
ゲッラブ！

中川 健司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

グッラブ！

【Nコード】

N5728E

【作者名】

中川 健司

【あらすじ】

山の麓にある小さな町、神乃崎に住む16歳の少年、山中健斗やまなかけんとの家に、同じく16歳の女の子、大森麗奈おおもりれいなが、ある事情で居候することになった。中々受け入れようとしない健斗と麗奈の遠い距離。16歳の心情を映した、青春のGood Loveグッラブな物語をぜひ読んでください。支えてくれる人が傍にいてくれる。それだけで人は、強く生きることが出来る……

50万アクセス数を突破いたしました ありがとうございます！

第1話 嬉しくない出会い（前書き）

第1話あらすじ

16歳の少年、やまなかけんと山中健斗の元に、ある一人の女の子がやってきた

女の子の名前はおおもりれいな大森麗奈。

とても元気の良すぎる性格に戸惑う健斗……

この日を境に、健斗のGood Loveグッドラブな物語が始まる

本編の主な登場人物

やまなかけんと山中健斗……本編の主人公。少し無愛想なところがある、神乃崎高校に通う一年生。突然健斗の家に麗奈が居候することになり、かなり戸惑っている様子……彼には実はある過去があつて……？

大森麗奈……本編のヒロイン。かなり元気がよく能天気なネコ型娘。健斗の家で居候することになり、その独特なリズムで健斗と深く絡んでいく。

真中ヒロ……健斗の幼なじみ。お調子者とはこいつのことと言わんばかりのやつ。麗奈に出会って思わず一目惚れするが……

早川結衣……健斗と同じ学校、そして同じクラスの女の子で、健斗の意中の人。とても優しく、周りの子にも気配りが出来る。

佐藤愛美……通称「マナ」。ちょっとガサツな面のある元気いっぱいの女の子。ヒロとのコント並みの絡みが好評。

第1話 嬉しくない出会い

五月になっても、この辺の地域は少し気温が低くかった。しかし全然半袖で過ごせる気温ではある。ブランケットを体にくるませるようにかけて、ベッドの上で健斗けんとはぐっすり眠っていた。

静かに寝息を立てて、ブランケットにきちんとくるまってはいるが、シーツは乱れていて、机の周りには雑誌だの教科書だのが山積みになって置かれている。

しかし机の上はきちんと整理されている。というのは、昨日の晩に片付けをしていたのだが……どうやらその途中に眠気に負けてそのままベッドで眠ってしまったのだ。

机の横にはギターケースが一個ある。そして棚の上には古くて小さなテレビにラジオもあった。

もう朝と呼べる時間は過ぎているが、健斗は全く起きる様子を見せではないなかった。

最近、何かと疲れてるためである。高校の授業は難しくてつまらないし、朝早く行かないと学校には遅刻する。毎日毎日、同じような感じだったけど、それが逆に健斗に疲れを感じさせていた。

そして今日は久しぶりの休日。だから今日はかなり眠っていたい。何なら、このまま永遠に眠っていてもいいくらいだ

部屋の外からは小鳥のさえずりが聞こえる。

昨日から開けっ放しにしてた窓から心地よい風が吹き込み、緑色の

カーテンを揺らしていた。

するとだった。

「ちよつと、健斗〜？」

部屋の外から大きな声がした。と、思ったら突然ドアが開き、廊下から母さんが雑な動作で、ずかずかと部屋の中に入ってきた。

健斗の癢に触る甲高い声で、健斗が嫌がるように耳煩く怒鳴ってくる。

「起きなさいよ！今日が何の日か、あんたも知ってるでしょっ？」

その煩い怒鳴り声を聞いて、さすがの健斗も目を覚まし、薄々と眼を開けた。しかし健斗はわざと聞こえない振りをして、母さんの言葉を見無視するように背を向けた

「起きなさいっ！」

と言つて、母さんは無理矢理ブランケットを健斗から取り上げてきた。

それをされると、心地よさが一気に消え失せた。健斗はうざそうにため息を大きく吐く。ゆっくりと起き上がって、仁王立ちする母さんを睨みつけた。

「……何で起こすんだよ」

健斗が眠そうに目をこすりながら不満そうに言うと、母さんは呆れ

るように大きいため息を吐いて言った。

「だから、今日が何の日かあんたも知ってるでしょ？」

今日が何の日……？

確かに……知っている。今日がどいう日なのか。そして誰がやってくるのか。知らないわけがない。

けど……

「俺には関係ない。俺は……賛成したわけじゃない……」

健斗がそう冷たく言い放つと、母さんは呆れ返るようにため息をついた

「あんたは……新しい家族が増えるのよ？嬉しいことじゃない。」

「何が家族だよ。所詮は他人だろ？嬉しくも何ともないし、むしろすげー迷惑。」

健斗はそう言うと、興味なさそうにまたゴロンとして横になった。すると母さんの怒りがついに頂点に達したらしい。母さんは健斗に向かって、大きな声で怒鳴りつけた。

仕方なく、渋々健斗は母さんに起こされた。かなり不機嫌な様子で外出用の灰色のパーカーと黒いジャージに着替え、一階に続く階段

を降りていった。

何で俺が……

心の中で愚痴を言うものの、母親にこれ以上言うことを聞かなかつたら、今晚の晩飯は抜きだ。と言われては動かざるを得ない。

これから健斗は、車に乗り込み、ある人を迎えに行く。迎えに行くと言ってもそんな紳士的なものじゃない。もちろん嫌嫌で、むしろ非常にうんざりとしている。歓迎の意志などひとかけられない。

その話を聞いたのは……一週間くらい前のことだった。

母さんと父さんに呼ばれて、突然その話を聞かされた。来週の休日に、この山中家の元へ新しい家族がやって来るということ……

「はあっ？」

母さんの言葉に我が耳を疑った。突然過ぎて頭が大混乱をした。しかし、そんな健斗の反応をまったく気にせず母さんはゆっくりした口調で繰り返してきた

「だから、来週くらいにね、家に居候が来るの。女の子よ。」

意味が分からない。一体何故？

その2つの間に健斗は板挟み状態となっていた。話のプロセスが全く読み取れない。親戚の女の子が遊びに来るというのならまだわかるし、それなら健斗も分別がついただろう。

だが今言っている話は全く関係ない。都会からやってくる赤の他人がわざわざこんな田舎に、さらに山中家に“居候”するのだという。しかも、相手は女の子だ。

「ちよっ……ちよつと待って？何？何かの冗談……だよな？」

健斗が焦る様子を全面的に見せながらそう聞き返してみる。しかし父さんと母さんは顔を見合わせて、呆れるようにため息を吐いた。

「何で冗談でわざわざこんなこと言うのよ。」

「麗奈ちゃんだよ。来週からうちでしばらく一緒に暮らすことになった。」

母さんと父さんは全く冷静な態度でそう言うてくる。そんな態度とは反対に健斗の頭は大混乱の渦が渦巻いていた。

「名前なんかどうだっていいよっ！何で？どうしてっ！？」

健斗は少し憤りを感じたように言った。すると健斗の問いかけに、母さんは順を追って説明してきた。来週から、東京に住んでいた女の子がある事情により、この神乃崎の町に来るらしい。

そこで頼る当てはこの山中家しかないという。というのも、どうやらその女の子の両親と、山中家は密接な関係があるとか……詳しく

はよく知らないが、とにかく全くの赤の他人同士ではないという。

そのためこっちの町で暮らす間、何と我が家でいっしょに暮らすらしい。つまり居候として我が家に迎えるということになる。

女の子といっしょに住むことになるなんて考えたこともなかった……そう、小学生のときにはまった「ウォーターボーイズ」のドラマのようだ

いやあれは男の子が田舎に来て、女の子の家に居候するという形だったのだが、どちらにしたって何も変わらない。

この「神乃崎^{かんのさき}」は、山の麓にある町で、自然豊かに囲まれた小さな田舎町である。

しかしこんなところに、東京者が来るんて……まあそこまで驚くようなことじゃないけれど。でも滅多にいないだろう。隣町から越してくることはあるだろうが、数十キロも離れた町……健斗もイメージとしてしかない大都会である東京から、その女の子はやってくるのだ。

健斗にとっては当然最悪のことだった。男ならまだいいかもしれない。しかししよりによって居候に来る子は女の子だ。そんなことは大反対だった。

当然性別が違うのなら、その間には色々と面倒事が付きまとうに決まっている。お風呂だったりトイレだったり、着替えだったり……全て性的な問題かもしれないが、やはりそういう部分が一番重要だ。健斗は他人に対して色々と気を遣うのは苦手な性格だ。

だからそれを踏まえて、健斗は目の前の母さんと父さんに向かって、ひっくり返ってしまうほど卓袱台を叩いて大反対した。

「お、俺は絶対嫌だぞっ！絶対反対だからなっ！」

しかしこういう話は子供の力は無力に等しい。結局何も出来ないまま、その女の子が来る日を迎えてしまったというわけだ。

健斗は玄関で靴紐を結びながら大きいため息を何度も繰り返していた。

「……もう嫌だ……本当に嫌だ……」

「嫌々言っていないで早くいきなさいっ！」

母さんがどんっと仁王立ちして、健斗にそう言った。その言葉や態度を見て、健斗の不満はさらに募る一方だった。

「っーか何で俺まで迎えに行くんだよ？父さん一人行けばいいじゃん。」

靴紐を結び終わり、健斗は立ち上がりながらそう言った。すると母さんは凜とした偉そうな態度で物申してくる。

「お客さんを迎えに行くのは人として当然ですっ！」

「何がお客さんだよ。さっきは家族だとうたって言ってたくせにさ……」

「つべこべ言っでないで早く行きなさいっ！」

「チエ……」

健斗は軽く舌打ちをして、かなり不機嫌で家を出ていった。

第1話 嬉しくない出会い P・2

家を出ると、砂利が敷き詰めた道を通った。そしてその家の前には一台の車がとまっている。その傍で煙草をふかし、煙を吐きながら父さんが立っていた。

健斗に気がつくと、煙草を携帯灰皿にしまった。

「やっと来たか。」

健斗は父さんの言葉を無視した。明らかに不機嫌だということを全面に出して、健斗は車のドアを開け、雑な動作で後部座席に乗り込んだ。

「不機嫌だな。」

「当たり前だろ。何で俺まで……」

父さんも車の運転席に乗り込んだ。健斗は未だに納得出来ない気持ちを感しながら腰を落ち着かせてため息を吐いた。

「まあ、そういうなよ。女の子だぞ？女の子。しかも、ものすごく可愛いぞ。」

「あつそ。たいてい可愛い子ってのは性格が悪いよな。」

健斗がそういうと、父さんは何が可笑しいのか、プツと吹き出して高らかに笑った。

「カッカッカッ。お前もそういうことを言うようになったか」

父さんは車のキーをひねり、エンジンをかけた。そして車を発進させて、その例の女の子との待ち合わせ場所へと向かった。

車は一本道を通り、しばらくするとコンクリートの道へと変わる。車道を走り真っ直ぐ駅の方へと向かう。こっちは道は、建物が比較的多く建つところに出る。

健斗が高校に通うとき、この道を使う。ここから4、5kmくらい離れていて、そのさらに先に行くと駅がある。

父さんの話によると、女の子とはその駅で待ち合わせているらしい。

神乃崎駅には、「神乃崎商店街」がある。さらに「神乃崎神社」という少し大きめな神社もある。毎年初詣で賑わうのが特徴だ。

父さんは車を走らせながら、健斗に言ってきた。

「麗奈ちゃんれいなは、父さんの友達の娘さんなんだ。確か……10年前だったけな、最後に会ったのは。6年前にも会えるかなっと思っただが、会えなくてなあ……でもまあ、小さいときから可愛い子だったからなあ……今は凄い美少女になってるんだろっな」

父さんは一人言を言うみたいにそう言った。健斗の方はどうかと言うと、相変わらずまったく興味を抱いていなかった。

でも父さんは構わず、その子のことを色々話してきた。

「とてもいい子だったなあ。元気いっぱい明るくて、娘のように可愛かったものだよ。それが本当に娘になるんだもんなあ」

車を走らせていくと、次第に建物の多くなってきた。この辺になると比較的人も増え、車線には他の車も走っている。

もう少しで神乃崎駅に着くみたいだ。そう思うと、さらに憂鬱になる……

「ちゃんと愛想良くしろよ？ じゃないと怖がるからな」

「どうかな」

健斗は深くため息をついて、過ぎ行く町を見ていた

第1話 嬉しくない出会い P・3

家を出発して、20分くらい経つと、ようやく神乃崎駅についた。車は駅近くの路上に停車した。すると父さんが腕にしてある時計に目を落とした。

「ちょっと早かったな」

「何時に約束してんの？」

健斗が訊くと、父さんは背中を伸ばしながら答えた。

「11時半。来てるかなあ？」

車についている時計は、11時20分だった。確かに少し早かった。

「健斗、ちょっと見てきてくれんか？」

「はあ？何で俺が？」

「そのために連れてきたんだがな」

「嫌だ。面倒くさいっ！」

健斗がふてくされるようにそう言って断固拒否をする。父さんはそれを受けて呆れるようにため息を吐いた

「まったく……じゃあ、父さんが行ってくるから、ちょっとここで待ってる。」

父さんはそう言つと車から降りて、駅の方へと歩いていった健斗はさらに不機嫌にするように、そして苛々を溜めながら大きくため息を吐いた。

やってられない……

何だか少し自分の行いが子供じみているようにも思えたが、それでも女の子が家に入り込んでくるという現実を、どうしても受け入れることが出来なかった。

眠るつもりはなかったけど、ただこうしていたかった

こうして眼をつぶって心を落ち着かす。

今日の一日の流れでも考えよう。

まず帰ったら昼飯を済まし、部屋の整理整頓を済ませる。

そしてその後、CDレンタル店に借りたCDを返しに行こう。そしてしばらくの間、辺りをぶらつくのか……

そうだ、そうしよう。しばらく家から離れていよう。その間父さんと母さんが、勝手にその女の子の面倒でも見てるはずだ。

健斗がそんなことを考えていたところだった。

ふと窓の景色に父さんの姿が見えた。駅のホーム辺りから誰かといつしよに車に近づいてきた。少しだが、声が聞こえた。

「健斗も車に乗ってるんだけど……悪いが仲良くしてくれ」

「はい　というより、わざわざすみません。迎えに来てもらっちゃって」

耳に残る暖かい甘い声、そしてその姿……それを見た瞬間、健斗はさらに不機嫌になった。すると父さんが車の後部座席のドアを開けた。

「失礼しまーす」

軽快で明るい声といっしょに、ふと甘い香水の香りがした。そしてサラッとした長い少し茶色のかかった栗色の髪……

可愛い小顔に、はつきりした瞳……長い足……服の上からも分かる豊かな胸……

その女の子は、ゆっくりと後部座席に座った。するとその女の子は健斗を見てきた。健斗は少し戸惑う様子でその女の子を見返す。

整った顔立ちが可愛いらしい……確かに……父さんの言う通り……一般的にはめちゃくちゃ可愛いんだと思う……認めたくないけど。

「……こんにちわっ！」

その女の子は元気な声で、健斗に笑いかけてきた。健斗は突然の音量に胸を驚かし、何も言い返すことが出来ず軽く会釈をしかえした。

その女の子はにっこりと可愛い笑顔を見せながら言ってきた。

「初めましてっ！私、おおもりれいな大森麗奈といます。あ、名前で呼んでくれて構わないよ？」

何だいきなり……

いや、自己紹介なんだろうけど……それでも遠慮というか奥ゆかしさというか……そういう品性らしいものが微塵も感じられなかった。見た目はこう、お嬢様っ！て感じなのに、どうも勝手が違うらしい。

「君は？」

名前を聞かれたので健斗は、戸惑い気味で答えた。

「え……あ……や、山中……健斗だけど」

「健斗くんねっ、よろしくっ」

と言いながら、につこりと笑ってきた。しかし健斗の方はまったく笑いもせず、プイツと顔を剃らす。するとそんな健斗を見ながら、クスクスと笑ってきた。

「……何だか、スツゴク普通なんだね」

普通と言われてカチンと頭にきたが、健斗は何も言わず、ただ窓の外を眺めていた。

普通で悪かったな……普通で……

すると父さんが運転席に乗り込んできて、すぐに後ろを振り向いて麗奈に笑いかけた

「こいつ、母さんに無理矢理起こされて機嫌が悪いみたいなんだ」

確かにそれもあるが、もちろんそんなの二パーセントくらいの割合しか占めていない。

「フフツ、何か子供みたい」

またそう笑われて、健斗さらにカチンときた。さつきから小馬鹿にするような言い方をしてくる。でも、怒鳴る気にはならなかった。あまり関わるのはゴメンだ。最初から言ってるが、馴れ馴れしくするつもりは全くない。

しかもこの性格……普通なら少し緊張でもして欲しいものだ。元氣過ぎてむかつく……健斗にとって、大森麗奈は苦手なタイプだとその判断した。こういうキヤピキヤピした性格は……無理。おしとやかで緊張していれば、まだ可愛いらしいと思い、気が変わっていたかもしれない。

しかし初対面のやつにいきなり頭に来るようなことを言うてくる……むかつく……

「これからいつしょに住むことになるけど……よろしくね？健斗くんっ」

「……よろしく願いしまーす……」

突然過ぎて、あまりにも自然に溶け込んできた……これが健斗と麗奈の最初の出会いだった。

ここから、健斗の日常が少しずつ変わっていくのだった

第1話 嬉しくない出会い P・4

「……………」

健斗は顎を手に乗せながら、麗奈のことをじっと見つめていた。呆れるように、まるでこの世において奇妙な生物を見るかのように、麗奈のことを見つめていた。

最初から感じていた。最初に見て、最初に喋ったときから……

こいつ……全然訳分からん……

「初対面の相手の前で寝るか？普通……」

健斗は麗奈を見ながら、ボソツと呟いた。この奇妙な美少女は無防備にも、可愛い寝顔を見せていた。車を走らせて父さんと話をした後、十分くらいすると次第に目を閉じてすやすやと眠り始めたのだ。

一体何なんだろう……いきなり人のことバカにできたり……

変なやつだ……

こんなやつといっしょに暮らさないといけないのだろうか？

「仕方ないさ。ここまで来るのに半日以上かけてるんだぞ？」

父さんが笑いながらそう言ってきた。

「……どこから来たんだっけ？」

「東京だ。昨日の夜中から今にかけて来たんだ。長旅で疲れてるんだろっなあ……」

「あっそ……それでも普通寝ちゃう？警戒心がゼロ過ぎんだろ？」

「気が緩んだんだよ。それより、どうだ？随分と可愛いだろ？」

それを言われると、健斗は口を閉じてしまった。それは反駁できなかったからだ。父さんの言う通り、大森麗奈はかなりの美少女だと思う。学校にもここまでの美少女はいるかいらないか……

一番怖いのは、いつかこの可愛いさに気を許してしまうことである。それだけはダメだ。絶対ダメだ。

「こっついうやつに限って裏があるんだ。」

健斗は大森麗奈「裏がある」性格が悪いと勝手に決めつけておいた。すると父さんが可笑しそうに笑って言うてきた。

「そんなことはないと思うけどなあ。まっ、お前も麗奈ちゃんを少しずつ分かっていけばいいさ」

「父さんだってこいつのこと全部知ってんのかよ？」

「知ってるぞ。美少女だろ？可愛いだろ？寝顔が素敵だろ？あとは……」

「全部顔のことかよ……エロ親父……」

「カッカッカッ　まあ、性格もすごくいい子だから、安心しろ。」

あつそうですか……と言わんばかり、健斗は不機嫌そうに鼻で息を吐いた……

それからしばらく経つと、車は家の前についた。いよいよこの変なやつを家に連れてきてしまったら、気が重くなってしまう。

父さんは家の敷地に車を止めた。そしてエンジンを止めて、車から降りる。

「健斗、麗奈ちゃんの荷物を運ぶから手伝ってくれ」

「ハイハイ……」

仕方なさそうに健斗は車から降りる。いつまでも愚痴を零していても仕方ない。現実を変えようがないし、もうこの謎の生物をこの家に連れて来てしまったのだ。切り替えを早くしなければ……

健斗は降りる前に麗奈を起こそうとする……が……

健斗は揺り起こそうとする手を止めて、麗奈をじつと見つめた。

「こいつ熟睡してる……」

麗奈は寝息を立てて、すっかり眠り込んでいた。全く起きる様子が

ない。すると父さんが健斗に近づいて、麗奈の寝顔を見て微笑ましく笑った。

「もう少し寝かしといてやれ。疲れてるんだから。」

「知るかよ。こいつにも手伝わせる。」

とは言ったものの、これほどまでに熟睡していると起こすのに気が引けてしまう。しばらく考えたあと、健斗は舌打ちをし、麗奈を起こさず車を降した。

健斗は車のトランクから、麗奈の荷物を持った。ずっしりと重量のある、大きなキャリーバッグを家の中へと運んでいく。

「二階の、空き部屋があつただろ？そこに運んでくれ」

「ハイハイ……」

健斗はゆっくりと荷物を抱えて、二階の空き部屋に持っていった。多分あの変なやつのは部屋は元物置部屋のことだろう。

でも、この前家族で大掃除したときに、いらぬ物は整理が出来たから、残った物は裏の倉庫に閉まった。母さんがここを熱心に掃除してたから綺麗になつてゐるはずだ。

やはりその中に入ると以前とは見違えるほど綺麗になっていた。残念ながら、何もなくて空っぽ状態だけ……

「綺麗だなあ」

健斗は荷物を置いて、空き部屋を見渡した。元物置部屋とは思えない広さに、綺麗さだった

この家は元々部屋が一つ空いてたみたいで、それを物置部屋にしたにすぎないらしい。

健斗は荷物を置いて、ふと気になった点を見た。それは……押し入れたった。健斗は恐る恐る、その押し入れに近づいた。

……押し入れも掃除してあるはずだ……

だがもしされていなかったら、ずっと使ってなかったんだから……もしかしたら蜘蛛の巣がいっぱいかもしれない。

健斗はゆっくりと押し入れに手をかけた。そして恐る恐る開けてみる。しかし、何もなかった。ちゃんと掃除されてるみたいだ。

健斗はほっと安心するようにため息を吐き、とりあえず居間へと向かおうと思って階段の方へと向かう。

その階段を降りて、居間へ入ろうとした。するとだった。

「本当に可愛いくなったわねー。スッゴク美人さん」

母さんの少し興奮気味の声……

「そんなことないです……それより……ありがとございます。居候なんかさせてもらうことになっちゃって」

この甘い暖かい声は……大森麗奈の声だ

「何言ってるの？こっちは嬉しい限りなんだからっ」

そんな会話を耳にしながら、健斗は居間へ入っていった。すると母さんと大森麗奈、そして父さんがちゃぶ台を囲んで出して、座りながら話をしていた。

麗奈は健斗を見ると、にっこりと頬笑んできた

「健斗くん、荷物ありがとうね 私、つつい寝ちゃってたね」

と、言いながら「えへへ」と笑った

えへへ？じゃねえよ、と健斗が心の中で呟いていると……母さんがものすごい形相で健斗を見ていることに気がついた。父さんが健斗と目を合わせて頷いてくる。

健斗はコホンと軽く咳払いをした。

「イエイエ……オキヤクサマニタイシテ、トウゼンノコトラシタマデデス……」

慣れない敬語を使い、片言のようにそう言った。母さんの形相は収まらなかったが、麗奈は可笑しそうにクスクスと笑っていた。

「あの……ところでご飯は？」

昼飯を済ませて早く家を出たかった。健斗がそう言うと、母さんはゆっくりと立ち上がって言った。

「そうね。ちょっと早いけど……お昼にしましょうか。麗奈ちゃんもお昼まだでしょ？」

「はいっ！もうお腹ペコペコなんです」

「……ちょっとは……遠慮しろよな……」

健斗は聞こえないようにボソツと言った。すると母さんは嬉しそうにはしゃぎ始めた。

「あら、だったら張り切って作るから！ちょっと待っててね？」

どうやらまだ少し時間がかかるようだ。健斗は昼飯が出来るまで、自分の部屋にしようと思い、居間を後にしようとした。

第1話 嬉しくない出会い P・5

健斗は二階に上がり、自分の部屋へと入っていった。そして、ドアを勢いよく閉めてベッドに寝転んだ。

正直気に入らない。大森麗奈……いきなりやって来て、人のことをバカにして……この家に打ち解け込んでくるのが。

ちよつとは遠慮したり、気を遣ったりする仕草を見せて欲しいものだ。

健斗は不機嫌そうに立ち上がり、机の中から音楽プレーヤーを取り出した。

こんなときは音楽でも聞いてリフレッシュしよう、と耳にイヤホンをかけてまたベッドに寝転んだ。

最近自分の中でも、世間的にも流行っている「AKB48」の曲を聞いていた。

「会いたかった」 会いたかった 会いたかった Yes! 君に」

会いたくない人に会ってしまったのだから、この曲は今の気分には不向きだ。健斗はそう考えて、イヤホンを耳から外した。

それにしても、自分はちゃんとあの変なやつと暮らしていけるのか？ ストレスがたまりにたまって、いつか爆発しそうな気がする。

何せ今でもすでにスツゴクいらするから……

健斗は少し心を落ち着かせようと思ってゆっくりと目を閉じた。そして再びイヤホンを耳につける。すでにサビの部分に入っていた。

好きならば好きだと言おう。誤魔化さずに素直になろう。

ああいう可愛い子たちに言われても、妙に納得がいかない。あんなに可愛いければ、そりゃ誰にだって「好きっ！」って言えるだろう。

何だか矛盾してるな……そんなことを思いながら、ぱっちりと眼を開いた。するとだった。目の前に麗奈の笑顔があった。

「うわぁっ！」

健斗はびっくりしてすぐに起き上がった。心臓が飛び出るかと思った。しかし、麗奈はクスクスと可笑しそうに笑っている。

「これでお相子だねエ」

「は？」

「だって、健斗くんも私の寝顔見たでしょう？私も健斗くんの寝顔を見れたから満足」

健斗はポカンと麗奈のことを見つめた。何が可笑しいのか、何を言ってるのか……全然分らない。

「べ、別に寝てないし。というか……あの、勝手に人の部屋入らな

いでくれませんか？」

健斗が不服そうにそう言うが、麗奈はまったく健斗のことなんか気にしない様子で部屋を見渡していた。

「ふう〜ん……いいなあ健斗くん。ずっとこの部屋使ってるんですよ？」

「君もすぐに同じような部屋を使えますよ。分かったらさっさとこの部屋から出て」

「でも結構散らかってるんだね〜？」

「掃除中なんです。早く出て」

「ん〜？」

と言いながら、麗奈は山積みになった雑誌の前でしゃがんだ。健斗は何をしてるんだろうと思いい麗奈を見つめる。

「ムムム……ここが怪しいですな……」

「……何が？」

大森麗奈は健斗の方を向いて、ニヤニヤと笑いながら怪しい眼をしていた。

「この山積みの雑誌の中に、エッチな本があったりしてえ〜……？」

「バツ……なっ……そんなもんねえよっ！」

健斗は顔を赤くして叫ぶように言った。いきなりとんでもないことを言いやがる……しかし、大森麗奈はフフフと笑っている。

「隠さなくってもいいのにいゝ」

「隠してねえよっ！俺はそんな男じゃねえ！っ！早く出てけよ」

「ん？」

麗奈は机の下においてある、奇妙な箱に手を触れた。

ゆっくりとそれを開けると、中には何かが……それは、多分靴だ。ただの靴じゃないとは思うけど……サッカーのスパイクだった。まだ新しそうだが、少し傷や汚れが付着している。

「これ、サッカーのスパイク？どうしてこんなところに閉まってる」

「

「それにさわるなっ！」

健斗が今までにない怒鳴り声をあげた。すると、さすがにその異様な怒り具合に麗奈は驚いたのか、それに従ってゆっくりとスパイクを元に戻した。

健斗は麗奈をにらみつけていたが、ふっと我に返ってきょとんとしている麗奈を見た。深くため息をついて気持ちを落ち着かせる。

「……それ……大事なものです。だから勝手に触らないでくだ

さい。」

「う、ごめん。」

麗奈は小さく頭を下げた。少し空気が重くなったことに健斗は気がついた。決まり悪そうに健斗は頭を掻くと、ため息を吐いてベッドに寝ころんだ。

「……あゝ！」

「今度は何っ？」

大森麗奈は健斗の机の横に置いてあるギターに興味を持ったのか、ギターの前に座りこんだ。

「健斗くんギター弾けるの？」

「……だったら？」

大森麗奈は手を合わせて、目を輝かせて、頬を赤く染めてなんとなく興奮しているようだった。

「すごい。ねえ、何か弾いてみてよ？」

「……誰に？」

「もちろん私」

そう言うと思った。

「……丁重にお断りさせていただきます。」

健斗はそう言うと、興味なさそうに麗奈から視線を外し、また寝転んだ。すると麗奈は健斗に近づいてきた。

「えゝ？何で何で？どうして？」

「……………」

「恥ずかしいから？下手だから？ねえどうしてっ？」

「……………」

「もしかして……本当はまだ弾けないとか？」

「もうじゃかしいっ！ちゃんと弾るってーのっ！」

「えゝ？じゃあなんで弾いてくんないの？」

「……俺は好きな人にしか弾いてあげない主義なんです。」

と適当なことを言っつて、麗奈をあしらう。健斗はまた横にゴロンとなった

まったく……本当に口のうるさい女だ。黙ってれば可愛いのに……

「……好きな人にしか弾いてあげないの？」

麗奈がそう訊いてきた。別にそういうわけじゃない……そんなかつこつた理由があるわけじゃないか。だが、面倒臭いので健斗

は適当に「ああ」と一言だけ答えた。

すると麗奈はそれを聞くと、「そつかあゝ」と言いながら微笑んだ。

「じゃあ……健斗くんが私を好きになればいいんだよ」

「……はい？」

健斗はガバツと身体を起こした。また突然意味の分からないこと言ってくる。だが当の本人である麗奈は、これぞ名案だという顔をしていた。

「だって健斗くん好きな人にしか弾いてくれないんでしょう？ だったら、健斗くんが私を好きになれば弾いてくれるってことじゃない。」

「……あの……」

「うん？」

「一つ言いたいことあるんだけど、いいですか？」

「うん。」

「あんたの話はわけがわからん。」

健斗はそう言い放つと、これ以上相手にしてらんないと思い、立ち上がって健斗の部屋を出た。がしかし、そのあとを麗奈が追いかけてきた

「え？ だからさあ、ギターを弾いてくれるには私を好きになっても

らわなきゃ
」

「違う！そこじゃないっ！何なんだよ！あんたはっ！」

健斗は逃げるようにして階段を降りる。けど麗奈もその後をついてくる。

「もしかして……健斗くんってバカ？」

……バカ？

カチン……

健斗は振り返って思いっきり怒鳴った。

「お前が言っなっ！」

また健斗の怒鳴り声に驚いて、麗奈はきょとんとして動かなくなつた。健斗は麗奈を睨み付けたあと、また前を向いて、居間へと向かった。

「あら仲良くなったの？」

母さんが居間から顔を出した。なんてタイミングで出てくるんだこのオババは……

「お昼ごはんできたわよ。麗奈ちゃん食べてね」

それを聞くと、大森麗奈はにっこりと笑った

「はあゝい いただきまあゝす」

麗奈は嬉しそうに居間へと入っていった。何てマイペースなやつなんだろう。健斗のことなんてこれっぽっちも気にしていない。

健斗ははあつと憂鬱そうに深くため息をついたのであった。

第1話 嬉しくない出会い P・6

健斗は昼飯を食べ終わり、歯を磨いたあと、また自分の部屋へと戻っていった。時計を見ると、昼の一時をちよつと過ぎていた。

何か……日曜日なのにすごく疲れた……これもそれも、全部あの大森麗奈のせいだ。あいつがこの家にいるからゆっくり休めないのだ。だからさつさと家を出て、しばらくの間独りになろう。麗奈も今は下で母さんや父さんと談笑しているはずだった。

しかし健斗にはそのまえにやるべきことがある。それは昨日の途中だった部屋の掃除だ。昨日は眠気に負けて雑誌だの何やらは全てそのままだが、今の時間を使ってその続きをやるうと考えた。

健斗は袖をまくり、さつそくその活動に取り組んだ。まず、いらないものというものを分けて……

普段から掃除に慣れているためか、ものの三十分もかからずに部屋の掃除を終えた。雑誌などは全て棚にきちんと並べ、教科書類やベットのシーツ、ゴミなどもきちんと整理整頓をした。

こんなものだろうか……と思いながら健斗が一息ついた瞬間……

「健斗くん。」

後ろから再び声をかけられた。聞きたくもない声だったが、健斗はゆっくりと振り返る。するとそこにはやはり麗奈が立っていた。健斗の部屋にまた勝手に入ってきて、健斗の部屋を見渡した。

「あれ？さっきより綺麗になったね？」

「……掃除したんです。それより何か？」

健斗がうんざりするように尋ねた。すると麗奈はゆっくりと頷いてみせた。

「うん。あのね、これから暇？」

健斗はそう聞かれて少しの間黙り込んだ。暇かどうかと聞かれるということは何かしら面倒なことを押し付けられるに決まっている。

「いえ。僕はこれから外出するんで。決して暇ではないっす。」

「だったらちようど良かった」

「……は？」

面倒事を避けるつもりでそう言ったつもりだったが、麗奈はむしろ都合が良いというように健斗に言ってきた。

「これから外に行くんでしょ？それだったらついでに、この町を案内してもらおうかなって思ってたの。」

しまった……

健斗は心の中でそう呟いた。まさかそう来るとは誤算だった。迂闊に外に出ると言った以上、ついでに麗奈もという流れになりかねなかった。

「いや、あの……俺今日は本当に忙しいんで……案内とかそういうのは……」

「えー？だって外行くんでしょ？だったらついでに私も連れて行つてよ。」

「いやその……あ、父さんとかに頼んだらどうっすか？父さんなら暇だし、この町のことよく知ってるし……」

「えー？でもお母さんが健斗くんに案内してもらいなさいって。」

「か、母さんが？……はっ！」

健斗は声にならない声を上げた。不思議そうに首を傾げて健斗を見つめる麗奈の奥に、その姿がはつきりと容認できた。健斗の部屋のドアの辺りに、母さんの顔が半分覗かれていた。ものすごい怒った顔で健斗を見つめている。健斗は冷や汗が流れるのを感じた。

「……健斗くん？」

「は、はい？あ、ああ……そ、そうっすね。じゃあせっかく何で案内します……いえ、させてくださいっ！」

健斗が心にもない言葉を口にする、麗奈は一気に嬉しそうな表情を浮かべた。

「本当につ？やったあっ！ありがとうっ！」

麗奈は嬉しそうに笑ってぴょんぴょんとうさぎのように跳ねた。健斗は口元で作り笑いを見せたが、目の先には母さんの姿を捉えていた。母さんはそれを聞くと満足そうにニヤリと笑うとそれからすと身を引いて去っていった。

健斗はその緊張から解放されて安心したかのように大きくため息を吐いた。そして、嬉しそうにはしゃいでいる麗奈を見つめて……どこか憂鬱な気分浸っていた。

「あっ！そうそう、あとね。お母さんが健斗くんと私に買い物をお願いできたの。」

「……買い物？」

「うん。何か商店街までついで行ってきて……ほら、このメモの中に書いてあるやつを買ってきてだつて。」

商店街の方か……

健斗はそう呟きながら、麗奈から一枚のメモ用紙を受け取った。確かに麗奈をどうせ連れていくのなら、そっちの方まで連れて行く必要があるだろう。

「じゃあ……すぐに出るから。支度してきてください。」

「はい」

麗奈はご機嫌そうに返事をする、健斗に背を向けて部屋を去っていた。そういう健斗も準備をしなくてはならない。

健斗はため息をついて、面倒くさそうに頭を掻きながら下の階へと降りていった。

第1話 嬉しくない出会い P・7

外は気持ちのいい青空に、涼しくて過ごしやすい気候だった。

健斗は麗奈を連れて、家を出た。せっかくこいつから離れるために家を出るつもりだったのに……結局こいつが近くにいます。

いちいち脅してくる母さんと、これから町を案内されることを嬉しそうにしている麗奈に苛立ちを覚えていた。

健斗は自転車を押し、塀の外まで出た。麗奈もそのあとについてくる。

「……………自転車で行くの？」

大森麗奈が戸惑いながら訊いてきた。健斗はゆっくりと頷いた。ちゃんと説明してやらないとな……あとで母さんに説教喰らうのはゴメンだ。

「一応バスはあるけど……一々金かけるのもつたいないし。でも歩くと1時間半くらいかかるから……チャリでいけば、三十分くらいか……そんなくらいで街まで出れるんで……」

健斗はそう言うと、自転車に乗った。

「もう1台、裏にあるから持ってきてください。」

健斗がそう促すと、麗奈はきよとした表情を浮かべた。

「私……こげないんだけど」

「……はっ？」

我が耳を疑った……

自転車を……

「自転車乗れないんだよね……」

健斗はきよんととして大森麗奈を見ていた。自転車に乗れない？

「……まったく？」

「うん」

そんなぁ……

健斗は愕然とした。じゃあどうやって街まで出る？歩いていくなんて時間がスゲーかかってしまう。

かと言って、父さんに車を出してもらうわけにはいかないし……

ということとは……まさか……

「わぁゝ 気持ちいい」

大森麗奈が楽しそうに、喜んでいた。健斗は不機嫌そうに自転車をこいでいる。

大森麗奈が自転車をこげないということは、健斗の自転車に麗奈を後ろに乗せて行くしか仕方がない。何でこんなことになってるんだろう？

まさか2ケツだなんて……

まるで……

「まるで私たち付き合ってるみたいだね」

「なっ！じゃかしい！変なこと……いわないでくださいっ！」

健斗は顔を赤らめて怒鳴った。しかし麗奈は可笑しそうにクスクスと笑っていた。

「冗談だよ」

そう言って笑う麗奈を見て、健斗は憂鬱そうにため息を吐いた。まさか、自転車に乗れないだなんて……考えもなかった。東京者は自転車にも乗れないのか？本当に良い迷惑だ。

麗奈が自転車に乗れないということでも一つ大変なことが分かった。
麗奈を乗せて行くのは今日だけじゃないということ。

これから毎日、しかも麗奈がどこかに行く度に、健斗は麗奈を送り
迎えしないといけないということだった。

学校や遊びに行くとき必ず……つまりそれは、常に麗奈に振り回さ
れることになるのだ……

マジでありえない。どうしてこいつに振り回されないといけない？
頭がおかしくなりそうだった。

苛立ちが込み上げてきた。しかも……誰か知ってるやつに見られた
ら、麗奈と付き合ってるかのように見られるじゃんか……なのにだ。
こいつは呑気に鼻歌を歌っている……

気持ち良さそうに、足をブラブラさせて……

オレンジ色の夕焼けに染まる横顔を見せていた。

「呑気なやつ……」

健斗は愚痴をこぼすように麗奈にそう言った。すると麗奈は町の景
色から健斗の方へと視線を向けた。

「何か言った？」

「別に……何でもないです。」

「……あの……ずっと思ってたんだけど……何でずっと敬語なの？」

麗奈がそういうと健斗はチラリと後ろを振り返って麗奈を見た。

「何でって……あんたと俺はそこまで仲良くないし……赤の他人だから。」

「……でも、同い年だよ？同い年なんだからさあ、敬語使われると何か違和感感じるんだよねえ？」

「俺はそうでもないけど……っか足をブラブラするの止めてくれない？バランスが取りにくいです。」

「あ、ゴメン。ほら、また敬語。もっ？じゃあっ……敬語禁止令を發布しますっ！」

「……じゃあ敬語禁止令の解禁令を發布いたします。」

「むっ！じゃあ敬語禁止令の解禁令の禁止令を發布いたしますっ！」

「それじゃあ敬語禁止令の解禁令の禁止令の解禁令を發布いたします。」

「だったら敬語禁止令の解禁令の禁止令の解禁令の禁止令を發布いたしますっ！」

「それでは敬語禁止令の解禁令の禁止令の解禁令の禁止令の解禁令を發布いたします。」

「だったら、だったら敬語禁止令の解禁令の禁止令の」

「もういいわっ！」

健斗が永久に続きそうなこの無限ループを食い止めるために、思わずそう麗奈に突っ込んだ。突っ込まれた麗奈は突然吹き出してケタケタと笑い始めた。

思わず突っ込んでしまった健斗ははっと我に返り、顔を赤くして前を向いた。いかん、いかん……思わずペースにつられてしまった。

「アッハッハッハ 今の突っ込み面白い」

「……よかったな……」

「アハハ もう、とにかくっ！私に敬語使ったらダメだからね？使ったら罰金一千万円」

子供かっ！

と思わずまた突っ込みそうになったのだが、寸前のところでこらえた。

これ以上そういう言い合いをしていると、何だか距離が縮まってしまふような気がした。

「……分かったよ……」

健斗がそうつぶやくと麗奈は満足気に頷いた。

「あっ、あと、私のことは名前で呼んでくれて構わないからね？」

「分かった……大森……」

「あ、ほらあっ！名前で呼んでつてばあっ！」

すると麗奈は不服そうに体を揺らし始めた。健斗はそのバランスを上手く保とうと必死にハンドルを操った。

「おいっ！ちよっ……動くなつて！」

「だつて〜！……あ、分かったあっ！」

突然麗奈がニヤニヤと笑ってそう言った。

「……健斗くんって……結構奥手なタイプ？」

「……いきなり何？」

麗奈は微笑みながら言った。

「何か、そんな気がする。女の子苦手でしょ？」

「お前みたいなやつは特に苦手だよ。」

健斗がそう答えると、麗奈はクスクスと笑った。

「アハハ 何それ？」

別に健斗は奥手ではない……いやそんなことは言えないな。確かに麗奈の言つとおり、かなり奥手かもしれない。

女の子に話しかけられたりすると緊張してしまう。表には出さないけど。

でもそれはみんなそうなんじゃないのだろうか？それよりも、女の子よりも、俺はこの大森麗奈がかなり苦手だ。それだけははっきりと言えた。

「健斗くんって面白いね」

「そりゃどうも。っーか足をブラブラさせんな。さっきも言ったけどバランスが取りにくい」

健斗は街へ続く道を、ゆっくりとこいでいった。

第1話 嬉しくない出会い P・8

それから三十分くらい、自転車で行くと、段々と街に入っていった。

麗奈は感心するように周りを見渡していた

「この辺は建物が多いね」

「お前寝てたからな。もう少し行くと、さっきの神乃崎駅がある」

「ふう〜ん……でもやっぱり田舎って感じだね」

「東京はもつとすごいのか？」

健斗が聞くと、麗奈はゆつくりと頷いた

「うん。車とか建物とかがいっぱい。人も多いし……」

「俺はそんなとこ嫌いだな」

「そうだね。私も田舎の方がいいよ。のんびりと出来るしさ」

健斗はそれを訊くと、不思議に思った

「東京者が東京を嫌うのか？」

健斗が訊くと麗奈は考える仕草を見せた

「うーん……どうかなあ？」

と言って苦笑いを浮かべた。

自分の住む街をあまり好きになれないのか？

健斗にはよく分からない気持ちだった。

俺はこの街が好きだ

例えば旅行とか行ってこの街に帰ってくると、妙な安堵感を感じる。

コイツにはそういうのはないのか？

「私は……そんなこと感じたことがないかも」

麗奈はそう言った

「ふうーん……」

しばらく沈黙が続いた。

「……感じたことがないっていうより……感じられないのかな……」

大森麗奈は、静かにそう言った……

「え……？」

そのとき俺はゆっくりと麗奈を見た。すごいそのとき俺の胸の中が
すごく……痛みを感じた

そのときの大森麗奈は……とても寂しそうな表情を浮かべていたん
だ……

健斗は自転車である高校の校門に来た

「ここが“神乃崎高校”」

神乃崎高校は健斗の通っている高校であり、学力も部活も平凡な高
校である。

通称、神乃高かみのこうと呼ばれている。

「ふうん……」

大森麗奈さキヨロキヨロと高校を見渡す

こいつもここに入ってくんだよな……

何か嫌だなあ……

同じクラスにならないことを祈りましょう

同じクラスになったら色々大変そうだな。

「結構広いんだね」

麗奈がそんなことを言うと、健斗は校舎の方から麗奈の方へと視線を向けた

「そうか？」

「うん。田舎の学校だから、もっと小規模なのかなあって思ってたけど……思ったよりも随分大きいんだね」

麗奈がそう言っ、健斗はもう一度校舎の方を見た。健斗にとってはあまりそういう感覚はなかった。確かに、中学に比べれば大きいのもかもしれないが……大して変わらない。

「田舎の学校の全部が全部小さいってわけじゃねえよ。ほら、行くぞ」

「あ、ねえ、もうちょっとだけ見ていかない？」

麗奈がそう言ってきたが健斗は、あまり賛成じゃなかった。思わず顔をしかめて麗奈を見つめた

早く帰りたいというのもあるが、それ以上に心配なことがあ

った

それはあまり校舎の近くにいと、同級生の誰かに目撃されて明日何かを言われるのがとても嫌だったからだ。なるべく校舎に近づきたくないし、出来ることならば早く立ち去りたい

「帰りが遅くなるんだけど。明日見りやよくない？」

「だって、だってー。今見たいんだもんっ！」

始まった……こいつの我が儘だ。健斗は少しこいつを宥める方法を考えて。

「でもお前考えてみ？」

「……何を？」

「今慌ただしく校舎の周りを見るよりも、明日学校にどうせ行くんだから、そこでゆつくりと色んなところ回った方がよくないか？その方がワクワク感も違うだろ？」

健斗がそう言うのと麗奈は少し考えるように空を仰いだ。健斗は祈るような気持ちで麗奈を見つめる。

来いっ！乗っかってこいっ！

すると麗奈は再び健斗の方に視線を向けて、納得するように大きく頷いた

「それもそうかもね。じゃあ明日にするっ」

ゲッツッ！健斗は心の中で大きくガッツポーズをした。これ以上我が儘を言うようだったら、本気で置いていくつもりだったが……こいつにも人の言葉を理解するだけの頭はあるらしい

少しこいつの扱い方が分かってきたような気がした

第1話 嬉しくない出会い P・9

健斗たちはさつきもきた、神乃崎駅まで着いた。駅前の駐輪場に自転車を止めて、歩き始めることにした

「ここが神乃崎駅。さつき来たから分かるだろう？ んでもって、踏切を渡ったとこに神乃崎商店街がある」

詳しく説明すると、神乃崎駅の踏切を渡ったところが、神乃崎商店街の入り口となっている。神乃崎商店街には商店街とだけあって、事業で営む店が1kmくらいに渡って並んでいる

健斗も幼い頃からこの商店街に立ち寄っているのだ、ある程度の店には顔も名前も知れ渡っているのだ

健斗は自転車に鍵をかけて、予め持ってきておいた布製の買い物袋を手にとった。地球に優しくてエコロジーだろ？ そしてすぐに麗奈を見て言った

「頼むから、うるちよろすんなよ」

すると大森麗奈はにっこりと笑いながら

「はあゝい」

と答えた。この軽い返事をちゃんと受け止めていいのかわからなかったが……

健斗はポケットから母さんに渡されたメモ用紙を取り出した

豚肉500gに、大根にキャベツ、牛乳2本、その他色々……

結構買うなあ……麗奈を連れてきて正解だったかもしれない。

「大森、行くぞ　　って、あれ？」

健斗が振り向くと、そこには大森の姿はなかった。

いきなり問題発生かよ……

健斗は辺りを見渡した。うろちよろすんなったのによ……

「……本当に迷惑なやつ」

健斗が踏切の方へと向かうと、大森麗奈は踏切の前で、何かを見ていた

健斗は安心するかのようにほっと息を吐くと、麗奈に近づいていった

「おいっ！何やってんだよ」

健斗が麗奈に近づいてそういうと、麗奈はゆっくりと振り返った

「ねえ、ここ改札機ないの？」

「はあっ？ねえよそんなもん。第一、この駅使う人そんなにねえんだよ」

「つかそんなことで勝手にきえたのかよ。捜すのはこっちなんだぞ！？」

確かにこの駅には改札機がない。駅員が改札口にいて、乗客は出る際に駅員に切符を渡すか、箱に入ればいいのだ。それを珍しがるのか普通……

「へえ……そうなんだ。鎌倉と同じだねえ……」

「なあ、ここは東京と違って都会じゃないから気になることはたくさんあるだろうけど、頼むから勝手にいなくなるなっ！！捜すのはこっちなんだよ。冒険したいなら一人のときにしろよな」

健斗はそう言うのと怒ったように踏切をさっさと渡ったて行った

大森麗奈は少し戸惑いながら、健斗の後を追っていく。

「私、何か気に障ることした？」

「自覚してないのかよ！？」

「うるちよろするなっで最初に言わなかった？」

「ああ……！！ゴメン忘れてた……！！」

「……ったくよ……」

もうこいつと歩くの本当に疲れる……

もう本当に帰りたいよ……

訳が分からないし、疲れるし……せつかくの日曜日を返して欲しい……

商店街は今日も人が多かった。いや混雑してる程ではなかったが、結構の人がいる。それぞれの店が店前で人寄せをしている

そのためか、商店街はいつも賑やかだ

「賑やかだね」

「そりゃ商店街だからな」

「そういえばさ、この辺って何でも“神乃崎”何だね？神乃崎駅とか、神乃崎高校とか、神乃崎商店街とか」

「地名だから……」

「どうして神乃崎なの？」

「商店街の近くに、神乃崎神社つつ、神社があるんだけど……そこから通っているらしいぜ。何せその神社には昔、崎があつて、その崎に雨を司る神様が住んでいたらしいんだ。昔の人々はそれを尊い、奉っていたらしい。神を崇めれば、村は毎日豊作になるんだとで、その神様が住む崎を人々は“神の崎”……それが時を隔てて、“神乃崎”になったんだってさ。それがこの辺の地名になったんだよ」

ということを、健斗は小学生のときに歴史の勉強で習った

大森麗奈はなるほどと言わんばかりに感心していた

「なるほど……すごいね。良く知ってるね」

「小学生のときに習った。あと、その神社で毎年七月七日にその神様を奉るための祭があるんだ。まあ、今では“七夕祭”になってるけどな。スゲー規模のかい祭なんだぜ？店とかもいっぱい並んでさ」

「へえー　すごい楽しみいー　私お祭り大好きなんだあ」

と大森麗奈はにっこりと笑った。

「よかったな。多分スゲー楽しめると思う」

健斗はそう言いながらふうっと息を吐いた

何か……調子に乗ってベラベラと喋ったなあ……

ちゃんと説明出来たかもしれないけど……どうでもいいことも話しすぎたかも……

そんなことを思うと、何だか自分が悔しくなってしまう……

健斗たちは、豚肉500gを買ったために、いつも使うお肉屋さん
立ち寄った。

「おばさん、こんちわ〜」

健斗が挨拶すると、いつもの元気なお肉のおばさんが店奥から出て
きた

「あら、こんにちわ健ちゃん。今日は何を買っていくんだい？」

「ああ……あの豚肉500g欲しいんだけど」

「おばさん、こんにちわっ」

健斗の後ろからひょこつと顔を出してきた女の子を見て、おばさん
は驚いただろう。

なんともまあ、おばさんは口をあんぐりと開けている……

「あら……まあ……すごく可愛い子ねえ……こんにちわ」

「私、大森麗奈って言いますっ！！今日から健斗くんといっしょに
住むことになりましたっ」

「バッ……！！！」

健斗が焦りを感じて、麗奈の口を塞ぐ

しかし遅かった……

おばさんはさらに驚くような表情を見せた

「あらあらまあ……健ちゃん、いつ彼女さんを作ったんだい？」

「いやっ！おばさん！！違うんだって。これには訳が……」

「それに……いっしょに住む！？こりや大変だ！！ちよつとあんた
く！？」

おばさんは大声を出して、店の奥へと入っていった

なんだか嫌な予感がしてきた……

「何！？！？」

突然店の奥から驚くような大声がしたと思ったら、突然おじさんが
急いで健斗の元へやってきた

「よお健坊っ！！やるじゃねえかつ！！」

とニコニコしながら元気な声で言うてくる

「いや……だからね？」

「その年で結婚とは……お前も出来るようになったか……くうっ

「!!おじさんは嬉しいぞ!!」

「あのさ……だから……」

「よお、お嬢ちゃん!!こんにちわ」

「こんにちわ　健斗くんがお世話になってますう」

え？

何でこいつノリノリなの？

「可愛い子だなあ？やるじゃないか健坊っ!!」

「あの……じゃなくって」

「そうかそうか……よっしゃあっ!!今日は健坊の結婚祝いとして、サービスしてやらあ!!おい母さんっ!!」

するとおばさんが「ハイハイハイ」と良いながら、何かを持ってきた

「はい、高級な豚肉500とサービスでこれも持ってきた」

と言って、袋に詰めたのは鶏肉と牛肉ともに200gずつをいっしょにつめてくれた

「あのさ……あのさ……」

「もっつ!!お代なんか結構よっ!!大丈夫大丈夫　気にしないで」

「いやさ……あの……」

何でこうなっちゃうわけ!?

つーか何で勘違いがこんなに激しいわけ!?

これじゃあもう誤解を溶けないじゃんっ!!

「麗奈ちゃん……だっけ? 健ちゃんとお幸せにね?」

「健坊っ!! やるときにはちゃんとやれよっ!!」

「あ……」

「ありがとうございます 健斗くんっ、行こうよ」

麗奈に導かれるように、健斗は放心状態のまま、肉屋から離れていった

「お前どうすんだよっ!?! お前が余計なこと言うから、訳の分からない誤解されちゃったじゃんかよっ!?!」

商店街で麗奈に怒鳴りつける。しかし麗奈は能天気なのかバカなの

か、ニコニコ笑っていた

「良いじゃん良いじゃん 良い人だったね？おばさんたち」

「良い人だけど、そういうことじゃなくて！！どうすんだよこの肉！！」

「もらえばいいじゃん。サービスって言ってたんだし」

「悪いだろ！？ただの居候なのによっ！？」

「大丈夫だよ 早く次行こうよ」

と、大森麗奈は楽しそうにいうのであった

はつきり言って最悪だ……

最悪の展開となってしまった……

もう嫌だ……こんなの……

それからだ。次々に買いに行く店で健斗は誤解を広めてしまった

魚屋でも……

「彼女さんかい？可愛いねえ」

八百屋でも……

「いつしよに住むだって！？おめでとうゝ！！」

スーパーでも……

「あらあ、可愛い女の子ね……えっ！？いつしよに住む！？」

買う店で、次々に誤解を広めてはとこうと努力し、しかしそのエネルギーに負けてしまう……

結局誤解は広まっていくのであった……

母さんから渡されたメモ用紙の物を全て買い終わったころには、健斗は全力で疲れきって、一言も喋らなくなっていた

一方大森麗奈と言うと、楽しそうに周りを見渡したり、嬉しそうにはしゃいだり、元氣１００倍アンパンマン状態だった……

健斗は最強に不機嫌で疲労困憊のまま商店街を歩いていた

「ねえ、健斗くん」

大森麗奈が話しかけても返事をしない。

「健斗くん？おい？」

「……何だよ……」

「大丈夫？すごい疲れてるよ？」

「……そうだな……」

本当なら、怒鳴りたい。

「お前のせいだろっつっ！！！！」

って怒鳴りたい

けど、何も言う気がしない

帰りたい……

「健斗くん、ちょっと休もうか。神乃崎神社なら落ち着くでしょ？」

そう言つて無氣力、無反応、放心状態の健斗を神乃崎神社へと導いていく麗奈であつた

第1話 嬉しくない出会い P・10

健斗は「神乃崎神社」にある、プラスチック製のベンチに座っていた。買い物袋を横に置いて、疲れた様子で座っていた。

敷地には小石が詰めてあって、そこを歩くとジャリジャリと音がなる。目の前には本堂があり、その奥に神様を奉っているらしい

でも今はそんなことどうでもよかった……

「健斗くん」

大森麗奈が、健斗に走りながら近づいてきた

「はい、コレ」

と言って、健斗に渡してきたのは250ミリリットルのコーラだった。健斗は静かにそれを受け取ると、麗奈は健斗の横に座った

「ふあゝ 賑やかなところだったねゝ商店街って。楽しかったあ」

と大森麗奈はルンルン気分でそういった

どこが楽しいのか……

健斗が疲れたのは何も、店の人への対応だけじゃない

麗奈に振り回される方が疲れてしまった

早く家に帰りたいよ

健斗はハアっとため息をつく、コーラの蓋を開けて少し飲んだ

「……私さ、この街結構好きかも」

麗奈は笑いながらそう言った

「そりゃよかったな」

「商店街の人も面白いしさ のどかし……自然もいっぱい、みんないい人そう」

「……そうだな」

しばらく沈黙が続く。健斗はそれに妙な感じを覚え、麗奈を見た

大森麗奈は少しうつむいていた

「好きだなあ……」

「……大森？」

「ずっといたいなあ……この街に……ずっと……」

健斗にはよく分からなかった

どうして……こんなに寂しそうな表情を浮かべるんだろう

こいつに……何かあったのか？

「……なあお前さ……」

健斗が静かに声をかけた。麗奈は健斗を見て、にっこりと笑う

「何？」

そういえば知らなかったことがあった

「どうして……この街に来たんだ？事情って何の事情だよ」

すると麗奈は少し考える仕草を見せた

「ん〜……そうだなあ。この街って、お父さんの故郷でね、面白そうだったから来てみたんだ」

とにっこりと笑いながらそう言った

けど健斗には、それが逆に納得出来ず、違和感をもたらし

「そんな理由だけでか？変なやつだな……面白そうだから来たんだなんて……」

健斗がそう言うと、麗奈はクスクスと笑いながら健斗に言った

「そうかな？」

「いや、おかしいだろ」

健斗は納得いかない表情を浮かべて続けた

「ずっと東京にいたんだろ？それなら、そこに仲のいい友達とか、馴染み深いとことかあったはずだろ？なのに、そんな理由だけでこんな田舎に」

「いいから！」

健斗が言いかけている途中に、麗奈が遮るように言った

健斗は驚いたせいで口を閉じて、麗奈を見つめた

さつきも感じた、胸の痛みを感じた

「いいから……そういうことにしようよ。ねっ？」

麗奈の言った言葉

そしてそれと共に笑う表情……

けど、その表情は悲しそうな笑顔だった。

健斗は見間違いだと思ったんだけど、見間違いじゃない……

この綺麗な瞳の奥に、たまっている光る何かが……

健斗には悲しくみえたのだった……

だから俺は今でも覚えている。

こいつがどうして、あんなことを言ったのか

笑顔の裏には何を隠しているのか……

俺は何も言えなかった……

何も、これ以上は訊けなかった

第1話 嬉しくない出会い P・11

「大森……」

「……なあゝんてねっ!？」

突然麗奈は元気を取り戻したかのように、イタズラな笑顔を見せた

「はっ!？」

「冗談だよゝ そんな深刻じゃないってばっ!!お父さんとお母さんが外国で仕事をしてる間だけ、居候させてもらっただけなのっ」

「え……ああ……そうなんだ」

「もう健斗くん真面目な顔してんだもん。騙されやすいなあ君は」

と健斗の身体を押してきた。

「別に騙されたわけじゃねえよ」

「そう?完全に信じこんでみたいだったけどねゝ?」

「るっせえなあ……っかもう行くぞ。暗くなる前に帰りたいからな」

健斗はコーラを飲み干して、ぐしゃっと潰して立ち上がった

元気じゃないこいつも変だけど、元気過ぎるこいつもうざったいな

あ
……

健斗は麗奈を置いていくようにさっさと歩いていく。

でも、健斗は気が付かなかったけど、麗奈はその後ろ姿を、静かな笑顔で見ていた。

一つの買い物袋に収まってよかった……

健斗は買い物袋を買い物籠の中に入れる

そして大森麗奈を後ろに乗せて、ゆっくりとこぎだした

「買い物袋持ってきてよかったね」

「そっだなあ……」

「今夜はパーティーかあ。楽しみい」

「そんな大げさなもんじゃないぞ？」

と健斗は言ったけれど、麗奈は嬉しそうだった

「どんなに小さくても、パーティーはパーティーでしょ？」

「それは……そうだけど」

ずっと思ってたんだけど、こいつってどんなに小さなことでも本当にオーバーだよな

家でやるパーティーだなんて、別に大それたやつじゃないのに……
こんなにはしゃいじゃってさ……

まるで子供みたいだ

それはいいことなのか悪いことなのか……

俺には分からないけれど……

そして、健斗は自転車をおあるCDショップに止めた

それに戸惑う麗奈はすぐに訊いてきた

「あれ？ここにもTSUTAYAがあるんだ……っていうか、寄るの？」

「帰りたいかったら帰ってれば？」

健斗はそう言って、買い物袋を持ってTSUTAYAへと入っていた

麗奈は口を尖らせて呟くように言った

「いじわるだなあ……」

さつきも説明したんだけど、ここから家まで歩いて帰ると一時間半くらいかかる。

だから麗奈には選択肢がないのだ……

健斗はTSUTAYAの中の、CDレンタルのコーナーへ向かった

そして、目的のCDを探し始めた

「こついつとは都会っぽいね」

「そうですか」

健斗は麗奈の言葉を半分聞き、半分流していた。

「どんな曲聞くの？」

「ん……色々」

「色々って？」

「色々は色々」

「健斗くん」

「ん」

「私と会話する気ないでしょ？」

「ん」

「……もつつー！」

麗奈は少し拗ねた感じで、どこかに行ってしまった

健斗は麗奈がどこかに行ったのかなんてさえ気がついてなかった

そのためか、

「あんまりうるちよろすんなよ。探すのが大変だから」

と、誰もいないのに一人で話していた

しばらく捜しているとお目当てのものが見つかり、健斗はそれを取り出した

借りたかったのは、Mr・Childrenの1995～1999年までのベストアルバムだった

こんなかに今聞きたい曲が入ってんだよなあ……

とりあえず目当てのものは見つかったんだけど……もう少し見てこ
つかなあ？

でも遅くなるし……また今度来るか

「うしつ。大森帰る あれ？」

ここで始めて、健斗は麗奈がいなくなっていることに気がついたの
だった

辺りをキョロキョロと見回す

「またかよ……うるちよろすんなって言ったのに……」

いや、今回は八割健斗が悪い……

でも本人はそれに気がついてなかった

CDらへんにはいないってことは、DVDの方にいるのかな？

健斗はそう思い、DVDの方を見に行った

すると、健斗の山勘は当たりだった

新作が並んであるところに、麗奈は退屈そうに眺めていた

健斗はハアっとため息をつき、麗奈に近づいていった

「おいっ！ーうるちよろすんなって言ったる」

健斗がそう言うと、麗奈は健斗を見て口を尖らせた

「だって健斗くんが夢中になってたんじゃん」

「夢中になろうがなかるうが、勝手にうるちよろすんなっつてんの。捜すのは俺なんだぞ」

「何それ。私がお荷物みたいじゃんっ」

「みたいじゃなくってそうなんだよ。第一俺がお前と好きでいっしょにいると思うか？買い物だって一人で行ければ行きたかったよ」

健斗がそう言うと、麗奈は少し頬を膨らませた

どうやら少し怒っているようだった

「ひどいっ！ー！健斗くんのバカッ！ー！」

「バカで結構コケコッコ。早く行くぞ」

健斗はそう言って、麗奈を置いてカウンターに向かった

それを不機嫌そうについていく麗奈は、ツンツとしていた

「健斗くんって絶対B型だよねっ!!」

「お前だっ てそうだろ」

「そうだけど何よっ!!」

「自己チューってことだよ」

「カチン。健斗くんに言われたくないよっ!!」一番自己チューなの健斗くんじゃんっ!!」

「ギヤアギヤア騒ぐな。さっき商店街でお前に振り回されたのは誰だ?俺だ」

「別に振り回してなんかないしっ!!」

するとだった……健斗は見てはいけないものを……いや、会ってはいけない人に会ってしまった……

その人を見た瞬間、健斗は全身の血が引いていった

カウンターで何かを借りている女の子。

ミディアムヘアに、可愛いらしい私服姿……に青いスカート。一際目立つ、可愛い女の子……

そんな……何であの子がここに……

「お……大森」

「はい何ですか健斗様？」

「お前、ちよつと先外に出てろ。すぐ行くから」

「うるちよろすんなって言われたので、お荷物は動けません」

と言ってツンツとした態度を見せた

健斗は慌てて、麗奈を促す

この光景をあの子には見られたくないっ！！

「頼むから！！なっ！？」

「謝ってくれないと嫌」

そう言われると健斗は顔をしかめた

「ハアッ！？何で俺が謝るんだよ！！」

「何で謝らないのっ？」

健斗はこの糞生意気娘に我慢の限界を覚えてきた

「あのなっ！！こつちだつて謝つて欲しいんだよっ！！お前のせいで商店街の人には変な誤解を受けるしっ！！お前を乗せて何km自

転車をこいだと思う!？」

すると麗奈の方も負けんじと言わんばかりに反論してくる

「自転車は悪いとは思ってるよっ!？けど商店街の人は自分がちゃんと言い訳出来なかったのが悪いんじゃないっ!！」

「そもそもお前がおとなしく家で待ってればよかったんだよっ!！」

「だってこの街のこと知りたかったんだもん!！」

「そら見る!!結局自分の都合だろうっ!!自己チューが!!！」

「違うしっ!!健斗くんのバカッバカッバカッ!！」

「んだと〜!？」

健斗たちはあまりの口喧嘩で熱くなっていたため、気づいてなかったのだが、二人の声があまりにも大きいため、他の人の注目を浴びていた

すると、店員が騒ぎを聞いて駆けつけてきた

「あのお客様……店内でさわがれると他のお客様のご迷惑となりますので……どうか」

すると健斗と麗奈は声を八もらせて言った

「「うるさいっ！！」」

二人の恐ろしい剣幕に店員はたじろいでしまう……

麗奈がさらに声量をあげる

「健斗くんのトンチンカンっ！！」

「何か悪口の言い方が可愛いですね……」

「お前こそっ！！能天気のネコ型女がっ！！」

「それは誉めてるんですか？」

するとだった……

あまりにもこいつがむかついたから我を忘れてしまっていた……

あの子の存在を……忘れていた……

「あ……あの……」

「あんっ！？あっ……」

声をかけてきた女の子を見て、健斗は絶句してしまった

「やっぱり……山中くん……だよね」

「あ……こんにちわ……」

健斗は感じていました……

全てが終わった

見られて欲しくないところを……

この子に見られてしまった……

第1話 嬉しくない出会い P・12

健斗と麗奈はCDを借りたあと、すぐに店を出た

そして、健斗がさつきから気にしていたあの女の子も、店からいっしょに出てきた

健斗の頭の中にはすでにどう言い訳しようか考えていた

「びつくりしたよ。騒いでる人がいるなあって思ったら山中くんだったなんて」

と言つて、その女の子はクスツと笑った

健斗は恥ずかしそうに「ゴメン」と呟いた

「俺も……早川はやかわがいるとは思わなかったわ」

本当に思わなかった……まさか一番誤解を受けたくない人に出会ってしまうとは……

彼女の名前は、早川結衣はやかわゆい。健斗と同じクラスメイトである。優しくて可愛くて……おしとやかで……成績はいいし、運動もできるし……

同じ人間とは思えない女の子だ

それに加えて性格はいいし……

どこをとつても最高の人だ

「健斗くんの知り合いなの？」

ふと麗奈がにっこりと笑いながら訊いてきた

「ああ。あゝ早川。こいつは」

「私、おおもりれいな大森麗奈です よろしくね、えつと……」

麗奈が戸惑っている、早川は最高に可愛い笑顔とともに、すぐに自分の名前を言った

「早川結衣です。よろしくね、大森さん」

「ええゝ？麗奈でいいよお 結衣ちゃん」

「そう？じゃあ、麗奈ちゃんで」

と言って、二人ともクスクス笑い合っていた。

「健斗くんと同じ学校なの？」

麗奈は健斗を見てそう訊いてきた

健斗は静かな声で答えた

「……………ああ」

すると、早川が健斗に話しかけてくる

「仲良いんだね。従姉さん？」

「ううん。違うよ、健斗くんとは今日会ったばかり」

早川はそれを聞くと不思議そうな顔をした

よく意味が分からないらしい

「今日から健斗くんの家に」

「だあゝっ！！」

健斗はすぐに大森麗奈の口を塞いだ

またこいつにベラベラと話させると面倒くさいことになる

「えっと、こいつの父さんが俺の父さんの友達で……何かとある事情で」

「いっしょに住むことになったんだ」

健斗が説明しかけてる途中に麗奈がそう言った

「変な言い方すんなよ。早川、ただの居候だから。えっとだから別にオレラそういう関係じゃ」

「結衣ちゃんはさ、今何してたの？」

また健斗が話している途中に麗奈が遮るように喋った

「私はちよつとCDを返してたの。で、これから商店街に用事があるって……」

「そうなんだ。偉いな、わざわざ」

「商店街って賑やかなとこだよね。さっき健斗くんと買い物に行ったんだ」

こ……こいつ……邪魔しやがって……

「本当に？でもお祭りの日はもっとすごいんだよ？」

「あ……七夕祭でしょ？」

「そう。そしたら今日の百倍は賑やかになるかも」

「そうなんだあ」

しばらくの間、早川と麗奈は「女の子」の会話を楽しんでいた

健斗は男だから、会話に入れずその様子をしらっとして見ていた

麗奈を見て、少し苛立ちを覚えていた

「大森……大森」

健斗は大森を呼ぶ。健斗は自転車に買い物袋を入れて、帰る準備をした

大森は振り返って健斗を見るとにっこりと笑ってきた

「あ、ゴメン。健斗くん忘れてた」

「あつそ……っ！かも俺は帰るぞ」

麗奈に苛立ちを覚えていた健斗は、麗奈に意地悪く言った

「えゝ……もつと結衣ちゃんと話したいなあ」

麗奈が残念そうに言うと、結衣はにっこりと笑って言った

「私も用事あるから……また今度お喋りしようね？」

「うんっ あ、私明日から結衣ちゃんと同じ学校に通うんだ」

「そうなんだっ。同じクラスだといいね？」

いや……同じクラスだったら俺が困るんだけど……

と言いたかったけれど言葉に出せるわけがない

「じゃあまた明日ね。山中くんも」

と早川はにっこりと可愛いらしい笑顔を見せてきた

健斗は照れる様子を見せながらゆっくりと頷く

そして早川は自転車に乗って、商店街の方へとこいでいった

健斗は少し放心状態になりながらも、その去っていく後ろ姿を見つめていた……

「……健斗くん」

麗奈が健斗の顔を覗き込むように言ってくる。

「早く帰るんじゃないの？」

「……分かってるよ。早く乗れ」

落ち行く夕焼けを背に、健斗は麗奈を乗せてゆっくりとしたスピードで帰り道をこいでいた

「川がキレイだね……」

小道の側を流れている川の水面が、夕焼けによって橙色に染まっていた

健斗も麗奈につられて見てみたが、確かにキレイなものだった

「夜道はここを歩いちゃ行けないね」

麗奈は静かにそう言った

「そうだよ。この一本道は電灯がないからな。日が落ちたら真っ暗になって、周りがまったく見えなくなるんだ。間違つて川にでも落ちたら大変だからな」

健斗はそう言つと、夕焼けをまた見る……

哀愁……今ならふさわしい言葉だ……

しばらく沈黙が続く

今日は疲れた……本当に……

「結衣ちゃん……可愛い子だよね」

「え……」

突然麗奈がそんなことを口に出してきた

その瞬間、健斗の胸が高鳴る

「いい子だし……きつとモテるんだろうなあ」

健斗は何も言わなかった

するとだった……

「好きなんでしょう？健斗くん。結衣ちゃんのこと」

「はっ！？わっわっ！！」

麗奈が突然とんでもないことを言ってきたため、健斗は驚き、バランスを崩してしまった

「わっ……ちょっとちゃんとこいでよ」

「う、うるせー。何いきなり訳のわからんこと……」

胸の高鳴りが止まらなかった……

「そっかぁ……まあいいけど」

そう言ってクスクスと笑う。健斗はそれ以上何も言わず、プイッと前を向いた

麗奈の言うとおりだった……

俺は……早川が……

早川のことか

「ねえ健斗くん」

「何だよ。うるさいなあ」

健斗は迷惑そうにそう言いはなつ

もちろん、照れ隠しも兼ねて……

「私さ……この街に来てよかったよ」

「はっ？」

いきなり何を言い出すんだ？

「今日来たばかりだけど……この街に来てよかったって思ってるんだ」

「……よかったな」

するとだつた

背中に暖かい感触を感じた

後ろを振り向くと、麗奈が健斗の背中におでこを押し付けていた

「お……おい大森っ。あまりくつつくなよ」

「私ね……この街で楽しい思い出作りたい……」

大森はそう言ったあと、静かに続けた

「これから……色々とお世話になるかもしれないけど……よろしくね、健斗くん」

そう言っつて麗奈はにっこりと微笑んできた

健斗はそれを見て……とっても不思議な感じを抱いた

こいつの口から……出た言葉……

それと共に、夕焼けに染まる可愛いらしい笑顔……

それがなんだか暖かい、大切な存在にほんの一瞬……たった一瞬だけ、そう感じたんだ

健斗は自然と口元がゆるんだ

「何言っつてんだよ今さら」

と健斗は……微笑みながらそう言った……

「あゝ！！健斗くん今笑ってくれたでしょ？」

麗奈が嬉しそうに声をあげる。それを聞くと健斗はまた顔をしかめて、頬を赤くした

「べっ……別に笑ってねえよ」

「笑ったよお。始めて見たあ」

「笑ってませんっ！！」

「笑ったもんっ！！健斗くんの笑った顔、始めて見れたもん」

と麗奈はにっこりと笑う……

健斗はそれを見て、プイツと前を向いた

けど、本当は……心の底から心地よい感じがして、麗奈に見られなように小さく笑っていたんだ

突然やってきた、大森麗奈……

この日を境に……俺の生活が徐々に変わっていくだなんて……まだ
思いもよらなかったんだ

第1話 嬉しくない出会い P・12（後書き）

これで第1話の終わりです。

続いて第2話をどうぞ……

第2話 始まる学校（前書き）

第2話のあらすじ

少しずつ、麗奈に慣れていく健斗

結局のこと、麗奈は健斗と同じクラスになった

健斗はこれから大変になると気を落としていた

そして、ひょんなことから麗奈との気持ちのぶつけあい……
そして健斗の憧れてる早川結衣……

果たして……どうなるのか

第2話 始まる学校

そして次の日となった。

いつもの朝が始まるはずだった。けれど……そういうわけにはいかない。

だってあいつがいるから……

健斗はというと、まだ眠っていた。当然だ。まだ6時だから。

大抵いつもは七時半くらいに起きて八時前にはでる

そうすれば遅刻なんてのは絶対にしない。ギリギリだけど間に合う。

だからあと一時間半は寝れる。

アラームだって……七時半にセットしてある。

今日健斗は、自分の部屋で寝ていてない。一階の居間の床に転がり、タオルケットをかけて眠っていた

理由は一つ、麗奈を二階のベッドで寝かしているからである

まだ麗奈の部屋には、ベッドどころか……机も何もない。だから健斗なりに、女の子を床で寝させるわけにはいかないだろうと思ひ、

麗奈を二階で寝させたのだ

別に居間の床だって、気持ちいいものだ。でも何でだろう……

何か寝苦しいんだよなあ……

わんっ！！わんっ！！

犬の吠え声が聞こえる

健斗はゆっくりと眼を開いた。するとだった。目の前には、可愛いらしい女の子の寝顔があった……

めちやくちゃ顔が近かった……

健斗はそれに驚いてぱっと起きてしまった

「何やってんのこいつ……」

麗奈が、健斗のように床に寝そべって気持ちよさそうに眠っていた。

何かスゲー色っぽい……

足と足の間に手をはさんで、可愛い寝顔を見せて……

っ！か本当に可愛いな……おい

健斗はゆっくりとため息をついた

何でこいつがここで寝てんだよ……一階で寝かせてやったのに……面倒くさいやつ

しかも……健斗はチラリと麗奈の服装を見る

麗奈の服装は、短パンに、タンクトップだった……めちゃくちゃ軽い服装……そして、少し露出している、麗奈の胸……ノーブラじゃねえの？

健斗は顔を赤くして、麗奈の背中……は触り難いが、背中に触れて麗奈を揺さぶるようにして起こした

「大森……起きろって」

「うーん……」

麗奈は眼を開いてゆっくりと身体を持ち上げた。そして眠そうにキョロキョロと見る

「あれ？健斗くん……おふあーよあう……」

と欠伸をしながら朝のあいさつをする

「おふあーよあうじゃねよ。何でお前がここで寝てんだよ」

「うーん……と、確か五時くらいに目が覚めて……健斗くん起きてるかなって思ったらすごい気持ちよさそうに寝てて……私もいっしょに寝ちゃってた」

と言って、えへへと笑った

「……五時に起きるバカがどこにいるんだよバカ……」二階に戻って寝てろ」

健斗はそういうと、ゆっくりとタオルケットを持って、立ち上がった
そして庭の方に出て、タオルケットを干す

するとだった

一匹の犬が健斗に近づいて甘えてきた

健斗の家には一匹柴犬を飼っている、名前はゴンタ。

まだ1才の仔犬で、目がクリクリしてる純粋な仔犬だ。

健斗はゴンタをゆっくりと撫でてやる

「ゴンタおはよう」

するとゴンタは健斗に飛びかかってくる。鳴き声を出しながら
きつと散歩に行きたいんだと思う

「分かった分かった。すぐ行くからちょっと待ってる」

「あゝっ!!」

麗奈が突然驚くような声を出した

「ここ犬飼ってたんだあ」

「二階で寝てろつつつたる」

「何て名前？」

健斗は微笑みながら、ゴンタをなでる

「ゴンタだよ」

「ゴンタ？あはは 可愛いね」

と言いながら、麗奈は縁側のサンダルを履いて、ゴンタに近づいてきた

「ちょっと待て」

健斗は麗奈を止めると、麗奈は素直に従った

「何？」

健斗はハアっとため息をついた

「ゴンタは人見知りが激しいんだ。知らない人が近づいたら、すぐ噛みついちゃうんだよ」

「そうなの？でも大丈夫だよ」

「噛まれたいなら勝手にしろ」

と言って健斗はプイッと前を向いて、洗濯棒にタオルケットをしっかりと干していく

ゴンタの悪い癖……早く治さないとなあ

「ゴンタッ！ーほらっ、いい子いい子いい子っ」

「ん……？はっ！？」

健斗は我が目を疑った。麗奈はまったく心配せず、ゴンタに近づき、しかもゴンタを撫でている

ゴンタも麗奈の匂いを嗅ぎながら、麗奈になついているように甘え始めた

「ゴンタ可愛い ほら、大丈夫だったでしょ？」

「うん……まあ……」

健斗は苦笑いをした

悪い癖が治ったのかな？

「お前って……本当に変なやつだよ……」

「えへへ 私、昔から動物に好かれるタイプなんだよね」
「変なやつ」

健斗はそういうと、また家の中に入っていった

健斗は二階に上がり、自分の部屋に入った。

何か……いい匂いがするなあ……

そっかあ、ここで麗奈寝てたんだもんな

健斗はそう考えると突然気恥ずかしくなった。

さっきの露出した胸を思い出してしまう……

健斗はハーフパンツからシャカパンに着替えて、財布とケータイをポケットに入れて、また一階へと降りた

すると麗奈が階段の辺りで健斗を待っていた

「どこか行くの？」

「ゴンタを散歩に連れてくんだよ」

健斗は台所に行き、冷蔵庫からペットボトルに入ったコーヒーを取り出し、コップにつぐ。

「……お前も飲む？」

麗奈は首を横に振った

健斗はそのままペットボトルを冷蔵庫にしまい、コーヒーを飲む

「ねえ、私もついていっていい？」

「ダメ」

健斗はそういうとコーヒーを飲み干し、流し台に置いた

「え〜？」

「え〜、じゃねえよ。お前がいると学校に遅刻する」

「そんなぁ……ついていくだけだよ？」

「昨日と同じこと言って、昨日大変な目にあったからな。お前は上で寝てるよ」

「むう……健斗くんお願い」

「嫌……だ……」

麗奈は健斗に近づいてきた

健斗の視線は、麗奈のはだけている胸の方にいていた

タンクトップなので少し露出しているのだ

健斗は顔を赤くしながらタジタジとした

けれど、麗奈は健斗にぴったりとくっついてくる

「ねえお願い。邪魔しないからあ」

「じゃ……邪魔しないか？」

「うんっ！！」

「……分かった……分かったから、くっつくなっ……そ、その恰好をどうにかしろー！」

「え……あっ！！」

麗奈はやつと自分の恰好に気がついて、すぐに胸の辺りを隠した顔を赤らめている

「……じゃあ、待っててやるから着替えてこいよ」

ハアッと健斗は安心したようなため息をついてそういった

「うん」

麗奈は顔を赤らめたまま、二階へと走っていった

健斗はまたため息をついた

胸の高鳴りが止まらない

何だよあいつ……本当に訳が分からない

健斗はまた冷蔵庫から今度はペットボトルに入った水を取り出して、自分の熱を冷ますように一気に飲んだ

第2話 始まる学校 P・2（前書き）

健です

わずか一週間ちょっとでユニークアクセス数が1000人を越えました

すごく嬉しいです

毎日200人以上のーが読んでくださってるおかげです

これからも頑張ります

第2話 始まる学校 P・2

健斗は家の外で、麗奈が来るのを待っていた。ゴンタを赤いリードに繋いで、しっかりと手を握ったまま欠伸をしながら暇そうにしていた

ゴンタはさっきからじっとお座りして待っている。健斗はジロツとゴンタを見下ろすと、ゴンタも同じように健斗を見上げた

「なあゴンタ」

健斗はゴンタに話しかけた。ゴンタ健斗の言葉に反応するかのようにじっと健斗の顔を見つめ、微かに首を傾げた

「お前どうしてあいつを気に入ったんだ？」

健斗はそのところが本当に不思議に感じていた。ゴンタの人見知りな健斗が一番よく知っている。以前、ゴンタに触ろうとして近寄ってきた小学生の子の手を噛んでしまい、大事になったのを健斗はよく覚えていた。ただ、一度覚えた人間に対してはとことん優しい。その男の子も今ではゴンタのよき友達の一人だ

しかし麗奈のようにいきなりゴンタに触れる人間なんて今までいなかった

本当にあいつは動物に好かれるタイプなのだろうか……

「もしかして……あいつがエッチイ恰好してたからじゃないかな？」

すると、ゴンタは健斗を見て一回だけ吠えた。何だか必死に弁明しているみたいにも見える

「凶星か？」

と笑いながらゴンタの頭をゆっくりと撫でてやった

するとだった。家の引き戸が開き、中から麗奈が出てきた。さっきの服装を着替えて、お洒落なピンク色のＴシャツ一枚に薄いパーカーを羽織り、下はショートパンツといった動きやすそうな服装だった。健斗は麗奈を見ながら不機嫌そうに言った

「遅えよ、帰るのが遅くなるだろ」

「ゴメンゴメン　女の子は色々と準備がかかるんだよ。着替えとか、髪とか」

着替え……不意に健斗は思わず先ほどの露出度の高かった麗奈の服装を思い出した。

「あっ！今、さっきのこと思い出したでしょ？」

「なっ！別にしてねえよっ！」

「鼻の下が伸びてるよ」

健斗はばつと鼻を隠した

「伸びるわけないだろっ！漫画じゃねえんだから」

「アハハ 健斗くんってピュアなんだね」

そう言われて健斗の中で何かがプツンと切れた。完全に小馬鹿にされていることに非常に腹が立ったのだ

「うるさいっ！さっきから田舎者だと思ってバカにしゃがって……
気が変わったっ！やっぱ連れてってやんない。家で待ってる」

健斗は憤りを感じながらゴンタを連れて、さっさと散歩に行こうとした

しかしだった。急に力強い抵抗を感じて、健斗はその場を動けなかった

慌てて後ろを振り向くと、ゴンタがまったく動こうとしないのだ

「ゴンタ、行くぞ」

健斗が引つ張つても、ゴンタはまったく動こうとしなかった。健斗から顔を逸らして知らんぷりしている

「ゴンタ……」

「ゴンタは私といっしょに行きたいんだよね？」

するとゴンタは甘えながら一吠えした。麗奈の方に自ら歩み寄って麗奈に甘え始める。健斗はその光景に思わず愕然とした

「いい子だねえゴンタ」

「ゴンタ……裏切りやがって……」

健斗は泣きたい気持ちを抑えて、うつ向いた。

やっぱりゴンタ……さっきのお色気にやられてしまったのだ……

「うーん……朝早いのは気持ちいいねえ」

麗奈は気持ちよさそうに、体を伸ばしている。

小鳥のさえずりが辺りに響き、心地よい風、涼しい気温。そして傍を流れる川の音が、心を癒す……はずだった。

麗奈はかなり上機嫌だったが、健斗は最悪に不機嫌だった

「ねえ健斗くん」

健斗はいくら麗奈に話しかけられても無視していた。まったく麗奈の方を見ようとせず、黙って目を閉じて俯き加減でいた。そんな健斗の様子を見て、麗奈は可笑しそうに言ってきた

「さっきのまだ怒ってるの？ゴメンってばあ。ただの冗談だよ」

「お前の冗談はぜんっぜん、笑えん!!」

と憤りを感じながら思わず怒鳴り声をあげた。するとゴンタはびっくりして身体をビクツとさせて健斗を見つめてきた。麗奈は苦笑いを浮かべて健斗を宥めるような言い方をしてきた

「ま……まあまあ……ところでさ、こつちの方向には何があるの？」

健斗はジロツと麗奈を見た。そろそろ許してやってもいいだろう。健斗だってそこまで心の狭い人間じゃないのだ。そこで少し考える仕草を見せた

「……別に特に何があるってわけじゃないけど……いつもゴンタの散歩コースは公園に行くから」

「公園？」

「うん。結構広い公園でさ、犬連れの人も多くて……子供るとき、いつもそこでよく遊んでた」

「へえ〜。ねえねえ今右に伸びてる道通ってるじゃん。左の道はどこに行くの？」

麗奈のいうとおり、健斗の家の前には、三つの道に別れている

前に真っ直ぐ行けば、昨日行ったように街に出て、学校まで行ける道のりである

今右方向の道のりは、公園があつたり……住宅もあり、さらにずっと行くと車道に出る。実はその車道を渡って少ししたところに、健斗が通っていた中学校がある。車道にはバス停もあつて、そこから

駅近くまで行くことも出来る。つまりそれは学校までも行けるとい
うことだ

そして健斗の家から伸びている左の方向に進むと……

「あつちは……何があるかな？山……かな」

「山？」

「うん……あとその頂きにお寺があつて、お墓とか……まあ、あつ
ちもほとんどは家が立ってるんだけど……」

「何て言うお寺？」

「何だつたつけなあ……でも結構由緒正しきお寺らしいぜ。初詣と
かでみんな行くんだ」

「ふう〜ん……」

「あつ……山の向こうには海があるんだ」

「海？」

「とは言ってもずっと向こう側だけだな。ここら辺は山や林に囲ま
れてんだけど、車で一時間半……二時間くらいかな？とにかくそん
くらい行けば海に出るんだ」

「ふう〜ん。夏が楽しみだねえ」

「そうだな。つーか元々はこの辺も海だったんだぜ」

健斗がそう言うと、麗奈が驚くような声を上げた

「ここがっ？嘘だあっ！」

「本当だつて。昨日神乃崎の地名の由来の話しただろ？」

「あ、うん」

「あの神社の辺りが、昔は岬だったんだ。本当にずっとずっと昔だけだな。で、この辺は一面に渡る海だったんだけど……大陸変動や人が住みだした影響で、この辺が山と海で隔てられた場所になったらしい」

「へえ……人って関係あるの？」

「関係あるだろ。人が住みだすっていうことは、その場所を確保する必要がある。だから長い歴史を通して人がこの辺を埋みたてて、家とかを立てたんだよ。で、今のようない町になったわけ」

「はあ……なるほど……」

健斗は麗奈に他にも色々質問されては、答えながら歩いていた

麗奈にある程度、この辺の地理を説明していた。そのため麗奈もこの辺りの地理的状況が分かってきたらしい

「ねえ健斗くん、いつも思ってたんだけど……あの川の名前ってあるの？」

「いや……名前があんのかどうかは知らないけど……」

「でも綺麗な川だね。あの山から流れてるんだ」

麗奈は振り返りながら遠くに並んでいる山々を指しながら言った。
健斗もそれを見てゆっくりと頷きながら言った

「まあな。つーかこの川は見た目だけじゃないぞ？本当に水が透き通ってるくらい綺麗なんだ。アユやマス、夏にはホタルとかが出てくるしな」

「ホタル？へえ、綺麗なんだろうなあ」

「そういやこの川は、商店街の方まで伸びてるよ。ほら、昨日商店街の中に橋があっただろ？この川があそこまでのびてるんだ」

麗奈はそれを訊くと、少し驚いた様子を見せた

「そうなの？じゃあ、この辺は川の源水に近いんだ」

「ん……まあそうは言ってもあの山を登ったとこなんだけど……他の場所に比べたらそうなるだろうな」

健斗の説明を受けて結構麗奈は大分この辺のことを理解してきたみたいだった

何だか……思ったよりも麗奈に丁寧に教えちゃってるな。今でもやはりまだ、麗奈に対する警戒心は拭えずにいた。それは当然だ。知り合ってからまだ日は浅い上に、健斗は麗奈のような人間は苦手……いや、むしろ嫌いだった

そのはずなのにこうして二人で散歩して話して、何だか徐々に距離が縮まり始めてるような気がする。もしかすると自分は麗奈に気を

許し始めてるのかも……

何か自分が悔しくなる……健斗にとってそれはものすごく不愉快な
ことであつた

第2話 始まる学校 P・3

健斗たちは10分くらい歩くと、看板に確かに書いてある「神乃崎三丁目公園」の言葉

「この上が三丁目公園」

と言って、健斗は指を差した。この少し長い坂を登れば、三丁目公園だ

「本当に？早く行こう」

と言って、麗奈は元気いっぱいその坂を走っていった

健斗は少し呆然として麗奈を見ていた

「……何であんなに元気なんだ？」

時々こいつがよく分からなくなる

健斗はふうつと息を吐いた

するとゴンタが健斗に甘えた声で鳴いてくる。

「分かったよ……」

健斗はゆっくりと歩き出した。

麗奈なんか、もう上り切りそうだ

「おい……大森！……ちょっと待てよ」

健斗が声に出して呼ぶにも、麗奈はまったく止まろうとしない

それどころか、むしろスキップで坂を上っている

この早朝にどこからあの元気が出てくるのか……

麗奈は坂を上りきり、何だか感嘆しているようだ

そして振り返り、健斗に大声で叫んだ

「健斗く〜んっ！！ゴンタ〜！！早くう〜！！」

「待てつつたのに　　うわあっ！！」

突然ゴンタが麗奈に呼ばれたからか、この坂を一気に走り出した

健斗はゴンタに引っ張られながら、坂を全速力で上っていった。

犬に引っ張られる……人間の走力が犬に勝てるわけがないのに……

そしてあっという間に、健斗は坂を上りきった。

いくら緩やかな坂でも、犬と同じくらいの速さで走ると体力が失わ

れ、さらに足がかなり痛くなってしまった

麗奈は健斗を見て、クスクスと笑っていた

「足、速いんだね？」

「……………はっ……………はっ……………はっ……………んぐっ……………ご……………ゴンタのバカやろっ……………」

健斗は死にそうな思いになりながらも、ゆっくりと身体をあげた

「ねえ、ここが三丁目公園？いいところだね」

三丁目公園は、人工的な木々に囲まれた、少し大きめの公園である。

滑り台やアスレチック、ブランコなどがそろっている

昼は子供が多いが、朝や夜は犬連れの散歩をしている人が多い

今日も犬連れの人が多いと思ったのだが……

「今日は人がいないなあ……………」

今日の三丁目公園は静かな朝だった。決して早すぎるわけじゃない
と思ったのだが……

「静かなところだね」

「まあな……………ここはゴンタのお気に入り　　うわっ！！」

また突然ゴンタが走り出した

さっきのがトラウマになったのか、それとも油断してたのか、健斗は反射的にリードを手から離してしまった

ゴンタは嬉しそうに、公園を駆け回っている。

「アハハ ゴンタ、嬉しそうだね」

「ったく いつもこうなんだよな」

健斗は微笑みながら、ゴンタを見ていた

「でも大丈夫なの？ リード離しちゃって」

「いや、いつものことだし……人もいないし、走らせとけばいいよ」

と言って、健斗と麗奈は公園の中を歩き始めた。

「いいところだねえ」

麗奈は周りを見渡しながらそう言った

「東京にもあるだろ……」

「けど、こっちの方が好きだなあ」

健斗たちは、大きな木の下に作られたベンチに座った

するとゴンタが健斗たちに駆け寄ってきて、健斗にいっぱい甘えてくる

健斗は微笑んみながら、ゴンタの頭をゆっくりと撫でてやった

「ゴンタ、健斗くんに甘えてるね」

「甘えん坊なんだよゴンタは」

すると今度はゴンタは麗奈に甘えてきた

本当に……珍しいことだと思う

ゴンタが初対面の人にすぐになつくだなんて……

麗奈は笑いながらゴンタの頭やあご、身体などを優しく撫でている。

「お前って……変なやつだよな」

健斗がそう言つと麗奈はにっこりと笑った

「そう?」

「ゴンタ、本当に人になつきにくいんだ。なのにすぐにお前にはなつちやってさ……」

「だから動物には好かれやすいタイプなの」

「あそう……」

健斗は持ってきた袋から、緑色の野球ボールくらいのボールを取り出した

そしてゴンタの目の前までやると、ゴンタはボールを目で追った

「ゴンタ……ほりゃ」

ボールを遠くに投げると、ゴンタはボールを追いかけた

そして口で加え、とことここっちに帰ってくる

麗奈はそれを見て、子供みたいにハシャイていた

「すごいすごい 私にもやらせて!!」

ゴンタから受け取ったボールを麗奈に渡す

麗奈はボールを手にとった

「えいつ!!」

麗奈は少々遠すぎるくらいのとこまで、ボールを投げた

しかしゴンタはまたそれを追いかける

麗奈はそれを見て嬉しそうに笑っていた

「ゴンタよく出来たね」

帰ってきたゴンタにいい子いい子と頭を撫でる

「それっ!!」

健斗はその麗奈の様子をみながら、あることを思い出していた

昨日から引つかかっていたこと……

昨日の時折見せた、あの寂しげな表情……

一体こいつに何があったんだろう？

こいつはいつも笑ってたり、喜んでたり……嬉しそうにしたり……
毎日が楽しそうだ

けど……何でかな……

健斗には麗奈のそんな様子が変に感じていたのだ……

何かが違う……麗奈は何かを隠していて、笑っているような……不思議な違和感を感じるのだ

「……健斗くん？」

「ん……」

「どうかした？もしかして、私に見惚れてたりしてえ……？」

「バツ……バカ……お前に見惚れるかつ！！ナルシスト」

健斗はそういつとプイツと前を向いた

でも実際、麗奈は男の誰もが一度は振り返ってしまっほどの美少女だ
顔も可愛いし、スタイルもいいし……

きつと、前の学校ではスゲーモテてたんだろう……

それを考えると、健斗は嫌悪感を抱く

東京では男を使って楽しんでたのだろうか……自分はモテると分かったやつは……調子に乗り、人を弄ぶようなやつになる

麗奈も……そんなやつなんだろうな……

だから俺は騙されない……こいつに恋愛感情なんて絶対に持ちたくない

「そつだよね……健斗くんは、結衣ちゃんが好きなんだもんね」

健斗はそれを聞いて、麗奈を見て顔を赤くした

「なっ……誰もそんなこと言ってねえよっ……！」

「隠してたってダメだよー 見てれば分かったもん」

「う……」

健斗はそれ以上言い返せなかった……

麗奈の言う通りだったから……

俺は…… 早川結衣が…… 好きなんだ

中学に入って、初めて見て…… 最初は…… そりゃ麗奈と同じこと思
ったよ

早川は可愛いし…… 勉強もスポーツも出来て、スゲーモテてた

だから最初は、人を弄ぶようなやつだと思ってた……

けど…… あのと時から……

「結衣ちゃん可愛いもんねー そりゃ、健斗くんだって好きになる
よ」

「……別に顔で選んでねえよ」

「ねえ、どうして結衣ちゃんを好きになったの？」

麗奈が微笑みながら、訊いてきた

健斗は答える気がなく、プイツと眼を剝らした

「別に……」

「優しいから？ 優しそうだもんね それに可愛いくて、勉強もできそうだよな…… 優等生って感じ きっとみんなからモテるんだろうなあ…… それにさ」

「おいっ……」

健斗は麗奈を睨み付けた

低い声で、少し憤りを持った感じで言った

「人のことを簡単に言うなよ。ちゃんと人のこと分かってから物を言えよな」

健斗がそう言うと、麗奈は苦笑いをした

「別に…… 悪い意味で言ったわけじゃないよ。ただ、昨日の印象で言っただけ」

健斗はそれを聞くと、何も言わず、ゴンタが甘えてくるのをそっと麗奈に受け流した……

人のことを簡単に言うな……か

よく言うよな…… 自分だって、麗奈を見た目で決めつけてるじゃん……

健斗は自分の言ってることとしてるこの矛盾さに気づき、恥ずかしくなった

麗奈はゴンタを撫でながら静かに言った

「健斗くん……結衣ちゃんのこと、本気で好きなんだね」

健斗はそれを聞いて、またイラツときた

「お前は誰かを好きになるとき、軽い気持ちで好きになるのか？」

健斗は麗奈が次にいう言葉を期待していた

けど麗奈は少し考える仕草を見せた

「どうだろう……そういうときもあったかな……」

健斗はそれを聞いて、少し安堵感を覚えた

やっぱりこいつ、印象通りの女だったんだ……

健斗は下をうつ向いてゆっくりとため息をついた

「……でも、人を本気で愛せない人は……本気で人に愛してもらえないんだよね……」

「え……？」

健斗は麗奈を見た

麗奈は静かな口調で言った

「人をちゃんと愛することって……難しいのかもね」

「……大森？」

何を……言ってるんだ？

するとだった

麗奈は突然健斗を見て、にっこりと微笑んだ

「でも、健斗くんは結衣ちゃんを本気で好きなんだもんね　すごい
よっ……！」

「はっ……？」

麗奈はさらに続けた

「健斗くんが本気で結衣ちゃんが好きなんだから、結衣ちゃんもき
っと健斗くんを好きになってくれるよ」

と言って、にっこりと笑った

健斗は意味が全然わからなかった

何を言ってるの？

何で……こいつがそんなこと言うの？

ただ健斗は恥ずかしくなって、プイツとまた眼をそらした

「うるせえ……」

恥ずかしさを隠すため、健斗は手を開いたり閉じたりする

そしてチラリと麗奈を見ると、麗奈は微笑んみながらゴンタを撫でていた

「ゴンタいい子だねえ」

訳が分からないよ

何だよ……こいつ……どうして赤の他人が……俺のことをこんな風に……

大森麗奈って……

一体……何を考えてるんだ？

健斗はふうつとため息をついて東の空を見た

明るい太陽が、まだそこでちよつとずつ西へ傾いていた

第2話 始まる学校 P・4

健斗と麗奈はゴンタを充分遊ばせた後、公園内を一回りし、ゴンタの散歩を終えたという形で、ゆつくりと家路についていた

「楽しかったあ 犬の散歩なんて初めてだったよ」

「そりゃよかったな」

「ねえ、明日もゴンタ散歩に連れてくの？」

麗奈がワクワクした様子で訊いてきた

健斗はブスツとした感じで答えた

「いつもは母さんが父さんが散歩するんだ。今日は何でか知らないけど、早く起きたから……」

「ふう〜ん……」

健斗は麗奈を見て、少し困り顔を作った

「ふう〜んじゃねえよ。お前のせいで早起したんだぞ」

「えっ？私のせい？私なんかしたっけなあ？」

と麗奈は不思議そうな顔で健斗にいう

健斗は顔を赤くして戸惑いながら言った

「おつ……お前が……俺の隣で……寝てたからだろうが……」

「えっ？あゝ……だったけ？」

麗奈はそれを聞くとクスクスと笑い始めた

「そんなことで動揺するなんて……健斗くんってやっぱりピュアなんだね」

「おまつ……そんなことって……」

健斗にとって女の子が隣でいっしょに寝てるだなんて大問題だった。

こいつは恥ずかしくないのだろうか？

昨日まで赤の他人だったやつといっしょに寝るだなんて……

「とつ……とにかくっ！！もう二度と隣で寝るなよっ」

「はあゝい ピュアな健斗くん」

健斗はそれを聞いてまたカチンときた

「うるさいっ！ー！」

健斗は麗奈を怒鳴りつけた。さつきから黙ってればいい気になりやがって……東京者が……

「……あれ？おこっちゃった？」

健斗は麗奈を置いて早歩きで歩き出した。

「もっつ……健斗くんって意外と短気？」

「お前がそうさせてんだろっ！？」

家に着くと、健斗はまずゴンタを犬小屋の中へと入らせた

「ゴンタ、戻れ」

ゴンタは健斗から離れ、犬小屋の中へと入っていった

リードを杭に繋ぎ、これでオッケーと……

後ろを振り返ると、麗奈が感心してる様子だった

「へえ……ゴンタ、仕付けちゃんとなってるね」

「ああ。どっかの誰かさんよりも礼儀正しいいな。手懐けやすい」

「それって私のこと？」

「こ名答大森さん。よく出来ました」

健斗はそう言っ、家の中へと入っていった。

すると麗奈が健斗の前に立ち、また意味不明な行動をとる

「ワンッ！ワンッワンッワンッ！！」

「……………何やってんの？」

健斗が引き気味で麗奈に訊くと、麗奈は微笑みながら言っ

「ワンちゃんの真似っ！！麗奈ちゃんを手懐けてみなさいっ！！」

「……………」

健斗は首をかしげて、麗奈を無視しながら靴を脱ぎ、二階へと上がった

麗奈は健斗を追いかけるように、そして煩く言っ

「ちょっと無視しないでよ」

「うるさいなあ……………っ！かお前、自分の部屋行って学校の準備してこいよ。今日お前も学校行くんだろ？」

「うんっ！！学校楽しみだなあ」

「そりゃよかったな……」

健斗は自分の部屋に入ると、そこには母さんがベッドのシーツを持ちながら立っていた

「あらお帰り。ゴンタの散歩に行ってきたの？」

母さんに訊かれて、健斗はゆっくりと頷いた。するとだった

「ゴンタの散歩スツゴク楽しかったです」

と後ろから麗奈がご機嫌そうに言った

母さんはそれを見てにっこりと笑った

「麗奈ちゃんも行ったの？二人ともすっかり仲良くなっちゃって
おほほ」

「別に仲良くなってねえし……つかシーツ自分で洗うからいいよ」

と言って、健斗は母さんからシーツを取り上げた

「あら、そう？別にいっしょに洗っちゃいなさいよ」

「他のと洗うと、匂いがつくだろ」

「つかないわよ。強力な洗剤使ってるんだし」

「市販のは大体当てにならないの」

健斗はそう言っ、シーツを自分のベッドの上に置いた

「まったく……細かいとこ気にしすぎよあんた……」

すると母さんは麗奈を見てゆつくりと微笑んだ。

「じゃあ麗奈ちゃん、朝ごはん用意しておくから、着替えたら下降りてきてね」

「はあーい　ありがとうございます」

母さんはにこつと笑うと、今度は健斗を見てきた

「あんたも早く降りなさいよ」

「まだ早いんだけど……」

時計の針はまだ七時だった。

全然早すぎるくらいだ。

「だから今日は麗奈ちゃんが早く行かないといけないから、あんたも早く行かないといけないの」

「はっ!？」

「今日あたしと麗奈ちゃんは、校長先生にあいさつしに行くのよ。だから早めに出ないと」

「二人で行けばいいじゃん。俺はあとで一人で行くから」

「車で行った方が早いでしょ？」

「別にわざわざ車じゃなくたって……ガキじゃねえんだから一人で行くよ」

健斗がそういうと母さんは鼻でため息をついた。

「まったく……ならいいけど、じゃあ麗奈ちゃん、支度しといてね。あつ、健斗。ゴンタにご飯上げといてね」

母さんはそう言うつと、部屋から出ていき、階段を降りていった

「……何つつたってんだよ」

健斗は立っている麗奈を見て言った

「健斗くん後から行くの？」

「そうだよ。はいこれ」

健斗はそう言うつてシーツを麗奈に渡した。麗奈は静かに受け取ると、首をかしげた

「自分で使ったんだから、自分で洗えよ。帰ってからでいいから」

健斗がそういうつと、麗奈はにつこりと笑って言った

「分かった」

「つーか、早く準備しろよ。二度も言わせんな」

「うん」

麗奈はにっこりと笑うと健斗の部屋から出ていった。

健斗はそれを見るとため息をついてから、ベッドに腰を下ろした

本当に……あいつがこの家に来てからスゲー疲労が溜まっているよ
うな気がする……

だから反対だったんだよ……女の子といっしょに住むだなんて

しかも、性格悪いじゃねえかよ……

健斗はふとさっきのことを思い出していた

『人を本気で愛せない人は……本気で人に愛してもらえないんだよね……』

麗奈は遠くを見ながら、何かを見ながら……健斗に、そう言った。
けど、健斗にはその言葉の意味はわからなかった

いや、言っていることはわかってるんだけど……どうして麗奈が、

それにあんな表情を見せてあんなことを言っただろう？

『でも、健斗くんは結衣ちゃんを本気で愛せてるんだね　すごいよっ！　健斗くんが本気で結衣ちゃんが好きなんだから、結衣ちゃんもきつと健斗くんを好きになってくれるよ』

何だよ……あいつ……本当に訳が分からねえ。

いきなりスゲーとかいいやがって……

もしかして……俺のこと応援してんのか？

何で俺なんかを……

………

健斗はベッドに転がった

まだあいつが来て二日か……

あんな訳の分からねえやつと暮らしていかないといけないのか……

健斗は憂鬱な気持ちでふうっとため息をついたのであった

第2話 始まる学校 P・5

健斗はいつも通り、ゆつくりと学校へ行く支度をした

ゴンタの散歩で汗を書いたのでシャワーを浴びて、タオルで髪を拭いていたときだった

台所へ行き、冷蔵庫から牛乳を取り出し、コップについて飲んでいった。すると母さんが居間から顔を出してきた。

いつも外に出るような少しお洒落をして……

「じゃあそろそろ行くけど、家の戸締まりとゴンタのご飯お願いね」

「大森は？」

健斗が訊くと、母さんはしらっとした表情を見せた

「もう車に行ったわよ。あと麗奈ちゃんにちゃんと学校のこと教えるのよ？きつと色々不安だろうから、あんたを頼りにしてんだから……」

「どうだかな……」

あの能天気なバカが不安という感情を持ち合わせているのかさえ、疑問だ

母さんは時計を見て、はっとした

「あらいけない。もうこんな時間だわ。じゃあ、お願いね」

母さんはそう言って健斗の目の前から姿を消した

ふと家のドアが閉まる音と、車のエンジン音が聞こえた

次第に車のエンジン音は遠くの彼方へ消えていった

健斗はそれに安心し、牛乳を飲み干して、居間の方へと行った

時計を見ると、七時半ちよつと過ぎ……そろそろ制服に着替えて、朝飯食って……ゴンタにご飯をあげないとな……

健斗はそう思いながら行動に移す

自分の部屋へと向かい、机の真つ正面に置いてあるクローゼットの
中から、白いYシャツと黒い学生服上下セットを取り出す

いわゆる、学ランというものだ。これを着ると、かなり暑く感じる。
でも学校の校則上、五月の下旬まで冬服着用なので、着なければな
らない

今は五月の中旬と言えよう。あと一週間の辛抱だ……

まあ、ズボンはこっそり夏服を着ている。夏服の方が生地が薄く風
通しもよいため、体感温度がかなり違ってくるのだ

またいつも健斗は学ランのボタンを2個外してるから、涼しさはア

ツプだ

健斗は着替え終わると、また居間へと向かう。居間にはちゃぶ台が出されており、その上にはトースト2枚とコーヒーが置かれていた。そしてお弁当箱の入った袋……

神乃高は、学食がないからお弁当を持参である。まあ購買部で買ってもいいんだけど……品揃えが悪いから

これらは全て、母さんが用意していったんだと思う

手際がいいなあ……

健斗はゆっくりと座ると、トーストを噛み締めてから、コーヒーを飲む。ほろ苦い味が朝をすっきりとさせる

健斗はテレビのリモコンを手に持ち、スイッチをつけた

みのもんたの、「朝ズバッ!!」のニュースと天気予報をチェックするのが日課だ

それにしても、みのさん……よくこんな年まで頑張れるよなあ

麗奈をみのさんの家に預けたいよまったく……

今日のニュースは、ニュースというよりも特集だった……

最近話題の、デートDVについてだった

聞いたことはある。彼氏彼女の間で、卑猥な暴力が起こること……
ドメスティックバイオレンス
DVの彼氏彼女バージョンってことだろう……

健斗はそれを見ながら、あることをまた思い出していた

今朝麗奈と散歩に言ったとき……麗奈が何気なく言った一言……

『人をちゃんと愛することって……難しいのかもね』

大森はあのとき、このことを言ってたのだろうか？

確かに……このデートDVのように、間違った愛し方っていうのは
数多く存在するような気がする

ただの性欲と、好きという感情を間違える人もいるだろう

または……体面だの印象などを気にして、それを好きという気持ち
に置き換えたりと……

よく分からないことばかりだ……

それを、俺は早川がマジで好きだと言ってるから……麗奈はすごい
と言ったのか？

でも……そう言われると、実際俺だって……早川を本気で好きなの
か？

そう思うと自信がない。100%早川が好きなのは自分でよく分かるけれど……

しかしそれが、もしかしたら性欲なのかもしれない……または体面だの印象だのを気にしているせいなのかもしれない……いくら口で俺は早川を本気で好きだと言っても、もしかしたら実際は違うのかもしれない……

自分のこの気持ちだが、果たして真実なのか偽りのものなのか……

それが分からないとなると、麗奈の言う通り……人をちゃんと愛することというのは簡単なものじゃないと言える

しかし、恋愛っていうのはそんなに理屈のこねた考えなんて必要なのだろうか？

好きなら好き……嫌いなら嫌い……大それた言葉のいらない、シンブルな気持ちだけでいいんじゃないだろうか？

どっちも正しく、どっちも間違ってるような気がする……

麗奈は何を感じてあんなことを言ったんだろうな……

わんっ！！わんっ！！

庭からゴンタの吠え声が聞こえた。この時間帯にこの鳴き方は、ご飯をねだっている証拠だ

健斗はふうつとため息をつきながら、重い腰を持ち上げた

そしてゆっくりとした足取りで庭へと向かう。

縁側に置いてあるドッグフードを持って、ゴンタに近づいていった

ゴンタは甘えた声と、吠え声を出しながら健斗に餌をねだってくる

健斗はゴンタがいつも使う器の中へとドッグフードを適量に入れた。

「ゴンタ待て」

ゴンタに餌を待つように命令すると、ゴンタは待ちきれないと言わんばかりにソワソワする

健斗はもう一つの器に水を汲んで、餌の横に置く

手を目の前に持っていて……

「よし」

健斗が許可を出すと、ゴンタはご飯に食らいつくように食べ始めた。

健斗はその光景を見ながら、ハアッとまたため息をついた

「お前は恋愛とかしないのか？」

健斗が訊いても、ゴンタは餌を夢中に食べる。

健斗はゴンタの身体をゆつくりと撫でると立ち上がり、また家の中へと入っていった

大森麗奈の言った言葉が頭から離れない……

健斗は洗面所に向かい、自分の顔を見た

……俺が早川のことを本気で好きなんだから……早川も俺のことを本気で好きになってくれる……か

一体何なんだよ……

あいつ……俺をからかって面白がってるだけなのだろうか

何だか心の中がモヤモヤする。健斗はそのモヤモヤを晴らすように、水で自分の顔を思いつきり洗った

第2話 始まる学校 P・6

そして時刻は八時前を指している。健斗はすでに、家を出る準備をしていた。

そろそろ家を出ないと、学校に間に合わなくなる。

いつもこの時間帯に出るようにしているのだ

この時間帯に出れば、早くもないし……遅刻することもなく学校に着くからだ

健斗はしっかりと家の鍵を閉めると、庭に回って自転車を動かす。その途中、ゴンタが近寄ってきて、甘えた声を出しながら健斗に甘えてくる

健斗はゆっくりとその頭を撫でてやった

「ゴンタ、いってきます」

健斗は自転車を家の外まで運び、そのまま学校へと向かった

これから学校だなんて……かなり憂鬱だ

学校はあまり好きじゃない……

授業はダリイし……

眠くなるし……

健斗は学校で目立つ立場じゃない。いや、むしろ地味で大人しくてもいなくても変わらないような存在なんじゃないだろうか、と自分ではそう思っている。

当然、友達と呼べるような存在は何人かいる。ただ……健斗はもう誰かと話すようなことをほとんどしていなかった。というより自ら誰かと関わることを避けている

それを自ら望んでいる部分があった。誰かと関わるようなことはしたくはなかった。一人が一番気楽だと思えたからだ。

健斗は誰かといっしょに行動したり、馴れ合うことが嫌いではない。むしろ昔は好きだった。友達とバカなことをしたり、はしゃいだりすることが好きだったはずだ。

ただ……健斗の中であることを決めていた。自分が誰かと関わるようなことは避けなければならぬ。

健斗は自転車を漕ぎながら空を見上げた。今日はとても良い天気で、雲一つない。普通ならば気持ちよく過ごせる日だろう。

だが健斗は不快だった。忌々しく感じる……ズキンと一瞬だけ頭が痛くなり、健斗は自転車を漕ぐのを止めて頭を抑えた。

……また……

健斗はゆっくりと目を開けた。こんなふうに天気がよい日は、どうしてもこうなってしまう。未だにあのことを思い出してしまうのが忌々しかった。

……もう昔のことなんだ……

健斗は自分にそう言い聞かせるようにそう心の中で呟いた。そしてまた再び自転車をゆっくりと漕ぎ始めた

健斗はいつも通る坂道を下った。この坂道を下りきったら、学校に着く。

健斗は欠伸をしながら自転車をこいでいった。他の生徒たちも自転車で来る人や、歩きで来る人などたくさんいる。

でも大半は自転車だ

だって健斗と同じ地域に住んでる人が多いんだから……歩きでは一時間半もかかってしまう

健斗は自転車を駐輪場に置いて、スクールバッグを持って昇降口へと向かった

行き交う人々は、友達に「おはよう」などと声をかけている

いつもと同じような光景だ。何だけど……なんだろう？今日はやけに騒がしいような気がする

健斗は廊下を通りながら、他のクラスを見る。男子はグループで騒いでいて、女子は集まって会話をしている

いつも見るような光景だけど……何かが違うなあ……

自分のクラスでも同じだった。1年A組では男子が教室内で騒いでいて、女子が女子の輪というものを作って会話している

健斗は不思議に思いながらも、自分の席に向かっていた。そしてその際、近くを通る男子グループの会話をこっそり盗み聞きした

「……おいっ！あの可愛い娘、見た？」

「見た見たっ！朝練で見たしっ！めちゃくちゃ可愛いくなっ？」

そして健斗は今度は歩きながら近くにいる、今度は女子グループの会話をこっそり盗み聞きした

「あんなに可愛い娘っているんだねー？羨ましいなあ……」

「でもさああんな子入学式の時、いたあ？」

健斗は彼らの話を聞きながら、自分の額に冷や汗が垂れるのを感じた

まさか……こいつらが騒いでる理由って……健斗はゆっくりとため息をついて自分の席についた。一番後ろの窓際の席。

そうか……すでに麗奈のことが噂になってるんだなあ……

やっぱり相当可愛いんだな……みんなこんなにも騒いでるってことは……

健斗はいよいよ、憂鬱になった

麗奈が居候してるなんて、言わない方がいいよなあ……

そんなことを悩みながらまたため息をついた。するとだった

「山中くん」

突然声をかけられて健斗ははっとして顔を上げた。すると、目の前に早川が笑顔で健斗の前に立っていた

「おはよう山中くん」

「あ……おはよう……」

健斗は胸を高鳴らせながら呟くように言った。朝から早川がこんな風に健斗に話しかけてくるなんて、めったにないことだった。というか、そもそも早川と会話自体あまりしたことがない

しかし早川はゆっくりと健斗の前の席に座ってきた。そして周りを気にするように見渡しながら、健斗に耳打ちするように小さな声で言ってきた

「大丈夫？」

「え……」

健斗はそう言われてはつと気づいた。そそうだ……早川は唯一事情を知っている。詳しくは話してないけれど……麗奈と会い、しっかりと会話をしたのはこの学校の中で早川以外誰もいない

健斗はそう考えながら小さく笑みを浮かべた

「まあ……えつと……やっぱりみんなが騒いでるのって……」

「うん。多分麗奈ちゃんのことだよ」

早川も小さく笑い返してそう言った。健斗はそれを聞いて困ったように肩をすくめた。もしクラスの誰かに、自分がその話題の美少女と深い関わりがあるなんて知られたら……考えるだけで恐ろしかった

「今日麗奈ちゃん、このクラスに入ってくると思うよ」

「はあっ？」

早川が健斗の不安をさらに煽るようなことを口にした。健斗は思わず驚いた声を上げた。その声にクラスの中の何人かの人間が健斗に視線を送った

健斗は肩をすくめながら早川を見た。早川は健斗の気持ちを推し量ったのか困ったように笑っていた

「……それ本当？」

「うん。クラスのみんなが噂してるから……多分そうなんじゃないかな？」

健斗はため息をつきながら肩を落とした。少し予想はしていた。母さんが余計なことを言って、健斗と同じクラスにするように取り計らってもらったのかもしれない。しかしそれは健斗が最も避けたかった状況であった。

「そっか……」

「あ……そっか。麗奈ちゃん、山中くんの家に居候してるんだっけ？」

早川は確認するような言い方で健斗にそう聞いてきた。もちろん、周りの人間には聞こえないような声量で……健斗は小さく頷いてみせた

「まあ……うん。ちょっとした事情でなっ……あっ！でも、別に付き合ってるとかそういうわけじゃないからっ」

健斗が慌てるようにそう言うと、早川は怪しむような視線を健斗に向けて笑っていた

「へえ……」

健斗はそんな悪戯気な早川の表情を見てドキリと胸が高鳴らせた……やっぱり可愛い……麗奈のことでみんなは騒ぐだろうが、健斗からしたらこの早川の可愛さに感服したい

そんなバカなことを考えていると、早川がまた周りを見渡しながら健斗に耳打ちをするように言った

「……居候のこと、言わない方がいいよね？」

そう言われて健斗はほとんど間髪を入れずに頷いた

「あ……なるべく……っーか言わないで欲しいかも」

健斗がそう言うのと、早川はにっこりと笑った。

「分かった。もし何かあったら、いつでも相談してね 出来ることなら力になるよ？」

と言って、眩しい笑顔を見せる。健斗にとってはすごく暖かく、嬉しい言葉だった

健斗はその優しい笑顔を見て、心が癒されるような感じがした。薄く笑いながらゆっくりと頷いた

「ああ……サンキュー」

健斗がそういうと、早川はにっこりと微笑んだ。本当に早川は優しい子なんだと健斗は思っていた

早川は覚えてないかもしれないが……あのときだって……

「でも一つだけ不思議なんだよね」

早川がそう言ったので健斗は顔を上げて早川を見た。早川は何か腑に落ちないような顔をしていた

「何が？」

「うん……どうして麗奈ちゃん、今の時期に来たんだろうね？」

「え……？」

健斗の中にあつた違和感が広げられているようだった。早川は考え込むように首を傾げながら続けて言った。

「だって麗奈ちゃん、入学式にはいなかったじゃない？一年の五月に編入なんてないと思うんだけど……どうして今になってからこの学校に来たのかなあ？」

「あ……」

早川がそう言うと、HRが始まる鐘が鳴った。早川はその鐘が鳴り始めたと同時に席を立てて健斗の方を見た

「あ、じゃあ……またあとでね」

早川はそう言うと、自分の席へ戻っていった。しかし健斗の中では拭え切れない違和感が広がったままだった。早川の言うとおり、今の時期に編入なんて有り得ないと思う。元々この高校に入学するつもりだったのか、だとしたら何故今の時期になってからなのか？そういえば健斗はそのことを全く知らなかった。

そして、健斗はふと昨日の神社内でのことを思い出していた

いいからっ！……そういうことにしておこうよ……

あの言葉に何か健斗の知らない事情でもあるのだろうか……だとし

たら一体何なのだろう。

「……………まあ、いつか。」

そうだ健斗には全く関係のないことだ。別に麗奈がこの町にやってきた理由なんてどうだっていい。どうせ大したことでもないだろう

それよりも早川だ。本当に早川の優しさには心が暖まる

実はこれが健斗の学校に来る理由だ……………もし早川がこの学校に行かなかったら、俺は100%の確率で中卒だったろう

本当に最高の人だと思う……………

チャイムが鳴ってからしばらく経つと、先生が教室の中へ入ってきたので、みんなざわめきながらも席に座った。健斗はチラリと教室の外を見る

すると麗奈の影らしきものが、窓から見えた。かなり戸惑いながら教室の中をチラチラと伺っているのがわかる。あんなやつでも緊張するんだな……………そう思うと何だか可笑しくってぷつと吹き出した

「えっへん。え……………みなさんおはようございます。今日は良い天気で、風もここちよさそうですね……………いいですかぁ……………みなさん、こういう天気の良い1日には必ず決まって……………」

「先生っ！」

一人の男子生徒が大声をあげる。眼鏡をかけて、髪が短く、お調子者の面をしている。健斗もよく知っているやつだった

「そんなことより早く、新しいクラスのお友達を紹介してくださいよっ！」

その可笑しな言い方にクラスみんながどつと笑った。確かに転入生とかを紹介するときに先生がよく使うような言葉だった。「今日はみんなに新しいクラスのお友達を紹介します。」みたいな……

クラスの騒ぎように先生はゆっくりとため息をついた。そんな光景を健斗は興味なさげにボーッととして眺めていた

「はい……じゃあ君、教室に入ってきて」

すっかり出鼻をくじかれ意気消沈している先生は外に向かって声をかけると、教室のドアが開いた

そして静かにゆっくりと、一人の女の子が長い栗色の髪をなびかせながら歩いて入ってきた

健斗も、その女の子をじっと見つめていた

我が校の制服を身にまとっている

白に緑色のラインの入ったブレザーに、紺色のスカート。さらに赤色リボンをつけた制服……この可愛い制服を着た、一人の美少女が頬を赤く染めながら教室に入ってきた

どうやら少し照れてるようだった

.....

みんな、麗奈に呆氣にとられている。特に男子は、こういうのを目がハートになっているというのか……頬を赤く染め、完全に見惚れていた

「じゃあはい、今日から新しくこのクラスに加わる、大森麗奈さんだ。みんな仲良くするように……じゃあ大森さん、軽く自己紹介してください」

先生がそう促すと、麗奈は小さくと頷いた。モジモジと照れてるように頬を赤らめながらゆっくり口を開いた

「えっと……今日からこのクラスでお世話になります、大森麗奈です。えっと、早く仲良くなりたいので、どんどん声をかけてください」

何かスゲー普通の自己紹介だな……と思った次の瞬間だった

「うおーつつつつ！！？！？！？」

男子が一気に騒ぎ始めて、教室中がパニック状態に陥った。突然の出来事に麗奈も驚いた。もちろん、健斗も同じように突然の大声にビクツとした

「ついに来た〜！！俺の青春だあつ！」

「待ってたぜマイハニー！」

「神様ありがとう〜！女神様、ありがとう〜！」

……健斗を除いて、皆（特に男子）が騒ぎ出した。まあ、こうなるだろうというのは朝の時点で予測していたことだった。健斗はゆっくりとため息をつきながら、麗奈をチラリと見た

すると……だった

麗奈は笑っていたのだが、あの……少し寂しそうな表情を浮かべていた。それは神社で健斗に見せた、意味ありげな寂しそうな微笑みだった。健斗は少しの間、その表情を見入っていた

「……？」

みんなが騒いでる中……多分気がついたのは健斗だけだった。麗奈のその寂しげな表情に気付いたのは……

第2話 始まる学校 P・7

教室中のざわめきは収まらない。先生もかなり困っているようだったが、麗奈は平然とした態度でいた

「じゃ、じゃあ……はい。大森さんの席は……自分で決めてもらえろ？」

先生がそう言うと、麗奈はゆっくりと頷いた

「はい」

するとだった

他の男子共々が一斉にアピールをしはじめた。

「カムヒア〜ッ！……ここっ！……俺の隣っ！……」

「いやっ！……俺の後ろっしよっ！……てめえ場所どけよっ！……」

「はあっ！……何あんたっ！……最低っ！……」

「俺と話そうっ！……」

よくみんなやるよなあ……と考えながら、健斗はその光景をゆっくりと眺めていた

「じゃあ……」

麗奈はキョロキョロと教室を見渡し始めた

いいから早く席決めろよ……そんな風に心の中で茶化してみる

するとだった……健斗と麗奈が目が合った

「あっ!!」

麗奈がまるで、「見つけたっ!!」なんて言いそうに、健斗に笑いかけた。

健斗はちよつと顔をしかめる……不思議そうな顔をしながら

「先生!!」

麗奈は先生に訊いてきた

「あの、あの一番後ろの窓側の席の隣に机と椅子置いてもいいですかっ!？」

「あ……構わんが……」

「やったあ」

ん……一番後ろの窓側の席の……隣……って……

健斗は自分の隣を見た。……ここかよっ！？

「ちよっ……あ……」

健斗が前を見ると、男子たちが凄い剣幕をして健斗をにらんできた

「何で……あいつの隣に……」

「羨ましい……麗奈ちゃんと仲良くなりたい……」

「チクシヨウツー!!」

健斗はみんなから鋭い視線を感じながら、苦笑いをした。ふと自分のコメカミの辺りに冷や汗を感じた

「あ……学級委員長。机手伝ってやりなさい」

学級委員長（女）は立ち上がり、麗奈の机運びを手伝った

麗奈はありがとう、と言いながら一生懸命健斗の隣に机と椅子を運び終わった

そして健斗の隣に席を完成させてゆっくりと座った。健斗はなるべく目を合わさないようにしたが、チラリと見た瞬間に麗奈はにっこりと笑った

「よっす 同じクラスになれたね」

「……………」

健斗はまたチラリと前を向いた

男子がスゲー怖いよ……睨むなよ……そんなにさ……

不穏な空気のまま、HRは終わった……

健斗は麗奈を、トイレの前まで連れてこさせた

「どうしたの？急に」

麗奈は不思議そうな顔をした

「お前なっ！！何でわざわざ俺と同じクラスで、しかもわざわざ俺の隣を選ぶんだよっ！！」

怒鳴りつけるように、健斗はそう言った

麗奈は手を後ろに回して、口を尖らせながら言った

「えゝ、だってこの学校健斗くんしか知ってる人いないし……」

「おかげでみんなから恨みを買ったんだよっ！！」

ギャアゝツと健斗は一気に怒鳴りつけた

でもよくよく考えてから、健斗はゆっくりとため息をついた

「でも……お前を責めても仕方ねえよな……」

勝手に騒いでるのは、男子たちだ。麗奈は何も悪くないもんな

「私、健斗くんに迷惑かけちゃったかな？」

と麗奈が苦笑いをしながらそう訊いてきた

やめろよ……そんな顔すんの……

「いや……とにかく、いいか大森」

健斗は麗奈によく言い聞かせるように言った。

「お前が、俺ん家で居候してるつつうのは……しばらく黙ってるよ」

「……なんで？」

「なんで……って、お前さっきの反応で分かるだろ？男子たちの反応で」

健斗がそついうと、麗奈はなるほどと言わんばかりに、目を丸くした

「そつか……ゴメンゴメン　あの反応にすっかり慣れちゃってて、気付かなかった」

健斗はそれを聞いて、少し力チンときた

そりゃそうだよな……こいつは可愛いくてモテるんだろうから、あやってもてはやされるのに慣れてるんだろう。

だからあんなに平然とした態度でいられたんだ……

やっぱりそういう女なんだ……俺の大嫌いな性格……

「……とにかく言わないように気をつけろよ」

健斗がブスツとした態度でそう言つと、麗奈は元気よく言った

「はぁ〜い」

いつもこいつはこうやって軽い返事をするんだけど……ちゃんと本当に分かったのかが心配だった

「……あと……学校ではあまり俺に馴れ馴れしくするなよ。変な関係だと思われるからな」

健斗がそう言うと、麗奈はゆっくりと頷いてから少し考えた

「ん……それは保証できないかも」

「出来ないじゃなくってするんだよ」

健斗はそう言うと、ゆっくりと教室に戻ろうとした

「ねえ、どうしてそんなに気にするの？」

健斗はそう訊かれ、イラッときた

「何を」

「そうやってさ、周りに変な関係に思われるとか……どうしてそんなに気にするの？」

健斗はそれを聞いて少し頭に來ていた

「お前には分かんねえよ。東京でもここでも、常にもてはやされるお前にはな……」

健斗がそう言うと、麗奈は黙り込み、健斗を見つめていた

「けどお前がよくつたって、こっちは困るんだよ。変な誤解されて恨みを買われたり……早川に……誤解されたりすんのが……どうせお前にはどうでもいいことなんだろうけど……」

健斗がそういうと、麗奈はゆっくりと頷いた。

「分かったよ」

健斗はそれを見ると、ゆっくりため息をついた

何でよりによってこうなるんだろうなあ……

「……でも、普通にしてもらえないかな？」

麗奈が静かにそう言ってきた。健斗は不思議そうな顔をして麗奈を見た

「え……？」

「今は……健斗くんだけなんだ。普通に接してくれるのって」

「何？何が？」

麗奈は静かに笑いかけた。

「ダメ？」

健斗は何も言えなかった。普通に接して欲しいって……それって俺

を頼りにしてるから？

何でそんなことを言い出すんだろっ

ただ健斗はこの麗奈の表情を見てしまうと、何だか周りの視線とかどうでもいいように思えた

だから

「……ああ……分かった」

健斗がそう言うと、麗奈は嬉しそうに笑った。

「さっすが健斗くんっ！！頼りにしてますっ！！」

と相変わらずの元気良さを取り戻し、健斗の肩をバンバン叩いてきた

「うるせえなあ……っ！か、早く教室戻ってろよ」

「はあゝい」

麗奈は健斗に手を振りながら、廊下を走って教室に戻っていった

健斗はその場に佇んで、壁によりかかりながらゆっくりとため息をついた

マジであいつ……訳が分からねえ……

昨日といい今日といい……

何が普通にしてもらえないかな……だよ

健斗は麗奈の顔を思い浮かべていた。そして舌打ちをすると、軽く壁を殴った

第2話 始まる学校 P・8

健斗もそのあとに教室に戻ると、また教室中は騒いでいた

「……………あれ？」

健斗は麗奈がいないことに気がついた。

先に戻ってたんじゃねえの？

健斗は不思議に思いながらも、自分の席へ戻った

「山中っ！！」

健斗が席に戻ると同時に、突然男子たちが健斗の周りに集まってきた

何やら凄い剣幕をしている。

健斗はあまりの気迫にタジタジしていた

「な……………何ですか？」

「お前っ……………昨日大森さんといっしょに商店街を歩いてたって本当か？」

「いつ！？」

健斗は何も言えなかった。ズバリ凶星だし、どうしてこいつらが知

ってるんだろう？

「い……いやあ……知らないなあ……」

「昨日、お前がとんでもない美少女といっしょに歩いていて、しかもけ……けけけ結婚するって聞いたやつがいるんだよっ!？」

健斗はさらにギクシャクした。そっか……昨日商店街でかなり騒がれたんだ……だから、誰が健斗たちを疑うやつらが現れても仕方がないだろう

「……えっと……それはお姉ちゃんだよ……そう……お姉ちゃん……」

とっさに思いついた言い訳……しかしみんなはさらに疑い深くなった

「何〜!？お前姉貴なんているのか〜??……あっ!!大森さんっ!~!」

麗奈がやっと教室に戻ってきて、自分の席へ戻ってきた

突然男子に囲まれて、麗奈は微笑みながら不思議そうな顔をした

「どうしたの?」

みんな少し戸惑いながら麗奈を見る

「あの……」

「ん?」

「あの……昨日……山中と商店街行ったりしました？」

麗奈はゆっくりと頷きながら言った

「うん。それがどうか」

「うおおお〜いっつ〜!」

男子たちはショックな声にショックな表情……中には啞然としたやつもいるし、口をあぐりと開けているやつもいた

健斗は呆れ返るように頭を抱え込み、ため息を深くついた

何余計なこと言ってるんだよこいつ……

「ちちちちよ……ちょっと待って!?!どうして、いつしよに商店街に行ったの?というより……二人とも……お知り合い？」

健斗は少し落ち着いた感じでみんなに苦笑いをしながら言った

「いや……あのさ、別に深い意味なんてねえよ?その」

「ちょっとお前は黙ってる?」

「ねえ、大森さん？」

麗奈は質問攻めされて少し戸惑っていた

「う〜ん……それは……」

麗奈は健斗をチラリと見た

明らかにどうしようと言って訴えている

もし正直に言えば、居候のことがバレるし……

でもどう言い逃れるか……

「もしかして……二人とも……っ、付き合ってるとか？」

「はあっ!？」

健斗はそれになんり反応した。顔を赤くして、めいいっぱい反駁した

「いやっ!!それは違うからっ!!絶対ないから!!」

「じゃあ二人はどんな関係なんだ?山中……ちゃんと説明するんだ……」

健斗は男子たちにズイツと詰められた……

何て言えばいいのか分からない……何て言い逃れよう……

完全に頭の中がパニックになってきた

「……えっと……その……」

「イトコさんなんだよね？」

ふと後ろから早川が、微笑みながらそう言った。男子たちは一斉に後ろを振り向いた

「昨日から山中くんの家の近くに引越してきたんだよね？」

「そうなん？　つーかイトコ？」

男子たちが疑い深くそう聞いた

健斗はコクコクと頷くだけだった

「でもイトコって結婚出来るんだよね……」

「いやっ！！だからそういう関係じゃないからっ！！」

健斗はまた顔を赤くして否定した

男子たちは何か腑に落ちない感じだった

「イトコか……　つーか何で早川知ってんの？」

「えっとね……　昨日山中くんに会ったから……」

「そっかあ……　ならいつか……　イトコかあ……　イトコかあ……」

「うんっ。だから二人は親戚同士なんだよ。ねえ、山中くん？」

早川にそう訊かれ、健斗はゆつくりと頷いた

「そ、そう。ただの親戚だよ……」

「……そういうことか」

「まだ望みはあるな……」

男子たちは少し嬉しそうに納得して健斗たちから離れていった

健斗は冷や汗を拭い、ほっと安心するようにため息を吐いた

「危ないところだったね」

早川が微笑みながらそう言った

「ああ……マジありがとう早川……助かったよ」

すると麗奈も少し苦笑いを浮かべていた

「ありがとうね結衣ちゃん。健斗ちゃんと約束したこと破っちゃいそうだった」

「お前なあ……」

「約束？」

早川が訊くと、麗奈はにっこりと笑った

「うん。しばらくは居候のことは話さないって約束したの。ありが

とう結衣ちゃん」

「そうなんだ お礼なんかいいよ」

と早川はフフツと笑った

「いや、マジ助かったよ……ありがとう早川」

健斗はゆっくりと頭を下げながら、早川にお礼を言った

「だって言ったでしょ？困ってたら力になるって」

早川はにっこりと微笑みながらそう言った

「……ああ。ありがとう早川」

健斗も笑いを浮かべて早川にお礼を言った

早川は本当にいい人だよ……頼りになるし……あのときから……全然変わらない優しい笑顔……

俺はそんな早川を好きになっただ

健斗と早川は笑いながら話していた

ただ……麗奈はそれを黙って見ていたことを健斗は気づいてなかったんだ……

「麗奈ちゃん、同じクラスになれたね」

突然早川に話しかけられて麗奈は少し戸惑った

「あ……うんっ！ー！そうだね 私結衣ちゃんいてくれてよかったあ」

「そうだね あとでゆっくり話そうね？それじゃ」

早川はそう言つてまた自分の席へと戻つていった

健斗はしばらく呆然としていた……早川の魅力に改めて気がついたからだ

「ふう……危なかったあ。結衣ちゃんに感謝しなきゃ」

「ったく……」

健斗は呆れ返るようにため息をついた

でも何でかな？今のでバレても……どうでもいいように思えている。

別にバレたから何？

みたいな感じで……

「っーかお前先に戻つてたんじゃねえの？」

海斗がそういうと、麗奈はえへへと言いながら、笑いかけた

「ちょっと……迷っちゃった ここ広いから」

「はあ？」

どんだけ方向音痴なんだよ…… ったく……

すると授業開始のチャイムが鳴った

今日の一時間目は現国だ。

先生が教室に入ってきて、みんなは騒ぎながら座った

「はい、日直号令」

先生がそう言っ、て、号令をしてから先生は教科書を開いた

「じゃあ今日は昨日の続き…… 28ページを開いて」

先生がそう指示し、生徒たちは教科書を開く

もちろん健斗も開いた。ふと横を見ると、麗奈は少し困っていた

「そっか、お前まだ教科書渡されてないのか」

健斗がそう言っ、と麗奈は頷いた

「ったく仕方ねえな…… ほら、机くっつけていいから見ろよ」

「あ、うん」

麗奈はいそいそと机をくっつけてきた

「ノートもないんだろ？俺のルーズリーフ分けてやるから……」

と健斗はルーズリーフを取り出して麗奈に渡した

麗奈はにっこりと嬉しそうに笑った

「ありがとう」

健斗はプイツと少し照れるようにして、前を向いた

「……健斗くんってさりげなく優しいんだね」

「……別に……」

健斗が少し照れた感じで言うと、麗奈はまたにっこりと微笑んだ

「でも、私健斗くんのそういうところ好きだよ」

麗奈が優しい笑顔でそう言ってきた

「はっ！？ば……バカッ！！何言ってん」

健斗が顔を赤くして慌てた様子で大声で叫んだ

するとみんな、健斗を一斉に見てきた

「あ……」

「山中……？どうかしたか？」

「いや……すいません……」

健斗は恥ずかしくなって下をうつ向いた

恥ずかしい……いや、この胸の高鳴りは……いったいなんだろう？

健斗はチラリと麗奈を見た。

麗奈は健斗を可笑しそうに見て笑っている

またバカにしているのか……からかっているのか

でも胸の高鳴りは、消えなかった

第2話 始まる学校 P・9

そして授業は三時間目まで終わり、昼休みの時間帯へと入っていく。三時間目は、数学だった。健斗はほとんど授業を聞かず、外を見ながらボーッとしていた。

やがて授業終了のチャイムが鳴り、みんなが騒ぎ始めた

「じゃあ今日やったところは復習しておいてください」

先生はそう言っただけで号令をし、教室を出ていった。

これから50分の昼休みだ。この間に、健斗たちは昼ごはんを済ませないといけない

「麗奈ちゃん」

一人の女の子が、麗奈に声をかけてきた

「もしよかったらいつしよにお弁当食べよう？」

麗奈は少し唖然としていた

「……あ……うんっ！！いいの？」

「結衣もいつしよに食べたいって」

とにっこりと笑った

麗奈は早川を見ると、早川はにっこりと微笑んだ。麗奈はその女の子を見てにっこりとまた笑った

「うんっ！！ありがとう」

麗奈は嬉しそうな笑顔でそう言った

健斗も嬉しかった

何だかわからなかったけど、何だか嬉しかった……だから健斗は知らずに微笑んでいた

すると、麗奈がふとこっちを向いて言った

しばらく健斗を見てから、いつもの可愛いらしい笑顔を見せてきた。

「健斗くんもいっしょに食べようよ！！」

「あっ！？」

麗奈の思いもよらない突拍子なことを言ってきた

健斗はびっくりしたが、すぐに落ち着いた声に変えた

「いや……俺はいいよ。一人で食うって」

「いっしょに食べようよ。いいじゃん別に」

「いって。女子の中に男子が入ったら迷惑だろ？早川も……」

「私は別に構わないよ?」

ふと早川が微笑みながら近づいてきてそう言ってきた

「大勢の方が楽しいし。いっしょに食べようよ 山中くん」

早川はにっこりと笑いながらそう言う

はつきり言つて……さらに驚いた……あの、早川が弁当を誘つてくるだなんて

一時の夢のような時間を過ごせるチャンスをくれるだなんて……

健斗は少し戸惑いながらも、ゆっくりと頷いた

そのときだった

「はい!!はい!!俺も仲間に入れて!!」

と健斗の傍に近づいてきた一人の男子。ヒロがその仲間に入ってきた。

さつき健斗は友達がいなかったと言ったが、まったくいないわけじゃなく、このヒロこそが健斗の小学校時代からの古い付き合いである。
まなかひろ
真中比呂は、愛称はヒロと呼ばれている……

髪は短く短髪だ。黒淵の眼鏡が良く似合っている。背が高く、また頭もよく、中学のときはそこそこモテていた

お調子者だが、スゲー信頼の置ける存在。

「お前もいっしょに食うのかよ」

健斗がそう言うと、ヒロはへへんと笑いながら言った

「お前だけハーレム状態にするわけにはいかないしな」

「何がハーレムだよ……」

「それに……麗奈ちゃんもいるし……」

「……………」

健斗は呆れ返るようにため息をついた

五人は机をくつつけて、それぞれのお弁当を出した

「…………えつと、麗奈ちゃん」

机をくつつけて早川は口を開いた

そして先ほど麗奈に話しかけてきた女の子を紹介した

「この子は佐藤愛美^{さいとうまなみ}。最近お友達になったんだ」

「よろしくね。……麗奈ちゃん……でいいかな？」

と佐藤はにっこりと笑っていった。

佐藤愛美……ぶっちゃけると、あまり話したことはない

背が小さく、赤いリボンで髪を一つに結いでいるのが特徴的な女の子だ。

麗奈や早川のようなパツチリとしたクリクリした目も可愛い……

「っーか可愛いんじゃないかな……普通に……
でも、たまに男気で負けん気なところもある

「愛美だから……マナでいいかな？」

麗奈は訊くように言った

「うんっ！っていつか、みんなからもそう呼ばれてるから」

「そっかぁ」

「じゃあハイハイハイ！！俺の自己紹介しますっ！！」

ヒロが元気に手をあげて、自分をアピールし始めた

こうなるともうウザいだよなあ

「俺は……真中比呂っ！！ヒロでいいよっ！！麗奈ちゃん」

「うん よろしくね」

すると佐藤がヒロを見て、少し引いた目付きになった

「あんた、いきなり名前で呼ぶなんて……っていうかちゃんづけ！
」

ヒロはまた、ふんつと鼻で嘲笑うかのように言った

「いいんだよ。早く仲良くなれるようにってね。ねえ麗奈ちゃん？」

「うん。私は別に構わないよ？」

「何か……真中キモい……」

「何だとー！？」

ヒロと佐藤は言い争うのを、麗奈は可笑しそうに見ていた

健斗はそんな麗奈をじっと見ていた

「あ、麗奈ちゃん、部活とか入るの？」

佐藤がヒロを無視し、そう訊いてきた

「うーん……今はまだ考えてないなあ……どんな部活があるか分からないし……」

「そうなんだ」

「マナは何部に入ってるの？」

麗奈が訊くと、佐藤は少し照れながら答えた

「一応……弓道部」

「へえ〜 かつこいいねえ 結衣ちゃんは？」

今度は早川に訊く

「私はテニス部だよ。中学から続けてるんだ」

すると麗奈は尊敬するように言った

「テニスかあ〜 面白そうだね〜」

「俺はハンド部だヨ!!」

すると佐藤が少し呆れ気味に呟いた

「誰もあんたには訊いてないでしょ……」

「アハハ ハンドかあ…… かつこいいね」

麗奈が微笑みながらそう言うと、ヒロは少し調子に乗り始めた

テンションを上げて、すごく満面な笑みを浮かべている

「本当に!?!?じゃ、じゃあぜひハンド部のマネージャーやろう!!」

「マネージャーかあ……考えとくね」

この答えを聞いただけでヒロは満足だったのだろう。健斗の肩をつかみ、嬉し涙を流して目で訴える

（我が人生……バンザイ青春……）

「よかったな……」

健斗は少し苦笑いをした。

「ねえ、健斗くんは？」

「え……」

ふと麗奈がそう訊いてきた。興味津々で健斗に笑いかける

「健斗くんは部活入ってるの？」

「俺は……入ってない」

健斗の答えに、麗奈は意外そうな表情をした。

「そうなのっ！？じゃあ、バイト？」

「……まあ……うん……」

健斗は少し恥ずかしくなって下をうつつ向いた。

何か、健斗以外は部活などに入って、やりたいことをちゃんと見つ

けているのに……自分だけ部活に入らず、ブラブラしていると思っ
たからである

こんなじゃ早川に眼中にないって思われるよな……

「健斗くん、サッカー部だったよね？」

早川がそう言った

サッカー……か……

「中学で、私すごい上手だって聞いたよ？高校じゃやんないの？」

健斗は少しうつ向いたまま、ゆっくりと頷いた。確かに、中学では
サッカーをやったけど……だけど……

「うん。ちょっと膝を痛めてて……高校はやめた」

「そうなんだあ……」

早川は少し残念そうな表情をした

健斗はチラリとヒロを見る。ヒロは健斗を見ると、ため息をついた。

「健斗くんがサッカーかあ」

麗奈は健斗を見ると、ふうふうと言いながら、納得した

健斗は麗奈からすぐに目を剝らした

「……私、もう少し考えてから決めるよ」

と麗奈は健斗に笑いかけた。健斗は何も言わず、麗奈からなるべく目を剝らして、弁当のおかずをついばんだ。

「そういえば、麗奈ちゃんのお弁当って、山中くんのお母さんが？」

早川が麗奈の弁当を見てそう言った

麗奈の弁当は母さんによって丁寧になられていた
心なしか……若干俺より少し丁寧のようだ

でも、当たり前だが健斗のと麗奈の弁当は、だいたい入っている具
材はいつしよだ

健斗にとって、それは少し嫌悪感を感じるものだった

麗奈は早川の問いにゆっくり頷きながら答えた

「うんっ わざわざ朝早くから作ってもらったんだよ」

「いいお母さんだね」

と早川は健斗に笑いかけた

健斗は少し困り顔を作った

「そんな……大森に優しいだけだよ」

健斗はゆっくりとため息をついた

「俺には口うるさいし、あれをしろ。これをしろ……いっつも命令してくるしさ……スゲー迷惑な母親だよ」

健斗はそう言っで、深くため息をついた

「確かに……分かるぞ健斗。俺の親も」

「そんなことないよっ!!」

突然麗奈が声を張り上げて叫ぶように言った。健斗やヒロ……早川たちは少し驚いて目を丸くした

麗奈はゆっくりと健斗に笑いかけながら、小さく語りかけるような口調で話した

「お母さんって、健斗くんが思っている以上に、健斗くんのことを考えてくれてるはずだよ？本当は誰よりも愛してるはずだよ？だから……迷惑だなんて言っちゃダメだよ」

健斗は啞然とした様子で麗奈を見ていた

その麗奈の表情はまた……あの寂しげな表情を浮かべていた

するとだった。早川はクスツと小さく笑った。

「そつだね。麗奈ちゃんの言う通りだと思つよ」

と健斗にっこり笑いかけてきた。健斗はその純粋な笑顔を見られず、目を剃らしてしまった

「そうだぞ健斗。親つてのは常に子供のことを考えてるはずなんだぞ？」

さっきまで健斗と同じことをいおうとしてたヒロも、都合良くゆつくりと頷きながらそう言った

「あんだだつて同じこと言つてたでしょ？」

佐藤がヒロに突っ込みを入れると、早川と麗奈はクスクスと笑っていた

四人は楽しそうに笑いながら話している中……健斗は苛々が込み上げてきた。

麗奈に言われた言葉が重くつて一人では支えきれない。

早川の目の前で自分の言つた言葉を正されるだなんて……スゲー恥ずかしかった……

その羞恥心が、自分を戒める劣等感へと変わり、苛々が込み上げてきたのであった

偉そうに物を言う麗奈に対し……そして情けない自分に対し……

我慢の限界だった

健斗はゆっくりとお弁当箱の蓋をしめ、片付け始めた

「あれ？もう食べ終わったの？」

早川が不思議そうに健斗に問いかける

健斗はゆっくりと立ち上がり、早川に微笑みながら言った

「うん。俺ちよっと、自販機で飲み物買ってくるから……昼飯誘ってくれてありがとうな早川。ごちそうさま」

健斗はそう言っ、弁当箱を自分の鞆の中にしまつと、教室を出ていった

健斗が消えたあとに、四人は少し静まり返っていた

「どうかしたのかな山中くん……」

早川が少し心配そうにそう言った

するとヒロが食いながら、口に食べ物を入れてるように言った

「ほっとけ。別に何でもないよ」

ヒロは健斗のことをよく分かってるから……健斗が何故自販機へ行ったのが分かっていたのだ

麗奈は健斗の去っていった後ろ姿を思いうかべながら、教室のドアを見た

そしてお弁当のおかずを口を開けて運んでいくのであった……

第2話 始まる学校 P・10

健斗は自販機で飲み物を買うつと、憂鬱な気分である場所に向かって
いた。

いつも何かモヤモヤするとあの場所に向かうのだ

健斗は飲み物を持って階段をゆっくりと上がっていった

向かう先は、屋上だった。この学校の屋上は普段空いていない

なのにどうして健斗は学校の屋上に入れるのか……

簡単なことだ。鍵を盗んだからだった

とは言っても職員室から盗んだわけではない。トイレに落ちていた
鍵をたまたま拾っただけである

以来健斗はその鍵を、屋上へ続く扉の下にある微妙な隙間に隠して
いる

あまりにも微妙過ぎて、絶対に見つかることはない。

また中からは鍵をかけられるから、絶対に関くことはないのだ

健斗が使わない限り……

健斗はいつものように、鍵を取り出し屋上に入った。ちゃんと中か

ら鍵を閉めて、やっと一人の空間を手にいれた

いつもなら、スゲー安心して、胸を撫で下ろしてたのかもしれない。
けれど、健斗が感じていたのは……羞恥心と劣等感だった

気に入らないことがあると、いつもここに逃げ込んでしまう

そんな自分が嫌になってくる……

健斗はゆっくりとため息をついて、ひんやりとするコンクリートの上
に寝転んだ

どうしてこんなことを思うんだろう？

一昨日まではそんなこと考えること何てなかった

自分は自分だから……他人にどう思われようとどうだっていい

こうやって恥ずかしいことから逃げるような臆病で卑怯なやつでも
構わない

そんな風に思ってたはずだ。なのに……どうしてさっきからこんな
に胸が痛むのだろうか？

健斗はゆっくりとため息をついた

風が気持ち良い……

風でなびく髪が、目にかかる。健斗はゆっくりと目を開いた。

何という素晴らしいほどの青空だろう。そしてグラウンドからは、人の騒いでる声がする

グラウンドでは昼休み、人がドッジボールや野球……サッカーなどをやっている

健斗は空を見上げながら、麗奈のことを考えていた

何もかも、あいつが来たから……全てが苛々する

早川の目の前であんなことを麗奈に言われた。まるで俺が悪者みたいな形になった

あいつのせいで……

……でも逃げ出してきたのはそれだけじゃないような気がする

やっぱり……あんな風に大勢で話したりするのって慣れてないから……そういうのってあまり好きじゃないのかもかもしれない

こんなやつ……きつと可笑しいよな

普通なら、楽しいって思うのが普通なのに……

急にいなくなつて、早川は何て思つたんだろう

変なやつだつて思つたに違いない。

せつかくみんなで楽しく弁当を食べてたのに、その雰囲気をつぶ壊したのと同じだもんなあ……

嫌われたかもしれない……

健斗はゆっくりとため息をついた

早川に嫌われたら……もう学校に来る意味なんてなくなつちゃうよ。

とても今、教室に戻つて早川に会う気分じゃない

つーより、会いたくない……

だから……午後の授業サボつところ。

きつとヒロが適当にしてくれるだろう

健斗は全てのモヤモヤを無くすために目をつぶつた。そして……疲れを癒すように静かに眠り始めた……

それから何時間が経過しただろう。夢なんて見なかった。

けど、気持ちよくって……かなり眠ってしまったような気がした

再び目が覚めたのは、どうやら放課後のようだった

健斗はゆっくりと目を開いた

空はまだ青いけど、少し夕方に近づいてた

太陽の場所が変わっている……

授業はもう終わったんだろうなあ……ちゃんと出ないと単位がとれないというけど、あまり気にしなくていいかあ……

眠ったことによって、少しモヤモヤが晴れたような気がする

健斗はゆっくりと息を吐くと、寝返りをうつた……と、するとだった……

また目の前に、可愛いらしい寝顔を見せる女の子の寝顔が映った

最初は何があったのか、そこで静止した状態でその寝顔を見ていた

……

……十秒くらい経過してから、全てのことを把握した。

健斗はびっくりしてすぐに身体を持ち上げた。このパターン……朝と同じだ

「お、大森!？」

そこには麗奈が健斗の隣で、気持ち良さそうに眠っていた

制服のまま、スースーと寝息を立てながら……

「何やってんだよ……こいつ」

マジで本当に……こいつがわけわからん

何でまた健斗の隣で眠っているんだろう?しかもこんな無防備な様子で……何を考えてんだろうか……

いや、それよりも……どうやってこの屋上に入ってきたんだろう

鍵の在りかをみつけたのか?まさか……

絶対に見つかるはずがないって思っていたのに……

しかも……こいつの顔なんて見たくなかった

健斗をモヤモヤさせる原因のくせに……

健斗はため息をついてから、ゆっくりと麗奈の身体に触れて、揺さ

ぶるように起こした

「大森っ……起きろよ！大森っ！！」

すると麗奈はゆっくりと目を開き、またゆっくりと身体を持ち上げて、健斗をしばらく見るとニコツと笑った

目が半分寝ている状態で、眠そうに言ってきた

「あ……おはよう健斗くん」

「おはようじゃねえよ。お前……なんでここにいんだよっ！」

麗奈は健斗の問いに思い出しながら答えた

「えっと……健斗くんが昼休み終わっても帰ってこなかったから、ヒロくんに居場所を聞いたらここだって」

そうか……ヒロも鍵の在りかを知ってるんだ……

「それで健斗くんを見つけて、健斗くん、気持ち良さそうに寝てたから……私もいつしよに寝ちゃえって 本当に寝ちゃった」

と麗奈はクスクスと笑った

健斗は笑わず、頭を掻きながら困ったように言った

「お前なあ……授業サボったのかよ？」

「だってどうせ健斗くんいなきゃ、教科書ないし……」

そりゃ……確かにそうだけどさ……

「普通いつしよに寝るか？起こしたりしろよ。俺は悪いことしてたんだぞ？」

本当にわけの分からないやつだ……いつしよに寝るだなんて

「健斗くん一人悪いことするのって寂しいでしょ？私も同罪だね」

と笑って麗奈は言った。健斗はそれ以上何も言えず、プイツと目を剃らした

「……アハハハハ」

麗奈は突然声を上げて笑い始めた

「何笑ってんだよ」

「分かんない 何か……アハハ 授業サボるのって、初めてだったから、何か可笑しくって。アハハ お母さんに言ったら怒られそうだね」

「はあ？」

そんなに笑ってんじゃないやねえよ……わけ分からねえ

「ふう」 よく寝たなあ」

「……………」

健斗は黙って、傍においといた飲み物を口に含んだ
少しぬるくなっていたが、まだ飲める範囲だ……

「もういいからあっち行けよ。早川のとかさ」

「結衣ちゃん、部活でしょ？」

「……………そっか」

健斗は納得してからため息を吐いた

「ねえ健斗くんはさあ」

「あ？」

「どうして部活やらなかったの？サッカー上手だったんでしょ？」

麗奈にそう言われて、健斗はプイツと目を剝らした

「昔の話だよ」

「ねえ何で？」

「とある事情」

「事情って？」

健斗は顔をしかめて少し声を低くして言った

「うぜーなあ……お前こそ事情って何だよ……」

「私？だから、親が外国でお仕事してるから」

「ウソつけ。バアカ!!」

健斗がそう言うと、麗奈はきょとんとした様子で訊ねた

「どうしてウソだと思うの？」

健斗は少し黙り込んだ。

何でだろうな……

どうしてこいつがウソついてるって分かるんだろう……

時折見せる寂し気な表情に、何か秘密があるように思えたから……

「……それは……分かんねえけどそう思うからだよ」

健斗はプイツと目を剃らした。

何だか、今考えてることを麗奈な言いづらい気がした。そんなこと言ったら、麗奈はどんなリアクションを取るんだろう……

「健斗くん」

「何」

「健斗くんってさ、どうしていつもみんなの傍に寄らないの？」

健斗はそれを訊いて、眉をピクツと動かした。麗奈は不思議そうに続けた

「何か、健斗くんっていつも一人でいたがってない？一人が好きなの？」

健斗は何も言わず、だ前を向いていた

それはさっき自分で考えてたことだ

「……別に……ただなんとなく」

健斗がそう言うのと、麗奈はふうんっと言いながら、健斗を見た

「……分かんねえけど、やっぱり……変……だよな」

健斗がそう呟くように言うと麗奈は健斗を不思議そうな表情をして視線を送った

「普通なら、ああいうのを楽しいって思えるんだろうけど……俺、小学も中学もそういうことなかったから……だから、何か……一人の方が落ち着くっていうか……」

健斗はそう言いながら、ふっと小さく笑った。

「いや、自分でも変だと思ってるよ。根暗なやつだって」

健斗はそういい、また飲み物を飲む

自分でも分かってるんだ

そんなやつ……誰にも相手にされないだなんて……早川にも、みんなにも……

麗奈は健斗をじっと見ていた。すると突然小さく笑い、空を見上げながら大きく言った

「……私さ、ネコ好きなんだ」

「は？」

突然何の話をしはじめたんだ？と思いながら、健斗は麗奈を見た

「ネコってさ、いつものんびりしてて、いつも自分の時間を楽しんで、いつも好きなことを好きなだけやる……でも人はあまりなつけない。何て言うか……自分を信じてるんだってみたいかな？そんな感じに思っただよね」

「だから……？」

健斗が変な視線を送っていると、麗奈は笑いながら健斗を見た

「健斗くんって、そのネコっばいよね」

「は？意味分かんねえ。つかお前だつてのんびりネコだろ」

健斗がそう言うと、麗奈はクスクスと笑った。

「私もネコっぽいかな？でも……私はネコはネコでも……ただの“飼猫”だから……」

「……？」

飼……猫？

「私さあ、健斗くんが羨ましいよ 自分の好きなように生きて、何ににとらわれない……自由な生き方……私も……」

健斗はそして見た……あの寂し気な表情を……また見れたんだ

「私も……健斗くんのような、自由な“野良猫”になりたいなあ……」

健斗はその表情に見とれていると、また健斗を見てにっこりと笑った

「だから変じゃないよ。健斗くんみたいな立派な野良猫」

健斗はその言葉一つ一つが、何だか心に響くような暖かい気持ちにさせるような……そんな感じにさせられていた。だから、麗奈に見とれて、その言葉一つ一つをちゃんと聞いていたのだ

麗奈はにっこりと微笑んだ。可愛いらしい元気な笑顔を見せながら

……

「私は、ちょっと人に向き合つのが苦手で不器用だけど……本当はさりげなく優しくって、自由で、しっかりと自分というのを持っている……健斗くんのそんなところが……好きだよ？」

「え……」

そんなことを言って、麗奈はにっこりと微笑んだ

健斗はその言葉を聴いた瞬間、胸の高鳴りが強くなった

麗奈の微笑んだ……そう、いつもと違う感じの笑顔だ

少し頬を染めて、嬉しそうに……喜んでるように、心の底から笑っている

この日、このとき……健斗は麗奈の「本当の笑顔」を見れたような気がした

胸の高鳴りは収まらず、ただ麗奈の綺麗な瞳に吸い込まれていた……顔の表面が熱い

俺を……好きって……俺の劣等感が……好きって言ってくれた

この麗奈が……すごくすごく……大切なものに思えた……

麗奈が健斗にとって大切な……大切な人に思えた……

「……なあーんてねっ！？びっくりした？」

「え……」

麗奈は健斗のきょとした表情を見て、クスクスと笑った

「冗談だよー ドキドキしたでしょ!？」

「なっ……!! お前おちよくってんのかよっ!!」

「アハハ もっと愛想良くしないと、結衣ちゃんに振り向いてもらえないぞ」

「べ……余計なお世話だバカっ!! 人をおちよくりやがって!!」

健斗は顔を真っ赤にしながら怒鳴るように言った

けど麗奈はクスクスと笑っていた

「アハハ ねえドキドキした? もしかして……私のこと好きになっちゃった?」

「なっ!! バカ!! お前なんか好きになるかっ!!」 健斗はプイッと麗奈から顔を剃らした。

でも、麗奈がそんなことを言ってくれたとき……本当は嬉しかった。

心の底から勇気が出た。

自分の感じていた劣等感を……

こんなことを言うようなやつは初めてだ……

健斗は麗奈を見た

麗奈は相変わらずクスクス笑っていた

それを見て、こいつは俺をからかってんじゃないかって思った

思っただけど……

「バカ……いつまでも笑ってんじゃねえよ。」

健斗も麗奈につられて、笑ってしまうのであった

第2話 始まる学校 P・11

「ねえ、別にいいでしょ？」

麗奈が不満そうに健斗に言ってくる。しかしそれを健斗は何も言わず、無視をしていた

「別にいいじゃん？人に見られてもさあ」

「ダメだ。誤解されると困るんだよ。つーかもうすぐだからちゃんと歩け」

「え……？」

麗奈はブスツとした表情を見せた。健斗はそれを見て、少し可笑しな気分になっていた

何をそんなに揉めているのかというと、帰り道のことである

健斗は部活もやってないし、麗奈もまだ部活に入っていない

だからすぐに帰れるんだけど……麗奈が学校から自転車の後ろに乗りたがるのだ

学校の目の前で自転車に乗せるとこを見られたら何て言われるか

……

しかも、未だに噂になってる麗奈だから……よりいっそう噂が広まってしまう

だから、人目がなくなるコンビニまで歩こうと言ってるのに……

「もう疲れたよぉー！！まだつかないのー！？ねえってばぁー！？」

「うるせえなあ……」

麗奈はさっきからわめいてばかりである

健斗は深くため息をつきながら、自転車を押して歩いていた

まったく……東京者は歩いたりしないのか？

「もう自転車に乗りたーい！！乗りたい乗りたい乗りたい乗りたい乗りたい乗りたい！！」

「だぁーっ！！うっせえんだよさっきからっ！！ちょっとは黙れな
いのかよっ！！」

健斗は怒鳴りつけるように麗奈に言った

麗奈を口を尖らせてツンツとした様子でいった

「大体さっ！！健斗くん周りを気にしすぎなんだよっ！！いっつも誤解されとかさあ」

「お前は周りを気にしなさすぎなんだよ……そもそもお前が自転車を乗れるようになっていればいいだろう？　そしたらわざわざこんな風に……」

「自転車とは無縁なんです」

「東京者はみんなそうなのかよ」

「そうっす　東京者は自転車を使わないんだよ」

健斗は呆れたようにため息を吐いた

自転車を使わないのはお前だけだろうが……
「……ここら辺なら人目につかないな」

健斗の隣にコンビニがあるとこまで歩くと、健斗は自転車にまたがった

「おら。さつさと……」

健斗は麗奈を見ると、麗奈は健斗の後ろにはいなかった……

するとコンビニの自動ドアが開く音がした

健斗はコンビニの方を見ると、何と麗奈がコンビニの中へ入っているのが見えた

「おい……」

健斗は自転車から降りて、後を追いかけるようにコンビニへと入っていた

入った瞬間、涼しい空気が健斗の顔を包み込むようなものを感じた。

「わぁ〜 涼しい〜」

「涼しいじゃねえよ。何してんだよ」

健斗がそういうと、麗奈は軽い表情を見せた

「いいじゃんいいじゃん ちょっと休憩タア〜イム」

「ふざけるな。おいてくぞ」

「待つてよ〜!! あ!! 私アイス買おつと!!」

麗奈は健斗を無視し、アイスの方へと走っていった

健斗はその様子を見て、苛々とした。漫画でいう……あれだ。怒りマークが頭につくような思いだ

「……やっぱし……自己チューなのはてめえだろう!!」

健斗たちはようやく家へと続く一本道を通っていた。

何か今日一日がスゲー疲れた。健斗は右手にもったアイスクリームをペロツと舐めた

麗奈はというと、後ろに乗って鼻歌を歌いながらアイスクリームを食べていた

「今日学校楽しかったなあ」

麗奈は意気揚々とそういい、健斗に話しかけてきた

「いい人ばかりで、友達も出来たし」

「よかったな……」

「結局健斗くん、アイス買ってるし」

「ウルセえなあ……別にいいだろ」

健斗は頬を赤く染めながら後ろを振り向いた。

「お前、部活どうすんの？」

健斗が訊くと麗奈は少し考えるような仕草を見せた

「うーん……どうしようかなあ……健斗くんはどこでバイトしてるの？」

「俺？俺は……商店街の中の喫茶店で」

「へえー？どこどこ？今度連れてってよ」

「嫌だ」

健斗がそう冷たく言つと麗奈は口を尖らせた。

「何でえ？」

「お前がいると邪魔だから」

「そう言つてさ、私邪魔したことある？」

「ある。つーかいつも邪魔だし」

健斗がそんなことを言つと、麗奈が健斗の背中を平手でたたいてきた

「いってえなっ！！叩くなよ」

「私健斗くんのそういうところ嫌いっ！！」

麗奈は少し怒ってるようだった

「別に。嫌いなら嫌いではつきりしろよ」

「むう……ふんっ!!」

麗奈はツンツとした態度でそっぽを向いた

頬を膨らませて、何だか可愛いんだけど……明らかに怒ってるような態度だった

「……っ何か何、お前バイトする気かよ」

健斗が少し笑いながらそう言った

「……………」

「大森」

「……………」

健斗はゆっくりと振り返ると麗奈はさっきの表情と変わらず、ツンツとした態度で健斗を精一杯無視しているような感じだった

健斗はそれを見て、また前を向いた

「勝手にしろよ……………」

健斗はそう呟くと、手にもっていたアイスを一気に食べた

第2話 始まる学校 P・12

健斗たちはようやく自宅まで帰ることが出来た

西の空を見ると、日は落ちかけていた。時計はもう五時を指している。

「ただいまあゝ」

麗奈は元気良く家の戸を開けた。

家へ入ると同時に、晩飯のいい匂いがしてきた。今日は……カレーだな、こりゃ

カレーとは母さんもたまにはやるじゃないですか

健斗がそんなことを考えていると居間の方から母さんが顔を出してきた

「あら、お帰りなさい」

麗奈は靴を脱ぎ、母さんに駆け寄った

そしてカレーの匂いを感じて、嬉しそうに笑った

「わあゝ 今日カレーですか？」

「そうよ。でももう少しかかるから、よかったらお風呂に先に入っ

てきなさい」

と母さんは麗奈に優しい笑顔を送った

「はい。そうさせてもらいます」

健斗と麗奈はとりあえず部屋へと戻った。健斗は自分の部屋に入り、
鞆を置いた

麗奈はまだ何もない自分の部屋に荷物を置くと、健斗の部屋の前で
立っていた

健斗は麗奈を見て、促すように言った

「先入れよ。あとから俺は入るからさ」

健斗がそう言うと、麗奈は何も言わず一階へと降りていった

健斗はその様子を見ると少し嫌悪感を感じていた。もしかして……
あいつ本当に怒ってんのかな？

健斗はため息をつく、ベッドにゆっくりと座った

まったく……別にそこまで怒ることなんて言っていないだろうに……

しかも訳の分からないことばかり言いやがって……

『私は、ちょっと人と向き合つのが苦手で不器用だけど……本当は
さりげなく優しくって、自由で、しっかりと自分というのを持っている……
健斗くんのそんなところが……好きだよ』

麗奈は俺に、そう言った。俺が野良猫みたいでそんな俺が羨ましい
って……

俺はずっと、自分がそんな風に思ったことはなかった

やりたいことの見つからない、中途半端な生活……そんな自分に嫌
気がさしていた

そんな俺を、どうして羨ましがるのがだろうか？

こんな野良猫を……どうして……

まだあいつに会って、二日しか経ってないのに……まるで俺のこ
とを昔から知っていたように見てくる

それとだ。麗奈は自分のことを、飼い猫だと言ったよな……

どういう意味だったんだろう……

健斗は時折麗奈が本当に分からなくなる

あの寂し気な表情を見せるときなんて、一番よく分からないこ
とを言うてくる

だから俺には、本当のあいつがなんなのか……分からない。だから
本当に気を許してるわけじゃないし、かと言ってそこまで仲良くな

る気はない

ただ……

健斗は考えるのをやめた。何か、最近麗奈のことを考え過ぎている気がする。あまり深く考えなくてもいいよな……

あくまであいつは居候なんだから……深く考えるのはやめよう

健斗はゆっくりと目を閉じて、息を吐いた

「いただきまあゝす」

そして夕食時、上手そうなカレーが3つ置かれていた

麗奈はそのカレーを見てとても嬉しそうだった。

「美味しそうゝ カレーなんて久しぶりですうゝ」

「あらゝ、もう遠慮なんかしなくどんどん食べちゃってね？あ……でも体重も気にしなきゃね？」

と母さんが言うと、麗奈はクスクスと笑った。

健斗はカレーを頬張りながら、テレビを見ていた

いつも母さんがつけているニュース番組。殺人事件や経済問題などが淡々と出ている

まあほとんどは都市の事件だが、こんな田舎にはこんな風に日常を壊すような事件なんて起きないんだろうなあ……

「学校はどうだった？」

母さんがカレーを食べながら、麗奈の表情を伺いながら訊いてきた。けれど麗奈はにっこりと笑って言った

「はいっ！！スツゴク楽しいです。友達も出来たんですよ？」

「あら本当？よかったわあゝ」

すると麗奈はクスクスと笑いながら言った

「しかも健斗くんと」

「ちよっ！？待て！！それは言っなよっ！！」

健斗はカレーを食べる手を止めて、麗奈の言葉を遮るように叫んだ。

一体何を言い出すんだこいつ……健斗は麗奈を見ると、麗奈はふふんと言った顔をしていた。その表情を見て、健斗は感じ取った

……わざと……だな……こいつめ……

さっきこいつに言ったことを根に持ってやがんのか……

「あら、何？健斗、何したの？」

「え？……っと……大森と、アイス買ったんだよ。帰りに……」

健斗がそう言うと、母さんは納得するように頷いた

「へえ？二人とも仲良くなちゃって やつと健斗にも青春が訪れたのね」

「訳分からねえよ」

健斗はそう呟くと、また麗奈を見た

麗奈はカレーを食べながら健斗を見ると、フンツとそっぱを向いた
……

「でも、麗奈ちゃん楽しそうで何よりよ」

母さんが安心するようにそう言った

「はい。もうこの町にずっといたいです」

「本当に？あ、そういえば、部活は決めた？」

母さんが健斗や早川と同じことを訊いた。麗奈は少し考えると、ゆっくりと首を横に振った

「まだ分らないです。やっぱり、バイトかな……」

健斗はそれを訊くと、カレーを食べる手を止めて麗奈を見た

母さんはちょっと困り顔を作りながら、不満そうに言った

「あら……バイトなんかやらなくていいわよ？こいつだけで充分」

と母さんは健斗を指す。けれど麗奈は少し苦笑いをした

「うん。でも、私がこの家に住む分……ガス代や水道代、光熱費や食料費とかが増えちゃうじゃないですか？だから、私働いて少しでも迷惑を減らしたいから」

その言葉を聞いて健斗は呆気にとられていた。びっくりしたのだ。麗奈がこんなことを言い出すとは思ってなかったから……

それにスツゴク意外だった。こいつが迷惑だとちゃんと考えているということが……

色々考えてるんだな……こいつもこいつで……

少し麗奈を、見直した気がした……

「ちょっと聞いた？」

母さんが甲高い声で健斗に言ってきた

「こんなにしつかりしてるいい子ってる？あんたも麗奈ちゃんを見習いなさいよ」

「いや……別に……」

健斗は少し嫌悪感を感じていた。麗奈から目を剋らして、カレーをパクリと食べた

「でも気にすることないのよ？」

母さんは麗奈に優しい笑顔を浮かべた

「生活のことなんて気にする必要なんてないわよ。高校生なんて今だけなんだから、あなたのやりたいことをやりなさい？」

母さんの言葉を聞いて、麗奈は嬉しそうに笑った。それは安心するような表情だった

「はい。ありがとうございます」

健斗はその表情を見ながら、カレーを一口食べた。そして、少しだけ小さく笑った

第2話 始まる学校 P・13

「ふう……」

健斗も夕飯を食べたあと、ちゃんと入浴をした。そして半パンと白いTシャツに着替え、バスタオルで頭を乾かしながら健斗はゆっくり息を吐いた

疲れた後の風呂とはいいいものだ……健斗は頬をあかく染めて、冷蔵庫の中から水を取り出し、口に含んだ

居間では母さんがお茶を飲みながらテレビを見ていた

母さんの好きなマヤ遺跡だの、エジプトの何とか何だかの……

母さんは歴史もんが好きだから……けど歴史は全然知らないけど……

健斗は水を飲みながら、居間へと入った

「今日父さんは？」

健斗が訊くと、母さんはお茶を飲みながら答えた

「今日は遅いわよ。麗奈ちゃんの部屋のものをホームセンターで見ているから」

なるほど……

健斗はそれを聞いてふと麗奈のことが気になった。麗奈は……何してんのかな……

健斗は冷蔵庫からもう一つ水を取り出した

麗奈にもあげるか……

ちよつと怒ってるみたいだしな……

「母さん、大森は？」

「ん……縁側の方にいるんじゃない？」

健斗はそれを聞いて、縁側の方へと歩き出した。

やれやれ……どうして俺があいつのご機嫌を伺わなければならないのか……

いつまでもご機嫌斜めだとかつちもこつちでやりにくいしな……

縁側を見ると、確かにそこには麗奈がいた。外をただ呆然と眺めていた

一体何を考えているのか、健斗は麗奈に近づいていった

すると麗奈は健斗に気がつく、すぐにプイツと顔を剃らした

健斗は頭を掻きながら、麗奈に水を差し出した

「ほら」

麗奈はそれを見ると静かに受け取り、ブスツとした態度で小さく「ありがとう」と言った。

「……なあ、まだ怒ってんの？」

健斗がそう訊くと、麗奈は健斗に不機嫌な様子を見せた

「別に……怒ってないもん」

「怒ってんじゃないか」

「だから怒ってないでばっ！！」

麗奈は少し声量を強めて健斗に怒鳴るように言った

健斗はそれ以上何も言わず、ゆっくりとため息をついた

もういいや……健斗はくるっと反転すると自分の部屋へと戻っていた
った

麗奈はそれを見ると、少し目を潤わせると、膝を抱え込んだ……

「健斗くんの……バカ……」

小さく、呟くように言った

健斗は二階へ上がり、自分の部屋に閉じ籠った。水を飲みながらため息をつき、ベッドの上に乗って窓から外を見渡した

何だよあいつ……せつかく人が気にしてやったのによ……それに別に大したこと言っていないだろうが……

勝手にしろよ……

でも……あいつも色々と考えてんだよな……

あいつがあんなこと言うなんて思わなかった……

自分の食費や光熱費を負担かけたくないから、バイトを考えてたんだな……それを嘲笑うかのように笑ってしまった……

やっぱり俺が悪いのかな……

でも麗奈も麗奈だ。いつまでもご機嫌斜めだから……

別に嫌われたならそれでいいし……あんな性格の悪い女……どうで

もいいよ……

……人のことを好きって言ったり嫌いったり言って……早川のことを応援してんのかからかってんのか分かんない……

いつも俺のことからかってるだけじゃねえか……

健斗は水を飲み干して、モヤモヤを晴らすようにペットボトルを投げ捨てた

まあ麗奈のことなんかより、早川のことだよ……明日なんて謝ろうか……せつかく誘ってもらえたのに、悪いことしたよなあ

今早川にあえれば、すぐにでも会いたいになあ……健斗は時計を見た

もう八時か……こんな時間に早川がここらへんを歩いてるわけないか……

と思っっているところだった……

……ん？何か、一人の女の子が、歩いている。しかも、健斗の家に向かっていた

こんな近くだから分かった。健斗は身を乗り出して驚きながら叫ぶように言った

「えっ！？は、早川！？」

そう、まさか本当に健斗ん家の目の前早川が歩いていたのだ。

しかもだった……間違はなく健斗ん家に近づいてくる。通りすぎるわけではなさそうだった！！

「えっ！？マジかよ！！本当に……早川？」

健斗はテンパリながらも、すぐに部屋を出て飛ぶように一階に降りた途中、慌て過ぎて壁の角に左足の小指をぶつけてしまった

そのせいで足に激痛が走った！！

しばらく「痛い痛い」といいながら片足で飛びながら、左足を押さえていた

するとだった。ドアの呼び出し音がした

きつと早川が押したのだ。すると居間から母さんが顔を出してきた

「健斗出てくれる？」

言われないでも出るつもりだった！！健斗は痛みを忘れ、すぐにサングダルを履き、家の戸を開けた

するとそこには早川が黄色のＴシャツに短パン姿の可愛らしい恰好で、何かを持って立っていた

健斗が出てくるのに気がつく、早川は少し驚いた表情を見せた

まさか初めから健斗が出てくるとは思わなかったのか……一番びっくりしてるのはこっちだけだよ

「あ……山中くん。こんばんわ。突然ゴメンね」

「あ……うん」

健斗が微笑むと、早川は少し健斗の濡れた髪を見て笑った

「お風呂上がり？」

「あ、ああ、今さっき入ったところ」

健斗も濡れた髪を触りながら微笑んだ。すると早川は少し近づいてきた

「ふん……フツ、？でもちゃんと乾かさないと風邪引いちゃうよ？」

「あ……ああ。ちゃんとあとで、乾かしとく」

と健斗は言った

「えっと……大森だろ？今呼ぶから」

と健斗が麗奈を呼ぼうとすると、早川がそれを止めてきた

「あ、ううん。今日は山中くんに用があったの」

「え……俺に？」

健斗はそれを聞いて胸が高鳴った。俺に用事って……？

胸が高鳴っていくなか、喜びも感じていた

麗奈が……隠れて話を聞いていたことも気づかずに……

「うん。今日、授業で渡されたプリント山中くんと麗奈ちゃんの分
持ってきたんだ」

と早川は持っていたクリアファイルからプリントを二枚、健斗に渡
してきた

健斗はそれを受け取ると嬉しそうになつこりと笑った

「ああ、わざわざありがとうな」

「ううん。今日のこと謝りたかつたし……」

「今日？」

健斗が不思議そうに聞くと、早川は少し苦笑いをしながら言った

「今日ゴメンね？お弁当の時間……迷惑だった……よね？」

健斗はそれを聞いて、自分も謝ろうとしていたことに気が付いた

「いやっ……全然迷惑じゃないって……逆に感謝してるから」

「……………本当に？」

健斗は微笑みながら続けた

「俺こそゴメンな……………いきなりどっか行っちゃってさ。ありがとう。誘ってくれて」

素直な気持ちを早川に伝えた。すると早川は安心するかのような可愛らしい笑顔を見せた

「よかった……………あのあと山中くん、授業も戻ってこなかったから……………怒っちゃったのかなって思ってた」

「ああ……………いやそれは……………」

「麗奈ちゃんも途中でいなくなっちゃったから」

「うん。ゴメン。ちょっと気分が悪かっただけ」

「そっか。今は平気？」

「うん。ちょっと寝たら元気になった。わざわざ心配してくれてありがとう」

健斗がそう言って微笑むと早川は嬉しそうに笑った

「よかった……………すごく心配してたんだから」

と言ってフツと笑った。そんなに心配してくれたなんて……………何て幸せなんだろう

「うん。ありがとな」

「ううん。あの……」

早川は微笑みながら健斗に訊くように言った

「明日もいっしょにお弁当食べない？」

「え……」

健斗は早川の言ったことがすごく驚きだった。早川は少し焦りながら言った

「もしよかつたらだけど……明日もいっしょに食べよ？迷惑……かな？」

「……あ……うん。サンキュー！！明日も、いっしょに食べていいなら」

健斗がそう言っていると早川は安心するように笑った

「よかった……じゃあ、私帰るね？」

「あっ！……うん。わざわざサンキューな」

健斗は早川を塀の外まで送った

「送ろうか？」

「うん。山中くんの家とは5分くらいだし。大丈夫」

「そっか……あ、本当にありがとう。わざわざ……帰り、気をつけて」

「うん。じゃあ、また明日ね」

「ああ。また明日」

早川は手を振りながら、健斗から離れていった。健斗も早川が見えなくなるまでずっと手を振り続けていた

そして早川が見えなくなると、しばらくの間呆然として佇んでいた。

早川が……早川が俺のことをスゲー心配してくれて……またお弁当を誘ってくれた……

「……よっしやあああ……!!」

健斗はその場で喜びの雄叫びを上げた

今日はスゲーついていた!! 嬉しい気持ちでいっぱいだった

さっきのモヤモヤした気持ちなんて忘れた!! なんて幸せなんだろうっ!!

健斗はルンルン気分で家へと戻っていった

そして鼻歌を歌いながら、サンダルを脱いだ。
すると目の前に麗奈が立っていることに気がついた

無表情で健斗を見つめていた

しかし健斗はそんなこと気にはせず、超好機嫌で麗奈に言った

「ようっ！ー！ちょうどよかった ほら、早川がお前のプリント渡してくれたぞ」

と言って、麗奈にプリントを渡すと、ルンルン気分でスキップで階段を上るうとした

すると……だった……

「よかったねっ！ー！結衣ちゃんといっぱい話せてさっ！ー！」

「あ？」

健斗は不思議そうに麗奈を見た。麗奈は渡されたプリントをくしゃくしゃにするまで手に強く力を入れていた

「よかったじゃんっ！ー！結衣ちゃんにお弁当誘われてさ……もしかして、こうなることを予測して今日授業サボったの？」

「……何言ってるの？お前……」

健斗は少し真面目な顔をして、麗奈を見た

麗奈は健斗を見ると、ゆっくり健斗に近づいてきた

「明日が楽しみだねっ！ー！おやすみ！ー！」

麗奈はそう言うと、笑いもせず、健斗の横を通り過ぎて二階へと走っていった

健斗は少し呆然としながら、麗奈の後ろ姿を見ていた

「……………何だよあいつ……………」

何を怒っているのか……………まったく理解できなかった……………

健斗はさっきの喜びが少し半減したような気がした

健斗はゆっくりと二階へ上がった……………

麗奈は何もない自分の部屋に閉じ籠ったようだった……………

「大森？」

健斗はその部屋の前で声をかけた

何だか、声をかけたかったから……………

「何怒ってんだよ……………夕方のことか？」

しかし麗奈は何も答えなかった……………

健斗はゆっくりとため息をついた

「……………悪かったよ。悪かったから、機嫌直せよ」

しかし麗奈はまた何も答えない。今は……何もしない方がいいかな……

「寝る時、俺の部屋、開けとくから……ちゃんとそっちで寝ろよ」

健斗はそう言うと、静かに自分の部屋へと戻っていった

麗奈は何もない自分の部屋で膝を抱え込んでいた。

健斗の言葉を聞いて、ただ膝を抱え込んでいた

そして静かに呟いた

「……健斗くんの……バカ……」

麗奈は寂しそうに、そう呟いた……

第2話 始まる学校 P・13（後書き）

うーん……何か麗奈が何でこんなに健斗に対し怒っているのか……
自分でも分かりません……

何かこの作品、自分でも先が読めない作品になってきました……

予測不能な物語です

みなさんは、どうして麗奈が怒っているのか……分かりますか？

第2話 始まる学校 P・14

健斗は居間で昨日のように眠っていた。

夜、麗奈のことも気になったし……少し寝づらかった。結局俺が寝ようとするまで、あいつは部屋から出てはこなかった……

だから少し気になった……

けれどだった。結局めちゃくちや爆睡してしまった……

まあ、大体こうなるのがパターンのだろう……

しかももう母さんは起きて、朝飯を並べていた

台所から顔を出して、困った顔をした

「ちょっとあんたいい加減に起きなさいよ？遅刻するわよ」

「うーん……」

うるさそうに寝返りをうつた。完全に熟睡している……

するとだった

突然二階からバタバタと大きな音がした。誰かが階段をかけ降りてきているんだ

そして居間へ入ると、突然健斗に大きな声を出してきた

「山中健斗ー！！起きなさあーいつー！！」

「うわあっ！！」

突然の大声で、健斗は跳ね起きるように起きた。そして周りを見渡すと、麗奈が制服姿で健斗の傍で座っていた。いつもの綺麗な栗色の髪をなびかせていた。

麗奈は呆れ返るようにため息をつきながら、健斗に言った

「もう50分だよー？早く用意してよー！」

「え……………ああっ！！」

健斗は時計を見ると、また跳ね起きた。時計は7時50分を指していた。完全に寝坊してしまった！！

すると母さんも呆れ返るように言った

「だから早く起きなさいって言ったじゃない……………麗奈ちゃん、朝ごはん出来てるから食べてね？」

母さんがそう言うと、麗奈はにっこりと笑った

「はい。いただきます」

「あんたは早く準備」

「わ〜てるよっ！！朝飯抜かしてたまるかっ！！」

健斗は速攻に二階へと走っていった。麗奈はその様子をクスクスと笑いながら、「いただきます」とあいさつを済ませて、朝飯の味噌汁を飲み始めた

健斗は制服に着替え、すぐに居間へと向かった

「朝ごはんは諦めなさい」

「うっ〜……」

健斗は居間の目の前で少し戸惑っていた。朝ごはんを選ぶか、学校を選ぶか……

時計を見ると、すでに8時を回っていた。健斗は仕方なく、朝飯は諦めた……

麗奈はすでに鞆を持って、革靴を履いていた。そして戸を開けて、外に出ていた

健斗もすぐに革靴を履いて、外に出ようとした

「ちょっとちょっと。お弁当!!」

健斗はお弁当を受け取り、急いで家を出た

「いってきますっ!!」

母さんはそれを見ると、鼻でため息をついた。

健斗は自転車を塀の外まで出して、鞆をかこの中に入れた。麗奈は塀に寄りながら、健斗を待っていた

「おう。もう行くか」

ふと右を見ると、父さんがゴンタを連れて帰ってきた。タバコを吸いながら微笑んでいた。麗奈がにっこりと笑いながら言った

「おじさん、おはようございます。高校にいきます。ゴンタもいってきます」

麗奈はそう言って、ゴンタの頭をゆっくりと撫でた。ゴンタは麗奈に一回吠えると、健斗の方に甘え出した

「分かった分かった。いってきます」

健斗もゴンタの頭をゆっくりと撫でてやった。するとゴンタは健斗にも一回吠える

それはまるで、「いってらっしゃい」と言ってくれているように……
きつとそうなんだろう

「大森、行くぞ」

健斗は麗奈に声をかけると、麗奈は自転車の後ろに乗る

それを確認すると、健斗はゆっくりと自転車を漕ぎ始めた

「いってきますあゝす」

麗奈は父さんとゴンタに手を振り続けた

後ろから、ゴンタの吠え声がずっと聞こえていた……

「もう、健斗くんって結構ネボスケなんだね？」

麗奈が呆れ返るように、健斗に言ってきた。しかし健斗は何も言えない……

昨日のことが気になっていたらだった

麗奈は昨日とはまったく正反対な態度をとってくる。昨日の怒った態度はなく、いつもの能天気な大森麗奈がそこにはいた

馴れ馴れしく、健斗に話しかけてくる。昨日俺が何を言っても、ずっと無視してたのに……

健斗は逆にそれが違和感を感じさせ、小さく訊いてみた

「怒ってないのか？もう……」

健斗がそう訊くと、麗奈はにっこりと笑った

「何が？」

「昨日……俺に怒ってたんじゃないの？」

健斗がそう訊くと、麗奈はクスクスと笑い始めた

「だから怒ってないって言ったじゃあ〜ん 昨日はちょっと、苛々してただけ。ゴメンね、怒鳴ったりして」

麗奈はそう言って、また可愛らしい笑顔を見せてきた。それを聞くと、健斗はもうそれ以上……何も聞かなかった……

もう怒ってないようだし、麗奈の機嫌が直ったなら直ったでいいか……

あまり深く考えないことにした

「ほら、そんなことよりも急いで急いで！！」

「わ～てるよっ！！」

健斗は少しスピードを上げて、学校までの道のりを漕いでいった

本当は麗奈が機嫌を直したのを、どことなく安心していたのだ

第2話 始まる学校 P・15

「健斗くん、待ってよ」

昇降口で麗奈が下駄箱に履き替えながら、健斗にそう言ってきた

しかし健斗はすでに上履きに履き替えていて、下駄箱の近くで麗奈を待っていた

「早くしろ。もう予鈴鳴ってんだぞ」

「うん」

麗奈は上履きに履き替えると急ぐように走ってきた

健斗と麗奈は少し汗をかいて、息をあげながら疲れたように机に座った。けど、まだ先生は来ていない。健斗と麗奈が座ると同時に、本鈴のチャイムが鳴った

「間に合った……」

麗奈も健斗の真似みたいなことをしてきたので、健斗は少し不快な

気持ちになった

「何でお前まで疲れてんだよ。ただ後ろに乗ってただけだろ」

すると麗奈がふふんと笑いながら言ってきた

「健斗くんが間に合うように祈ってたら疲れたの」

「何だそれ……」

健斗は呆れ返るように呟いた。まったく相変わらず訳の分からないことを言うやつだ……

健斗は息を落ち着かすと、ふと気になる方を……早川の方を見た

早川は佐藤と楽しそうに会話をしていた。もちろん、健斗の方は見てこない。けどそれでもよかった

昨日……早川が家まで来てくれたのって……夢じゃないんだよね……
…未だに信じられない……

あの早川がだぜ！？あの早川が……俺のことを気にしてくれて……
また弁当を誘ってくれた。スゲー些細なことだけど、健斗にとって
は例え親に月1万円のお小遣いを貰うことよりも、何千億倍も嬉しい
ことなのだ……

健斗は早川を見て昨日早川の笑顔を思い出していた

やべーよ マジで可愛い……

「麗奈ちゃんおはよう」

すると、突然ヒロが健斗たちのところにやってきて、麗奈に話しかけてきた

麗奈を心配するように、優しい雰囲気を漂わせている

「昨日はどうした？急にいなくなっさ……心配したんだぜ？」

ヒロがそう言うと、麗奈は少し微笑みながら言った

「あ、うん。ありがとう心配してくれて」

「いや……つかお前さ、また授業サボったのか？」

ヒロは健斗にそう言ってきた。健斗は少し言いづらそうな様子を見せた

「あ……まあな」

「ったくよ……言い訳するこっちの身にもなれよな」

「ワリイ。サンキューヒロ」

「私ね、昨日健斗くんといっしょに授業サボっちゃった」

麗奈が悪戯にそう言った。するとだった。ヒロがかなりショックを受けているようだった……

「えっ！？二人……さん……まさか……そういう関係で？」

「いや、こいつが勝手に……」

「何か授業サボるので楽しいものだから、クセになっちゃいそう」と麗奈は能天気には笑っていた。健斗はそれを見て呆れ返るようになめ息をついた

ヒロを見ると、ヒロは何だか自分に言い聞かせていた……

「大丈夫……二人はまだ……麗奈ちゃんは平気……大丈夫……」

「……はあ……」

「あつ健斗」

突然ヒロが少しにやつきながら健斗を見てきた

「昨日早川がお前のことスゲー心配してたぞ？」

健斗はそれを聞いて、突然胸が高鳴った

「だ、だから？」

ヒロはさらににやけ、肘で健斗をからかうように押してきた

「照れんなよ」あとでちゃんと話すとけよ」

「う、うるせえなあ……」

ちなみに言うのだ。ヒロは健斗が早川のことを好きということを知

っていた。早川を好きになったのは中学のときで、真っ先に感づかれたのが、常に行動を共にしてきたヒロだったのだ

以来ヒロは、健斗の恋を応援してくれている。

ヒロは早川をどう思ってるのか……

「早川は確かに可愛いけど……仕方ねえからお前に譲るよ」
などと言ってきたことを覚えていた……

「ところでさ麗奈ちゃん。麗奈ちゃんって東京から来たんだよね？」

「うん」

「東京っていいよなあ……スゲー憧れる」

「えー？そんなことないよお」

……今ではヒロは、完全に麗奈狙いみたいだ……

しばらくヒロと麗奈は会話をしていた

すると、先生が教室に入ってきて、みんなが席に座り始めた

「じゃあ麗奈ちゃん後でな」

「うん」

ヒロはルンルン気分で自分の席へと戻っていった

健斗はそんなヒロを見て、少し羨ましかった……

ヒロはどうしてあんな風に……好きな女の子に話しかけれるんだろうか……

いやヒロに限ったことじゃない。やつぱしみんな、好きな人にはあんな風にアプローチをかけるんだよな

俺もやってみようか、早川にアプローチ……でも……なあ……

そんなやつらの真似なんかして何になるって言うんだよ

俺は俺だろ？自分なりに早川と仲良くなればいいじゃん……

自分は自分なりに早川と仲良くなっていきたいなあ

無理に仲良くなるよりも、自然と仲良くなる方が全然いいもんなあ……

健斗は一人でそんなことを考えていた

欠伸をして、背中を伸ばしていた。

第2話 始まる学校 P・16

時間は退屈なまま、過ぎていく。つまらない授業は本当に退屈だ

健斗は授業中、ぐっすりと眠っていた。今は数学の時間……数学は健斗の中で一番嫌いな教科だ……

だから、この時間は寝るに限る。このまま眠り続ければ、次は待ちに待った弁当の時間だったからだ。

こんなに弁当の時間が待ち遠しく感じるなんてスゲー久しぶりだ

初めて感じたのは、確か小学校一年生のとき、初めての遠足以来だ

理由はもちろん分かっている。早川と話せるからだ……

早川とコミュニケーションをとれるだけで、健斗には幸せな時間を感じるのだった

そんな中だった……

麗奈はというと、ただ先生の話聞いていた。板書などは書いていない。ただ先生の話をしつかりと聞いているだけだった

「……ふうん……ああなるんだあ……ねえ健斗くん」

麗奈は授業を面白そうに聞いていると突然健斗に話しかけてきたけれど健斗は夢の中へと行っているのです、麗奈の言葉が聞こえていない

麗奈は静かに軽く健斗の背中を触って揺さぶった

「健斗くん。健斗くんってば」

「ん……ん……」

「ねえ健斗くん」

「何だよ……」

麗奈に起こされて、健斗は眠そうに麗奈を見た

麗奈は健斗の寝ぼけた顔に呆れるようにため息をついた

「もう、大丈夫なの？テストとか泣いても知らないよ」

「うーん……」

「頭悪いのがバレたら結衣ちゃんに嫌われるよ？」

「うーん……」

「結衣ちゃんに嫌われてもいいのかな？」

「うーん……嫌だ……」

「じゃあ起きて聞かないと」

「うーん……疲れてんだよ……寝かせろよ」

「……もうっ」

麗奈は呆れ返るようにつめ息をつき、健斗の頭を叩いてきた

「うーんうん……」

健斗は相変わらず、まったく起きようとはしないけど……

それから何十分が経ち、チャイムが鳴った

チャイムが鳴ると教室中のみんなが教科書などをしまい始めた

麗奈は健斗の教科書を丸めて、健斗の頭を叩いてきた

「おーい、ネボスケー。授業終わったぞー」

健斗はそれを聞いて、すぐに顔をあげた

「んあっ！？じゃあ弁当の時間？」

「……………もうっ……………」

麗奈はもう目をつぶるしかなかった

「麗奈ちゃん」

すると健斗たちの目の前に早川が微笑みながら近づいてきた。今日も可愛いらしい笑顔である。いつも何だけど、早川を見る度に胸が高鳴るのは何故だろう？

「お弁当いっしょに食べよ？山中くんも」

「うん 今そっち行くね」

麗奈はにっこりと微笑むと、鞆からお弁当を取り出した

健斗もそのあとに続くかのように、鞆からお弁当を取り出して、早川や佐藤、あと一応ヒロが集まる場所に向かった

「昨日麗奈ちゃんどうしたの？急にいなくなっちゃって……………」

佐藤が少し心配そうな表情を浮かべていた。しかしそれと逆に、麗奈は少し笑いながら、手を頭の後ろにやって言った

「えへへ、昨日授業サボっちゃった……………」

「え〜？意外だなあ、麗奈ちゃんもそういうことするんだね〜」

それはきつと、悪い意味ではなく、麗奈もそのような学生らしいことをするんだという、驚きの意味で言ったのだった

「山中くんは？」

佐藤はふと健斗にそう聞いてきた。健斗はお弁当を開けながら答えた

「えつと……気分が悪くなって、保険室にいた」

それを聞いてヒロは吹き出すように笑った

そんなヒロを見て、佐藤は首を傾げた

「もう平気なんだよね？」

昨日と同じように、早川が心配そうに訊いてくるのを、健斗は微笑みながら答えた

「ああ。サンキュー早川」

「ねえ麗奈ちゃん？今度は俺といっしょにサボっちゃおうよ？」

とヒロがまた訳の分からない誘いをした。麗奈は少し笑いながら、謝るように言った

「ゴメン。もうサボることないかも」

「ガビン」

佐藤はそんなヒロをみて可笑しそうに笑った

「さて、いただきまあゝす」

佐藤のかけ声とともに、健斗たちもお弁当を食べ始めた。今日の弁当はまた母さんが作ったので、麗奈と具材はほとんどいっしょだ

「そついえば麗奈ちゃん、部活は決めた？」

早川がふとそんなことを訊いた。昨日は母さんにも聞かれた

「うん……私ね、昨日までバイトやろっかなあつて思ってたんだ」

麗奈がそう言うのと、ヒロが食いつくように言った

「何い？ハンド部のマネージャーは？」

「ちよつとあんた黙つてて」

佐藤が鋭くヒロに言う。早川は少し笑うと、麗奈を見てまた訊ねた

「じゃあ、バイトにするの？」

「うゝん……昨日の夕飯にね、お母さんにも……あつ、お母さんつて健斗くんのお母さんなだけど……」

それを聞くと、佐藤とヒロは少し驚いたように言ってきた

「えっ？」

「健斗のおばさん？昨日健斗ん家で晩飯食ったのか？」

そっか……この二人は麗奈が居候してることを知らなかったんだっ

麗奈はしまったというように、健斗を見た

「ゴメン……」

麗奈が苦笑いしながら謝ってきた。健斗は特に怒ることもなく、冷静であった

「いや、こいつらには大丈夫だろ」

「麗奈ちゃんね」

早川が説明をするように少し笑いながら言った

「麗奈ちゃんね、本当は山中くんのイトコじゃなくって、山中くんのお父さんの友達の娘さんなんだ。それで、今とある事情で、山中くんの家に居候してるんだって」

早川がすらすらと説明をすると、麗屋は申し訳なさそうに、肩をすくめた

「黙っててゴメンね」

「そうだったんだ……」

佐藤は少し驚いていたようだったが、そこまではないようだ。ただ健斗と麗奈の事情を知れて納得するだけだった。

問題なのは、ショックと驚きのあまりに口をあんぐりと開けたままのこのバカの方だ

「い……居候……健斗と麗奈ちゃんが……いっしょに……」

「そっかぁ……大変だね」

麗奈は少し笑うと、佐藤とヒロに請うように言った

「このこと、他の人には言わないでくれる？」
と言って、麗奈は健斗を見た

きつと健斗のことを気遣ってるんだろう

佐藤はゆつくりと微笑むと、どんっと胸を叩いた

「任せて！！私口割らない方だし」

佐藤は大丈夫だけど問題は……

「嘘だ……健斗と麗奈ちゃんが……そんな……」

「……はぁ……」

健斗は呆れ返るようにため息をついた。

「ま、まあこんなバカはほっておいて、で、さっきの続きは？」

佐藤が笑いながら訊いた。麗奈はゆつくりと頷くと、さっきの続きを話し始めた

「うん。でね、お母さんにも訊かれたんだ。でもさ、ほら私が居候してる間、私が使っ光熱費とか、食費とか余計にかかるでしょ？だから私バイトして、迷惑かからないようにしたかったんだ」

麗奈がそんなことを言うと、健斗以外みんな感心するように麗奈を見た

「偉いね麗奈ちゃん。私も今親戚の家に住んでるんだけど、そんなこと考えたことなかったよ」

と佐藤が感心しながら言った

「本当。ちゃんと考えてるね」

早川も麗奈を感心していた

麗奈はゆつくりと微笑んだ。

「じゃあ麗奈ちゃんはバイトかあ……」

とヒロが残念そうに言った。けど麗奈はそれを少し否定した

「うん……それがね、お母さんがね、高校生は今だけなんだから、そんなこと気にしないで、やりたいことをやりなさいって言うてくれたんだあ。すごく嬉しかった」

「そう……でも難しいね」

早川がそう言うと、麗奈はゆっくりと頷いた。

「うん。お母さんの言葉は嬉しいけど、でも……って感じ。悩むんだよね」

と少し笑いながら言った。

健斗はそれを黙って聞いていた。改めて麗奈の考えを聞くと、麗奈に対しすごく申し訳ない気持ちになった

麗奈はこんなにも深く考えているんだと思うと、あるとき麗奈を嘲笑ってしまった自分にすごく嫌悪感を感じてしまう。

麗奈はもしかしたら、そのことにすごく怒ってたのかもしれない……

健斗はそんなことを思いながら、麗奈を見ていた

「でも、よく考えた方がいいよ。せっかくお母さんもそう言ってくれてんだしね」

早川がそう言うと、麗奈はにっこりと笑いながら頷いた

「そうだねっ！……とりあえずもう少し考えてみるよ」

と麗奈が言うと、早川もにっこりと笑った

しかしだった……そんな麗奈を見ていたら、健斗は、ふと口から言葉が出てしまった

「……そんなに気にすることねえよ」

健斗が話すと、みんなふと健斗の方を見てきた。健斗は弁当を食べながらゆっくりと続けた

「母さんの言うとおり、自分のやりたいことをやれよ。絶対に部活をやれってわけじゃないけど……もし、バイトをやリたかったらバイトをやればいいし……部活をやリたかったら部活をやればいい。ただ、お前次第なだけだよ」

健斗がそう言うのと、みんなは呆氣にとられるように静まり返った

特に麗奈がそうだった

まさか健斗がそんなことを言うてくるとは予測だにしてなかったんだろう

自分だって何でこんなことを言ったのかさえわからなかった

ただ、自分の昨日嘲笑ってしまったことに対する羞恥心から……素直な気持ちを持ただ言葉にただけだった

早川がクスツと笑った。健斗を見て、優しい目をしていた

「そつだね。山中くんの言う通りだと思っよ」

早川にそんなことを言われて、健斗はさらに気恥ずかしくなって目を下に向けた

麗奈はしばらく健斗を見つめていた

そして、頬を赤くして、口元が喜びの表情に変わっていた……

第2話 始まる学校 P・17（前書き）

健ですっ

ユニークアクセス数が4000を突破しましたっ！！

みなさんありがとうございます

これからも応援よろしくお願いしますっ！！

また、評価感想等もよろしく

第2話 始まる学校 P・17

健斗とヒロは弁当を食い終わったあと、残った昼休みの時間、屋上に続くまでの階段にいた。

「どういうことだ!？」

ヒロは少しキレ気味で健斗に詰め寄ってきた。鋭い眼光がまるで刃のように、健斗の心に突き刺さってくる。健斗はその視線に耐えきれず、ずっとヒロの顔を見れないでいた

「いや……だからさ……」

「お前、ただの親戚だって言ったよな? 言ったよなっ!？」

「一応……親戚だろ? 父さんの友達の娘なんだから」

「全然チゲーだろ!!」

ヒロは怒鳴りつけるように健斗に言った

「まさか……お前麗奈ちゃんとあんなことやこんなことを……?」

「んなっ!?! バカ言ってるじゃねえよっ!! そんな関係じゃねえっ!?!」

健斗は真っ赤になってそれを否定した。ヒロはいつも事を大袈裟に解釈する

「さっきは麗奈ちゃんの前でかつこいいこと言いやがってよ……」

ヒロは拗ねるように言い捨てた

「いや……別にあれは……」

「くそ……何でお前ばかりいい目に……」

ひがむヒロを見て、健斗は深く息を吐いた

「実際……あいつ全然訳分からねえよ……昨日、あいつずっと俺のこと怒ってたと思ったら、今日ケロツとした態度に変わっててさ……本当に意味分からねえ」

健斗がそう言うときヒロは少し不思議そうな表情を浮かべた

「何？ケンカか？」

「いや……よく分からねえんだよ……本当に」

健斗はため息をつきながら、そう言った。するとヒロは腕を組みながら、目をつぶり何かを考えるかのように言った

「本当は怒ってんじゃないか？女は中で溜めるもんだからな」

「そうなのかなあ」

「さあ？」

ヒロの曖昧な答えに健斗は困惑した。

女は中で溜める……か。確かにヒロの言う通りなのかもしれない。もしかすると麗奈はまだ本当は怒ってるのかも。

「……そっぴやさ」

健斗は話題を変えるように、ヒロに言った。ヒロは健斗の話題の転換に振り向いた

「昨日さ、早川が家に来た」

健斗がそう言っているとヒロは少し驚き気味の表情をした

「家に!？」

健斗はゆっくりと頷くとヒロはへえとため息をつくように驚いた

「で、何だつて？」

「いや、何か……昨日はゴメンねって……迷惑だったよねって……」

ヒロはそれを聞くと吹き出しながら肩を震わせて笑った

「何だそれ。迷惑なわきゃねえくせに」

「早川に気を遣わしちゃったみたい……」

健斗は苦笑しながらそう言った

「で、お前は何て」

「本当に嬉しかったよって……ありがとうって……そしたら、またお弁当いっしょに食べよって言ってくれた」

「マジかよ！？お前好かれてんじゃねえの？」

ヒロが簡単にそんなことを言ってきたので、健斗は首を横に振った。

「違うよ。多分……」

本当は自分でもそう思ったかった。早川に好かれてんじゃないかって……でも、期待したくはない。期待して裏切られるとショックを受けるのは自分だから

「まあ、お前が早川に誘われるおかげで、麗奈ちゃんもいっしょに誘われて、俺もいっしょに食べるからいいんだけどな」

とヒロはククツと笑ってきた

「いや、麗奈が誘われて、俺はそのついでだろ……」

健斗がそう言うと、ヒロは健斗の背中を叩いてきた

「消極的考えはやめえ。もっと前向きに考えれへんのか？」

「けどなあ……」

健斗は天井を見上げて早川のことを考えた。確かに、麗奈が来てから早川と突然仲良くなりはじめたような気がする……

でも何でだろう？

それから一日が過ぎて夜になり、健斗は風呂上がりの状態でバスタオルで頭を乾かしていた

「ふう〜……」

結局、今日は早川のことを一日中考えていた。早川が何故、自分を誘ってくれるのか？何故自分をこんなに気にしてくれるのか……ずっと疑問に感じていて、少し嬉しい気持ちに浸っていた

ふと頭を乾かしながら、健斗は縁側に向かった。そしてゆっくりと戸を開けて涼しい風を吹き込ませた……

そんなことをしながら、麗奈の言葉を思い返していた

「俺が本気で早川が好きだから……あっちも好きになってくれる……か……」

少し芽生える、都合のいい妄想……

まさか早川は自分に好意を持っているんじゃない……何て少し疑う気持ちもあった

静寂な闇に鳴り響く虫の声……もうすぐジメジメした季節がやってくるのを感じていた

早川ともっと仲良くなりたいな……

「健斗……!？」

ふと居間の方から母さんの声がした。健斗はそれを聞くとゆっくりと立ち上がり、静かな足取りで居間へと向かった

居間に入ると、母さんが夕飯の支度をしていて、父さんが風呂上がりのため、タオルを首にかけて、ランニングを来てビールを飲んでいた

けれどそこには麗奈の姿はなかった

「健斗、実はな頼みがあんだ」

父さんがビールを飲みながら、枝豆を口にしていた

「何？」

健斗は座りながら用件を聞く

「実はな、今度ホームセンターに行つて麗奈ちゃんのベッドとタンスと机を買いに行くから、お前ついてきてくれ」

「うん……分かった」

健斗が素直に頷くと、父さんは少し意外そうな表情をした

「意外だな。素直に頷くか」

「断つて欲しいの？」

「いや……」

隣で皿やコップを出しながら、母さんはクスクスと笑っていた

正直、もう麗奈のことで面倒臭くはならなかった。まだあいつが来てから三日しか経ってないけれど、なんだかもう慣れてしまったような気がしたのだ

「健斗、ご飯にするから麗奈ちゃん呼んできてくれる？」

母さんがそう言うと健斗は何も言わず立ち上がり、二階へと向かった

その様子を見て、父さんは肩を震わせて笑った

「あいつ、何だかんだですっかり慣れてるな」

「フフフ……ちゃんと仲良くなってるみたいね」

健斗は二階へ上がると、ドアが開けっ放しの麗奈の部屋を覗いた

すると麗奈は窓際に座り込み、景色を眺めていた

青いＴシャツに、ビニール製のシャカパン姿だった

またちやぶ台が出されていて、その上にはノートが一冊……ペンが一本置いてあった

「大森」

健斗が名前を呼ぶと、麗奈はすぐに健斗を見た

しかしいつものように微笑むことはなく、無表情で健斗を見つめた。

それが少し健斗にとって不安を感じさせた

「飯……だから降りてこいよ」

麗奈は健斗の言葉にゆっくりと頷くと、立ち上がり部屋を出ようとした。

するとすれ違いざまに、健斗はある場所に目をやった

麗奈の右肘の関節の辺りに、擦り傷があった……

「お前……その傷どうした？」

健斗が聞くと、麗奈はぱつと肘を隠した

肘だけじゃなかった。左膝の関節の辺りにも同じような擦り傷があった

またその擦り傷は、まだ膿んでもなく、痂になりかけている……つまり新しい傷であることが分かった

「膝も怪我してんじゃん」

「何でもないよ」

麗奈はやつと健斗に微笑むと、そのまま一階へと降りていった……

健斗は少し胸が痛んだ……何だか……昨日から麗奈らしさがなくなっているような気がした。

いつもの能天気なあいつは朝だけだった。

不意にヒロの言葉を思い出す……

本当はまだ、怒ってるのだろうか……

女は中で溜めるらしいから……な……

健斗はそんなことを考えるのが嫌になり、麗奈の傷を考えた

いつできた怪我なんだろう？昨日か？

今日か？でも今日も昨日も体育はないし、まだ部活に入っていない麗奈は運動してるわけがない

男子のように追いかけてこはしていない。昼休みや休み時間はずっと早川や佐藤と会話をしていた

でもまだ新しくできた傷だというのは明らかだった……

健斗は首をかしげながら、別に何でもないならいいかと自分で納得した……

けれどだった。次の日の朝、健斗は麗奈の傷が増えていることに気

がついた。右の脛の辺りに、左足にもまた擦り傷が出来ていた。

手にも同じような傷が出来ていた。健斗は訳を聞いても、麗奈は何も答えなかった……

だからそれ以上聞かなかった。ただ、不思議なことがもう一つ……健斗の自転車のギアが外れていたということ……昨日は外れてなかったのに。

麗奈に理由を訊ねても、知らないと言い張る……本当に？と訊ねても、自転車には触ってないという

だから、結局麗奈の傷と自転車のギアが外れていたことは不明のままになるうとしていた……

傷のことは、さすがにみんなにも気付かれた。一番最初に見つけたのは早川だった

でも麗奈は、ちょっと転んだだけと言う。だからそれ以上疑いのない。健斗でさえ、そう思ったのだから……

ただ疑ってたのはヒロだ。健斗が麗奈を襲ったのではないかと、勝手な妄想を膨らませている……

結局健斗も麗奈の傷のことはあまり気にしないでいた

第2話 始まる学校 P・18

麗奈がこの家に来て、1週間を過ぎようとしていた朝のことだった。この日は健斗は自分の部屋で久しぶりに寝ていた

麗奈が、たまには自分が居間で寝ると微笑みながら言ってきたからだった……少し気になっていたが、麗奈がそう望むんだつたら……と健斗は何も言わず了解をした

やっぱり自分の部屋は風通りがよくて涼しかった。健斗はほとんど爆睡状態でいた……

と、そんなときだった……

わんっ！！わんっ！！わんっ！！わんっ！！

ゴンタの吠える声が、健斗の部屋に入ってきた。ゴンタは健斗の部屋の真下にいるから……吠える声がうるさく、健斗はゆっくりと目を覚ました

ゴンタうるさいなあ……なんて思っているときだった……

「ゴンタっ！静かにしてっ！」

ふと耳に、誰かの話し声がきこえた。けどゴンタは吠えるのを止めず、その話し声は少し大きめな声になる

この声は……麗奈？

健斗はゆっくりと身体を持ち上げて、窓からそつと顔を出した

するとだった。

麗奈がゴンタをたしなめながら、健斗の自転車を持ち出そうとしているのが見えたのだ

健斗はすぐにケータイを手にとって時計を見た

時計はまだ、五時半だった……

こんな朝早く何をしてるんだ？

麗奈に声をかける気はおきなかった。けど麗奈は自転車をゆっくりと押しながら、家の塀の外まで運んだ

「……何だあいつ……」

健斗はふうつとため息をつく、またベッドに横になって眠ろうと試みた……

……が、やはり気になってしまいまた起き上がって、頭を掻きながらケータイをポケットにしまい、麗奈のあとを追いかけてみることにした

家を出ると、もう麗奈の姿は見えなかった……

「どこ行っただ？あいつ……」

朝早いからか、少し寒さを感じた。草むらには朝露がついていて、小鳥たちのさえずりに、虫の鳴き声を聞いていると少し気持ちよかった

けど、まだ太陽は昇りかけているため、まだ少し薄暗かった……

「……ん？」

ふと下を見ると、自転車の車輪が通ったあとが見えた

右の方向に進んでる……ってことは……

「あいつ、三丁目公園に行ったのか？」

でも何しに？考えるよりも、健斗は少し小走りで麗奈のあとを追いかけた……

それから十分くらい歩くと、公園に着いた

麗奈の姿はまだ見えなかったが、きっとここにいるんだろう。健斗はそう思いながら、坂を少し小走りで上っていった

坂を上ると共に、太陽が眩しく感じられた

橙色の日の光が、目に染みた。また息も上がる……

坂を上り切ると、健斗は息を荒げて麗奈を探した

するとだった……健斗はそこで、ある光景を見てしまった……

「……ハア……ハア……大森？」

麗奈はグラウンドにいた。何をしているのかと思ったら、自転車に股がっっている。けど、すぐにフラフラと蛇道を描くと、すぐにバタンと倒れてしまっている。それを、何回も、何回も、何回も繰り返ししていた

健斗は息を整えながら、あまりの驚きに言葉も出てこなかった……

一体何をしてんだよ……麗奈は何で……自転車を乗る練習をしているんだ？

それを、いつから続けてたんだろう？自分の知らないところで、あいつは頑張ってたのか？

「……………あいつ……………」

麗奈は一生懸命、自転車を漕ごうとしていた。どんなに転んでも、少し痛がってからすぐに前を向いた

そしてゆっくりと自転車を持ち直すと、また股がつて……………蛇行運転を繰り返している

そんな麗奈の姿を見ると、健斗は可笑しさと共に、麗奈の寛大な姿に心を打たれていた。

どうしてこんなにボロボロになってもやめないのか……………

麗奈のイメージとは全然違った……………

理由は分かっていた。どうしてこいつがこんなことをしているのか……………

しばらくの間、健斗は麗奈を見守っていた。いつか止めるだろうと期待するのは無駄なことだった。

麗奈は止めたりはしなかった。いつまでもおんなじことを繰り返して、けれどいつか乗れるようになると自分を信じていた……………

次第に、健斗は身体が疼いていた……………今にも麗奈の元に走り出しそうになっていた……………

「……………あつ！！」

麗奈が約五秒間の間、自転車をフラフラと運転していた。けどそのときの倒れ方が少しひどかった……

健斗は気がつくとも麗奈の元に走り寄っていた

麗奈は少し痛そうにしていたが、またすぐに自転車を起こして再びチャレンジしようとしていた

けれど、健斗の駆け寄ってくるのに気がつき、驚いた表情で健斗を見つめた

「ハア……ハア……何やってんだよ……バカッ」

健斗は息を切らしながら、麗奈にそう言った。

「……えっと……自転車の……練習？」

と健斗に微笑みかけてきた。

健斗は真剣な表情をして、麗奈の手足を見た

「傷だらけじゃねえかよ……」

「……まあね 別にすぐ治るから」

麗奈はそう言つと、また自転車に股がった。

「あっ……」

「バカッ!!」

しかし麗奈はすぐに倒れ込んでしまった。健斗はそれを瞬時に対応し、麗奈を庇うようにして、麗奈を自分に引き寄せた

自転車はすごい音を立てて倒れ、前輪がカラカラと回っている

麗奈は健斗にもたれかかるような体制になっていた。頬を赤く染めながら、健斗を見つめていた

「あ……ありがとう……」

「……別に……」

健斗は恥ずかしそうに言い捨てると、麗奈の身体をゆっくりと持ち上げた。そして自分も立ち上がり、自転車を起こした

「……自転車とは無縁じゃなかったのかよ」

健斗がそう笑いながら言うと、麗奈はさっきの微笑みは消え沈んだ表情を浮かべていた

「……だって……」

麗奈は座り込みながら、呟くように言った

「だって……健斗くんの荷物になりたくなかったんだもん……」

ふとこぼれる本音の言葉……健斗は黙ってそれを聞いていた

「健斗くんの邪魔になりたくなかったから……だから……」

やっぱり……あのときの言葉を、ずっと気にしてたんだ……と健斗は自分に後悔するように思っていた

「あんときは……悪かったよ……俺が悪かった……」

健斗は謝ると麗奈は上目使いで健斗を見た。少し涙目で、怒ったように頬を膨らませていた

「謝らないでよ……」

「じゃあ何て言えばいいんだよ」

健斗がそう言つと、麗奈は再びうつ向いた

その表情が、健斗はすごく嫌だった

「……大森……」

健斗は麗奈を見つめて言った

「俺さ、少しお前のこと……誤解してたかも……」

素直な気持ちを麗奈にぶつけたかった。麗奈はうつ向いたままだったけど、健斗はゆっくりと続けた

「俺さ、お前って自分勝手に、能天気で、何も考えてない、性格の悪い女だと思つて……お前が嫌いだった……けど」

健斗は息を吸いながらまた続けた

「でも、本当は色々考えてるんだなって思ったら……何かスゲー意外で、俺びっくりしてさ……うん……」

伝えたいことが上手く言葉に出来ない……いつもこうなんだ

健斗は一旦、自分の頭の中を整理した

「正直……見直したよ。俺……」

本当だった……麗奈は本当は実際迷惑にならないように色々考えるんだって、考えるようになってから、麗奈に対する意識が自分の中で少し変わっていた。

「だから……あんとき、お前のこと邪魔だとか、お荷物とか言ってる悪かったよ……本当にゴメン。ゴメンな」

麗奈はうつ向いたままだった。うつ向いたまま、手をいじくっていた

「……違うよ」

「ん？」

麗奈はうつ向いたまま、呟くように言った

「違うよ……健斗くんが謝ることないよ。私が、この前怒ってたのはね……健斗くんよりも……自分が嫌だったから……」

「え……」

麗奈は静かに健斗を見た。目を涙目で必死に涙を堪えていた

「何か……何も出来ない自分が嫌だったの……健斗くんがいなきゃ、何も出来ないんだもん……私……」

それを聞いて、健斗は少し胸が高鳴った……早川とは違う胸の高鳴りだった

麗奈はそれから黙り込んでしまった。

健斗は麗奈の言いたいことを、言葉じゃなくても……分かっていたつもりだった

だから……今こいつにしてやれることは何かと考えたんだ……

「大森っ」

健斗は麗奈の頭に手を置いた。麗奈はゆっくりと健斗を上目使いで見してきた

「立てよ。練習するんだろ？自転車乗れるように」

「え……」

健斗は笑いながら麗奈を立たした

「ほら、自転車に股がれよ」

麗奈は健斗に促されるまま、少し戸惑い気味で自転車に股がった。

健斗は自転車がフラつかないように、自転車の後ろでしっかりと支えた

そして微笑みながら麗奈に言った

「いいか？両手でハンドルをしっかりと握って、しっかりとバランスをとれ？それで、ゆっくりと足で漕いでみる」

「う……うん」

「ちゃんと押さえてるから、ほらっ！！」

健斗の掛け声と共に、麗奈はゆっくりと漕ぎ始めた

フラフラしてるが、健斗はしっかりと後ろで支えてるため、倒れはしなかった

「最初はゆっくりでいいからっ！！ゆっくり、確実に漕いでいけっ！！」

「うんっ」

「前輪は真っ直ぐ！！真っ直ぐ漕げ！！」

健斗はポイントなどを言いながら、大きな声で麗奈に自転車の乗り方を教えて言った

次第に麗奈も元気を取り戻していった

「足は漕ぐだけでいいからっ！！バランスに集中しろっ？」

「わっ！うっ！やっ！」

麗奈は一生懸命バランスをとろうとしている。健斗も一生懸命になつて支えようとした

それからどのくらいが経つただろう。健斗と麗奈は朝日が完全に昇るまで、ずっと自転車の練習をしていた

笑いながら、励ましながら、何度転んでも何度でもチャレンジした。その時間が、とても大切に思えて、まるで永遠のように感じることもさえもあつた

そして麗奈は徐々にスピードに慣れていった。健斗も少しスピードを上げながら、大声で言った

「離すぞっ！！」

そう言つて、健斗は静かに両手を自転車の後ろから離れた……

するとだつた……麗奈は蛇行運転ではなく、真っ直ぐとスピードをつけて漕いでいた

健斗はそれを見て、はしゃぐように喜んだ

「麗奈っ！！漕げてるぞっ！？ちゃんと漕げてるっ！！！」

思わず健斗は名前で呼んでしまうほどの興奮と驚きだった。麗奈も驚きと興奮が隠せないでいて、すごく嬉しそうに笑顔であった

たった10秒くらい。10秒くらいだったが、確かにあのとき麗奈は自転車を真っ直ぐ漕いだのだった

「わっ!!」

不意にバランスを崩してしまつて、麗奈は自転車と共に転んでしまつた

健斗はすぐに麗奈のもとに駆け寄つた

麗奈は頭を押さえながら痛がつていた

「大丈夫か？」

「いったあゝいつ!!でも乗れたよ!?!ちゃんと見た!?!」

健斗はそんな風に子供みたいにはしゃぐ麗奈を見て可笑しさが込み上げてきた

健斗は吹き出しながら笑つた

「プツ!!アツハハハハハ!!」

「何で笑うの?」

麗奈も笑いながらそう言つた。健斗は腹を抱えながら首を横に振つた

「分かんねえっ！！何かっ！！アハハハハ……お前可笑しいんだもんっ！！アッハハハハハ！！」

「そんなことないよぉ　アハハハハハ」

次第に麗奈もつられて笑いだした。

朝日に照らされながら、健斗と麗奈は声を出して笑いあっていた……

その帰り、健斗は麗奈を自転車の後ろに乗せて走って帰っていた

「ねえ、健斗くん」

麗奈が後ろでご機嫌そうに言ってきた

「何だよ」

健斗が訊くと麗奈はにっこりと微笑んだ

「ありがとう。来てくれて……」

「……お前が外で騒いでるから目が覚めただけだよ」

と健斗は恥ずかしそうに言った

「でもありがとう」

麗奈はにっこりと微笑んだ。久しぶりに見た麗奈の本当の笑顔だった

「……お前さ、邪魔になりたくないとか荷物になりたくないとか言っただけさ……」

健斗は照れながら前を向いて静かに言った

麗奈はゆっくりと頷いた

「うん」

「……荷物なっていていいんだよ……っーかなれよ」

「え？」

健斗は大袈裟に声を出して言った

「もう俺はこの生活に適応しはじめてるんだから、今さら無理されたら困るっつてんだよ。バカなことしないで、お前は黙って俺の後ろに乗ってればいいんだよ」

と健斗はそう照れ隠しにそう言った

随分と遠回りな言い方になってしまったが、麗奈はその意味に気づくとクスツと笑った

「素直じゃないなあ〜？要するに、どんどん俺に頼れってことですよ？」

「さあな……」

すると麗奈はまた可笑しそうに笑った

「でもありがとう 健斗くん」

「……うるせえな、バアカ」

「もう本当に素直じゃないなあ〜」

「別につ！？つまりだな、俺がいらないとお前は本当に何も出来ないんだからなっ！！俺という人間に感謝しろよなっ！！」

健斗の言葉を聞いて麗奈はしばらく黙り込んだあと、クスツと笑った
ゆっくりと自転車を漕ぎながら、健斗たちの声は静かな朝に溶け込んでいた……

このとき俺は感じてたんだ……俺はこの日、麗奈の本当の姿を見て、自分が麗奈に心を許し始めていること

俺らの距離は、少しづつだけ縮まってきた……

第3話 想い（前書き）

第3話のあらすじ

二人の遠かった距離を次第に縮めていく、健斗と麗奈……

そんな中、健斗はヒロからある噂を耳にする……

それは、早川がサッカー部主将を好きだという噂……

落ち込む健斗の傍にいたのは、麗奈だった

次第に想いが募りに募って……あの日、辛い過去のこと、早川を好きになった理由を健斗は自然と話し始める

全てを聞いた麗奈は……

第3話 想い

ある日の土曜日、そろそろ蒸し暑くなってきた。ようやく五月の下旬に入ってきたから

「健斗くん、早く早く」

せつかくの休みの日、健斗は少し季節早いポロシャツとジーパンを着て、面倒臭そうに家を出た

麗奈は可愛らしい私服姿で、車の前で健斗を呼んでいた

今日は父さんがこの前言ったとおり、麗奈の日常に置いての必需品を買いに行くのだった。

あのときは何も考えてなかったけど、今は正直面倒臭かった

かと言って、今日は昼までやることはないし……とりあえず着いていくことにした

父さんも母さんも、ゴンタも連れて家族そろって買い物に行くのだ

健斗はゴンタをリードに繋いで、ゆっくりと歩いていた

「健斗くんったらあ」

「うるさいなあ……」

たく、元気過ぎるんだよなあ……いつもこいつは

車まで歩くと、ゴンタを車の中へ入れた

あとは母さんが来るのを待つだけだった

麗奈は車に寄りかかりながら、嬉しそうにニコニコしていた

「……嬉しそうだな」

健斗がそう言つと麗奈は健斗に笑いかけた

「うんっ 私こつこの好きなんだよね」

「あそう」

「今日健斗くんも付き合ってくれるんだね？」

「他にやることがないからな……」

すると車の中から父さんが出てきた。父さんは車からタバコを取り出し、火をつけた

「この前な、ホームセンターに行ったんだがいいのがなくて……でも知り合いがベッドや机を提供してくれるって言うから、それを取りに行くんだ。気に入ってくれるといいんだけどなア」

父さんが麗奈に言つと麗奈はにっこりと微笑んだ

「はいっ……あ……お金って大丈夫なんですか？」

麗奈が訊くと、父さんは肩を震わせて笑った。

「大丈夫さ。ただでくれるらしいから。まあ、君のお父さんからお金も預かってるんだけど……なるべく使いたくはないしな」

父さんがそういうと、麗奈は少し寂し気な表情を浮かべた

「そうですか……」

「お父さん……今度君に電話するって言ってたよ」

「……………」

麗奈は何も言わず、父さんの言葉を聞いて頷いただけだった

健斗はただそれを黙って見ていた

麗奈のお父さん……か……麗奈はここがお父さんの故郷と言っていて、今は外国で働いてるって言ってたな

この表情には多分なにか理由があるんだろうけど、健斗は特に気にすることはなかった

すると母さんが家の戸の鍵を閉めて、家から出てきた

父さんはそれを見ると、タバコの火を消し、笑いながら言った

「さあて、そろそろ出発だな」

第3話 想い P・2

もちろん父さんは運転席、母さんは助手席、そして真ん中に健斗で右端が麗奈、さらにゴンタが左端という配列で車は出発した

ちゃんと窓を開けるとゴンタはすぐに窓から顔を出した

なびく風がゴンタは好きらしい。また過ぎ行く景色も好きらしい

意外にゴンタも人間らしいところがあるのだ

犬なのにな……

「これからどこに行くんですか？」

麗奈が父さんにそう訊いた。

「市内まで出るんだ。あの辺ならビルもいっぱい立ち並んでるんだ。車道に出てから、一時間くらい走ると着くよ」

父さんが言うと麗奈は感心するように言った

「一時間かけて買い物って、毎回だと大変ですね」

「そうでもないさ。食事の材料とかは此处で買っからな。年に三回程度しかいかないよ」

「へえ」

「でも、東京ほどの都市じゃないんだけどね」と母さんが可笑しそうに笑った

「でも楽しみだなあ……健斗くんも行ったことある？」

不意に麗奈がそう訊ねてきた。健斗は甘えてくるゴンタの頭を撫でながら答えた

「そりゃ……な。服とか買いに……」

「ふうん。ねえ、あっち着いたら案内してよ」

「案内出来るほど詳しくねえよ」

健斗がそう言うのと母さんが後ろを向きながら言った

「いいじゃない。麗奈ちゃんの服も買いに行くのよ？二人で行ってきなさいよ」

それは……別にそれでも良いけど……

「母さんたちは？」

「父さんたちは麗奈ちゃんの勉強机を見てくるよ。それとベッドとタンスをもらってくる」

父さんがそう言うと、麗奈は健斗を見てにっこりと笑った

「じゃあいつしょに行こう健斗くん」

「ん……ああ」

健斗が了解すると 麗奈は嬉しそうに笑った。

ゴンタは健斗の膝に頭を乗せて、虚ろな目をしていた

「二人ともすっかり仲良くなっちゃって 青春だね」

とオホホと母さんは笑った

健斗は呟くように言い返した

「別に仲良くなってないし……」

でも母さんの言う通りだった。確かに麗奈とはあの日以来、距離がだいぶ縮まったような気がする

つか、本当に一日中いつしょにいるから……こいつにすっかり慣れてしまったのだ

そんな自分が時々恐ろしい……でも仲良くなったからと言って、こいつの全部を知っているわけじゃない。あの寂し気な表情の意味は何なのだろうか？ 本当の事情とは？

疑問が浮かんでくる。けどそれを麗奈から今聞こうとは思わなかった。いや、むしろ思おうとはしなかった

「……ゴンタ……お前酔ったのか？」

健斗はゴンタの頭を撫でながら、ゴンタにそう訊いた。ゴンタは鼻で高く鳴いた

「ああ。眠いのか」

ゴンタが鼻で高く鳴くときは、大体が眠いかお腹が空いてるのかのどっちかだということを健斗は知っていた

けど、ご飯は出る前にあげたからお腹は満腹のはずだ。だから、多分健斗に甘えている内に気持ちよくなって眠くなったのだらう

何だかんだで、子供だなまだまだ……

次第にゴンタは目を閉じて眠り始めた。健斗はゆっくりと安心させるようにゴンタの身体を撫でてやった

「ゴンタって、健斗くんによく甘えるよね？」

と麗奈は眠るゴンタの鼻を触って言った

「そうか？」

「うん。何か、健斗くん父親って感じ」

麗奈がそんなことを微笑みながら言った。その言葉を聞いて、健斗は口元が緩んでしまった

父親か…… 案外麗奈の言う通りかもしれないな……

でも、父親よりゴンタは兄弟だと……そして心からの親友だと思いたい。息子であり、弟であり、友達なんだゴンタは……

「甘えん坊なだけだよ」

健斗はそう言って静かに笑った

「なあゝんか、私も眠たくなっちゃったなあゝ……」

と麗奈は言つと静かに目を閉じた。

健斗はちよつと困つたような表情を作りながら怪訝そうに言った

「寝てもいいけどさ、こつ……俺に寄りかかったりするなよな？」

と健斗は言つたけど、麗奈は軽く頷くだけで、何も言わなかった。すでにあれだ。爆睡モードに陥つてるというわけだ

こいつが軽い返事をするときはいつも……

こうなるわけだ。結局麗奈は何回も健斗に寄りかかってきた。健斗はその度に身体を起こすが、すでに爆睡モードに入ってる麗奈は車の揺れで健斗に寄りかかってくる。

一回起こそうか……と考えたのだが、あまりにも気持ち良さそうに寝ている麗奈を見て、気が引けた

つか……いつも思うんだけど、無防備過ぎるだろ……こいつは

これで麗奈の寝顔を見たのは4回目だ。普通女の子って、寝顔を見られるのを嫌がるもんなんじゃないのかって思う

つか、そんなもんだろ？一応俺も男だ

こんな無防備で寝られると、男の性さがというのも反応してしまう。麗奈は豊かな胸でスタイルもいい……性欲が沸き起こるのが普通だ

けど、健斗は自分をマインドコントロールしていた

こんなやつに負けてたまるか……

もっと女の子らしくなれば可愛いのかなあ……と健斗は思いながら深くため息をついた

何回身体を起こしても、麗奈は何回も健斗に寄りかかってくる

それがもう面倒臭くて、そのままの状態にした。甘い香りが麗奈の綺麗な栗色の髪から流れてくる

香水もつけているようだ。アロマティックな良い匂いだ……きっと

彼女になつたら最高のシチュエーションなんだろうなあ……

って俺は何をバカなことを考えているんだ

「どうだ健斗」

「……何が」

父さんが突然主語もなしに訊ねてきた

今この車の中は健斗と父さんしか起きていない。どうやら母さんも眠っているようだった……

「麗奈ちゃんだよ。あんなに嫌がってたのに、気に入ったか？」

「……別に気に入ってはないよ」

「好きにはなれたか？」

「それもない。……ただ……」

ただ……嫌いじゃない。それだけは言えた

「でもいい子だろ？」

「……いい子……かどうかは知らないけど」

健斗は麗奈をしばらく見つめていた。相変わらず安心そうな表情を浮かべていた

「……なあ父さん」

「ん？何だ」

健斗は呟くように訊いてみた

「こいつってさ、東京に住んでたんだよね？」

「ああ」

「じゃあ何で居候することになったの？」

すると父さんはしばらく何も答えなかった

「……麗奈ちゃんから聞いてないのか？」

「……一応……何か、こいつの親が外国で働いてるから、その間だけ此処で居候するってさ」

健斗がそう言つと、父さんは高らかに笑つてきた

「そつだよ。あいつは今頃、ニューヨークで大事な取引をしてるんだろうなあ」

「ニューヨーク！？」

健斗はさらに疑問が湧いてきた

「麗奈ちゃんのお父さんは、貿易会社の社長なんだ」

「社長？」

父さんの話によると、麗奈のお父さんはとある貿易会社の社長さんらしい。麗奈のお父さんが営む貿易会社は世界を股にかける大企業らしいのだ。

今回は、米国との関税がどうのこうのについての会議と、重要な取引のため、ニューヨークで働いているらしい

まず、取引成立は一体いつまでかかるか分からないといていたという

そのため、麗奈は健斗の家に居候することになったのだ

「ふう〜ん……でもおかしい話だよな」

健斗は不思議そうにそう言った

「何が？」

「いや、いつまでかかるか分からないってことは、逆に言うとうちに成立するかもしれないってことだろ？ わざわざこんな田舎に来ることあるかな？」

「それがだな」

父さんは少し苦笑しながら言った

「まだ麗奈ちゃんには言っていないんだか、今度は中東で石油問題に

ついでに会議があるらしくてな。やっぱりそれも時間がかかるらしい。そのあと仕事もどんどん入ってきて、まだまだこっちに帰れそうにないんだと」

「はあ……スゲーなこいつの父親は……」

感心してしまう。本当に世界を股にかけてる大企業の社長なんだな……バリバリの働きマンだ。まさに自慢の父親とも言えよう

「父さんとはどんな関係？」

健斗が訊くと、父さんは赤信号を待ちながらタバコに火をつけた

「友達って言ったろう？まあ、友達というより、幼なじみと言った方がただしけどな」

「幼なじみ……」

「幼稚園、小学校、中学校、高校が同じでな。よく二人でつるんだものだったよ。けど大学で、あいつは東京の大学に行っちまってなあ……それから……最後に会ったのが10年前。ちょうど麗奈ちゃんも小学校に上がるときだったよ」

「その割にはいきなりだな」

健斗がそう言うと父さんは可笑しそうに、肩を震わせて笑った

「そうだな。この前電話がかかってきたとき、そりゃびっくりしたさ。けど、まあ迷惑な話ではなかったしな」

「迷惑だろ……いきなりだぜ？まず俺にもちゃんと電話しろっただよ。初対面のやつを送り込んできやがって」

と健斗は鼻で息を強く吐いた

「かつつか。そうか、健斗は覚えてないのか」

父さんがふとそんなことを言ってきた。健斗はそれにピクツと反応した

「何を？」

「お前、麗奈ちゃんに会ったことあるの、覚えとらんのか」

「え……」

健斗はそれが、あまりにも衝撃な事実に思えた……

俺は……麗奈に会ったことがある？

「えっ！？嘘だぁ！！いつ俺こんなやつに会った！？」

健斗が少し混乱気味で父さんに訊いた。するとだった。麗奈がゆっくりと目を開いて、起き上がってきた

「ん……どうかしたんですか？」

なんてバッドタイミングで起きるんだこいつは……

しかし父さんは高らかに笑っていた

「だから１０年前だよ。お前が小学校に上がるとき、大森家が帰ってきたんだよ」

「……え？嘘、マジで？」

父さんの言葉が信じられず、健斗は頭を抱えた。全然覚えてない……麗奈は何があつたのかまったく理解しておらず、不思議そうな表情を浮かべていた

「お前喜んでたじゃないか。『麗奈ちゃんと友達になったよ』なんて言ってきたり」

「全然覚えてない……じゃあこいつのお父さんにも会った？」

「ああ。あつちはちゃんとお前のこと知ってるよ。この前電話かかってきたときだって、お前のこと元気かって聞いてきたぞ」

「……え……」

健斗はまた頭を抱えた。本当にまったく何も覚えてなかった。

こいつに会った記憶など、これっぽっちも残ってなかった

「ねえ、健斗くん？」

頭を抱えている健斗を見て、不思議そうに麗奈は訊いてきた

「……お前さ、覚えてる？」

「何が？」

健斗は呟くように言った

「俺とお前って……前も会ったことあるんだと」

麗奈はそれを訊くと、また不思議そうに健斗を見た

やっぱり覚えてないんじゃない。こいつも……

「うん。覚えてはないけど……お父さんから聞いてたよ」

「え？じゃあ、最初から知ってたのか？」

麗奈はゆっくりと頷いた

「健斗くんを最初に見たとき、何か懐かしい感じはしたんだよね。まったく覚えてないけど……」

と言つて、麗奈は可笑しそうに笑った

意外な事実、健斗はまだちゃんと受け入れていなかった……

「俺、こいつと仲良くしてた？」

健斗はそう訊くと、父さんが笑いながら答えた

「そりゃあもう。たった1週間だったけど、ずっと二人ともいっしょだったぞ？ハハッ、麗奈ちゃんが帰るときなんか、お前鼻水垂ら

して大泣きしたぞ？『嫌だ〜！！ずっとここにいてよ〜っ！！』って言うてな。だからてつきり麗奈ちゃんが戻ってくるのを聞いたら、喜ぶかと思っただが、まったく反対な反応をしたから……」

父さんがそんなことを暴露すると、麗奈は吹き出して笑った

多分、鼻水垂らして大泣きしたってとこに笑いが込み上げてきたのだろう

麗奈が大笑いしたので、父さんも大笑いをした

健斗はそんな自分の哀れな姿を思い浮かべてみた

考えられなかった……

「嘘だ。父さんたち嘘ついてるんだ。大泣きするかよ、この俺が……っ！かお前笑ってんじゃねえよっ！！」

「クッ……アッハハハハ……鼻水垂らしてだって 健斗くん可愛い……」

「嘘だつて！！絶対ないからっ！！」

健斗はそんな事実を知って後悔した……聞くんじゃなかった……健斗は悲しくなって、深くため息をついて目を閉じた……

第3話 想い P・3

そしてそれから時間が経つとようやく、市内についた。高層ビルなどもたくさん並び、いかにも都会らしい町だった。麗奈は窓から顔を出して、町を眺めていた

「へえ……ビルがいつぱあゝい」

「でも東京ほどじゃないだろ」

健斗がそう訊くと、麗奈は健斗を見ながら言った

「うん。神奈川県、本牧ってところに似てる」

「本牧……？」

あまり聞いたことのなさそうな町だった……

「何か、お前神奈川県のことも詳しいんだな」

健斗がそう言うのと麗奈頷きながら笑った

「うん。だって前は神奈川に住んでたから」

「え？東京じゃねえの？」

「東京は前に。神奈川は前の前」

健斗ははあっと納得するように感心した

「お前大変だったんだな」

「まあね」

さすがは社長の娘ということだと思っ

車はとあるデパートの駐車場に入っていた。

車は適当な場所に車を止めた。周りにも車はいっぱい。どうやら今日も込んでいるようだ。

車はバックして、停車した。さて、降りるとするか……

健斗はゴンタを先に下ろし、そのあとに続いて降りた。駐車場は地下なのでひんやりとした空気が身体を包んだ。

リードを父さんに渡した

「じゃあどうすりゃあいい？」

健斗が訊くと、母さんは腕時計を目にやりながら答えた

「そうね…… 11時半にこのフードコーナーで」

健斗はケータイを取り出して、時間を確認した。現在9時半ちょい過ぎ……二時間くらいはある。

「はい麗奈ちゃん」

父さんは封筒から3万円を取り出した。きつとこれが麗奈のお父さんから預かったお金だろう。麗奈は「ありがとうございます」と言いながら、そのお金を受け取った

「じゃあ11時半にね」

健斗は了解して、麗奈と共にデパート内へと向かい、父さんたちはここから少し歩いたところにあるホームセンターと、その知人のところへと向かった

駐車場にあるエレベーターで、健斗たちは4階へと上がっていった。4階に洋服のお店が並んでいるのだ

エレベーターに乗っているのは健斗と麗奈の二人だけだった

「何かデートみたいだね」

麗奈が可笑しそうに笑った

「バカッ！！つまんねえこと言ってるじゃねえよ……」

健斗はそう恥ずかしそうに言い放つと前を見た

高い鐘のような音が鳴り、エレベーターの扉が開いた

それと共に、何だか最近流行っている音楽のBGMが聞こえた

そして色んな店が並んでいるこのショッピングモール。健斗たちだけじゃなく、色んな人がいる。家族連れや、友達同士。それと……恋人……

健斗はふと麗奈を見た。可愛いらしい私服姿の麗奈は少し女の子らしさが上がっている

「ねえ、行こうよ」

麗奈が健斗にそう促すように言った。

「ん……ああ」

健斗と麗奈はエレベーターから降りて、とりあえず店を見回ることにした

半ば心なしか……少しみんなの視線を感じた……

「なあ、どこで買っただよ」

健斗は麗奈にそう訊くと、麗奈は少し洒落た洋服店に入った。店の名前は……多分英語なんだろうけど読めない……

麗奈はWOMENのところに向かい、服を眺めていた

どの服も可愛いらしい服に思えた

「……つか、服ならいっぱいあるんじゃないの？」

健斗が麗奈についていきながらそう呟くように言った。でも麗奈は奥の服を見ながら楽しそうに選んでるだけで、何も答えなかった

どうやら夢中になっていているらしい。健斗はため息をつきながら、苛々するように頭を掻いた

「まったく……」

健斗はこのままどこかへ行きたかった……

つか、女の子と服を買いに行くだなんて生まれて始めてのことだから……自分は何をすればいいのか分からない……

ただ待つてればいいのかだろうか？

「あつー！…ねえねえ健斗くん。これ可愛いよね」

と言って、健斗にシャツなどを見せてくる

「んー……可愛いんじゃない？」

「ねっ？でも……ちょっとデザインがあれかな……」

「派手？」

「うん」

それは確かに健斗も感じた。それから麗奈は色んな服を探索しはじめたが、どうやら気に入ったものは見つからない様子だった

健斗はとりあえず、見せられた服を見て素直な気持ちを伝えた

でもぶっちゃけるとだ……麗奈が例え、どんな服を着たとしても、どうせ可愛く見えるんだろうと思う

「ちょっと試着してもいい？」

と言って、麗奈はとりあえず候補のものを全部手にとって組み合わせせてみる気らしい

健斗にそう訊くと、健斗は何も言わずゆっくりと頷いた

女性の店員に試着室まで促され、健斗は試着室の前で立ち止まった。麗奈は試着室に入り、カーテンを閉めた

と思ったら、突然顔を出して、怪しい目をしてにやついてきた

「覗きたい？」

「なっ……!!」

健斗は顔を赤くして怒鳴るように言った

「変なこと言ってるじゃねえよ、バカッ!! さっさと着ろよなっ!!」

健斗の反応を見て、麗奈はクスクスと笑って顔をしまった

カーテン越しで笑いながら

「冗談なのにいゝ やっぱり健斗くんってピュアだね」

と言つて、多分着替えながら言ってきた

健斗はそれを聞いて、舌打ちをした

お前の感覚がおかしいんだよ……そう心の呟きをするだけで、ただ
試着室の前で待っていた

「健斗くんってさあゝ」

麗奈は着替えながら、また話しかけてきた

「あ?」

「健斗くんってさあゝ、こんな風に、誰かと服買いに来たりしたこ
とってある?」

突然何を聞き出してくるんだこいつ……

「そりゃ……誰だってあるだろ……」

健斗がそう言っていると、麗奈は驚いたような声を出し、また顔を出してきた。

「嘘っ！！誰誰？」

「えっと……ヒロと。たまに来る」

健斗がそう言っていると、麗奈は可笑しそうに吹き出した

「違うよ。女の子と来たことはある？」

健斗はそれを聞いて、麗奈の顔を見ず呟くように答えた

「ねえよ……」

麗奈はそれを聞いて、声に出して笑ってまた顔を引っ込めた

「やっぱりね？誰かと付き合ったこととかは？」

「何でそんなこと聞くんだよ……」

「いいじゃん。教えてよ」

「……別にいいだろ……想像にお任せします」

健斗がそう言っていると、麗奈はため息をつきながら言った

「そつかあ……まあ、結衣ちゃんをゲット出来るように頑張って」

健斗はそれを聞いて、少し力チンときた

「別にお前みたいな何人の女と付き合うようなやつじゃないんだよ俺は」

健斗がそう言うのと、麗奈は少し口を尖らせるように言い返してきた。

「何それ？私がまるで軽い女の子みたいじゃあん」

「ほー、じゃあお前こそ何人の男と遊んできたんだ？言ってみるよ」

健斗はそう言いながら、少し憤りを感じるように鼻で息を強く吐いた。大方、5人とかから6人とか……10人とかだろ？

麗奈はしばらく黙っていた。着替える手を止めて、寂しそうな表情を浮かべながら呟くように言った

「……1人だよ」

「あ？」

健斗は聞き取れずに聞き返した

「1人だよ。今まで付き合ったことがある人……」

「え？お前が……？」

1人って……スゲー意外だった。麗奈みたいな人、きっと東京では

すごくモテてただろうに……それなのに、1人が……

びっくりして、それ以上言葉が出てこなかった

「ね？私は、1人の人をちゃんと好きになるような純情な女の子ってわけですよ」

と麗奈はクスクスと笑っていた

「自分で言っなよ……バアカ」

健斗がそう呆れた感じで言うと、カーテンが不意に開いた

そこには少しボーイッシュカッシュ気味な服をきた麗奈がいた

「どう？」

「……いや……いいんだけど……悪くはないんだけど……多分却下」

健斗がそう言うと麗奈は口を尖らせた

「やっぱり〜？ちょっとボーイッシュカッシュ過ぎかな〜？」

「それもあるけど……少し派手。他の着てみれば？」

いや、派手というより少しエロイ……

太ももを露出させるジーパンが、何だか色っぽかった……

こんなんで歩かれたら、多分行き交う人が振り向くだろうけど……

それからしばらく経って、またカーテンは開いた

「…………ふざけてんの？」

「えへへ？ちよつと面白そうだったからつい…………」

めちゃくちゃ派手な服装である…………真つ赤なドレスに身を包んでいた

「お前はパーティーにでも行く気か？つーかそんなもんがここに置いてあるかっ!？」

そして次は…………

「…………俺帰るね」

「嘘嘘っ!ー!ちゃんと選ぶからあゝ!ー!」

今度はこいつ…………ピカチュウのぬいぐるみを着やがった…………

はつきり言って……めちゃくちゃ可愛い……けど、何でこんなものがあるんだろう？

それから麗奈は色んな服を健斗に見せてきた。完全にふざけていた。

「いい加減にしないと帰るからな……」

健斗は半キレ状態で麗奈を待っていた

するとまたカーテンが開いた

「じゃあこれは？」

「……………」

麗奈は繊細な黒の総レースが光沢地に美しいワンピースとネックレスをつけた姿で登場した

下の部分をちよつとヒラヒラさせながら笑いながら言った

「ちよつと派手かなあ？」

「…………いやあ…………」

健斗は目を見開いてそれを見た

正直な感想……

「可愛い……」

「本当にっ！？じゃあこれにしようかな」

健斗はそう呟いてから口を塞いでしまった。でも、めちゃくちゃ可愛いかった……

今日麗奈が着てきたのは、最愛ピンクの裾ひらカシユクールとレースが可憐なキャミに、ティード裾からふんわりチュールが覗く黒の花柄スカートを着て、さらに黒レース×つぶつぶパールが華やか可愛いツイードパンプスを履いて、めちゃくちゃ女の子らしくて可愛いかった

でもワンピースの方は、サテン素材が裏地だから繊細なレースがとびきり映えるワンピースで、透ける袖と胸下切り替えの絶妙バランスが品よく美しかった

まるでお嬢様のようだ

「でもちよつと派手じゃないかなあ？」

「いや、いいんじゃないの？多分……スゲー似合ってると思う」

多分大人が着るような服だったけど……麗奈には充分似合っていた

「そっかあ　じゃあこれは健斗くとデート用にしよう」と

「はあっ！？な、何訳の分からないこと言ってるんだよ」

クスクス笑いながら麗奈はまたカーテンを閉めた……

健斗は自分の鼓動を確かめるように押さえてみた。さっきから鼓動が早い……

麗奈のいきなりの女の子らしさアップに戸惑ってしまったからだっ
た。

健斗は頭を掻きながら、深くため息をついた。

第3話 想い P・4

「ありがとうございます」

店員からのお決まりの挨拶をされ、健斗と麗奈は店を後にした

麗奈はご機嫌そうに、ビニール袋に入れたさっきのワンピースを持っていた。

健斗はその様子を、見つめながら麗奈の一個後ろで離れて歩いていた

「たく……バカみたいにはしゃぎやがってって感じた……」

でも……本当は未だにドキドキしていた

早川とは違う、胸の高鳴りだった。

また、麗奈に対し嫌悪感も抱いていた……

何が俺とのデート用だよ……バカにしゃがって……

「健斗くん」

麗奈は不意に振り返ってきた

「何だよ」

「これからどこに行く？」

「……いや、俺はお前についていっただけだし」

「そっか。じゃあ、これから本屋行こうよ」

「……何で？」

「教科書。買いたいからさ」

健斗は納得するように頷くとケータイの時計を見た。そして見てかなりびつくりした

もう11時だ。あんなところに、1時間以上もいたのかと思うと驚きだった

「健斗くん？」

「ん？あ、ああ。分かってるよ」

健斗は麗奈と並んで再び歩き始めた。

このショッピングモールにはもちろん本屋はある。書店が5階に…
…健斗たちはエスカレーターで5階に行くつもりだった

「ねえねえ」

「ん？」

麗奈を見ると麗奈は少し照れながら健斗に言ってきた

「私もね、男の子と買い物するの初めてなんだよ」

「……………だから？」

「初めてが健斗くんなんだなんて、ちょっと複雑う〜」

と麗奈は少し不満そうに健斗に言ってきた

その表情を見て、健斗はふんつと顔を剃らした

「俺で悪かったな」

健斗がそんな風に言うと、麗奈はクスツと笑った

「冗談だよ〜。健斗くんではよかったなあ」

と健斗の背中を叩いてきた。健斗は背中を擦りながら、少し顔をしかめた

「絶対お前付き合った人1人って嘘だろ」

健斗がそついうと麗奈は不思議そうに訊いてきた

「どうして？」

「そんな風には見えない……………」

よくいるじゃないか。軽い女として見られたくないから、自分の本性を隠すようなやつ……………」

「嘘じゃないって。っていうか私そんなに軽そう?」

「さあな……じゃあそいつどういうやつだったんだ?」

健斗がそんなことを訊くと、麗奈は少し考えるような仕草を見せてきた

「そうだなあ……分かんない」

と言ってえへへと笑った。健斗はそれを聞いて、鼻でため息を吐いた

「やっぱし嘘なんじゃねえかよ」

「だって本当に好きな人のことなんて分からないものでしょ?」

と麗奈がにっこりと笑ってきた。

「そうかあ?」

「そうだよ。健斗くんは結衣ちゃんをどんな人だと思ってる?」

麗奈はエスカレーターに乗りながら、そんなことを訊いてきた。健斗はそれを聞いて、少し考えた

早川が……どんな人か? そりゃあ……優しくって……可愛いくて……性格のいい人……

だけど、それは本当に早川というそのものなのだろうか?

もっと俺の知らないところにひょっとしたら早川がいるのかもしれない

ない

そう思うと分からない……

「ね？分からないでしょ？」

エスカレーターをさらに上っていく。麗奈は笑いながら穏やかに言
った

「人はね、その人を本当に好きになった理由も、何も分からないもん
なんだよ。なのに人は人を好きになるの」

「……よく分かんねえ」

健斗は麗奈の言っていることが本当に理解できなかった

けど、何か上から物を言われてるみたいで少し嫌悪感を感じた

「健斗くんにはまだ早いなあ」

「うるせえ。お前だってたかが一人なんだろ」

健斗はそう言ったけども、健斗を見下すようにフンと笑った

そして5階に着くと、すぐ目の前には書店があった。

「予約してるんだけど……どこで受け取るのかな？」

健斗にそう訊いてきた

「控えみたいのは持ってるの？」

麗奈は財布からそれらしきものを持っていた。控えとレシートだった

「それをレジに出せばいいんだよ」

健斗は麗奈にそう促すと、麗奈は健斗に言われるままレジへと向かった……

麗奈はどうやら前払いをしたようだった。レジに出すとすぐに教科書が積み上げられた

サインをして、紙袋に入れられた教科書を麗奈は持とうとした

けど、知ってる？教科書つて束になると意外に重いんだぜ？

女の子の麗奈には持ち上げるのがやっとで歩くことはままらなかつた

健斗はため息をつくとき、麗奈の教科書を持ってやった

「わあ、力持ちっ！！」

「てめえが非力なんだよ」

と健斗はそう言い捨てると、さっさと書店を後にした

時計を見ると11時10分だった。別に行くところなんてないし、フードコーナーに行くか……

「麗奈、もう行くところないんだろ？」

「うん」

「じゃあもうフードコーナー行くぞ」

と言って、健斗はさらにエスカレーターに乗った。

あの日以来、健斗と麗奈は少しずつ距離が縮まっていた。

そして日常にも変化が起こった。健斗は麗奈を名前で呼ぶようになった
っていた

自発的に呼んだわけじゃない。あのとき、ついつい興奮して麗奈を
名前で呼んだことから、麗奈は自分のことを名前で呼んで欲しいと
言い始めたのだ

「名前で呼んでくれないなら、私だって“山中くん”って呼んじゃ
うからねっ」

と訳の分からないことを言ってきた

でも最初は拒否した

名前で呼び合うなんて、付き合ってるって誤解がさらに進んでしまう
だから絶対呼びたくない……

けど、麗奈はしつこかった。健斗が名前で呼ばないといちいち口を
出してきた

仕方がないから、みんなの前では大森で、二人や家では名前で呼ぶ
ことにしようとしたのだが……

何だか麗奈と言う名前が案外呼びやすいことに気がついてしまい、
最近じゃまったく気にすることなく名前で呼ぶようになってしまった

339

ヒロや早川、佐藤は最初二人が付き合い始めたんじゃないかって怪
しんできた

けど健斗が熱心に事情を説明することで、何とか誤解は解いていた。

早川に誤解されたまんまだなんて、死んでも死にきれないからだ

でも早川はにっこりと笑って納得した。本当に優しい子だと思う……

佐藤は未だに怪しんでる。ヒロは信じたくないみたいだ

でもあいつだって麗奈のこと名前で呼んでるよな？

それから、麗奈とは関係ないのだが、この前めちゃくちゃ嬉しいことがあった

何と……早川のメルアドと番号をゲットしてしまったのだ!!

時を遡ること二日前……弁当の時間……きっかけはヒロの言葉だった

「ねえ麗奈ちゃん」

ヒロは弁当を食べながら麗奈に話しかけた

「なあに？」

相変わらず甘い声で麗奈は答える

「あのさ、俺とメルアド交換しない？」

健斗はそれを聞いて、軽く息がつまりむせてしまった

びっくりしたのだ。とんでもないアツクだなあと思った……

でも麗奈は能天気な、頷いた

「うん。いいよ」

「麗奈……やめとけ。あとで後悔するぞ」

と麗奈に言つと、ヒロは顔をしかめた

「あ、ねえ、みんなでメルアド交換しようよ」

と佐藤がこれぞ名案だと言わんばかり、そう言ってきた

すると早川もそれに賛成するように急にテンションが上がった

「いいね、私ヒロ君のは知ってるけど、山中くんの知らなかった」

「え……」

「山中くん教えてもらってもいい？」

健斗は早川の笑顔に戸惑っていた。

あまりに突然の喜劇に、動揺を隠せなかったのだ

何度夢見たことだろう……早川のメルアドをゲットすること……それが、それがついに叶ったのだ

健斗はあまりの喜びに我を忘れていた

だからそれ以上のことは覚えてない……

健斗たちは、7階のフードコーナーに向かった。フードコーナーは少し混んでいる。当然だろう。けど、いくつか席は空いてるから、健斗は四人席に座った。

「……少しまだ時間あるな」

健斗はケータイを見ながらそう言った

「何か食べる？」

健斗は麗奈の言葉を聞いて少し考えていた。多分、母さんがここに集合をかけたのはご飯を食べるためだと思う。

だからちよつと早めに食べても、別にいいか……

でも……

「俺はいいや。お前何か食ってこいよ」

健斗はそう言つと、麗奈は首を横に振つた

「健斗くん食べないんなら、私もいいや」

「そっか？俺は、バイト先で食うからいらなただけだぞ？」

健斗がそう言うと、麗奈は少し戸惑いながら言った

「今日バイトなんだ」

「今日から……またな」

「でも最近、バイト出てなかったみたいだね」

麗奈がそう言うと、健斗はゆっくりと頷いた。そして何も言わずにゆっくりと立ち上がった

「何か飲むか？」

「うん」

「何飲む？」

「じゃあ私は……クリームソーダ」

と言って、麗奈はファーストフード店を指して言った

健斗は了解すると、そのファーストフード店へと向かった……

「ほらよ」

クリームソーダを買って健斗は一つ麗奈に渡した

何か……スゲーオレラ付き合ってるみたい……周りからもそう思われてんのかな？

「ありがと。おごってもらっちゃった」

「別に」

「ねえ、健斗くん今日からまたバイト行くだよね？」

「ああ。今までは、店長に休みをもらってたんだ」

健斗がそう言うと、麗奈は不思議そうな表情を浮かべた

「お前が居候に来て、何かと色々あるだろ？とりあえず落ち着くまでって……店長に事情話したら、すんなりオッケーされた」

「そっかぁ……」

「別にお前のためじゃねえし。気にすんなよ」

と健斗はクリームソーダを飲みながらそう言った

「お前は昼から何か予定でもあんのか？」

健斗が訊くと、麗奈もクリームソーダを飲みながら首を横に振った

「そつか……暇だな」

「うん。何しよっかなあ……」

「早川らと約束でもしたら？」

「結衣ちゃんもマナも、今日は昼から夕方まで部活だって」

「じゃあヒロは？」

「健斗くんいないと無理だよ……」

と麗奈は寂しそうな表情を浮かべた

「……まあ、今日は俺バイト6時までだから……相手してやれないから」

「別に相手してもらわなくってもいいもん」

と麗奈は子供みたいに顔を剃らした。健斗はそれを見て可笑しそうにクスツと笑った。

「部活やったら？」

「……うん……」

「まだ悩んでんの？」

健斗が聞くと、麗奈は少し答えたくなさそうな表情を浮かべた

「だってさあ……」

「気にすることないって。母さんも言ってただろ？高校生活なんて一度しかないんだから……自分のやりたいことをやれよ」

「……健斗くんは部活には入らないの？」

麗奈にそう聞かれて、健斗は甘いクリームソーダの堪能しながら答えた。

「ん……まあな」

「えゝ？何だかもつたいくない？」

「別に他にやりたいこととかねえもん」

麗奈はそれを聞いて、ふうんと言いながら、健斗と同じようにクリームソーダを飲んだ。アイスクリームが溶けて、メロンソーダの部分が黄緑色に染まった。

「健斗くんはサッカーやってたんだよね？」

麗奈にそう聞かれたとき、健斗はピクツと眉をひそめた。

「……それが何？」

麗奈は少し苦悶の表情を浮かべて悩んでるようだった。

「高校ではサッカー部に入らないの？」

麗奈にふとそう聞かれて、健斗はクリームソーダを飲む手を止めた

「……膝を痛めてるって嘘でしょ？」

「……………」

健斗は何も答えなかった。その変わり、またクリームソーダを飲み始めた

「この前なんか言ってたじゃん。ちょっと事情あるって。事情って何？教えてよ？」

「別にいいだろ？お前には関係ない。とにかく俺はサッカーは辞めたの」

麗奈はそれを聞くと、寂しそうな感じで言った

「……冷たいんだから」

「それよりもお前の話だろ。テニス部は？早川もいつしよだぞ」

健斗がそう言うと、麗奈は首をかしげた

「テニスやったことないもんなあ」

「初心者歓迎らしいけど……………」

「でもなあ」

健斗は悩んでいる麗奈を見て深く息を吐いた

「お前ちよつと悩み過ぎだろ？もつと樂觀的に考えるよ。いつもみたいにさ」

「そうだな」

麗奈はまた考えるような仕草を見せた

別に深く考える必要なんてないのにな……と健斗はそう思った

でも、気持ちは分かるような気がした。部活ってスゲー悩むものだ。

俺は、もしあんなことがなかったら……迷わずサッカー部を選んでた。

でも、サッカー部を止めることを決めたとき、正直他の部活をやるかバイトがで悩んだ

でもサッカー以外に何かをやるだなんて……俺には考えられなかった

「何か……夢中になるものを作ってけばいいさ……ゆっくり考えろよ」

健斗はそう言いながらまたクリームソーダを飲み始めた

麗奈はその言葉を聞いて、ゆっくりと頷いた……

クリームソーダはすでにアイスが溶けて、メロンソーダと混ざっていた

第3話 想い P・5

それからしばらくが経ち、約束時間の15分くらい過ぎたときに、健斗たちのもとに母さんと父さんが戻ってきた

特に大きな荷物とかはなく、父さんが右手に袋を持っていた

「すまんすまん。待ってたか？」

父さんがそう訊いてきた。でも健斗はそんなことは気にせず、別のことを訊いた

「机は？あとベッドやタンスとか……」

すると母さんがよっこらせと座りながら答えた

「机はもう車。ベッドやタンスとかは、運んでくれるって」

「ふう〜ん……」

「腹減ったか？何か食うか」

と父さんが麗奈に訊いた。すると母さんがすぐに健斗を見た

「あんたはどうするの？」

「俺は……あっちで多分食うと思う」

「あらそう。麗奈ちゃんはどうする？」

母さんも麗奈に訊いてきた。麗奈は少し微笑みながら答えた

「私も、お家に帰ってからでいいです」

「そう。じゃあ、帰りましょっか」

と母さんが言ったので、健斗たちはフードコーナーを後にした

そして健斗たちは駐車場に戻り、今度は麗奈が真ん中、健斗が左端。そして最初から乗っていたゴンタは右端だった。

ゴンタは麗奈が乗ってくるにすぐに甘えてきて、麗奈はゴンタの頭をゆっくりと撫でてやった

健斗はその様子を見て、可笑しさが込み上げてきた

机は確かに車のトランクの中に置かれていた。かなりギリギリの状態で……この車が軽自動車じゃなく、ヴァンで本当によかったと思う……

そして、山中家の車は駐車場をあとにして、また一時間をかけて神乃崎に戻るのだ

「麗奈ちゃんどんな服買ったの？」

母さんが助手席からそう訊いてきた。麗奈は躊躇うこともなく笑って答えた

「ワンピースです」

と言って、母さんに例のワンピースを渡した。母さんは例のワンピースを受け取り、袋から出すと口到手を当てて感嘆するように言った

「素敵っ！！夏にはいいわね？デート用にもパーティー用にも使えるそうね？」

「はいっ。でもちょっと派手じゃないですか？」

麗奈がそんなことを訊くと、母さんは首を横に振った

「全然いいわよ。きっと似合うと思うわ」

健斗は母さんの言葉を聞いて、うんうんと頷いた。

麗奈は照れながら、クスクスと笑っていた

「健斗くん」

「ん？」

麗奈が突然、健斗に話しかけてきた

「このワンピース、健斗さんとデート用にするからね」

「はっ！？何で……」

「だって、初めて男の子と買った服だもん。何かいい記念じゃない？」

と無邪気に笑う麗奈を見て、健斗はため息をつくしかなかった

「別に大した記念じゃねえだろ」

「ーかさっきの言葉は本気かよ……」

健斗はもたれかかるように、座席を少し低くした。なんか……こいつに付き合わされたら、疲れてしまった

健斗はゆっくりと目を閉じて、しばらくの間目を閉じた……

夢を見た。

あれは寝ていても分かる。夢だった

健斗は家の近くの川原で寝そべって、空を見ていた。

するとだった。遠くから声が聞こえた

「健斗くん!!」

ふと声のする方を見ると、そこには麦藁帽子を被り、白いワンピースを来た小学校に上がる前くらいの小さな女の子が、健斗に手を振っていた

そしてだんだんと近づいてくると、それは……見覚えのある女の子になっていた

健斗は驚いて跳ね起きてしまった

「れい……!!?」

「健斗くんつてば」

健斗はゆっくりと目を開けた。目の前にはいつもの麗奈の顔があった。困った表情を浮かべて呆れていた

「もう。家に着いたよ。早く起きなよ」

「あ……うん」

健斗は少し頭がぼやーとしていたが、ゆっくりと頷いて、車から降りた

確かに目の前には我が家がある。健斗はうんと背を伸ばした

「健斗」

ふと父さんに呼ばて、健斗は振り向いた

「もうバイトに行かんとまずいか？」

健斗はケータイをポケットから取り出し時間を確認した

「うん……でも別にいいよ」

健斗がそう言うと、父さんは謙譲するように言った

「いやいいよ。帰ってからで」

「分かった」

健斗は家に入り、自分の部屋へと向かった。そして、その喫茶店の制服一式を、クローゼットの中から取り出し、少し洒落た鞆の中に入れた

そして、髪型を整え鞆を持って、また外へと出た

自転車を塀の外まで運び、自転車に股がると麗奈が近づいてきた

「あゝあ、健斗くんいなくなると暇だな」

と麗奈はつまらなそうにわざと声をあげて言った。その様子が可笑しくって、健斗は軽く微笑んだ

「残念だったな。まあ6時くらいには帰るから」

健斗はそう言い、自転車を漕ぎ始めて商店街へと向かった

「いつてらっしやゝい」

麗奈が手を振りながらそう言うのを聞いて、健斗は何も言わず手を挙げてそれに応えた

少し暑い、真昼間の中、風が心地よいのを充分感じながら、健斗はいつもの道を漕いでいた

川の流れる音が健斗の心を癒すようだった

……ふと、さっきの夢を思い出した

あの小さな女の子……多分あれは間違いなく麗奈だと思う

確かに、あんな子に前会ったことのあるようなそんな気がしていた。
それにしても、未だに驚いている

麗奈とは前々から接点があっただなんて……
それを知らなかった自分が少し悲しかった……

「あんなやつと……なあ」

健斗は深くため息をついた。

そして久しぶりに乗る一人での自転車を、ただ長い一本道を漕いで
いた

第3話 想い P・6

健斗は鼻歌を歌いながら、神乃崎商店街へと自転車のまま入っていた。

いつも賑やかだここは……相変わらず、今日も活気である

途中八百屋のおじさんや、魚屋のおばさんなどと挨拶を交わしながら、健斗は奥の方へと進んでいった

そして、とある喫茶店の前に自転車を止めた。ここが、健斗の働いてる喫茶店だ

「カフェレストランRyu」

これがこの喫茶店の名前だ。少し洒落た喫茶店で、この店長とは昔からながらの付き合いである

健斗は自転車を邪魔にならないように端に置くと、欠伸をしながら中へ入った

「ちわゝす」

挨拶しながら中に入ると、中々賑やかな声が飛び交っていた

客も結構入ってて、家族連れや友達同士などが多かった

「あら健ちゃん」

入ってすぐ目の前席から、おばさんが話しかけてきた

もちろん知り合いだ。商店街の……

「こんにちわっす」

「今日もバイト？」

「ええ……まあ」

「偉いわね」

と言いながら、おばさんはタバコをふかし、灰皿にトンスと灰を捨てた

「店長はどこか知ってますか？」

健斗が聞くと、おばさんは少し首をかしげた

「多分……あ、ほらカウンター席にいるわよ」

健斗はお礼を言うと、カウンター席に近づいた。

確かにそこには白いちよび髭を生やした50歳くらいのおじさんが、カウンター席の机をふいていた

健斗が近づくのになががついて、店長はにっこりと笑った

「おう来たか」

「こんにちわっす」

健斗は挨拶をすると、鞆をカウンター席に置いた

この人がこの店の店長で、梶本竜平さん。かしもとりゅうへい年齢は今年で51歳、ちやんと家族もいて、15年前からこの店を営んでいる。健斗とも幼いからの知り合いで、よくこの店に来たものだ。白いちよび髭を顎と鼻の下に生やしてるのが特徴的だ

「悪かったな。今日はちょっと忙しくなりそうなんだ」

店員は苦笑しながら言った

「いや、もう落ち着いてきたんで大丈夫です」

「そうか。何か食うか？食ってきてないんだろ？」

と店長は小さなオープンキッチンへと足を運んだ

健斗は恐縮そうに席に座った

「いつもすみません」

「何、これくらい……何食べる？」

「じゃあ……ナポリタンで」

健斗がそう言うと、店長は髭を寄せて笑った

「好きだなあナポリタン」

「店長のは大好物です。昔から変わらないもんですから、店長の味は」

「ハッハッハ」

と店長は声を上げながら笑った

健斗は店を見渡した

「今日は結構いますね」

「だろ？特に学生が増えてきたよ」

と言って、店長は指指した。確かにその方向には、学生がいた

多分、神乃高の人だ。でも顔は知らない。

学生の多くは勉強をしていた

「こつやって、彼らの勉強してる姿を見るのもいいものだ」

と言って、店長は軽く笑った

「どうだ最近。その女の子……えっと……」

「麗奈です」

「ああ、そうだ。如何せん、最近物忘れが酷くなってきたよ」

「そんな、まだそんな歳じゃないでしょ」

健斗は可笑しそうに笑った。

「まあな……しかしなんだ。見てみたいものだな……可愛いのか？」

健斗は少し苦笑いをした。

「うん……可愛いことは可愛いんですけど……」

健斗は出された水を頂いた。ゆっくりと口に運ぶ。ふとあの可愛いらしい麗奈の笑顔を思い浮かべていた

「でも、何を考えてるのかまったく分からないようなやつです」

と健斗はそう言った。すると、店長は笑いながらナポリタンを健斗に出してきた

「女なんてそんなもんさ。逆にまたしかり……ってな。それが面白いんじゃないか」

「そうっすかね？……でも、結構意外な面もあるんですよね」

健斗は出されたナポリタンをフォークを使って丁寧に食べた

うん……マジで美味い。

店長は少し興味が湧いたのか、健斗にその話について聞いてきた

健斗はナポリタンを食べながら、今までの麗奈のことを話した

特に、あの自転車のことを詳しく店長に話した。

全てを聞いた店長はお皿を拭きながら、感心するように言ってきた。

「いい子じゃないか」

「まあ……でも、あいつはあいつなりに、色々考えてるんだなって
思うと……何かスゲー申し訳ない気がしました」

「お前らしいな」

「でも、まだ麗奈のことよく分からないですよね」

健斗はそう言いながらため息をついた

「あいつ、たまに寂しい表情をするんですよ。今はそれが気にな
ってるんです」

あの寂しそうな表情には何が隠れてるのか……何を考えてるのか、
それがずっと気になっていた

店長はしばらく黙り込んでいると、不意に訊いてきた

「その子、東京から来たんだっけ？」

「ええ……まあ」

「色々あつたんじゃないか？前の学校とか、家族の間でとか」

その言葉に、健斗は残り少ないナポリタンを食べる手をとめた

「色々つて？」

「さあ？色々だよ。もしかしたら、その頃麗奈ちゃんにとって辛いことがあつたのかもしれない」

「あいつに？」

健斗が聞き返すと店長は手際良くコップや皿を拭いていく

「人間は誰しもそうさ。過去に何か辛いことを経験した人間は、その傷が癒えるまで心の底から笑えなくなったりする。それを、一生気にしていく人間だっているんだ」

健斗は麗奈の顔を浮かべた……たまにあいつは、寂しそうな表情を浮かべたり、苦笑したり……でもほとんどは笑っている

その笑顔は……麗奈の本当の笑顔なのだろうか？

麗奈は毎日、心の底から笑っているのだろうか……健斗はそれが気になって仕方がなかった

「……まあ仮にそうだったとしたら、麗奈ちゃんの傷をを癒してあげるのは、お前だぞ」

店長はそう言いながら、笑いかけた

「人は人に助けられるもんなんだからな」

健斗は少し首をかしげた。店長の言ってる言葉は全部正しいと思うけど……それが想像できなかったのだ

本当に麗奈は……

「それに……」

店長はしばらく手を止めた。そして、健斗を見つめて静かに言った

「お前だって、そうだろう?」

健斗はその言葉を聞いて、思考を停止した。何も考えなくなかった。今何かを考えると、あの日のことが思い出されてしまうからだ。その代わり、残り少ないナポリタンを一気に口に運び、水を飲み干した

「ごちそうさまっ」

健斗は皿を店長に渡すと、ゆっくりと立ち上がった

「俺、着替えてきます」

健斗はそう言うと、鞆を持って店の奥へと歩いていった

店の奥で、健斗はポロシャツに手をかけて手を止めた

あの日……少しでも忘れようとした自分がいた。自分の人生の中で最も悲しい日だったと思う。思い出したくない。思い出したくない。そうやって弱くなるのはいつも自分ひとりだった。

そんな自分が少し嫌だった……健斗はむしゃくしゃし、ポロシャツを一気に脱いだ……

第3話 想い P・7（前書き）

ふと自分で気づいたんですけど、第3話の題名「想い」ってぴったりで

この「想い」というのは決して早川への想いだけじゃなく、ちよこちよこ気にする麗奈への素直じゃない想いや、健斗の言っていた「あの日」への「想い」とか、他にも色んな「想い」をここで感じてるんですよ……

あ、それとユニークアクセス数が5000人を越えました

本当にありがとうございます

毎日400人以上の人が読んでくれているわけです

なのに……感想や評価が一件しかないのは何故？

もし疑問に思ったことやアドバイス、気に入らない部分があればぜひ書いてください

また、作品への感想や自分の文章能力の評価等もお願いいたします
励みになりますので、どうかよろしくお願いします

第3話 想い P・7

「いらっしゃい」

店に客が入ってくると店長が声をかけた

制服を着た健斗は、入ってくる客に席を喫煙席と禁煙席かを訊く

つか……この店に入ってくるのはほとんど知り合いだった

商店街のおばさん、おじさん……

「あら健ちゃんこんにちわ」

「いらっしゃいおばさん」

「まあ、あんたが着るとこの制服もかっこいいわね」

おばさんが健斗の背中を叩きながら笑った

それを聞いて店長はコーヒーを入れながら苦笑して言った

「おいおい、そりやうちの制服はダサイと言いたいのかい」

「アハハ。どうかしらね」

「タバコ吸うよねおばさん。あの席にどうぞ。何頼みます?」

「あらどうも。暖かいレモンティーお願いね」

「はい。店長、ホットのレモンティー、1つ」

「はいよ」

店長は笑いながら、コーヒーをカウンター席に出す

「健斗、カフェモカ二つ入ったぞ」

「はい」

健斗は店長からコーヒーを受け取ると、ゆっくりと溢さないように小さい女の子を連れた若い夫婦にコーヒーを運んだ

「カフェモカです。暑いので気をつけてください」

若い夫婦はお礼を言いながら、健斗に笑いかけた

どっちも知らない人だ……けど女の子の人がゆっくりとわらいかけてきた

「いつもご苦勞様」

「ありがとうございます」

「いいところだねーこー」

と、男の人が見渡しながらそう言ってきた

健斗は一回お辞儀をすると、連れの女の子を見た

健斗をじっと見ていた

「こんにちは」

健斗が微笑みながらそう言うと、女の子はペコッと頭を下げた

「お名前何て言うの？」

健斗がその女の子に訊くと、女の子はまだ慣れてない喋り方でゆっくりと話した

「きりしまれい」

「れいちゃんか……」

健斗はそう呟くと、女の子にっこりと微笑んだ

「可愛いですね。何歳ですか？」

健斗が訊くと、女の子がその女の子を撫でながら答えた

「3歳です」

「へえ……あ、れいちゃんこれあげるね」

と言って健斗は制服のポケットから飴を取り出し、れいちゃんにあげた

「ありがとう」

健斗はにっこりと笑って、れいちゃんの頭を撫でてやった

ふと店長から呼びかける声がした

「健斗、ホットドッグとアメリカン入ったぞ」

健斗は振り向き、返事をした

この店で働き始め、まだ約二ヶ月程度……高校に入る前の春休みから、店長からのお誘いで働いていた

幼いころから、この店は好きだった。店長は人が良くて、とても居心地のよい場所だとずっと感じていた

店長は健斗の事情を知っていた。高校ではサッカーを止めると聞いたとき、もしよかったらここで働いてみないかと心良く誘ってくれたのだ

本当に感謝していた

いつか恩返しをしたいと思っている。血は繋がってはいないけど、もう一人の父親だ

健斗はふと手を止めた……

ゆっくりと目を閉じてあの日の後悔を身にしみていた

「健斗」

ふと店長に呼ばれて健斗はまた振り返った

「ほら、ナポリタんだ。摘まみ食いするなよ？」

「しませんよ」

健斗は笑うとまた仕事に戻っていった

それから時は経ち、客足も少なくなっていたころだった

知り合いのおじさんたちと笑いながら話していた。

「健斗」

店長に呼ばれ健斗は振り返った。店長は皿を拭きながら言った

「今日はもう上がっていいぞ？」

健斗は時計を見た。時計は五時半少し過ぎていた

「いいんですか？」

「ああ。そろそろ客足も少なくなってきたしな。麗奈ちゃん一人にさせるのも寂しいだろ」

さすがは店長だった。何て言うか……人の心を見透かすような人だった

「じゃあ俺先上がります」

と言って、健斗は店の奥へと進み、また制服を着替えた

着替え終わると、とりあえず店長の元に行く

「明日は定休日で……火曜日空いてるか？」

「あ、はい」

「じゃあ火曜日にまた来てくれ」

「はい。じゃあ先に失礼します」

健斗はお辞儀をして、さらにおじさんたちにもお辞儀をして、店を後にした

商店街は人が減っていた。昼よりは活気が少なくなっている。中にはもう店を閉めるところもあった

何だか寂しいような気分になりながらも健斗は自転車に股がって、活気の少ない商店街を通っていた……

帰り道の一本道、色んな想いを健斗は背負っていた

時折、店長の言葉を思い浮かべる。

麗奈の寂しい表情の裏には何か過去に辛い思い出があるのだろうか……もしそうなら、自分にはよく分かる

俺だって同じだ。

麗奈は心の底からちゃんと笑えてるのだろうか……すごく気になっ

た。

また、健斗はあの日のことを振り返っていた。

……もしあの日、いつもの平常な日々だったのなら、俺は今とは違う生活を送っていたのかな……

大好きなサッカーを続けて、あいつといっしょに……

ふと寂しい想いになり、健斗は自転車を止めた

また思い出してしまった。一人になり、こんな風に夕暮れのような寂しい雰囲気になるといつもこんな風になってしまう

あの日が来なければよかったのに……神様っていうのは、残酷なものだと思う。

幸せな日々を送る人と不幸な日々を送る人とで分けるんだから……

健斗は再び、自転車を漕ぎ始めた。唇を噛み締めながら、寂しさに堪えていた

それから10分程度、漕いでいると家が見えてきた

目を凝らすと、誰かが家の目の前から走ってくる。

あれは麗奈だ……次第に麗奈は健斗に近づいてきた。

はつきり見えたとき、健斗はびっくりして思わず自転車を止めてしまった。そしてゆっくりと自転車から降りた

「お帰りっ!!」

「お前っ……」

健斗は麗奈の恰好をよく目を凝らして見た

麦藁帽子を被っていて、白いＴシャツと青い短パンは泥まみれになっていた。手や足……顔も泥まみれで、いつもの綺麗になびく栗色の髪はどこどころ跳ねていて、ボサボサになっていた

「お前、どうしたんだよっ!!ドロドロじゃんか」

健斗が驚きを隠せないまま訊いてみたが、麗奈は嬉しそうに微笑んでいた

「今日ね、お父さんといっしょに畑仕事を手伝ったんだ。すっごく楽しかったよ」

と言って子供みたいにはしゃいでいた。

健斗は納得するようにため息をついた

健斗の家には確かに畑がある。家から1kmくらい離れた山の中にだ。

そこには野菜畑などがあり、この季節は畑を耕して種を撒く時期だった。

麗奈のドロドロな姿からして、相当頑張ったんだと思う……

本当に……変わってると思う

「ったく……まあお疲れさま」

「健斗くんもね。……あつ、もうすぐご飯だよ。早く家に帰ろ」

と言って、麗奈は微笑むと楽しそうに家に帰ろうとした

健斗はその笑顔を見て、少し寂しくなっていました

だから、ふと口から出た言葉があった……

「麗奈……」

健斗が呼ぶと、麗奈は足を止めて振り返った。そしてにっこりと笑った

「どしたの？」

健斗は目を合わせず呟くように訊いた

「お前……さ、今……楽しいか？」

「え？」

麗奈はキョトンとして、健斗を見つめた。不思議そうな表情を浮かべていた

「どしたの急に？」

麗奈は可笑しそうに笑ったけど、健斗は笑わず、苦悶の表情を浮かべていた

麗奈はそんな健斗を見つめて、またにっこりと微笑んだ

「うんっ！！すごく楽しいよ！？毎日がスツゴク」

その麗奈の言葉を聞いて、少し安心するように口元が自然と緩んだ

「そっか……ならいいや」

健斗はそう言い頷くとまたゆっくりと自転車を押していった

麗奈はそんな健斗の表情を見て少し心配するように訊いてきた

「何かあったの？」

「いや、別に」

健斗は何も言わず、ゆっくりと家まで自転車を押しながら麗奈と並んで帰っていった

自転車を庭へ置くと、深くため息を吐いて家の中へと入っていった。

すると、突然びっくりしてしまった……

何と玄関に泥だらけの足を濡れタオルで拭いてる、泥だらけ汗まみれのヒ口がいたからである

ヒロは健斗を見ると声をかけてきた

「よっす。バイトお疲れ」

「何でいるんだよ……」

健斗がそういうとヒロは顔をしかめた

「失礼だな。麗奈ちゃんのベッドやタンスや机を運んだの誰だと思っ？」

なるほど、と健斗は納得した

「悪かったな。サンキュー」

「分かればよろしい」

ヒロはそう頷くと、また足を丁寧に拭き始めた

「畑仕事だったのか」

「そつ。麗奈ちゃんといっしょにな」

ヒロん家の畑は、隣だからな……

「そつか……風呂入ってけよ」

「そうさせてもらっわ。サンキュー」

健斗は振り返って、麗奈に言った

「お前も足を拭いて、先風呂入れよ」

健斗がそついうと麗奈はゆっくりと頷いた

「分かったあ」

「言つとくけどちゃんと拭けよ？」

「分かつてるって」

すると奥から母さんが水の入った洗面器とタオルを持って玄関までやってきた

「あら、お帰り」

「ただいま」

母さんはそつ言つと、麗奈に笑いかけた

「麗奈ちゃんこれで足拭いてね。あとヒロくん今日はありがとうね？」

「いや、これくらいいいですよ。長い付き合いじゃないですか」

とヒロは愉快そうに笑った。母さんはクスツと笑うと微笑みながら言った

「よかったらご飯食べてく？もうすぐだから」

「マジっすか？じゃあいただきます」

健斗としては何の悪い気はしなかった。別にヒロだし……何の問題もない。

健斗は靴を脱いで、自分の部屋へ戻り、息を吐きながらベッドになった

今日も疲れたなあ……ケータイを見る。メールは一件もない……

健斗はケータイを放り投げ、ゆっくりと目を閉じた

それから麗奈、ヒロ、健斗の順番で風呂に入り、結局飯を食うのは7時半になっていた

今日はヒロも加わったということで、焼肉だった

「焼肉久しぶりっす」

とヒロはルンルン気分で肉を食っていた

「今日お前部活なかったのか？」

健斗も肉を食いながら、ヒロに話しかけた

ヒロは肉の旨味を充分に感じながらゆっくりと頷いた

「んああ……今日は定休日だからな」

「そっか」

「今日は畑仕事をやれって親から言われててさ、お前もいんのかな？
？って思ったら麗奈ちゃんだけでちよつとびつくりした」

「こいつちゃんと出来てたか？」

健斗はちよつとバカにするような感じで言った

「失礼なっ！！私は私なりで頑張ったもん」

「でも、何回も転んでたよな」

とヒロは可笑しそうに笑った。それを聞いて、父さんも母さんも健斗も吹き出して笑った。

「鍬を使ったことがないらしくて、最初はすごく危なっかしかったよ」

「ちよつとヒロくん……恥ずかしいから言わないでよ」

と言って、麗奈は恥ずかそうに頬を赤くして、膨らませていた

「かつつか。でも、麗奈ちゃん頑張ってたよな」

と父さんがビールを飲みながら笑ってそう言った

「明日は筋肉痛になるぞ？」

「あゝ確かに……もう身体中がガツタガタですう」

と言って、足とかを自分で触っていた

確かに、きっと明日は筋肉痛でほとんど動けないと思う

畑仕事って思うより大変だから……

「でもスイカが楽しみです」

と麗奈は嬉しそうに笑った

健斗ん家の畑は、スイカや人参、じゃがいもなどを育てている

特に夏はスイカがメインだった。夏には出来るスイカを冷たい川で冷やして食べるのがたまらない

夏の楽しみの一つだった

「じゃあスイカを頑張って育てるよ」

と健斗は笑いながらそう言った

「健斗くんも手伝ってよ」

「分かってるよ」

「今日バイトどうだった？」

母さんがご飯を口にしながら訊いてきた

「今日は……いつもより人が多かった」

「そう。結構繁盛してるのね竜平さんも」

「まあね」

そんなことを話しながら、健斗たちは夕食を楽しんだ

何か分からないけど……いつも以上に楽しい夕食だった

けど健斗は複雑な想いだった。本当に色んな想いが飛び交っていて、自分でもよく分からない……変な気分だった。

第3話 想い P・8

夕飯後、健斗とヒロは縁側に行き涼んでいた。自販機で買ってきたペットボトルのコーラを飲みながら、話し込んでいた

「んまじかよっ!？」

ヒロは驚いた様子で健斗に聞き返してきた。健斗はゆっくりと頷いた

「だってさ。父さんが言ってた」

健斗は今、自分は昔麗奈に会ったことがあるらしいということをヒロに話したところだった

どうしてこんなに驚くのかはわからなかったが、ヒロは目を丸くしていた

「お前はそんな昔からあんな美少女と知り合いだったのかぁ……羨ましいぞこらっ」

健斗は呆れるようにコーラを一口飲んだ

「別に……昔は可愛かったかは限らないだろ」

「いや、あんな美少女だぜ？昔だって可愛かったに決まってんじゃん。つーか覚えてないのかよ」

とヒロは可笑しそうに笑った。健斗は昼間に見た夢を思い出した
もしあの小さい女の子が麗奈なら、確かに可愛かった……

自分は昔、やっぱり麗奈に会ったことがあるんだなと感じていた

健斗は急に複雑な気分になり、またコーラを今度は一気に飲んだ

炭酸が鼻をつんつとさせた

「俺がお前だったらなあ……くそっ、どうして俺はお前じゃないんだあゝ!!」

「知るかよ」

健斗は苦笑した。

「なあ、お前この暮らし羨ましがってる？」

健斗は不意にそんなことを訊いた。するとヒロは健斗を睨み付けた

「何、嫌味ですか？」

「チゲーよアホ。お前が思ってるよりもこっちは色々大変だってことだよ」

と言って、健斗はコーラを口にした。ヒロはずいっと顔を近づけてきた

「ほっ………どんなことが大変なんだよ」

「それは……朝は毎日あいつを乗せて走らないと行けないし……」

「いいじゃん。まるで付き合ってるみたいで見られんじゃん」

とヒロは不思議そうにそう言った。そう言うてから、ヒロははつと気がつくように言った

「そっか、お前は早川だもんな」

「ちっ……うるせえなあ」

健斗は恥ずかしそうに顔を剃らした

「それに……風呂とか鉢合わせしたらとんでもないことになるだろう？」

「お前鉢合わせになるように仕組もうと考えないの？」

健斗はそれを聞いて、顔を赤くして怒鳴るように言った

「はあっ！？考えるわけねえだろ、バアカ!!」

健斗はこの言葉を考えてふと気がついてしまった

こいつと俺とでは、感覚そのものが違うのである。だからこいつに何を言っても無駄だということだった

「俺は麗奈ちゃんといっしょに暮らせるだけでどんなに幸せなことか……」

ヒロはそんな風に妄想劇を繰り広げていた

健斗はもう何も言わず呆れ返っていた

「なあ麗奈ちゃんってさ、好きな人とかいんのかな？」

「……いや、いないだろ」

健斗はそれを確信するようにそう言った

するとヒロは怪しげな目付きになった

「何で分かるんだよ」

「だってまだここに来て、2週間だぜ？」

健斗がそんなこと言うのとヒロは深くため息をついた

「分かってないなあ、お前……女ってのは一目惚れとかしやすいものなのよ」

健斗はそれを聞くと、少しの間黙り込んだ

確かにヒロの言う通りだと思った。

結局女ってそんなもんだろ？

かっこいいやつがいたら一目惚れ……優しくされて騙されて……騙したり……

麗奈も東京でそんなことをしてきたのだろうか……自分では、色々否定してたけど

ヒロはまた怪しそうに疑う目付きで健斗を見てきた

「麗奈ちゃん……まさかお前を好きになることなんてないよな？」

「はあ？」

健斗はヒロの言葉に可笑しさが込み上げてきた

今までの麗奈の行動を思い浮かべてみた

「ねえよ。あいつはただ……俺をからかってるだけだし」

その通りだ。麗奈はいつも健斗をからかっているだけだ。人の気持ちを知っておいて

そんな麗奈にたまに嫌悪感さえ抱くこともある

ヒロはコーラを口に含みながら深くため息をついて外を眺めていた。

「なあ、俺さ麗奈ちゃんとメールのやり取りたまにするんだけどさ」

「うん」

それはもちろん健斗も知っていた

「麗奈ちゃんってさ、どという話が好きなのかな？」

健斗はそれを聞いて少し意味がわからなかった

「どういうって?」

「例えば、音楽のこととか映画のこととかさ、ファッションとか俳優とか色々あんじゃなか」

確かに麗奈とはいずれも話したことはある。でも多分それは特別好きな話とは言えないと思う

「さあ」

健斗は分からないので首をかしげた

ヒロはそれを聞いて、軽く舌打ちをした

健斗は外を眺めながら、麗奈のことを思い浮かべていた

麗奈が初めて学校に来た日のことだ

「……そんなこと気にする必要はねえよ。何も気にしないで自然と話された方が、麗奈も嬉しいと思うぜ」

健斗がそんなことを言いながら、コーラを飲み干して空になったペットボトルをゆっくりと床に置いた

ヒロはそれを聞いて、同じようにコーラを飲み干しながら言った

「そんなんじゃないや麗奈ちゃんにつまらない男と思われんじゃん。ボキ

「ヤブラリーないってさ」

「そこまで考えるようなやつじゃねえよ」

あんな能天気バカ女がいちいちそんなことを考えるようなやつだとは思えなかった

ヒロは少し腑に落ちない感じだったが、健斗はありのままの事実を伝えただけだった

「お前はどんなんだよ」

ふと突然ヒロがそんなことを訊いてきた。その瞬間、胸が高鳴って表情が強ばってしまった

「な、何が？」

「早川だよ。メールとかしてんの？」

痛いところをつかれてしまった……

健斗はヒロと目を合わさず呟くように答えた

「いや……まだ」

健斗の小さな言葉を聞き逃さないヒロは口をあんぐりと開けていた。完全に呆れ返るように嘲笑しながら言ってきた

「お前まだしてねえのっ！？とつくにしてるかと思ってたわ」

「うるさいな……」

「最近麗奈ちゃんに気をとられすぎじゃない？誤解されても知らねえぞ」

実際のところ、健斗が未だに早川にメールを送れないのには、やっぱり勇気がないからである。早川のメルアドをゲットしてから二日が経った

もちろんヒロに言われる間でもなく、自分からメールを送るつもりだった

けどどんな文章を送ればいいんだろう？どんな話をすればいいんだろう？いきなりメールされて迷惑じゃないか？

色々な疑問と不安が走馬灯のように巡ってくるのだ。

『今日も学校楽しかったな』

『最近どう？』

『急にゴメンな。ちょっとメールしたかったから』

何を考えても、片言のような意味のない言葉……こんなメールじゃ、よく分からないだろう……

何を考えても、結局破棄してしまうメールの内容……

メールを送れないまま、健斗は早川への想いを募らせていく。時間が経てば経つほど、あんなにも恋しくなるのはどうしてなんだろうか

結局自分はヒロと同じだった。だから、ヒロにそこまで偉そうなことは言えない

いや、すでにメールを送ってコミュニケーションをとろうとしているヒロより全然ダメなやつだ俺は……

「俺って意気地なしだよなあ」

「ああ。気が弱すぎる」

「ちよつとは励ませよ」

「人のこと言えんのか？」

健斗は一旦、深くため息をついた

「……早川は……俺のことどう思ってるのかな？」

誰かに訊いたわけじゃない。ただ素直な気持ちが言葉として出てきたのだ。高校に入って……それも麗奈が居候に来てから、早川とはよく喋るようになった。それは健斗にとって、すごく幸せなことで、妙な期待を持たせてしまう。早川は少しでも自分に興味があるんじゃないかと、淡い期待をしてしまう

「さあ……ただの友達？」

「やっぱし？」

「っーか、お前さ」

ヒロは突然真面目な表情をして言ってきた

「早川に誤解されんのはマジ避けるよ？」

「何が」

健斗が素っ気なく聞き返すと、ヒロは深くため息をついた

「この前の弁当のときもさ、お前急に麗奈ちゃんを名前で呼ぶようになったろ？ああいうのを続けたら、そのうち誤解されるって言うてんの」

健斗はそれを聞いて黙り込んでいた。そして呟くように言い返す

「別に……麗奈を名前で呼ぶようになったのは……ただ呼びやすいつてだけだし。それだけで怪しむことなくね？」

「お前はそう思っても、他人からすれば付き合い始めたんじゃないかって思うに決まってるだろ？」

「早川は……ちゃんと理解してくれた」

「さあ分かんねえぞ？そう思っても、本当はまだ誤解されたままかもしれない」

健斗はそれを聞いて、戸惑いを隠せなかった。ヒロの言うことがあまりにも正しく思えたからである

「別に、麗奈ちゃんと話すとか仲良くするとかじゃないんだけ

ど……誤解されるような真似はやめろよ？これ、別にこれは何か狙ってるわけじゃなくって、マジでお前のため思って言ってるんだから」

ヒロの健斗を想う気持ちがよく感じられた。だから健斗は何も言わず、静かに頷いた

全部ヒロの言う通りだ。居候とは言え、あまり突発的なことをしたら、誤解されるのが落ちだ。

それは本当に困る。そうなったら最悪の展開だ。それだけは絶対に避けなきゃいけない

それよりももっと早川との距離を縮めることを考えていきたい

健斗は早川に……ヒロは麗奈に……互いに想いを募らせる日々が続く

そんな日常がスゲー嫌だった。

自分から何かを行動起こしたい……

「もっと早川と仲良くならなきゃな」

と健斗は改めて決意を入れ直した……

それから1時間近くたったとき、ヒロは突然立ち上がった

「さあて、そろそろ帰りましようかね」

健斗は座ったままヒロを見上げるようにして言った

「泊まってけよ。どうせ家近くじゃん」

「いや、今日はいいや。親父がうるさいし」

ヒロと健斗は玄関まで歩いた。途中、ヒロは居間にいる父さんと母さんに挨拶をした

玄関でヒロはサンダルを履いていた

健斗は見送るように、玄関でその様子を見ていた

「麗奈呼ぼうか？」

「いや、いいよ。また明後日なって言つといて」

健斗はゆっくりと頷いて了解した

「今日は悪かったな。色々と……麗奈の部屋のやつ運んでもらった
り、畑手伝ってもらったりしてさ」

「いんや。別にいいさ。麗奈ちゃんのためなら」

ヒロの冗談に健斗は可笑しそうに笑った

「じゃあまた明後日な」

「おう。じゃあな」

ヒロはそう言うと、家の戸を開けて自分の家へと帰っていった

健斗はヒロが帰っていくのを見届けたあと、ゆっくりと息を吐いた。ふと麗奈は何をしているのかが気になり、ゆっくりと二階へと上っていった

もちろんもう麗奈は自分の部屋にいるようだ。麗奈の部屋のドアは閉まっていた

健斗は麗奈の部屋の前まで行き、軽くノックをした

「麗奈」

しかし、呼びかけには何の返答もなかった。

そのあと三回くらい続けて呼びかけてみる。しかし結果は同じだった。

健斗は恐る恐るドアを開けた

すると、開けた瞬間に驚いてしまった

あの、何もなかった部屋が今はベッドが窓際に、タンスやクローゼットが隅っこに、さらに机はその横に置かれていて、ほとんど健斗の部屋とは変わらない配置だった

ピンク色のカーテンが窓についていて、女の子らしい部屋へと変わっていた

麗奈はというと、椅子に座り、机に上半身を預けて眠っていた

寝息を静かに立てて、ぐっすりと眠っていたのだ。

机にはシャーペン、ノートが置かれている

眠ってしまったのには無理はない……畑仕事でクタクタに疲れてしまったんだろう

健斗はふうつとゆっくりと息を吐いて、麗奈に近づいた

相も変わらず、無防備な寝顔を見せていた

「麗奈。麗奈」

身体を揺さぶるが、麗奈は起きようとはしなかった。

仕方がない……健斗はゆっくりと麗奈の身体を椅子から持ち上げた。さすが、スタイルが良かったため軽い。

そしてそのまま、女の子らしい水玉模様のベッドに麗奈を静かに寝かせた。

全然起きる気配はない。

「まったく……変わってるよな、本当に……」

健斗はクスッと笑うと、静かにタオルケットをかけてやった

そして、電気を消して、健斗は囁くように
「おやすみ」と声をかけて麗奈の部屋をあとにした

自分の部屋に戻ると、床に放っておいたケータイを拾ってアドレス
帳を見た

早川結衣

健斗はこの名前を見ると、ため息をつきながらケータイを閉じた
そして机に置くと、自分のベッドに寝転んだ

早川への想いは募るばかりだった……

早川と仲良くなるために、どんなことをすればいいのか……

まったく思いつかないのを知っていて、健斗は考え込んでいた

第3話 想い P・9

「ふあゝ……………」

朝から大きな欠伸を後ろから聞きながら、健斗はいつもの一本道を自転車で漕いでいた。麗奈がさっきからもう10回は欠伸をしていた

「欠伸し過ぎだろ」

健斗はちよつと呆れたように後ろを振り返ってそう言った

麗奈は眠そうに目を擦りながら言い返してきた

「だって眠いんだもん……………身体中筋肉痛だし……………」

「慣れないことをやるからだろ……………ったく……………ちゃんと後先考えろよな」

どうやら麗奈の疲れはまだとれていないようだった。まあ、無理はないと思う

健斗も中学校から畑仕事を手伝ったが、最初的时候は麗奈と同じようになつたのをよく覚えていた

簡単に疲れが取れるような仕事じゃないのだ。なのにもこいつは、後先を考えないから……………

それに……………

「昨日お前1日中寝てただろ」

健斗がそう言うと、麗奈はむっとした感じで言い返した

「1日中じゃないよ。午前中だけじゃん」

「とにかく。そんだけ寝たんなら大丈夫だろ？もうちょいしゃんとしろよ、しゃんと」

「そんなこと言っただって……眠い……」

ふと背中に、暖かい感触を覚えた。後ろを振り返ると麗奈が健斗にもたれかかるようにしているのが見えた

「ちょ……麗奈。もたれかかなよ」

健斗は恥ずかしそうにそう言ったが、麗奈はもたれかかるのを止めたかった

多分……眠ってるんだと思う

「……あゝっ……」

健斗はイライラするように唸った。こうなったら、もうどうしようもない……もたれかかれるのは嫌だけど、健斗は我慢しながらひたすら漕いで行った

「おはよー」

健斗と麗奈が校門の辺りまで来ると、ふと後ろから声がして、健斗と麗奈は振り返った

すると佐藤が走りながら健斗たちに手を振っているのが見えた

「おふぁーよー……」

「おはよー……って、麗奈ちゃん、どうしたっ!？」

佐藤は麗奈の表情を見るなり、驚くように固まった

「生気が感じられないよっ!？」

佐藤がそんなことを言っていると、健斗はため息をつきながら答えた

「こいつ、一昨日畑仕事を手伝って、全身筋肉痛なんだって」

「ふうーん……大変だったね？」

と佐藤が苦笑しながらそう言った

「もう疲れたよー……（泣）」

まったく……東京者は貧弱過ぎるよな……

「お前、先佐藤と教室行つてろよ」

「うん……ありがと……」

麗奈はフラフラしながら佐藤と共に教室へ向かった。最後までその様子を見て、健斗は次第に可笑しさが込み上げてきて、一人笑ってしまった

そして健斗は自転車を駐車場へと運んで行った……

結局昨日も、早川にはメールを送ることはできなかった。あんなに決意した結果がこれだ。どんな内容を送ろうかから迷ってしまう

こんな自分に腹立たしくなった。

つかメールすら普通に送れない自分って一体……麗奈の言う通り、超奥手なタイプなんだって改めて実感してしまったとき、悲しくて物が言えなかった

でも、ぶっちゃけるとそうなるのは目に見えていた。だってあまり女の子とメールなんてしたことがないから……

ヒロが言っていた。男慣れしてる女の子は、まずメールをしてて楽

しいかで、恋愛対象として見極めるって。本当にそうなのか？と疑問に思ったが、あながちそうだとも思えた

もちろん早川が男慣れなどという品のない言い方はないと思っている
でも少なくとも、女の子ってそうじゃないかな？

やっぱり面白くない男の子より、面白い男の方がいいだろ？

けれどももちろんそんなに急ぐ必要はないことくらい、よく分かっていた

別に、そんなに急がなくても……でも急いでるわけじゃなかった……

ただ純粹にもっと仲良くなりたいたいという素直な気持ちだが、ただ健斗を焦らせているのかもしれない

それに、昨日ふと思ったことがあった

ヒロが一昨日、麗奈は好きな人はいるのかと聞いてきた

それに対して、健斗は確信していないと答えた。

それはヒロを安心させるためでも何でもない。ただ麗奈はまだたった2週間余りしか経っていないから……

実はこの2週間で麗奈に対して薄々感じたことがあった

だが、早川はどうなんだろう？

この学校に入学してすでに1ヶ月以上経っている早川は、好きな人……とかいるのだろうか

あまり考えたくない

つか、いないで欲しい……

でも早川はあのルックスであの性格だ

もし早川が好きじゃないとしても、早川自体を好きな人がいるかもしれない……

それで早川も惹かれて……次第に俺なんか相手にされなくなる……

健斗はその考えを捨てるように、頭をブンブンと揺らした

何でいつもこう消極的な考えしかできないかな俺は……

俺だって男だ、いざとなったら早川を奪い取ってやるっ！！

「ま、あのサッカー部の主将とかだったら勝目なんてなさそうだけど」

と、一人でそんなことを思ってた笑っていた

予鈴が鳴ったのを見て、健斗は少し急いで昇降口へ向かおうとした

……と、するとだった……

校門を見ると、人生史上最悪な光景をこの目に写してしまった……

信じたくないけど、見てしまったのだ

健斗はあまりに驚きでそこでたたずんでいた

校門から、早川が歩いてきたのが見えたのだ。けど……その横には……

あの、サッカー部の主将がいた……

相変わらず爽やかさを放っていて、背も高く、速水もこみち並みのイケメン……

その主将が、早川といっしょに歩いて、楽しそうに笑っていた

早川も頬を赤くして、主将と楽しそうに会話をしていた

他人から見れば、他人から見れば……あれは幸せそうな、校内一のベストカップルに見えた

すると、サッカー部主将は、早川に手を振りながら2年、3年専用の昇降口に……早川は嬉しそうに笑うと1年専用の昇降口へと入っていた

最初は夢じゃないかと思った……

多分、よく似た人が主将と歩いていただけだと思った

けど、本鈴が鳴っても、健斗は教室に行こうとはしなかった

「ふぁ〜……うん……」

1時間目……麗奈は未だに眠そうに欠伸をして、机に伏せるように眠ろうとした。

国語の時間、芥川龍之介の代表作である「羅生門」。何て言うか、つまらない小説だ……

「……ん？」

麗奈は健斗を見ると、健斗は何とも言えない雰囲気を漂わせていた。

健斗も机に伏せながら、ぼーっと景色を眺めていた

間違いなく、落ち込んでいるというのが分かった

「……健斗くん？」

麗奈が健斗の様子を見て、不思議そうに話しかけた

しかし健斗は反応しなかった

「何か……あつた？」

「……何にもないよ……何にもないよ……見てねえよ俺は」

「……健斗くん？泣いてるの？」

麗奈はちよつと笑いながらそう言った

「分かった。結衣ちゃんと何かあつたんでしょ？」

麗奈は可笑しそうにそう言った。凶星をつかれた健斗は何も言わず、麗奈を見た

麗奈はそんな健斗を見て、ゆっくりため息をついた

「……俺ってさ、魅力ねえ意気地なしで、どうしようもないくそつたれな女々しいやつだよな……」

「な、何？」

麗奈は少し引き気味で健斗を見た

健斗はそれ以上何も言わなかった

そのかわり、ふと早川を見る

何事もないように、早川は真面目に授業を受けていた

早川は……早川は本当にあの主将が好きなのかな……

あの主将と付き合っているのか？

健斗はそれ以上、考えるのをやめた。

もう何にも考えなくなかったから、ただ早川を見ていただけだった。

第3話 想い P・10

「あゝ、マジで？」

今朝のことを休み時間に、屋上へ続く階段でヒロに話した。ここは誰も来ないから、秘密の話をするのには持ってこいだ

もっと驚くと思っていた。跳ね上がるくらい驚くと思っていた

けどヒロは意外にも冷静で、一人頷いていた。

「俺さ……もう……学校来ねえかも」

健斗は深くため息をつきながら、静かにそう呟いた

今まで学校に来たのは、早川に会えるからだった。

でも今となつては……何も意味がない

「……っーかお前やっぱ知らなかったんだな」

ふとヒロはそんなことを健斗に言ってきた。健斗はそれを聞いた瞬間、顔を上げてヒロを見た

「……何が？」

ヒロは少しため息をつきながら、ゆっくりと言った

「早川、最近サッカー部の主将と噂になってるらしいぜ？」

さらに健斗の精神を追い詰めるような事実だった。健斗はそれにも
るで餌に群がる魚のように食いついた

「マジかよっ！？いつからっ！？」

ヒロはそれを聞いて、少し考えて答えた

「俺が聞いたのは……3日前。よく二人で放課後とかいつしよに帰
ってんの見たってやつがいてさ。まあ、あの二人同じ委員会らしい
から」

それを聞いて、さらに愕然とした。

健斗はしばらく何も言わず、ただ前を見つめていた。そんな様子
を見て、ヒロは深くため息を吐いた

「だ〜から〜、言っただろうが。いつもお前は後先考えないよ
な」

自分が麗奈に言ったことをヒロに言われて、さらにショックを受け
てしまった

「……まあ、所詮噂は噂なだけだな」

「……でもあれは……完全に恋する乙女の瞳だったぜ……」

健斗がそんなことを言うと、ヒロは可笑しそうに吹き出して笑った。

「お前がそんなこと言っなよ」

「でもマジだよ……」

「そんなに気になるなら聞いてみたら？」

ヒロがそんなことを言ってきた、健斗は少しムカッとした

「訊けるわけないだろ……そんなこと」

健斗は深くため息をついたあと、ふと階段の窓から見える空を見た

……

すごい複雑な気分だった……すごい……複雑な……

そして昼休み、弁当の時間。健斗は弁当を持って立ち上がった

麗奈も弁当の時間が楽しみだったのか、元気を取り戻していた

「あれ？健斗くん」

立ち上がって教室を出ようとする健斗を見て、麗奈は不思議そうに訊いてきた

「お弁当、みんなと食べないの？」

「……今日は屋上で一人で食うよ」

健斗はそう言っていると、うつ向きながら教室を後にした。とても早川と
いっしょに飯なんて食う気分じゃなかった……

「麗奈ちゃん」

早川が麗奈に話しかけてきた。麗奈は振り返ると、早川は少し心配
そうな顔つきだった

「大丈夫？筋肉痛」

「あ、うん。平気平気　ありがとう」

麗奈がそう言っていると、早川はにっこりと微笑んだ。

「あれ？山中くんは？」

早川は健斗を探すようにそう言った。

けど麗奈は、健斗が出ていったあとをただ見つめていただけだった

……

「はあ……」

もう弁当すら食う気分ではなかった。寝そべって、空を眺めていた。何となく今は一人になりたかった

健斗は悩みがあるとき、大抵こうする。今日の空は曇りがかかっているが、その雲と雲の間から微かに日が指していて、見ていると何だか微笑ましい気分になった

「……早川は……主将と付き合ってたのかな……」

健斗は呟くようにそう言った

「なあ、俺はどうすればいいのかな？」

誰かに語りかけるように、健斗はそう呟いた。あいつの大好きだった、この空を眺めながら俺はそう呟いた……

今でもあいつは、この空のどこかにいるような気がしたから……
どうしてこんなに胸が苦しいんだろうか

どうしてこんなに哀しい気持ちになるんだろう……

「……翔……」

「誰と話してんの？」

ふとそう声が聞こえて、目の前には麗奈の顔があった。健斗は驚くように身体を起こし、ため息をつきながら麗奈を見た

「何でついてくるんだよ」

健斗は睨み付けながら麗奈に言うと、麗奈は微笑みながらお弁当を指指した

「だって、お弁当の感想を聞きたかったからさ」

健斗はお弁当を見ると深くため息をついた

今日のお弁当は、母さんが作ったものじゃなかった。今日母さんは仕事のため朝早く出ていった。たまにそういうことがあって、そういうときは自分でお弁当を作った

でも麗奈は自分がお弁当を作ると言ってきたのだ。いつも自転車に乗せてもらってるんだから、これくらいのこととはしなきゃと、微笑みながらそう言ってきたのだ

別に悪い気分じゃなかったから、健斗は心配せず任せた

「……ワリイ……今飯食う気分じゃないから……」

健斗はそう言うと、またゴロンと寝そべった。しかし麗奈は健斗のお弁当を持って、ふたを開けた

「健斗くん」

「ん……ふがつ……」

麗奈は箸を使って、何かを健斗の口に突っ込んだ。健斗は驚いて一瞬息がつまってしまつてむせてしまった

しかしゆっくりと口を動かし、その味を確かめていた

「お前……何すんだよいきなり」

健斗がむせて咳をしながら言うと、麗奈はにっこりと微笑んできた。

「どう？美味しい？」

そう訊かれて、健斗はしばらく口を動かした。

多分これはウィンナーだ……

「……美味しい」

素直な感想だった。普通に美味しい……

麗奈はそれを聞くと嬉しそうに頬を赤くして微笑んだ

「本当に？筋肉痛で頑張った甲斐があったよ」

健斗はそれを聞くと、麗奈がもっているお弁当箱の中を見た

筋肉痛のためか、少しグシャグシャだった。多分筋肉痛で上手く段取りができなかったんだと思う

それなのに一生懸命、おにぎりを作って……朝早く頑張ったんだな……

健斗はそう思いながら、ふっと笑った

「やっと笑った」

麗奈はそう言っているとクスツと笑ってきた

「何が」

「健斗くん、今日ずっと沈んでたんだもん。やっと笑ったなあ……」

健斗はそれを聞いて、また笑った。

「余計なお世話だよ」

そう言いながら、お弁当箱からおにぎりを取って口にした。すごく、ふわふわした感触がして、本当に美味しかった

「お前、料理上手いんだな」

健斗が感心するようにそう言っていると麗奈は照れるように言った

「まあね。お母さんが早くに死んじゃって、夕飯とか自分で作ってたから」

麗奈がそんなことを笑いながら言ってきた。健斗は、驚きを隠せず、目を丸くしてしばらく何も言えなかった

風の吹く音が聞こえる……

「……お母さん、外国で働いてんじゃないのかよ」

「そう言ったけ？」

「……亡くなったんだ……」

健斗がそう訊くと、麗奈はゆっくりと頷いた。

「うん。私が……小学生のときにね……」

麗奈は少し寂しそうな表情を浮かべていた。健斗は何も言わず、その様子を見つめていた。

「見る？」

麗奈はそう言いながら、ポケットからピンク色の財布を取り出した。そして、そこから一枚の写真を出して、健斗に渡してきた

そこには、あの夢で見たような少女と男の人……そして、とても美しい太陽のように微笑む女性、白いワンピースに麦藁帽子を被って写っていた

これが……麗奈のお母さん……そして、この眼鏡をかけてちょっと頑固そうな人が……お父さん……

少し覚えているようで、覚えていなかった……

「私が6歳くらいのときの写真だよ」

と麗奈は微笑みながら笑った。健斗も、それにつられて笑った

「綺麗な人だな」

健斗がそう言うと、麗奈は「そう？」と聞きながら笑った

「お前にそっくりだな」

健斗の言う通り、今の麗奈と麗奈のお母さんの面影が一致していた。太陽のような微笑む、その笑顔がそっくりだった。また身に纏う雰囲気もいっしょだった

「それって私が綺麗ってこと？」

麗奈はからかうように健斗にそう言ってきた。

「お母さんね、身体の弱い人だったんだ」

麗奈は静かにそう話した。健斗はその写真を見ながら麗奈の話を聞いていた

「身体は弱いけど、でも、心は強い人だった」

「……そうか」

「お父さんもそこに惚れたって言ってたよ」

と麗奈は可笑しそうに笑った。

「優しくて、でも時には厳しくって、子供のように大人らしくて……自慢のお母さんだったよ」

「……うん」

「ずっといつしよにいたかったけど、私お母さんとは１１年しかいられなかったね。もつといつしよにいたかったなあ」

自分のお母さんと、１１年……

健斗には想像できなかった。健斗にはお母さんもお父さんもいる

あの二人がいなくなるだなんて想像できなかった。でも麗奈はそれを今経験してる人間なんだって思うと、すごく哀しい気持ちになった

健斗は写真を麗奈に返すと、麗奈は苦笑しながら言った

「結衣ちゃん、サッカー部の主将さんのこと好きらしいね」

ふとそう切り出してきた麗奈を見て、健斗は苦笑しながら訊いた

「早川から聞いた？」

「うん。１週間くらい前にマナと結衣ちゃんと話したときに、結衣ちゃん言ってた……黙っててゴメンね」

「……そっか」

知りたくない事実だった。噂が肯定された瞬間だったから……

ショックだった

健斗は空を見上げると、深くため息をついた。

「恋って……上手いかないもんだよなあ……」

健斗は苦笑しながらそう言った。

「俺、バカみたいだよな」

さらに苦笑したまま、自分に言うように健斗はそう言った

麗奈はそんな健斗を、真剣な表情で見つめていた

「ちょっと仲良くなって、ちょっと昼飯誘われたからって、妙な期待しちゃってさ。そんな上手くいくはずないってのに、妙に浮かれてさ……」

健斗ははあっとため息をついた

「そりゃそうだよな。こんな情けないやつよりも、かっこいいサッカー部の主将に惚れるよなあ……何か、スゲー自分が情けねえよ……何にもやりたいことがなくて、ただ暇こいて生きてるだけの自分が……スゲー情けなくなっ嫌になっちまうよ……」

健斗は寂し気な表情を見せると、またため息をついた

「本当に……好きだったんだよ……」

そう呟くと、早川を好きになった中2のことを思い出した

健斗が早川を好きになったのはあの日がきっかけだった……

「俺さ、中2のときに……親友亡くしちゃったんだ」

「え……?」

麗奈は少し驚くように健斗を見ていた

健斗はそんな麗奈を見て、苦笑しながら続けた

あの日の光景を思い浮かべながら、麗奈に自然と話していた

「事故でさ……俺とそいつがいつしよに帰ってたんだ……そんで俺……車道にいる子犬を見てさ、今にもトラックにひかれそうなのを見て、飛び出しちゃったんだよ、俺……」

今でもはつきり覚えている。あの日の光景を……

「そしたら……そいつが……俺と子犬の代わりに……」

俺は子犬を抱きながら死を覚悟した。ここで俺の人生は終わりなんだって……

けど、そのとき……あいつが俺を押して……俺を助けて、そいつはトラックと……

『翔……翔!!』

足がすくんで立てなかった……トラックにはねられて、あいつは空中で何回転もしたら、数十メートルとばされると頭から落ちて、血だらけになって倒れていた……

俺は震えながら、涙を流しながら、あいつの名前を叫んでいた

通りかかりの大人たちに介抱されながら、俺はそれでもあいつの名前を叫んでいた……

『翔!! 放せっ!! 放せよっ!! 翔!!……翔っ!!』

「翔とは、小学校からの付き合いでさ。同じサッカークラブで同じサッカー部だったんだ……お互いにライバル視してて、親友だと思ってた。高校に行っても、ずっと同じサッカーをしていくんだと思ってた……」

「……それが、健斗くんがサッカーを辞めた理由？」

麗奈がそう訊くと、健斗は苦笑しながらゆっくりと頷いた

「ダセーだろ？今でも、足が震えるんだよな……サッカーをするとさ……怖くなるんだよ」

サッカーを楽しめなくなったから、俺はサッカーを辞めた

何より、同じ目標を持っていた大切なやつを自分のせいで失って…俺は…スパイクを捨てたんだ…サッカーを…棄てたんだ

「翔の葬式のあと、誰でもいいから…慰めてくれるのかと思ってた…けど、聞こえるのは…非難の声ばかり」

『知ってる？翔くん…山中くんのせいで死んじゃったらしいよ』

『ちよつとそんな言い方ないだろ？』

『でも事実そうだろ？』

「誰でもよかったから…優しい言葉が欲しかったんだ…誰でもよかったから…そんなときさ」

『山中くん』

ふと後ろから声がした

そこには早川が寂しそうな表情をして立っていた

また非難の言葉を言われると思ったから、無視しようと思った

けど早川は……

『山中くんは悪くないよ』

そう言ってきた。俺が求めていた優しい言葉で……俺はその場で立ち止まってしまった

『山中くんは悪くないよ。だから……』

『うるせえよ……』

早川の言葉は嬉しかったんだ。涙が溢れるほど……けど俺は、逆に腹立たしくなっちゃって……

『お前に俺の気持ちが分かるかよ』

そんなこと言って帰ろうとした

けど早川は……

『それでもっ！……山中くんは悪くないよ！……』

って、最後まで言ってくれたんだ……

早川と翔が、恋人同士だったことを知ったのは……それからすぐのことだった……

「それから、早川が気になったんだ……普通憎むはずのやつを、早川は悪くないって……最後まで俺にそう言ってくれて……普通の神経じゃ、そんなこと言えないのにな……それで俺は、早川が……スゲー好きになった。翔の代わりに、俺が早川をちゃんと守ってあげなきゃみたいなさ、勝手な使命感が出てきてさ……でもそれは結局……俺のただの妄想だったんだけどな。……カッコ悪いな……俺ってば」

健斗は苦笑しながら、麗奈を見た

麗奈は真剣な赴きで健斗を見つめていた

「何か、どうでもいいこと話しちゃったな俺……悪い……忘れてください」

健斗はそう言ってから、うつ向いた

素直な気持ちが……今までの辛い過去が……麗奈の誘惑に誘われように自然と出てきてしまった

翔との過去を、麗奈に言うつもりはなかったのに……

早川を好きになった理由を、麗奈に言うつもりはなかったのに……想いとともに、自然と出てきてしまった……いつまでも引きずって……カッコ悪いなあ俺……

結局、早川との恋もこれで終わりなのか……

「まっ、でも早川に好きな人が出来て、それで幸せならそれで満足だし。俺なんて別に」

健斗が話している途中だった。ふと自分の唇に、暖かく柔らかい感触がした

ふと、見ると……目の前目を瞑った麗奈の顔があった……

何が起こってんのかわからなかった……

でも、この感触は……麗奈が……

麗奈とキスをしているんだってことに気がついた……

麗奈はゆっくりと唇を離して、頬を赤くしながら健斗を見つめていた

健斗はあまりの突然さに、驚きを隠せないでいた……何も言えず、目を見開いて麗奈を見つめていた……

麗奈はにっこりと笑うと静かに言ってきた

「カッコ悪くないよ」

麗奈は穏やかな表情でそう言うと、健斗に何も言わせず続けた

「カッコ悪くなんか……ないよ……」

麗奈はそう言い残すと、お弁当を持って静かに立ち上がった

そして、健斗から離れて屋上から出ていった……

何が起こったのかわからなかった……

ただ呆然として、前を見つめていた

麗奈が……麗奈が俺に……キスしてきた？

何で……何で急に？

訳がわからなかった……ただ残っているキスした感触が、今もはっきりと感じる……

柔らかな感触……暖かい感触……

目を瞑っていた麗奈の表情……頬を赤くして笑った麗奈の表情……

全てを思い出しながら頭が混乱していた

「何……なんだよ……」

健斗は呆然としながらそう呟いた

まだキスした感触が、残っていた

第3話 想い P・10（後書き）

うわぁー……何かスゲー意外な展開になってきました

何か、本当に自分でも予想外です

本当はこうなるはずじゃなかったのに……

ちなみにあらすじを変えてしまいました

この物語、普通に思いつきで書いてるのであらすじが変更することがあるので、あらすじチェックは数回した方がいいと思います

第3話 想い P・11

授業は全て終わり、健斗は帰る準備をしていた。

午後の授業や休み時間……健斗は麗奈と話すところか目も合わすことができなかった

あのキスは何らかの間違いだと思ったかった。けれど、あの感触は今でも感じる

あきらかに、あいつは故意にキスしてきたのだ……

麗奈も健斗と同じように話しかけてきたり、目を合わそうとはしなかった……

一体何を考えているのか、どういっつもりであんなことをしたのか……

それが気になったから、聞き出したかった

けれど、あんなことをされては話しかけられなかったのだ……

健斗が帰る準備ができたとき、不意に早川と麗奈が健斗に近づいてきた。そして麗奈が……健斗にいつもの調子で話しかけてきたのだった

「健斗くん」

健斗は何も言わず、麗奈を見つめた

「私今日ね、テニス部見学することになったの。帰り結衣ちゃんと
いっしょに帰るから、健斗くん先帰っても大丈夫だよ」

すると早川がにっこりと優しい笑顔をして言ってきた

「ちゃんと麗奈ちゃん送るから、安心して任せてね」

しかし健斗は二人の表情など直視しなかった。何も言わず、鞆を持
って立ち上がり、そのまま教室を後にした

そんな様子を見て、早川と麗奈はしばらく佇んでいた。健斗の後ろ
姿を見ながら、早川は不思議そうな表情を浮かべる

「健斗くん……どうかしたのかな」

早川が寂しそうにそう呟くのを、麗奈はにっこりと笑って答えた

「別に何もないんじゃない？」

早川はそんなことを言う麗奈に対して、また不思議そうな表情を浮
かべた

「麗奈ちゃん……健斗くんと何かあったの？」

麗奈は一瞬躊躇った

けどすぐに首を横に振る

「う、ううん……何もないよ。っていつか早く部活いこー」

麗奈がそう言っ、早川は少し可笑しさが込み上げてきた

帰り道、健斗は自転車を漕いでいた。なるべくあのことは考えないようにしたかった

けれどやはり脳裏に浮かんでしまう、あの麗奈の顔……そして柔らかく暖かい感触……

それらを思い出すと、ふと自分に戒めを感じてしまう

好きでもない女の子とキスをしてしまった……

それは自分の中で早川に対する裏切りであり、自分に対して羞恥心を感じさせた

麗奈は本当に何を考えていたんだろう。そう考えると不意にヒロの言葉を思い出した

『麗奈ちゃん……まさかお前を好きになることなんてないよな』

いや……ないだろ

そんなこと……万に一つの可能性でもないはずだ

あいつが俺のことを好きだなんて……絶対ない

じゃああいつは……別に好きでもないやつとキスをしたってことなんだろうか……

そうでなければ、あんな風に容易く話しかけてきたりするだろうか

……

今日の昼休みのせいで、麗奈という人間が分かりかけていたのに……
……また分からなくなってしまった……

そして健斗は家が見えるようになると、ゆっくりと自転車を押し始めた

自転車を庭まで運び、ため息をつきながら鍵を開けて、戸を開けた

「ただいま……」

まだ誰もいないことは承知で健斗はそういいながら、ゆっくりと自分の部屋へと戻っていった

自分の部屋に入ると、健斗は鞆を放り投げてベッドに寝転んだ

……これからどうすればいいんだろう？

麗奈と何て話せばいいんだろうか

とりあえず、どうしてキスをしてきたのか。その理由だけちゃんと聞いておこう

麗奈に対し嫌悪感を抱きつつも、健斗は一人でにそう決めた……

風呂から上がり、健斗はバスタオルで頭を拭きながらまた自分の部屋に戻ろうとした

さっぱりしたくて早めに風呂に入ってみたものの、結局何の解決にもならなかった

ため息をつきながら、階段を上ろうとしたそのときだった

突然家の戸が開く音がした。

健斗は少し驚きながら振り返ると、そこには麗奈が少し疲れたように息をはいていた

ふと健斗を見ると、にっこりと微笑んできた。

「ただいま」

「……………」

健斗はやはり何も言えず、目も合わすことができなかった

けど麗奈はまったくそんなことは気にしていなく、笑いながら言うてきた

「テニス部さ、結構楽しそうだったよ」

麗奈はそう言うのと靴を脱いで続けた

「先輩もいい人だしさ、テニスって難しそうだなって思ってたけど……案外やって見ると楽しいしさ。それに」

「あ……………あのさ」

健斗は勇気を出して、麗奈に問いかけようとした

麗奈を睨み付けるように見た。麗奈は不思議そうな表情を浮かべていた

「どうしたの？」

「……………お前さ、何であんなことしたの？」

健斗は低い声でそう訊ねた

麗奈は可笑しそうに笑った

「何が？」

「とばけんなよ……何で……急にキスなんかしてきたんだよ」

胸が高鳴っていた。一体何て答えるのか、すごく気になっていた

思ったよりも落ち着いて聞けた

というよりも、麗奈に対して苛立ちを覚えていた

まるで何もなかったかのように話しかけてきて、笑ってくる麗奈に苛立ちを覚えていたのだ

でも麗奈の答えに対して……健斗は麗奈に対し激しい怒りを覚えることになった

「あ……あれね。健斗くんが元気なくしてるから、元気づけようと思って」

「……は？」

麗奈は可笑しそうに笑いながら続けた

「それにしてもショックだよね……結衣ちゃん健斗くんのこと好きになるって思ってたのにさ……？残念だったね……。でもさ、別に結衣ちゃんが他の人好きでも健斗くんが」

「ちょっと待てよ」

健斗は麗奈の態度に対して、ふつふつと怒りが込み上げてきた

「そんな理由でしたのかよ……」

「え？」

「そんな理由でしたのかって聞いてんだよ……元気づけたかった？俺が落ち込んだから？ふざけんなよ」

健斗は次第に握った拳を強く力を入れていた。

「健斗くん……私別に……」

「人をバカにすんのもいい加減にしろよっ！！」

健斗はバスタオルを投げ捨て、ついには麗奈に怒鳴りつけてしまった

感情が押さえることが出来なくって、健斗は麗奈を睨み付けた

麗奈はビクツとして、健斗を見た

怯えていた

「調子こいてんじゃないやねえよっ！！お前は最初っから俺をからかってるだけなんだろうが！？」

最初から思えばそうだ。初めてこの家に来たときも、自分を好きになれればいいって……訳の分からないことを言いやがった

そして健斗が早川に対する気持ちに気がついたとき……あいつは励ましてきた……

それだけじゃない。今まで励ましてきたり、けれどわざと胸を高鳴せたりしてくる

バカにしたりバカにしたり……その繰り返し……

どう考えても、からかつてるようにしか思えなかった

「ち、違うよっ……私はただ健斗くんが」

「違くないよ！お前が東京でどんだけ男を弄んできたかは知らないけど、俺は簡単にお前に弄ばれるようなやつじゃないんだよ！」

それを聞いた麗奈は、ショックを受けたのか……目を見開いていた

……

「そんな……私そんなことしてないよ……」

「だったらキスなんかしてくんじゃねえよバカッ！！お前の性格は訳分からねえんだよ」

健斗は一息ついてから冷たく言い放った

「はっきり言って……迷惑なんだよお前」

感情が収まってきたが怒りは変わらなかった。

「幻滅したわ本当に……」

麗奈は下をうつ向きしていた

ずっと下をうつ向きしていた

健斗は何か言い返してくるかと思ったけど、何も言い返して来なかった

健斗はもう相手にするのもいやになり、階段を上ろうとした

「バカ……」

麗奈は顔を上げて健斗を見た

健斗も麗奈を見るために振り返った

すると……麗奈は涙を流していた。けれども強く、健斗を睨み返していた

「健斗くんのバカッ！！健斗くんなんか、大嫌いつ！！」

麗奈はそう叫ぶと泣きながら、階段を一気に上っていった

ドアの勢いよく閉まる音が聞こえた

健斗はしばらく佇んでいた。麗奈の涙が、階段に溢れていた

「何であいつがキレんだよ……」

健斗はさらに憤りを感じ、壁を思いつきり蹴った

そして、不機嫌そうにバスタオルを拾うと健斗も自分の部屋へと戻っていった

少し言い過ぎたのかもしれない……

あいつの話をちゃんと聞かないで

でもこのときの健斗は怒りを麗奈にぶつけていた

だから何も考えることはできなかった……

何も……何も考えられなかった……

第4話 過去（前書き）

麗奈とのキス事件により健斗と麗奈は口もきかなければ、顔も合わさないという喧嘩をした

そんな健斗は、ふと翔との

「過去」を思い出す……

大雨の夜、麗奈の帰りが遅いことに健斗は徐々に不安を募らせていく

素直になれない気持ち……押さえられない気持ち……

そして……

麗奈はいつたい？

第4話 過去

朝になっても、健斗は麗奈と口を交わそうとも顔を合わそうともしなかった

麗奈も同じだったのか、健斗を見ると逃げるように健斗から離れていった

はつきり言っただうでもよかった。麗奈の性格がよく分かったから……結局、あいつは人を弄ぶような性格の悪い女だったってことだ……

健斗はベッドから起き上がると、ゆっくりと着替えた

いつもより30分早く起きていた。どうやらまだ麗奈は起きていないようだ

それでいい。麗奈とは顔を合わせたくなかった。

健斗は音を立てないように階段を降りて居間に向かった

台所には母さんが起きていてコーヒーを飲みながら朝のニュースを見ていた

健斗に気がつくのと驚くかのよう口を開けた

「早いわね……どうかしたの？」

「いや……今日用事があるから」

健斗はそう言うと冷蔵庫から牛乳を取り出した。

「お弁当作ってないわよ？」

「いいよ。コンビニで買うから」

健斗はそう言うと、居間を後にした。洗面所で歯を磨くと、また自分の部屋へと上がった。

充電しておいたケータイを手にかけると、アドレス帳検索してヒロの名前を検索した

そしてヒロに電話をかけた。

しばらくするとヒロはすぐに電話に出てくれた。

「もひもおーひ……」

明らかに今起きたばかりの声色でヒロは電話に出た

そんなヒロに健斗は可笑しさが込み上げてきてしまって、ふっと笑った

「俺だけど」

「んだよ……麗奈ちゃんかと思った」

「んなわけねえだろ……」

「つーか何の用？……まだ30分くらいは寝れるんだけど……」

ヒロは迷惑そうにそう言ってきた

「あのさ、今日……麗奈といっしょに学校行ってくんない？」

「あゝ？……あ！？」

突然ヒロの音量がでかくなった。どうやら驚いているようだった

「何で！？俺が！？お前は！？」

「今日俺早くに学校行くからさ。麗奈頼むわ」

「あそう……ならいいけど！？」

ヒロにとってはとても嬉しいことだったんだと思う

快く了解してくれた

「じゃあ、8時に麗奈迎えに来といて。じゃあな」

「おう」

ヒロはご機嫌そうに電話を切った

多分今頃、あまりの嬉しさに動揺を隠せずにいるんだろうな

健斗はケータイをポケットに入れると、鞆を持ってまた階段を降りようとした

ふと立ち止まって麗奈の部屋を見た

……健斗はすぐに前を向いて、階段を一気に降りていった

「いつてきます」

健斗はそう言つと家の戸を開けて、家を出ていった

本当は麗奈は起きていた。ベッドから起き上がって、窓から健斗の様子を覗いていた。自転車を家の塀の外まで運んでいる

さっきの健斗のヒロとの会話だつて少し聞こえていた……

用事なんてないくせに……

麗奈を避けているのだ。

麗奈は自転車に股がって漕いでいく健斗を見て哀しい気持ちになった

「……健斗くん……」

自転車を漕ぎながら、健斗は憂鬱な気分になっていた

……これからどうしようか……

本当は用事なんて何も無い。ただ麗奈と顔を合わせたくなかったから、早めに出ただけだった

特に何もすることなんてあるはずがない

こんなとき部活に入ってれば、朝練とか行ってるのにな……と健斗はため息をついていた。

でも例え翔のことが忘れられたとは言え、サッカー部には入れないよ

だって……憎き相手がサッカー部の主将だろ？

気になってサッカーを楽しめないよな……

健斗は自転車を漕ぎながら、空を見上げていた。今日も曇りだ……
天気予報を見てなかったけど、今日雨降らないよな

どうして最近晴れないんだろう？

翔の好きだった空……今でも翔は、この空のどこかで生きてるんだと思う

だから翔……最近元気じゃないのか？

ふと翔の顔を思い浮かべていた

教室に入るとまだ誰もいない。みんな朝練などに行ってるのだろうか……健斗はゆっくりと歩いて、自分の席に座った

そして、ため息をつくとそこからまた空を見上げた……

『健斗』

ふと呼び声がして、健斗は振り向いた。

中2の夏……半袖Yシャツにエナメルバッグをしょって、翔は健斗を呼んだ

「何ぼーっとしてんだよ。早く部活行こうぜ」

「分かってるよ」

健斗も歩き出して、グラウンドに向かった

と思ったら、また立ち止まってしまった

「何だよ」

翔はちよつと苛々するように言ってきた

「……………」

校舎の隅にある草むらから鳴き声がすると思ったら、そこに鳥の雛がいた

苦しんでるのか、鳴いている

健斗は手で拾ってあげると、翔が覗いてきた。

「…………雛じゃん」

「そこに落ちてた」

健斗がそういうと、二人は近くにある一本の大きな木を見上げた

すると、木の頂上に鳥の巣が見えた

「あれか…………」

健斗が呟くように言うと、翔が健斗の手から雛を取った

と思つたら、エナメルバッグを置いてヒョイヒョイとみるみるうちに、木を上っていった

そして翔はあつという間に頂上まで上るとゆつくりと巣を覗いた

そこには二匹の雛がいて、翔に向かって鳴いていた

「ほら」

翔はゆつくりと雛を巣に戻すと、雛はじゃれ合うようにそして喜び合うように鳴いていた。

「……お、健斗……!!」

突然翔がすごい大きな声で叫んできた

「ちょっと来いよ……!!」

「あ……!? 何で!?!」

「いいから……!!」

翔に言われるまま健斗もエナメルバッグを置いて木を早いペースで上っていった

そして頂上まで上ると翔は指指した。その方向を見ると……

その頂上からは、グランドを全体を見渡せながら広大な青い空が広がっていた

とっても広大な景色に、健斗は少し驚いていた

「スゲーな」

素直な気持ちを健斗は言葉にした

吹いてくる風が心地よかった……

「……俺さ、空好きなんだよな」

「え？」

翔はそう言いながら、空を見上げて笑っていた

「何か空ってさ色んな表情があって人間みたいで面白いよな。晴れてるときは笑ってて、曇りのときは落ち込んで、雨のときは泣いている……何か、空見てるところこっちも同じ気分になるんだよな」……」

健斗はそんな翔の言葉を聞いて、吹き出すように笑った

「んなつ！！何笑ってんだよっ」

翔は顔を赤らめて、怒鳴りながら言った

「別に……お前らしいなって思ってたさ」

「何だよそれ」

俺らはそんなことを話しながら笑っていた

青い空に見守られながら……楽しくって、笑っていたんだ

お前は覚えてるか……？

こんなときは俺は笑ったけどさ……そんな風に言うお前が、スゲーさこよく見えてさ

お前といっしょに見た空が、スゲー好きになったんだ

お前らしい青い空が……お前の宝物だったように、俺の宝物になったんだ

「なあお前さ……」

ある日の帰り道……翔は何を考えているのか、少し苦笑いをして言ってきた

「何だよ」

「……いや、あのさ……」

健斗は不思議そうな表情を浮かべた

すると、翔は顔を赤らめながら言ってきた

「好きな人とかいるか？」

「はあっ!？」

突然何を言い出すのかと思ったら……

「いねえよ。別に彼女とかいらねえし」

そんなことよりもサッカーの練習をめいいっぱいして、絶対に全国大会に出場したい

女の子とイチャイチャしてる時間なんてなかった……

翔も当然そうだと思っていた。けど翔に少し違和感を感じて、健斗は少し驚いた

「お前……」

「ん？」

「好きな人いんの？」

健斗がそう訊いたとき、翔は少し戸惑っていた。もうそれだけで充分だった

「マジかよっ！？え！？誰々！？」

「お前ぜってえ誰にも言わねえか？」

「言わねえよ。っーか聞いて欲しいんだろ！？」

健斗がそう言うのと、翔は軽く舌打ちをした

「……同じクラスの早川」

「早川？……誰だっけ」

健斗は思い出そうとしたが無駄だった

翔は呆れるようにため息をついた

「お前って、本当に女の子興味ないのね」

「っーか誰？」

「あれだよほら……テニス部のさ……スゲー可愛い子」

健斗はそのテニス部の女を思い浮かべた

「……ああ……あの子か」

確かに、テニス部にめちゃくちゃ可愛い子がいた

健斗にとってもかなりタイプで、翔の好きになるのも分かった。でも健斗は早川のことなんてあんまり知らないし、正直興味は抱けなかった

健斗は空を見上げながら少し考えて言った

「ああ……まあ確かに可愛いけどな。少なくともうちの学校ではピカ一かも」

「当たり前だよ」

と翔がそう言っていると健斗は首をかしげながら苦笑して言った

「まあ、確かにめちゃくちゃ可愛いけどさあ……可愛いやつに限って裏がありそうだよな」

健斗がそういうと翔は口を尖らせながら言った

「早川はそんなやつじゃねえよ」

「そうか？可愛いやつは調子こいて色んな男と遊んでるかもよ？」
「お前はなんでそんなことしか言えないかな……」

翔は呆れ返っていた

まあ、確かにそういう女ばかりではないとは分かってるけど

「ヒロが言ってた。女は男が思ってるよりも深い生き物だって」

「あいつだって色んな女と付き合ってたんじゃない？」

「ヒロをそんな風に言つなよ。友達だろ」

「別に悪い意味で言っただけじゃねえよ。だったら人の好きな人を悪く言つなよ。それに……早川は……」

翔は少し憤りを感じながら健斗にそう言ってきた。途中言葉を詰まらせて、何かを考えているようだった

健斗はそんな翔を見て可笑しそうに笑った

「本気なんだな……」

「本気に決まってるんだろ？……じゃないと好きになんねえよ」

翔が鼻で息を強く吐いた

健斗はそんな表情も、翔らしくって可笑しさを笑った

「ったくよ……まあどうでもいいけど、サッカーへの熱意を忘れないじゃねえぞ」

と健斗は言つと翔は笑いながら「当たり前だろ」と答えた

「……山中くん？」

健斗はふと呼ばれすぐに振り返ると、そこには早川が日直日誌らしきものを持って健斗の顔を覗き込むようにして呼びかけてきた

健斗は驚いて身体をビクツとさせた

「あ……お、おはよー……」

前まではまだ普通に話せるようになったのに……また逆戻りになってしまったような気がした

けどそんな健斗に何の気にもしないでにっこりと笑ってきた

「おはよー。今日早いんだね」

と言うと、鞆を自分の席に起きながらそう言ってきた

「まあね……早川は？」

「私は今日日直だから」

と言って日誌日誌を見せてきた。そんな表情がめちゃくちゃ可愛い
く思えた

「そっか……」

健斗はそう言うつと、早川は日直日誌を机に置いた

健斗は早川を気にしつつ、チラチラ見ていた。

サッカー部の主将が好きだという早川……

麗奈は言っただけ、早川はそうなんだよな……

ふと麗奈の名前と共にあのキスをした感触が思い浮かべいた

健斗はブンブンと頭を揺らした

「昨日……」

早川は自分の席に座りながら健斗にそう言ってきた

「昨日、麗奈ちゃんとかあった？」

「え？」

早川はゆっくりと笑いながらそう健斗に言ってきた

「昨日ね、テニス部の体験で、麗奈ちゃんちよつと様子が変わったんだよね」

「……え……」

「なあくんか、ほとんど上の空だったんだよねえ……」

麗奈の意外な言葉に健斗は動揺を隠せなかった

そんな健斗を見ると早川はクスツと可笑しそうに笑ってきた

「やっぱり。何かあったんだ」

「いや……別に何もないよ」

健斗がそう言うと、早川また可笑しそうに笑っていた

「麗奈ちゃんと同じこと言ってるし」

健斗はそれ以上何も言えなかった……まさか早川に、麗奈とキスをしたなんて言えるはずかなかった

「……昨日麗奈とちよつと喧嘩した……そんだけだよ」

「喧嘩？」

早川は不思議そうに聞いてきた

「何か……麗奈が意味分かんねえから俺がキレて。そしたらあいつ逆ギレしてさ」

早川はまた不思議そうに表情を浮かべた

「どういうこと？」

健斗はまたそれ以上何も言わなかった

早川はそんな健斗を見て笑いながら少しため息を吐いた

「よく分からないけど麗奈ちゃん、本当は健斗くんと仲直りしたいと思ってるんじゃないかな？健斗くんもね？」

「……そんなことねえよ。あんなやつ」

健斗はプイツと顔を剃らすと、早川はクスクスと笑っていた

「素直じゃないんだから」

早川のそんな言葉を、健斗は聞かないような振りをして顔を叛けた

……

第4話 過去 P・2

学校で麗奈に会っても、健斗は無視していた。つか、もう麗奈なんてどうでもいい素振りを見せていた

麗奈も麗奈だった

休み時間も健斗に口を聞いてこようとはしなかった。早川や佐藤と楽しそうに会話をしている

そんな様子を健斗は嫌そうに見ていた

ちよつとは俺を気にするような仕草を見せるよ……

まったく何も気にしてないんだな……

最低なやつだ……

さらに麗奈に対して、健斗は怒りを込み上げていた

するとだった。ヒロが健斗のところにやってきた

「何かあった？」

ヒロが不意にそんなことを訊いてきた。

健斗は不機嫌そうにヒロを睨み付けた

「何が……」

「いや……何かお前妙にピリピリしてない？」

ヒロはちよつと苦笑しながら言ってきた。

「別にしてねえよ……楽しかったか？お前のずっと願ってた、れい……大森麗奈との登校は」

健斗は意地悪く少し憤りを感じながらヒロにそう言った

もう馴れ馴れしく名前で呼ぶのもやめた

「何意地になつてんだよ？」

「何も意地になつてねえよ……」

「今朝麗奈ちゃん、スゲー元気なかつたんだけど……喧嘩したのか？」

健斗はそれを聞いて、ちよつと安心するような感じを覚えた

「別に……知らねえよ……あいつが勝手にキレただけ」

健斗は不機嫌そうに顔を剃らした。

そんな健斗を見てヒロはため息を吐いていた。

「お前なあゝ」

「……元氣ない振りしてるだけだろ？お前の前でそういうキャラ作ってただけだよ」

健斗はそういうと、首をくいつとして麗奈を指した

「見るよ。今はスゲー元氣そうだぜ？お前も騙されやすい男になったな」

と言って健斗は嘲笑するように笑った

「ちよつと麗奈ちゃんに対して冷たくないか？」

「あんなやつに優しくする必要なんてあんの？」

「何があつたんだよ。ちよつと酷いぞお前……」

ヒロはちよつと怪訝するように健斗を見た。けれど健斗は何も言わなかった……

「何で喧嘩したかは聞かないけど……ちゃんと麗奈ちゃんの話聞いてあげたのかよ？」

「あ？」

「喧嘩のとき、一方的にお前だけキレたりしなかったか？自分の話ばかり押しつけたりしなかったか？」

健斗はそれを聞いて、ちよつと自分の行動を振り返っていた

……確かに……ちよつと麗奈に言い過ぎた感があった。あいつ……

そういえば何か言おうとしてたけど、健斗は何も聞こうとはしなかった……

それであいつは……

『バカ……健斗くんのバカッ！！健斗くんなんか、大嫌いっ！！』

健斗はそんな言葉をふと思い出したが、すぐに首を横に振った

「別に何くもないよ。特にそんなことなんてさ」

「本当か？」

「お前は太森麗奈の肩でも持ってれば？けどそのうち分かるよ。あいつが最悪な女だってこと」

「おい、そこまで言うことないだろ？」

「別に大したこと言ってるねえし」

「……お前ちょつと意地張りすぎだよ」

「だから……意地なんか張ってねえよっ！！」

健斗はだんだん苛々してしまい、机から立ち上がるとそうヒロに怒鳴りつけた

ヒロは少しびつくりして健斗を見ていた

ヒロだけじゃなかった。クラス中のみんなが、健斗を見ていた……

早川や佐藤も目を見開いていた

突然大声で怒鳴って、驚いているようだ。

麗奈も健斗を見ていた……しばらく目が合った

健斗は軽く舌打ちすると麗奈から目を剋らし、静まり返ったこの教室から出ていった……

健斗が去ったあと、みんな驚きを隠せずヒロの元に集まったり、話をした

第4話 過去 P・3

健斗の不機嫌さは1日中直りはしなかった

ヒロに話しかけられても無視をした

麗奈と顔を合わそうとか話そうとかしたりしない

早川ともいつしよに弁当は食わず、健斗は一人屋上へ行き、みんなを避けた

健斗は屋上で空を眺めていた

やはり……久しぶりの一人ぼっちはいいものだった。最近では麗奈に付きまとわれて、一人になる時間は少なかった

常に誰かといっしょにいるという生活を送っていた……

だからたまにはこういう一人も気持ちいいものだった

誰にも邪魔されずに一人の時間をゆったりと過ごすのが好きだった

けどなんだろう……この胸に感じる違和感は……妙に切ないような気がしてきた

健斗は戸惑いながらも屋上のドアを見た

いつもなら、いつの間にか……本当にいつの間にか麗奈はここにいます
いつもいつの間にかついてきて、色んな話をしていた

あいつがこの町に来て……もう1ヶ月近く経つ。

最初はいいつ……俺が面倒臭くって授業をサボって寝てたら、いつの間にかいっしょに寝ていた。びっくりして、いきなり可笑しそうに笑い始めた

訳が分からなかった

そしたらあいつ……こんな俺を野良猫みたいで羨ましいって

そして自分はただの飼い猫だって……

訳が分からなかったけど……

そして次はまたいつの間にか付きまとわれていて、ここであいつの母さんの話をしてきた。

そして早川がサッカー部主将のことが好きだって聞いて……落ち込んでた俺にキスしてきた

第一あいつがわざわざキスなんかしなければ、こんな面倒臭いことにはならなかったのに……

健斗は深くため息をつきながら、何かをふと待っていた

麗奈……今日は来ないんだな……

そんなことを思って、はっとした

何を考えてるんだよ俺は……今あいつと喧嘩中だろ？

健斗はまたため息をつくとき空を眺めた

あいつが本当に訳が分からない

あいつって、本当は何を考えてるんだろうな？

色んな麗奈がいて、どれが本当の麗奈かわからなかった

何を考えているのか、麗奈は何を考えているんだろう

ふとヒロの言葉を思い出した。そりゃ、少し言い過ぎたかもしれない……あいつ何か言おうとしてたけど……ちゃんと聞いてやること
ができなかった……

ただ感情的になりすぎて……麗奈を怒鳴りつけてしまった……

健斗は深くため息をついた

だんだん、麗奈と仲直りをしたいという気持ちが湧いてきてしまっ

ているということ、知りたくなかった

健斗は目を瞑り、モヤモヤを忘れるため眠りについた……

そして放課後になると、健斗はすぐに帰る準備をした

これからバイトだ……

憂鬱なのは、麗奈をどうするかだった

健斗はチラリと麗奈を見ると麗奈は相変わらず早川と佐藤といっしょに楽しそうに会話していた

元気がない様子なんてまったく見られない

やっぱり何も思っていないんじゃない

それが健斗を少し苛立たせた

するとだった

「山中くん」

ふと早川と佐藤が健斗に近づいてきた。麗奈は遠くから健斗を見ている

「な、何？」

健斗が少し戸惑うように訊くと、早川がにっこりと微笑みながら言うてきた

「今日ね、私とマナ部活ないから、麗奈ちゃんといっしょに町に遊びに行こうと思うんだけど……いいかな？」

健斗はチラリと麗奈を見た。3秒間くらい目が合うと、健斗は目を剃らしてしまった

「うん。ああ、いいよ。俺も今日バイトだし……」

「そうなんだ。じゃあ帰り私が責任持って送るから」

「ああ。サンキューな。麗奈よろしく……じゃあ、じゃあな二人とも」

健斗はいそいそと鞆を持って、教室を出ていった。早川様々だった。気まずい雰囲気で帰るのを避けることが出来た

健斗は軽くガッツポーズをすると、昇降口まで向かった

麗奈はずっとそんな健斗の様子を見ていただけだった

本当はすぐに仲直りしたかった……けど健斗が自分を避けていることは分かっている

だから素直になれずにいた……

そんな気持ちに健斗は気づいているのか、わざと無視してるのか、それとも気づいていないのか……

麗奈には分からない……

「山中くん……やっぱり様子が変わったね……」

とマナが不思議そうに麗奈に言ってきた

麗奈は微笑みながらゆっくりと頷いた

「変な人だね　っていうか早くいこー」

「あゝ……ちょっと待ってて。私日誌先生に出してくるから」

と、結衣が日直日誌を持ってそう言ってきた。すると、マナは少し怪しげな目をして言った

「そんなこと言って……彼氏に会ってくるんじゃないの?」

マナがそう言うと、結衣は顔を赤くして必死になって答えた

「ち、違うよ。まだ松本まつもとさんとはまだそういう関係じゃないしっ」

「えゝ？付き合っていないのゝ？」

「……そのうち頑張るもんっ！！変な噂とか立てないでね」

結衣はそう言つと、さっさと恥ずかしそうに教室を出ていった

麗奈はちよつと嬉しいような、でもちよつと悔しい気持ちを感じていた

嬉しいっていうのは、まだ結衣がサッカー部の主将さんとは付き合
つてないという事実……健斗くんにもまだチャンスはあるってことだ
で……多分悔しいっていうのは……

「……今日麗奈ちゃん、山中くんと話してないね？」

「え？」

マナが突然そんなことを言つてきて、麗奈は一瞬戸惑った

「そんなことないよ。今日朝とか話したし」

「えゝ？麗奈ちゃん今朝はあの女好きときたんでしょ？」

ギクリ……多分女好きってヒロくんのことだ。

「うーんつと……まあちゃんと今日も話したし。ちよつと健斗くん最近落ち込んでるだけだからさ」

「そっかぁ……でも今日はびっくりしたよね？あの山中くんがだよ？あの山中くんが、今日真中に怒鳴ったんだから。本当にびっくりしたし」

「う……ん」

麗奈は苦笑した

多分、自分のことで話してたんだと思う

だから複雑な気持ちだった……

やっぱりまだ怒ってるんだ……

「私山中くんってもつと温厚な人だと思ってた」

「うん……いや、健斗くん、しょっちゅう怒鳴ったりしてるよ」

と麗奈がちよつと可笑しそうにそう言った

「私がちよつと好きなことするとまるで鬼みたいに怒るからねあの人」

「えー？想像できないなあ」

「健斗くん猫だから、普段は猫被ってるわけ」

麗奈がそんなこと言うと、マナは声を上げて笑った

「猫みたいって……確かに山中くんは猫っぽいよね」

とマナはそう言いながら笑っていた

麗奈も猫になった健斗を思い浮かべていた

今日健斗くんは、バイトかあ……

早く仲直りしたいと思う

それは、麗奈の気持ちだった

第4話 過去 P・4

健斗はちよつと憂鬱な気分のまま、バイト先であるRyuに向かつていた

最近何かと面白くない……いや、今までも面白くはなかったけど……
…何だか胸に大きな穴が空いたような気分だった

間接的とは言え、早川にフラれたようなもんだからなあ……しかも
ヒロの話によると早川は付き合ってるらしいし……

あときは麗奈のことで気を取られてたけど、やっぱりかなりショックだった

失恋ってこんなに儚いものなんだな……

ヒロが失恋したとき、かなりしょげてたけど……やっと気持ちが分かるような気がする

こんな気分のせいか、今朝もそうだったけど……頭の中には翔との
思い出が蘇る

何で今更……って感じた

自分でもよく分からない……

神乃崎商店街に入ると今日も賑やかだった

健斗は変わらないこの風景で気分を変えようとしていた

本当にいつ来ても、みんな元気そうだなあ……

Ryuに着くと、健斗は自転車を止めてゆっくりと店の中へ入っていった

「いらっしゃ……おう健斗か」

「こんにちわっす」

店長が微笑みながら健斗に言ってきた。健斗は挨拶をするため息をつきながら、鞆を机に置いた

今日は客が一人もない……

「学校どうだった」

「……いつも以上につまらなかったです」

「いつも以上？」

店長は不思議そうな顔をした。健斗はちょっと苦笑すると、深くため息をついた

そんな健斗を見た店長は息を吐きながら、紅茶をついでくれた

「ほら、飲みなさい」

「あ……どうも」

健斗はカウンター席に座り、店長オリジナルブレンドの紅茶を頂いたバイトなのにも関わらず、気前よく紅茶を出してくれる店長の優しさには、本当にいつも感謝していた

「学校で何かあったか？」

まるで父親のように語りかけてくる。健斗は一応頷いた

「まあ……半分は……学校でちょっと……」

「半分は？」

健斗は少し戸惑っていた。この心のモヤモヤは多分……失恋したからだと思う

それは自分の中で一番の悩みだった

けど、麗奈のことも何故か気になっていた

ヒロの言うとおり、麗奈の話をろくに聞かず、感情的になりすぎたことに対して、一種の罪悪感らしきものを覚えてたからだ

確かにあんな軽い気持ちで麗奈は自分に対してキスをしてきたという事実に対しては、怒りを感じている

けど何故だか、やっぱり仲直りしたいという気持ちが徐々に湧いてくるというのもまた事実

素直になれば、果たしてどっちが本当の気持ちなのか

自分の中でよく分らない……失恋による悲しみ、安心感……麗奈による怒り、罪悪感……これらが自分の中で周り回っている

そういう複雑な心境なのだ

「……少し休んでいいぞ？ 今客来てないし。学校でちょっと疲れてるだろ？」

「え、いや……これ飲んだらすぐ手伝いますよ」

「いいさ。嫌なことあったら、紅茶を飲んで心を静かにしてごらん……そして嫌なことを振り返って、忘れるといい」

店長は静かにそう言って、カウンターからいなくなり店の奥へと入っていった

一人になった健斗は店長の優しさに感謝しながら、ぼーっとしていた

少し目を瞑り……心を落ち着かせようとした……

翔が早川のことを好きだと聞いてから……翔はよく早川といた

同じ委員会だからかもしれないけれど、それでもよくいっしょにいた。

放課後……翔はちよくちよく部活に来なくなった

理由は……委員会の係りの仕事を終わらせないといけないから……

けど、健斗は部活が終わったあと教室を覗いてみると……早川と楽しそうに会話している翔がいた

翔はサッカーを捨て、早川を選んだんだと……自分の中でそう解釈した

それは翔に対して怒りを感じ、そして……

悔しかった

健斗は翔という時間はなくなってしまったかのように、翔と話すとが少なくなってしまった

「……翔は……サッカー辞めんのかな」

「何で」

昼飯を食いながら、ヒロにそう話した

いつもはここに翔がいたんだけど……あいつと顔を合わせたくなくて、教室抜け出して中庭で食べていた

ヒロは翔が変わったことに気がついていようで、けど気にはしてなかった

「最近あいつ……早川結衣とべったりだから……サッカー部にもこないし……」

「委員会の……んぐつ、仕事だろ？仕方ねえよ」

と弁当のおかずを飲み込みながら、ヒロはそう言った

「仕事が終わればまた部活に来るって。サッカー大好き少年のあいつが辞めるわけねえだろ」

「……どうかな」

健斗はそんなこと思えなかった……委員会の仕事が終わったとしても……永遠に翔はサッカーをしないような気がしてならなかった

「お前が思ってるほど、翔は変わってないよ。つかお前だって女の子と関わり持てば？」

「嫌だ。俺はサッカーで忙しいんだよ……女なんかとイチヤイチヤする暇ねえもん」

「かゝっ……硬派なやつ」

とヒロは若干呆れていた。健斗は顔を叛けた

「まあ、好きな女の子には男は夢中になるもんだよ。お前だって好きな人出来たら、そうとう夢中になるんじゃないかね？」

「サッカーより夢中になるもんなんてねえよ」

「ったく……お前と翔はいつもサッカーだな」

「翔はチゲーよ。翔はサッカーより女だ」

「あっそうですか」

そんなつまらない日々が続いた

相変わらず翔はちよくちよく来ない……いつも活気溢れていたように見えたサッカー部は健斗だけには、ただの球遊びにしか見えなかった

翔といつも、二人組を組んで基礎練をやる

けど今は翔じゃなく、後輩が相手……

翔のDFは最強だった……

でもゲームで健斗と張り合えるやつはいなかった……

本気で自分もサッカーを辞めようかと思った

翔のいないサッカーがこんなにもつまらないとは思ってなかった

そんなある日のことだった

休み時間、移動教室のあとのことだった

健斗は教室を出て廊下を歩いていた

すると前から早川が女の子たちと歩いてくるのが見えて、健斗はなるべく早川を見ないように歩いた

が、しかしだった。早川は健斗を見ると微笑みながら突然話しかけてきた

「山中くん」

健斗は立ち止まると早川を見た

早川は友達を先に教室に戻らせていた

「何」

健斗は低い声で、早川にそう言った

すると早川は笑いながら言った

「これ、図書室に忘れてたよ。はい」

と言って渡してきたのは、国語のノートだった

健斗はそれを受け取るとゆっくりと頷いた

「……サンキュ」

「ううん。山中くんのノート、綺麗だね？ちよつと見ちゃった」

その綺麗とは字が綺麗ってことなのだろうか……つか人のノート
勝手に見るなよな

「山中くんって、クールだから字も綺麗そうだしね」

「人の性格と字って関係すんのかよ」

健斗がそう言つと早川はちよつと考えていた

「どう……かな？あまり関係はしなそうかな」

と早川がクスクス笑っているが健斗はため息をついた

「ねえ、山中くんってさ……翔くんと仲良いよね？」

早川の突然の問いかけに健斗は少し不機嫌になった

「だったら？」

早川は少し恥ずかしそうにして、顔を赤らめていた。そんな仕草も

可愛いく見えたけど、不機嫌だったから何も思わなかった

「翔くんって、サッカー部ではどんな人なのかな？」

「は？」

訳の分からない質問に健斗は声を上げた

「ほら、翔くんって普段はすごく優しいんだ……すごくすく……でも翔くん、サッカーやっているとどんな感じなのかな……ちよっと思っただけ。ゴメンね、気にしないで」

と早川はゆつくりと微笑んできた

健斗はそんな早川を見て、目を合わすことを止めた

早川の言う通り、翔は普段は温厚で優しいし、強い人間だ。けどサッカーのときはさらに強くてかっこいい……そんな雰囲気漂わせる

「知らねえ。別にあいつと仲良いわけじゃないし……それにあいつサッカー部辞めんだから知っても仕方ないんじゃない」

健斗がそう言うと、早川は少し驚いていた

「翔くんサッカー部辞めるの！？どうして？」

「……翔に聞けば。俺トイレ行くから」

健斗はそう言うと、早川を通り過ぎてゆっくりと歩いていった

振り返ると早川は去っていく健斗を見つめていた

健斗はそれを見ると顔を叛けて、それ以上何もしなかった……

第4話 過去 P・5

今日はバイトを遅くまでやった。そのあと客は入ってきて、現在7時半だ。

健斗がオーダーを取ったアイスコーヒーとサンドイッチAセットを運んだときだった

「おう健斗。今日はずいぶん働いてくれたな。もう上がってもいいぞ」

「そつつすか？じゃあ、お先に」

と言って、健斗はお盆をカウンターに戻し、店の奥へと歩いていった

Ryuは8時には閉店するから……だからもう大丈夫なのだ

健斗は店長に挨拶をすると、店から出ていった

それにしても、店長特性オリジナルブレンドの紅茶は本当に美味しい……嫌なことなんて忘れそうになる。

店から出ると少し冷たい風を感じた。健斗は自転車に乗り、ゆっくりと商店街を抜けようとした

と、するとだった

「あら、健斗くん」

いつもの八百屋のおばさんが健斗に話しかけてきた。どうやらその八百屋ももう閉めるようだった

健斗は自転車を止めてゆつくりとお辞儀をした

「ども」

「今日もバイト？偉いわね」

「いや……まあ」

「あら、今日は麗奈ちゃんいないのね」

「あ……いや、あいつは今日友達と遊んでるから」

健斗がそう言つと、おばさんは残念そうに言った

「あらそう……そうだ、ちょっと待っててね」

おばさんがそう言つと、店の奥へと入っていった

数分が経つと、おばさんは戻ってきた。手に何かを持って……

「この前麗奈ちゃんがね、お使いを頼まれてくれたのよ。これはお礼だって渡しておいてくれるかしら」

と言っておばさんは健斗に、かの有名なヒヨコまんじゅうを渡してきた。

八百屋のおばさんのお手伝いを……いつしたのかがすごく疑問だった

「本当に麗奈ちゃんはいいい子ね……よろしく言っておいてね」

「あ……はい。ありがとうございます」

健斗はお礼を言つとヒヨコまんじゅうを鞆の中に入れて、商店街を抜けていった

麗奈のやつ……結構この商店街にも慣れてきているようだ

まあ、初日にいきなり騒ぎを起こしたから……みんなに知れてんだろう

今頃麗奈は……家かな

健斗はそんなことを考えながら商店街を抜けようとしていた

がするとだった

いつの間にか外は雨が降っていた。商店街の中は屋根があるから、雨には気が付かなかった

健斗はそんな雨を見ながら深くため息をついた

そういえばさっき雨雲が広がってたっけ？

雨が降り出しそうなのは分かってたけど……本当に降っちゃうなんてな

「傘持ってきてねえよ……」

健斗は憂鬱そうに言うと、また雨を見た

まあ、まだ雨は弱いし……急いで帰れば大丈夫か……

そう思い、健斗は自転車を急いで漕いで雨の中家に帰っていった

びしょびしょになりながら、家についた

自転車を庭に置き、走りながら家の戸を開けた

「ただいま」

すると母さんが居間から出てきて、健斗に駆け寄ってきた

「お帰り……ってあんたびしょびしょじゃない」

「雨が降ってた」

「んなもん知ってるわよ。バカね、電話してくればよかったのに」

それもそうだと健斗は頷きながら、鞆を玄関に置いた

母さんは風呂場からバスタオルを持ってきて健斗に渡してきた

「頭拭いて、早くお風呂に入っちゃいなさい」

「ほい」

「返事は、はい!」

「はいはい」

「はい、は一回!」

「はあい」

健斗は玄関で身体や頭を拭いた。まったく……別に返事なんてどうこう言われるような歳じゃねえのに……

そんな風にブツクサ呟いていた

「ねえそれよりあんだ、麗奈ちゃんは?」

母さんがそう聞いてきて、健斗は手を止めた

「帰ってきてないの?」

「まだよ。あたしあんたといっしょにいんのかと思ってたし……」

健斗はそれを聞いて、深くため息をついた。

「あいつ、早川と佐藤と遊びに行くって……もうすぐ帰ってくんじやない?」

健斗がそんなことを言うと、母さんは心配そうに言った

「そうかしら……これから雨も強くなってくし……」

「あいつも子供じゃないんだから大丈夫だよ」

健斗はそう言って、髪を拭きながら風呂場に向かった

第4話 過去 P・6

風呂から上がり、タオルを肩にかけ、健斗は自分の部屋で窓を開けて涼んでいた

六月に入ったから……だんだん蒸し暑くなってくる。そろそろ扇風機を出すことになるだろう

これから夏かあ……

さつき天気予報で見ると日本はそろそろ梅雨に入るらしい

麗奈がこの家にやってきて、もう1ヶ月弱が経つ。早いもんだと思う……

いつの間にか時は流れていく……本当に自分が気付かないうちに激流のように流れていくのだ

雨は母さんの言う通り、さつきより強くなっていた

麗奈はまだ帰ってきてないらしい。一体何をしているのだろうか……まだどこかで遊んでいるのか……

健斗は暗闇で見えない道を見ながら、少しずつ不安を感じていた

麗奈に自分で言った言葉を思い出していた

この雨だから、多分川は増水してると思う

そしてこの暗い道……足でも滑らせて川に落ちてたら？

いや、まさか……だって早川と佐藤もいつしよなんだ。そんなことが起こるわけがない

と健斗は一人でに安心感を持たし、静かに目を瞑った

こうして聞いていると……雨の音しか聞こえない……

そういえば……あの日もこんな感じの雨だったけ……

雨が強く降る夏の日……こんな雨では部活も中止。グラウンドを荒らしてはいけないから、らしい

納得の出来る理由だけど、サッカーはやりたかった

けど最近サッカーがつまらないせいか、部活が休みで嬉しかったのはこの日が初めてだったのかもしれない

健斗は傘を指しながら、帰路を歩いていた

相変わらず隣にはいつもいるはずのやつがない

また早川と何かしているのだろうか……

健斗はなるべくそんなことを考えないように早く帰ろうと思った

が……するとだった……

「健斗!!」

突然後ろから肩を叩かれ懐かしい声に健斗は即座に振り返った

するとそこには健斗と同じように傘を指しながら笑っている翔がいた

それを見て急に安心感が湧いてきて、涙が出そうになった。けど力
ツコ悪いのは嫌だから、健斗は頑張って無視をした

「んあれ？無視……か」

健斗は何も言わず、ただただ、車道の横を歩いていた

翔は苦笑しながら健斗の後を追いかけた

「やっと委員会の仕事が終わったよ？明日からは部活にちゃんと
出られるぜ」

「あつそ」

健斗が冷たく返事をする翔は口を尖らせた。

「んだよう、怒ってんの？」

「いつも早川とイチャイチャしてたんだろ？よかったな彼女出来てさ……」

「まだそんな関係じゃねえって」

そんな風に弁明する翔の言葉なんて健斗は無視をした

そんな健斗を見て翔は深くため息をついた

「お前さ、早川に変なこと言つなよ」

「何を？」

翔が健斗を見ながら呆れるように言った

「俺がサッカー部やめるっていう話。早川にかなり訊かれたぞ」

「事実なんじゃねえの」

「やめねえよ。やめるわけねえだろ」

それを聞いて、健斗は本当はすごく安心してた。翔はサッカーを辞めない……まだいっしょにサッカーをやっけていけるんだ

だから本当はすごく嬉しかった

「俺とお前はずっとサッカーをやってく。そう約束したべ？」

「……………」

健斗は素直に頷けなかった。

そう、素直になれなかったんだ

「信じられつかよ………」

「ん？」

健斗は足を止めた。翔も同時に足を止める

健斗は翔にだんだん怒りが込み上げてきた

素直になれずに、苛々が募ってきた

「どうせお前なんか、サッカーより女なんだから！？一生早川とイチヤイチヤしてろよっ！！」

「え……………」

「お前なんかもう友達でもなんでもねえよっ！！俺に話しかけなっ
つ！！」

たわいのない喧嘩のつもりだった

こんなこと言っていていつかは仲直り出来るはずだった

だっていつもこんな感じに喧嘩をしてきたから……………だから……………

感情的になっていた俺は……俺は……

健斗に怒鳴られた翔は真剣な表情になって健斗を見つめていた

知らぬ間に健斗の目元には涙が浮かんでいたのを、翔は見つめていたのだ

健斗は翔の胸を押すと、さっさと翔を置いて歩いていった

あいつを見返してやる……あいつが足元に及ばないくらい上手くなつてやる……

悔しさしか感じていなかった健斗はふと足を止めた

これが運命のときだった

前を見ると、一匹の子犬が何かを口に加えて車道を見渡していた

多分、パンだと思う……どこからか盗んだんだ

もしかして……渡ろうとしてんのかな？

けどちゃんと横断歩道を使わないと渡れないはずだ。だって……この車道は交通量が多いから……

すると子犬は、普通に走って渡り始めた

犬だし……大丈夫かな……

とちよつと安心してゐたその瞬間だった

なんと犬がもうすぐ渡り切れるところで、口にくわえていたパンを落としてしまったのだった

しかもそのパンを拾おうとしているのだが、上手く、くわえられないのか……ジタバタしていた

健斗の直感的に……危険だと思っていた

犬の目の前からは、トラックが……

犬は逃げようとしなかった

健斗は……いつの間にか鞆も傘も捨てて、走っていた

犬を助けなきゃという思いだけが、頭に巡っていた

足が早い健斗は犬の元に行くのにそう時間はかからなかった……

そうかからなかったのだ……しかし、犬を抱き抱えたそのときには、トラックが目の前まで来ていた

逃げられない……でも動かなきゃ！！

けどどうして？

足が動かない……頭が真っ白になっていく

酷いクラッシュ音が鳴り響く……怖くて、怖くて足がすくんでるんだ

怖い……

怖い……

死ぬ……

けどまだ死にたくない……

周りがゆっくりに見えた

トラックも自分に近づいてくるのがゆっくりと見えた

それと同時に、真っ白だった頭のなかに走馬灯が走った

悟った……自分はここで死ぬと

人間の直感だ

健斗はぐつと目を瞑り、犬を抱き締めた

恐怖で何も考えられない……

自分は死ぬんだ……

それだけが分かった

ふと、強い力が加わって自分は横に押された。健斗はゆっくりと押された方向を向く……

そこには、必死な顔をした……びしょびしょな髪……歯を食いしばって健斗を右手で強く押して……

翔がいた

この表情が……翔を……翔を見る最後の翔だった……

それからは覚えてない

最後に覚えてるのは鼓膜が破れそうになる程の大きなブレーキ音……そしてまるで高層ビルが爆発するような音……それだけだった……

目を開くと、激しい痛みが右手を襲った。自分の右手を見てみると、手首から先が変な方向に曲がっていた。かなり赤く腫れていた……

身体も激痛を走って、あちこちすりむいていた。やがて脳を突き抜く……気を失いそうになりながらも、周りを見渡した

健斗の傍には、前の部分が凄惨な形になって停車したトラック……人がたくさんいた……

そして健斗の数十メートル先に倒れてる少年がいた

血だらけになって倒れている、少年が……

健斗は顔を苦しみながら上げた

貫く痛みに耐えながら、健斗は叫ぶように言った

「……し……う……」

声がしゃがれていた……けど倒れている翔に健斗は声を上げた

「しょう……しょう……」

けれど聞こえてないのか翔は動きもしなかった……

健斗は涙を溢れだしてきて、息を荒くしながら翔を見た

はあ……

はあ……

はぁ……

はぁ……

……

健斗の身体に激痛の他に暖かい感触を感じた

周りにいた大人が健斗を介抱しているのだった

健斗は一気にパニック状態になった

出ない声を必死になって上げた

「翔……翔……！」

健斗が暴れるのを、大人たちは必死に止める

他の大人も翔の元に駆け寄っていた……

健斗の身体は震えていた

大人たちを振りほどいて、今すぐに翔の元に行こうとした

「翔っ！！放せっ！！放せよっ！！翔っ！！……」

けどだんだん翔は離れていく

本当に……今度は本当に手が届かない場所に……いなくなってしまう

身体中に悪寒が走った……

「……翔……っ！……！」

……

第4話 過去 P・7（前書き）

健です！！

ユニークアクセス数が10000人を超えました

本当にありがとうございます！！

毎日300人以上がこの小説を読んでもらっています

これからも応援よろしくお願いします

また評価感想等もよろしく

第4話 過去 P・7

健斗は部屋を出て、一階へと降りていった

早く晩御飯が食べたい……腹ぺこだ。居間に入ると母さんがお膳を出して座りながらため息をついていた

健斗はその様子を見て、少し困ったような表情を浮かべた

「麗奈……まだ帰ってねえの？」

母さんは時計を見ながら、ゆっくりと頷いた

「遅いわよね……大丈夫かしら」

健斗も座りながら少し不安になっていた

「電話は？」

健斗が訊くと、母さんは静かに首を横に振った

「繋がらない……」

「……あいつ……傘持っててないんだよな……」

健斗の不安は徐々に肥大した。母さんも黙り込み、居間は静かだった

時計の針の音だけが聞こえる

健斗は時計を見た

もうすぐ8時半を回る……

辺りはもうすっかり暗くなっていて、灯りなしではまともに歩けない

また雨が強くなっているから、さっきも思ったとおり川が増水してる

雷も凄いいし……もし……

走って帰ってるとして、途中で足を滑らせて川に落ちてたら……

健斗はだんだんと不安が押さえられなくなってきた

健斗は立ち上がって、母さんを見た

「母さん、俺麗奈探してくるよ」

健斗がそう言うと、母さんは驚くような表情を浮かべた

「この雨の中？」

健斗は軽く頷くとゆっくりと居間から出た

玄関に置いてある傘を持って、健斗は靴を履き始める

そんな健斗を慌てて追いかける母さんは、玄関で立ち止まると言ってきた

「大丈夫なの？」

「うん……すぐ戻ってくる。あ、懐中電灯ある？」

母さんに言うと、母さんはまた居間へと歩いていった。しばらくすると母さんは懐中電灯を持って戻ってきた

「すぐ帰ってくるのよ」

「分かってるよ」

健斗はそう言うと、戸を開けて走っていった。

外は本当にすごい雨だった。さっきの弱い雨とは比ではない

さらに空には大きな音を奏でる雷……麗奈は雷が苦手って前言っていたことがあった

だから不安はさらに募っていく。雷を怖がってどこかで立ち止まっていたり……または川に落ちて流されてたら……

麗奈に対する蟠りなんて忘れていた

健斗は学校へ行く道を走っていく。本当に真っ暗で何も見えない

ここにもちゃんと電灯をつけるべきだと思う。けどないものは仕方がない

懐中電灯をつけて先の方を照らしてみるが、結局は何も見えない

辺りを照らしてみる。川の方、草むらへん……慎重に照らして、麗奈を探してみる

出来ればいいことを願って……

「麗奈！！麗奈！！」

もしかしたら、草むらに滑ってじっとしてるんじゃないか？

色々なパターンを考えながら声に出して呼んでみる

けど、返事は返ってくることはなかった

健斗はため息をつく、電話を取り出し麗奈に電話をかけてみた

「……………ダメか……………」

やはり電話が繋がらない……

それがさらに不安を募らせた

「麗奈……！！麗奈……！！」

声に出して呼んでみるも、やっぱり返ってはこない

とりあえず、先の方までどんどん進んでいく。

この強い雨では、傘を差していても雨がかかってしまいびしょびしょに濡れてしまった

それでも健斗は麗奈を探し続けた

麗奈への怒りは忘れていた……どうしてだろうか……

あんなにもあいつが嫌いだったのに。

こんなに心配してしまう自分が不思議だった

あいつの、笑ってる顔を思い出す。あいつの寂しそうな顔を思い出す。あいつの怒ってる顔を思い出す

これはまるで、あの日と同じようだった

翔が死んだあの日……走馬灯のように蘇ってくる麗奈との記憶

それが健斗にものすごい不安を与えていた

さっきまでの心配が、不安で押し潰されそうなほど苦しかった

麗奈の顔が見たかった……

別に麗奈が好きだからとか、そんなんじゃない。

ただ、麗奈がいなくなるということを考えたくなかったただけだった。

焦りからか、だんだん小走りになり健斗は息を切らしていた

服やスポンは濡れてしまっている。しかしまったく構うことはない。

不安と戦いながら、麗奈を探していた

「くそっ……麗奈！　麗奈！　いるなら返事しろよ、バカッ！！」

すると、目の前から誰かが走ってくるのが見えた

制服を着た女の子……？

それを見た瞬間、頭に浮かんだのが麗奈だった

「麗奈っ！？」

安心感と共に、その人の元に駆け寄る

が、それは麗奈じゃなかった……健斗を通り過ぎて暗闇の中を走っていた

健斗はその女の子を呆然として見て、しばらくの間佇んでいた

それから30分くらいが経過しただろうか

麗奈は見つからなかった……まだどこかで遊んでるのか……

そう思ったかった

気を落としながら、家へと帰っていく。服はすでにびしょびしょだ。帰ったらまた風呂に入らないといけない

健斗は深くため息をついた

家が見えてくるとまた立ち止まって、辺りを見渡してみる

けどいないのは分かっているのだ

健斗はゆっくりと家へと帰っていった

「ただいま……」

小さな声で戸を開けた。

傘と懐中電灯を置いて、びしょびしょになった靴を脱ごうとした、そのときだった

ふと前を見ると、風呂上がりらしき頬をあかく染めて、Ｔシャツと長ズボン姿の麗奈がいた

目を丸くして驚くように健斗を見ていた

健斗はしばらく何も言えなかった……というより、あまりの安心感にしばらく意識が飛んでいたからである

「……健斗くん……」

久しぶりに聞いた麗奈の声だった。麗奈は苦笑しながら小さく言った

「ゴメン……心配させちゃって……」

「……はあ……」

健斗は深くため息をつきながら、その場で座り込んでしまった

目の前に麗奈がいるという事実、嬉しさ半分に自分が情けなく感じたからであつた

「……大丈夫？びしょびしょだよ……」

健斗を気遣うように、持っていたバスタオルで健斗の身体を包ませる

健斗はそれを受け取ると何も言わず、靴を脱いで、身体を拭きながら二階へと上がっていった

安心しきって、何も言えない……

自分が情けなくって何も言えない

健斗は深くため息をつくと着替えを持って、風呂場へと向かった

第4話 過去 P・8

そのあと、母さんから聞いた話に寄ると……

早川や佐藤とファミレスでご飯を食べていたら、ついつい話が弾んでしまい、7時半になってしまったという

帰る途中に雨が降り出してしばらく雨宿りしたが、まったく止む気配がなく……仕方がないので、走って帰っていったという

家に帰る前に、早川がタオルと傘を貸してくれてそれで遅くなった。

健斗が出ていったあとに少し経つと、麗奈は帰ってきたらしい

結局自分は無駄足で、こんなびしょびしょになって帰ってきたのだ

……

あんなに麗奈のことを心配していた自分が恥ずかしく感じた

麗奈らしいと言えば麗奈らしいが、まったく……心配させんなよって感じた

健斗は眠くなって、ベッドに寝転んでいた

でもよかった……麗奈が無事で本当に安心した。

安心感からか、疲れがどつと来て眠くなってしまったのだ

健斗はゆっくりと目を瞑った

こうして目を瞑っていると、何だか癒される。

そして、思い出される……最後のシーン……

健斗は病院に運ばれ、右手と擦り傷の処置を施され、集中治療室の前にある長椅子に静かに座っていた

集中治療室には……翔がいる。目の前でガラス越しに医者たちに処置を施されている

無惨な姿に変わっている翔を、健斗は直視することが出来なかった

……

ただ静かに自分に対する怒り、後悔……悲しみ……不安……多々の気持ち健斗を放心状態にしていた

と、するとだった……

廊下から、誰かが走ってくる

「健斗っ！！」

健斗は自分の名前を呼ばれ、ゆっくりと顔を上げた

すると走ってくるのは、母さんと父さん……そして翔の両親だった。

母さんと父さんがすぐに健斗に駆け寄った

「健斗っ！！大丈夫！？何ともない？」

母さんの必死な呼びかけに健斗はゆっくりと小さく頷いた

母さんはそれを見て、涙を流しながら、安心するように言った

「よかった……本当によかった……」

「だから言っただろう？こいつがそんな簡単に死ぬわけねえって」

と父さんも嬉しそうに笑った

健斗は素直に頷けなかった。健斗は翔の両親を見ていた。翔の両親は、翔の無惨な姿を見て絶句していた

それから、母親が大きな声で泣き崩れた。父親の方も自分の妻を抱き締めて、泣いていた。

そんな様子を見て、健斗は心が痛んだ

母さんが、優しく静かに健斗を抱き締めてくれた……

身体が震えていた

恐怖で頭がいつぱいだった。母さんにしがみつき、苦しみに耐えていた

父さんがそんな健斗の様子を見て、暖かく「大丈夫」と声をかけてくれた

「健斗……大丈夫だ。翔くんは大丈夫だ。心配すんな」

父さんの暖かい言葉が、不安を支えられてくれた

けど、震えは止まらなかった

健斗は母さんに寄り添い、一人を怖がっていた

そう

怖かった

一人になるのが

すごく怖かったんだ

今でもはつきり覚えてるんだ

「……の……せいだ……」

健斗は震える声を必死に出した。その言葉に母さんと父さんが静かに耳を傾けてくれた

「俺の……せいだ……」

健斗は次第に涙を流していた。

「俺……犬がひかれそうなのを見て……飛び出しちゃったんだ……俺が飛び出さなきゃ……翔は……翔は……俺のせいだ……俺……俺……」

健斗がパニックを起こそうとしたとき、母さんはまた静かに抱き締めてくれた

「もういいの。もういいのよ健斗」

「母さん……俺……俺……」

絶望に浸っている中、母さんは健斗の身体を擦ってくれた

「あんたは悪くない。悪くないわよ？犬を助けたかったのよね……分かってるから……あんたは何も悪くないわ。だから眠りなさい……」

母さんはそう言い続けてくれた

それから何時間が経っただろう……

健斗が母さんの懷で眠っていると、集中治療室のドアが開く音がして健斗は目を開いた

中から年配者の医者が出てきた

マスクを取って暗い表情を浮かべた

翔のお母さんとお父さんが、すぐさま医者に聞いた

「先生っ！！翔は！？翔は助かるんですかっ！？」

両親の問いに、医者はしばらく黙り込んでいた

最悪な展開が頭をよぎる……

健斗も母さんから離れ、立ち上がった

医者はうつ向く顔をあげた

そして……

「……最善は尽くしました……しかし、非常に残念なことに……」

医者は一息つくと、両親の目を見て静かに言った

「お子さんの翔くんは……たった今、脳死が確認されました……」

……のう……し？

「まだ息はしてますが、かろうじてです……やがて息も……引き取
ると思います……」

悲痛の叫びが健斗の耳を貫いた

翔が……のう……し？

脳死って……

何だよそれ……

翔が……翔が……

泣き声が廊下に響き渡る……健斗は医者を見ず、翔を見つめていた。

「そんな……こと……」

健斗は翔に向かってあるきはじめた。医者を通りこして、集中治療
室の中に入った

翔を見る

翔の表情は、白かった。

そう、生気がなかった

まるで人形のように、そこに横たわっていた……

「翔……起きろよ……翔……」

健斗の呼びかけに、翔は反応しない

健斗は齒をくいしばった

「翔……ふざけんなよっ……死ぬなよ……死ぬなよ……死ななっ……行くなよっ……何でだよ……」

健斗は翔を揺さぶった。ざらざらした感触……

包帯を触ってるから

「死ぬなよ……サッカーやろっぜ……ずっと続けてくんたる……？約束したろっ……起きろよっ……翔……翔……」

「君……やめなさい」

医者が健斗を止めようと身体を押さえてくる。けど健斗はそれを振り払った

大声で呼びかけた

「お前！！好きなんだろう！？」

健斗はテレビのドラマで見た、心臓マッサージをしながら叫んだ

医者の手を振り払ってでも続けた

「早川結衣が好きなんだろう！？お前言ってたじゃんっ！！せつかく……せつかく良い仲になってたんだろっ！！だから起きるよっつ！！翔！！こんなとこで死ぬな！！死ぬなっつ！！！！翔！！」

「やめなさい！！翔くんはね　」

「うるせえ！！！！」

健斗は涙を流しながら、止めようとする医者を睨み付けた

「まだ息あんだろっ！？生きてるんだろっ！？あんた医者だろ！？助けるよっ！！！！何で……何で諦めんだよっ！！翔を……翔を見捨てんなよっ！！」

健斗は息を荒くして、医者を睨み付けた

医者は何も言わなかった……

自分でも本当は分かった

もうどうしようもないんだってことくらい……

「翔……」

翔の両親も集中治療室に入ってきた、翔を見た

「翔……翔……」

両親はその場で泣き崩れた……

その様子を見て健斗はそれ以上何も言えなかった……

自分以上に一番悲しみを感じているのはこの人たちだ……なのに、俺は……俺は……

「……くそっ……」

健斗は呟くと、集中治療室を走って出ていった

「健斗っ!!」

涙を流している母さんを通りこして、健斗はそのまま走り続けた

廊下を走り抜け、病院を走って出ていった

冷たい雨が降り続いてる中、健斗はその中を走り続けた

町の中を……ただ走り続けたんだ

行き交う人……変わる景色……ただ、悲しみを抱きながら走る健斗は……哀れだった

走りながら走馬灯のように思い出されるのは、翔との思い出……

初めて会ったのが、6歳……サッカークラブに入ってきた翔……

『俺、翔ってんだ!!お前なんてーだ?』

笑いながら、そう握手を求めてきた翔……

サッカーがめちゃくちゃ上手くって、この日から翔とは親友でありライバルだった

楽しかった……翔といた日々が……

いっしょに公園でサッカーをやった

翔の家でゲームして遊んだ……

喧嘩もした

何回も、何十回も……

けど最終的には、前よりももっと仲良くなってた

翔と笑い合った日……いっしょに川に釣りしに行ったとき、健斗が足を滑らせて川に落ちたことがあって、二人で笑い合ったっけ?

翔と泣いた……

小学校の卒業式とか……試合に負けて悔しかった日とか……

翔が……その翔はもういない

『俺とお前はずっとサッカーをやってく。そう約束したべ?』

翔はあのときそう言った……

サッカーをずっと続けていく。高校でも大学でも社会人になっても……サッカーを楽しみ続けていくって決めた。

健斗は息を荒くしていた……翔の言葉を一つ一つ思い出していく

『なあお前さ……好きな人とかいるか?』

翔に好きな人がいるって聞いて、びっくりしたけど

何だか嬉しかった……

翔の恋が……上手く行くようにと思ってた

あの日……翔と広大な青い空をいつしよに見た

『……俺さ、空好きなんだよな』

『何か空つてさ色んな表情があって人間みたいで面白いよな。晴れてるときは笑ってて、曇りのときは落ち込んで、雨のときは泣いている……何か、空見てるところも同じ気分になってくんだよな』

「……うわっ！」

健斗は町の中を走っていると、足をつまづいて転んでしまった……

そのまま健斗は起き上がらなかった……

翔の言葉を思い出し、翔の表情を思い出し……翔との日々を思い出す

翔はもういない

翔は……もういないんだ……

俺……翔と喧嘩したまんまだった

翔に……酷いこと言っ……俺……

「翔……翔……う……うわあああつつつ!!」

健斗はおさえられない感情を一気に爆発させた

雨の中、うつ伏せになりながら健斗は……

泣いていた……

次の日……翔が死んだことは、教室中に広まっていた

みんなひそひそと健斗に聞こえないように話していた

いや、それでも本当はちゃんと聞こえていた。

「ねえ……翔くん、交通事故で亡くなったって」

「知ってる。山中を助けようとして、身代わりになったんだろ？」

「おいバカッ！！そんな言い方はないだろ」

「でも、事実そうなんですよ？」

誰でもいい

誰でもいいから……暖かい言葉が欲しかった。

けど聞こえてくるのは、非難の声ばかりだった

苦しかった……

自分を責め続けた

「健斗」

ふとヒロが健斗に近づいてきた

ヒロは周りを見渡すと悔しそうに歯ぎしりをした

「……教室出ようぜ……ほら……」

ヒロは健斗の味方になってくれた

俺を……気遣ってくれた……

「大丈夫か？」

中庭で、ヒロは健斗に話しかけた

けど健斗は何も言わなかった……ただ黙り込んでいたのだった
しばらく沈黙が続く

「……俺……さ」

健斗が言つとヒロは静かに健斗を見た

「俺さ……あいつと喧嘩したんだ……」

「え？」

健斗は虚ろになりながらも、そう言った

「あいつがサッカーをずっと続けてくとか言ってきた……本当はス
ゲー嬉しかったのに……素直になれなくて……俺、あいつにお前
なんか友達でもなんでもないって……なのにあいつ……俺……なん
であんなこと言っただろ……俺……」

健斗は頭を抱え込み、自然と流れる涙を隠していた

ヒロは静かに健斗の背中を擦ってくれた

何も言わずに……静かに……

翔の葬式、翔の家族はみんな泣いていた

翔の家族だけじゃない。翔の友達や、クラスメイトも……焼香をし
ながら泣いていた

ふと健斗が焼香をし終わると一人の女の子が目についた

早川だった

友達に抱かれて泣いている……

あるとき早川は、健斗に翔のことを聞いてきた……

あれは何のために聞いてきたんだろうか

葬式が終わり、健斗は翔の仏壇の目の前で佇んでいた

翔の笑っている写真が飾られている

もう翔の身体は……灰になったことだろう

健斗には耐えられなかった……だからここで翔の顔を見ていたかった
するとだった

「山中くん」

ふと呼びかけられて健斗は後ろを振り返った。するとそこには、早川結衣が喪服姿で健斗を見ていた。さっきまで泣いていたのが嘘のように微笑んでいた

「……何してるの？」

「……別に」

健斗はプイツと顔を剃らした

すると、早川は健斗に近づいてきた

「翔くん……気の毒だったよね」

「……………」

健斗は何も言えなかった……

早川は翔の遺影を見つめていた

「……翔くんね」

早川が口を開き、健斗はそれに耳を傾けた

「翔くんね、委員会の仕事やってるとき、いつも山中くんのこと話してたよ」

「え……？」

健斗が聞き返すと早川は笑いながら続けた

「山中くんは凄いやつだって、サッカーがすごく上手くて、最強のライバルで最高の親友だって……本当にいつも……山中くんのことを嬉しそうに話してたよ」

健斗は何も言えなかった……

その代わり、健斗は翔の遺影を見つめていた。

「みんな……翔くんは健斗くんのせいで亡くなったって言ってるみたいだけど……私はそう思ってないよ。だから……」

早川は静かに笑った

「山中くんは悪くないよ」

「……………」

早川は確かにそう言ってくれた

本当に嬉しかった……

優しい笑顔で俺にそう言ってくれた早川は、とても優しい女の子だ
ということが分かった。

暖かい気持ちになって、本当に嬉しかった

涙がでそうになるくらいに、凄い嬉しかったんだ

けど……それと同時に何だか苛々が募った……何故か……分からない
けれど

「山中くんは悪くないよ。だから……」

「うるせえよ……」

健斗は苛々して、思ってもいないことを口に出してしまった

「お前に俺の気持ちが……分かるかよ」

翔の好きだった早川結衣……早川には、優しい言葉をかけて欲しく
なかった

責めて欲しかった

健斗のせいで翔は死んだんだって

責めて欲しかった……

だから自分に腹立だしくなって……

健斗はそう言っと、早川の前から立ち去ろうとした

もう何も聞きたくなかったから……

そのまま帰ろうとした。

けど……

「それでもっ!!」

早川は健斗に必死に叫んできた

「それでもっ!!山中くんは悪くないよ!!」

早川は最後まで俺にそう言ってくれた

最後まで……

「早川が？」

ヒロにそのことを話すと、ヒロは驚いたような表情を浮かべていた。けどすぐに、ヒロは笑った

「優しい子だな……早川」

「え？」

ヒロは少し戸惑っていた

「あいつも、翔のことが好きだったんだって」

それを聞いて健斗は驚きを隠せなかった。早川も、翔のことが？

だったら……何で？

少なくとも健斗よりかは辛い思いのはずだ

一番憎むはずの相手なのに……

「きっと、今も凄く辛いんだろうぜ……けど、それでもお前に元気になって欲しかったんじゃない？」

健斗は何も言えなかった……

それから、健斗は早川のことが気になっていた

翔の好きだった早川結衣は……いつの間にか、自分も早川に惹かれていた……

そして、大好きだったサッカーを辞めた……

今でも震える……翔を思い出すと……足が震えてしまう

楽しめないサッカーをやっても仕方がないから……スパイクを……サッカーを……捨てたんだ

健斗は空を見上げると、いつも翔を思い出す。翔の好きだった空……翔の好きだった空を思い出す

翔は空になって、今も俺を見ているんだ……

だから生きようと思った。

翔の分とか、そういうかつこつけた理由じゃない

ただ翔が見ているなら、いつまでも泣いてるわけにはいけないと思っただから

だから強く生きようと思う

翔にバカにされないように……

笑って生きたいと思った……

だから翔……お前はいつも、青い空の中で……笑っててな……

笑ってろよ……翔……翔……

第4話 過去 P・9

ふとドアがノックされる音が聞こえ、健斗を目を覚ました

自分の目元に濡れた感触がした……涙が溢れていた

健斗はすぐに涙を拭き、ドアの方を見た

一体誰だろうか？母さんか？父さんか？

けどそのどちらでもなかった

ドアのノックする音と共に声が聞こえた

「健斗くん……」

麗奈の声だった。やけに元気のない沈んだ声だった。麗奈らしくない感じがした

健斗はふと麗奈に対する蟠りを思い出したが、それはもう気にしないことにした

だっていつまでも気にしてたら、身体がもたない……

ふとドアが開き、麗奈部屋に入ってきた

少々戸惑って健斗を見ている。何の用だろうか？

健斗を見ると麗奈はドアを閉めながら言ってきた

「ゴメン……寝てた？」

「……いや……どうした？」

健斗は優しくそう訊き、ちょっと笑顔を見せた。麗奈に対する蟠りなんて消えていた。麗奈も軽く頷いて、ゆっくりと健斗に近づいてきた

「あの……今日ゴメンね……心配かけちゃって……雨降ってるのに、わざわざ探しに行かせちゃって」

「ああ……別に。早く晩飯が食いたかったただだから」

と健斗が恥ずかしそうに顔を叛けながらそう言った。麗奈は少し笑ってくれた

何だか……それでも麗奈らしくないような気がしてやりにくかった。

しばらく気まずい雰囲気、部屋の中を流れた

「あ、そうだ」

健斗は鞆からビニール袋に包まれた、ヒヨコまんじゅうを取り出した

「ほら、八百屋のおばさんがお前にだって」

健斗がそう言うと麗奈はゆっくりとそれを受け取った

「……………」ありがとう

「もう自分の部屋に行けよ。全然気にしてないから」

と健斗が言うと、麗奈はちよつと戸惑っていた

まだ何か話したいことでもあるのだろうか？

健斗はしばらく麗奈を見ていた

「健斗くん……………」あの……………」

「何だよ？」

健斗が聞くと麗奈はちよつと恥ずかしそつにためらっていた

健斗はちよつと苦笑いしながら言った

「何か……………」いつものお前らしくないんじゃない？あのウザイほどの元気さはどこ行ったんだよ」

健斗がそう言うと、麗奈はゆっくりと頷いた。

こんな風に普通に接してやる健斗だが、やはりちよつと気まずい気はした

すると麗奈の弱々しい目は強く輝きを取り戻すような目になった

「あの、ゴメンね」

「だから気にしてねえって」

「違っの。あの……」

また麗奈は言い詰まった。麗奈が何を言おうとしているのか分かって健斗は真剣な表情を浮かべた

「昨日……あんなことしちゃって……ごめんなさい」

麗奈が頭を下げてきた。

本当に反省してるからこそだった。この能天気でおバカな麗奈が、頭を下げてくるなんて思ってもなかった

もうキスのことは怒ってなかったから、逆に可笑しさが込み上げてきた

しばらく沈黙が続いた。

「……それ」

健斗が指差しながら言うと、麗奈はふと顔を上げた

「ヒヨコまんじゅう分けてくれたら許してやるよ」

すると麗奈はヒヨコまんじゅうを見た。健斗はそれから頭をかきながら息を吐いた

「本当に怒ってない？」

また麗奈にそう訊かれて健斗はゆっくりとうなずいた

「別に、ファーストキスってわけじゃないし」

そう健斗が言うと、麗奈はすごく驚いたような表情を浮かべた

「健斗くん……意外とやるんだね……」

「まあな。ファーストキスが父さんだって知らなかったら、まだお前のこと怒ってたかもしれない」

「……………」

「……………」

麗奈は健斗の返事に啞然としていた。しばらく沈黙が続くと、麗奈が吹き出してきた

「プツ……………クスクス……………アハハハハハ」

「なあに笑ってんだよバアカ」

健斗もつられて笑いながら麗奈に言った

麗奈は可笑しそうにお腹を押さえて笑っている

「アッハハハハ　だって！！アハハ」

「笑い過ぎだよ」

こんな感じでしばらく二人は笑い合っていた。さっきまで感じていた二人の蟠りは完全になくなったような気がして、また全てが元通りになったような気がする

麗奈といつもどおりの関係になったことに健斗はとても安心していた

「ふいっ……もう健斗くんっ」

麗奈は涙を拭きながらまだ笑っていた

「私本当に気にしてたんだからねっ！！健斗くんずっと怒ってると思っただから」

「いや……最初はあれだったけど、何かもうどうでもよくなったから」

健斗は頭を掻きながら恥ずかしそうに続けた

「たかだかキスされたくらいで……そんなに怒ることもないよな。だから、あのことはなしっ！！水に流すってことで」

健斗がそう言うのと麗奈はふと笑顔を見せて、何も言わなかった

すると麗奈はゆっくりと健斗に近づいてきて、健斗のベッドに座った

「えっと……今日どうだった？」

「何が？」

「遊びに行ったんだろ？どこまで行ったんだよ」

健斗が聞くと、麗奈は思い出すように答えた。

「えっとね……神乃崎商店街を抜けた方まで。何か車道があつて、その近くにあつたファミレスでご飯食べてた」

「そっか……」

健斗がそんな風に言つと麗奈はさらに言つてきた

「ほとんどが結衣ちゃんの恋バナだったけど」

それを聞いて、健斗はまた違う心の痛みを覚えていた

「あつ……ゴメン……」

「いいよいいよ……俺はどうせフラれた身ですから……」

と健斗は深くため息をついた。すると麗奈が少し笑いながら言つてきた

「でも、結衣ちゃんまだ主将さんと付き合つてはないみたいだよ？」

それを聞いた瞬間、健斗は過剰に反応した

「マジでっ！？ヒロから付き合つてるって聞いたけど……」

「何か噂ではそうなってるみたい。でも本人は違うって言ってた」

「それって隠してるだけなんじゃねえの？」

健斗が疑わしい目で見ると麗奈は首をかしげた

「さあ……多分違うと思うけど」

「何で言い切れんだよ」

「だって結衣ちゃんって嘘つくような人に見える？」

健斗はそれを聞いて少し呆れた

「そうは見えないけど、人間そういうのは隠したいもんだろ」

「そうかなあ？」

「お前だってそんな噂が学校中に広まったら、嘘ついてでも否定するだろ？」

健斗はそう言うってからまた深くため息をついた

「事実を隠そうとするの？」

麗奈は首をかしげていた

「本当に好きなら堂々としてればいいじゃん」

健斗はそれを聞いてしばらく麗奈を見つめていた。それと同時に少し可笑しさが込み上げてきた

麗奈らしい考えと言えば、麗奈らしい考えである

「……あつ、そういえばさあ」

麗奈が何かを思い出すかのように言ってきた。

「結衣ちゃんね、中学のときにすごく好きだった人がいたんだって。もしかしてそれって健斗くんのことじゃない？」

健斗はそれを聞いてふと心を沈めた

早川の好きだった人……か……

「それ……早川が話したのか？」

「マナが結衣ちゃんに付き合った人って何人くらいって訊いたら……そう言ってた」

「そっか」

「健斗くんじゃないの？」

健斗はゆっくりと首を横に振った

「俺じゃねえよ」

健斗は麗奈から離れ、窓から外の景色を眺めていた

そんな健斗にまた大胆に近づいてきた

「何で？健斗くん知ってるの？」

「……知ってる」

健斗がそう言うのと、麗奈は驚くように言ってきた

「ウソ？ね、誰々？もしかしてヒロくん？」

健斗は麗奈を見ずに空を見上げた

雨がしとしと降っていた……

「……翔だよ」

しばらく沈黙が続いた。健斗の言葉に麗奈の表情は、笑いから哀しみに変わっていた

雨の音だけが、聞こえる……

「……しょう……って、健斗くんの……」

健斗はゆっくりと頷いた。

「この前話したやつだよ。俺の親友……」

「……ゴメン……」

謝る麗奈を見て、健斗は笑いながら言った

「謝るなよ。別に悪いことしてないだろ？」

「でも……」

「お前がそんなしょげた顔すんじゃないよ、全然似合ってるねえ」

健斗はそう言いながら、麗奈の額を小突いた。

しばらく麗奈は何も言って来なかった

多分自分が容易に訊いてしまったことを後悔してるんだろう

まさか翔だとは思わなくて……

「……俺さ」

健斗は降り続ける雨を見ながら呟くように言った

「俺さ……今日、翔のことばかり思い出してた」

「え？」

健斗は笑いながら今でも翔の顔を浮かべていた

「時々そうなんだ。あいつが死んで、もう2年は経つの……何回も思い出しちゃう……」

麗奈はふと健斗に訊ねた

「健斗くん……翔くんは自分のせいで死んだって言ってたよね？」

「……そうだよ」

「今でも？」

「……うん」

今でも思ってる

自分のせいで、翔は死んだんだって……

「翔を殺したのは……俺だよ」

健斗はそんな風に寂しそうに呟いた

翔を殺したのは……俺なんだ……

翔の家族は、今はこの神乃崎には住んでいない

この場所にいるのには耐えられない……だから引越すと言って、泣きながら引越してしまった……

俺が翔を殺したせいで、翔の家族の幸せも奪っちゃったんだ……

あの日から、たまに迷うときがある

強く生きようと決意した日から……

俺はこんな風に、普通の生活を送っててもいいのかって……

人の人生を奪った俺が、生きてる権利なんてあるのかって……

そう後悔することが多かった……

「もし過去に戻れるなら……俺はあの日に戻りたい……もしあの日をやり直せるなら、俺は……」

ふと麗奈を見ると、健斗は少し驚いてしまった

麗奈は泣き声をあげながら、泣いていたのだ。

「麗奈……？」

麗奈は涙を拭いながら、下をうつ向いていた。健斗は優しい声色で麗奈に語りかけた

「バカ、何でお前が泣くんだよ。泣くなよ」

初めて見た麗奈の泣き顔……

するとだった……

突然麗奈が健斗に抱き締めてきた

健斗の胸に顔を埋め、押さえられない涙を流していた

健斗は訳が分からなかった……

一体何が起きているのか……理解するまでに時間がかかった

「お、おい……ど、どうしたんだよ」

意外にも冷静に麗奈に言う

けど麗奈はずっと泣いたままだった

心臓が高鳴る……顔も熱くなる

ヤバいってこれは……

「離れろって……麗奈」

けど麗奈は離そうとはしなかった

健斗は力づくで麗奈を止めようとはしなかったけど、かなり困惑していた

「……して……」

「……え……え？」

麗奈が何かを言ってるが上手く聞き取れなかった

「……どうして……?」

「な、何がだよ……」

こっちが訊きたいよ……どうして泣いてるんだよ

「どうして……そんなこと言うの?」

麗奈はグスグスと泣きながら、静かに続けた。

「みんな……みんな……哀しいんだよ?みんな、同じくらい哀しいんだよ?」

健斗はしばらく黙っていた

「みんな同じだよ……健斗くんだけじゃないよ……」

「麗奈……」

「みんな同じくらい哀しいのに……自分が殺しただなんて……言わないで……」

麗奈はさらに健斗の胸に顔を埋めた

しゃがれた声で健斗に言ってくる

「……過去をやり直したいだなんて……言わないで。そんな寂しい

こと……言わないでよ……」

健斗は何も言えなかった……麗奈の暖かい気持ちが健斗に伝わってきた

すると麗奈はゆっくりと健斗から離れた

鼻ですすり、涙を拭う。しゃがれた声で、健斗に言った

「そんな健斗くん……私嫌だよ……」

麗奈の短い言葉で健斗は胸が暖まった気がした

嬉しかった……泣いている麗奈が……こんな俺のために泣いている麗奈に、感謝の気持ちでいっぱいになった

「ゴメン……」

麗奈は泣きながら、顔を赤らめて健斗の胸を指した

「ここ、濡らしちゃった」

「え……いや、大丈夫」

戸惑ってる健斗を見て、麗奈は可笑しそうに笑った

「えへ、ゴメンね。何か、健斗くんや結衣ちゃんがすごい辛い思いをしてるんだなあって思っただけ……何か急に悲しくって……」

「……そっか……」

するとふと麗奈は涙を拭いながら微笑んできた

「このことも、水に流して」

「え……あ、ああ」

するとふと麗奈はベッドから降りて、ゆっくりと立ち上がった

「私……もう寝るね。おやすみ」

「あ、うん。おやすみ」

麗奈はゆっくりと部屋を出ていった。

出ていったあと健斗はしばらく啞然としていた

まだ身体中に麗奈の温もりが残っていた

そして泣いている麗奈の顔を思い出した

突然過ぎてびっくりした。けど、何だか救われたような気がした

翔が死んで2年経った……今初めて、心が軽くなった

第4話 過去 P・9（後書き）

すみません……また第4話のあらすじをちよこつと変えました

第4話 過去 P・10

そして次の日の朝、雨は止み……空から雲は消え気持ちのいい晴れになっていた

健斗はまだ寝ていたから気付かなかった

気持ちのいい朝に、窓から吹き込む優しい風が心地よかった

時計の針は7時半を指していた。そろそろ起きるべき時間だが……
健斗は全然起きようとはしてなかった

と思ったら、健斗はゆっくりと目を開けて身体を持ち上げた

しばらくの間ぼーっとする。それから朝だということに気が付いた。

健斗は欠伸をしながらベッドから降りて、ゆっくりと立ち上がる

早く顔を洗って支度しないとな……

一階へ降りていって、居間に入ると味噌汁のいい匂いがした

健斗がキッチン覗くとそこには……

制服姿にエプロンを着た麗奈がいた

健斗が起きたことに気がつくときとゆっくりと微笑んできた

「おはよー」

「あ、おう……おはよう」

健斗は少々戸惑い気味で麗奈を見ていた

「母さんは？」

「お母さん、今朝早くから仕事だよ」

そっか……今日はA勤だったっけ？

麗奈は味噌汁をかき混ぜながら、健斗に言ってきた

「すぐ朝ごはんにするから、先に顔と着替え済ませてきたら？」

「うん……」

健斗はドキマギしながらさっさと居間から出ていった。

ちよっと驚いてしまった……昨日あんなことされたから、妙に意識しちゃってるのか……

麗奈がすごく大人に見えてしまった……

そうまるで朝に夫の朝食を用意する妻のように……

変な感じだ……

健斗は顔を洗い、ため息をつきながら制服に着替えて、また居間へと降りていった

居間にはちゃぶ台が出されていて、麗奈はそれに朝食を置いていた。健斗は恐縮しながらゆっくりと座り、目の前に並べられた朝食を手につける

今日は味噌汁とご飯に、卵焼きだった

朝にしては充分だった。

「いただきます」

健斗は箸をとってまず味噌汁を飲む……

……

「美味しい？」

麗奈も座って、ご飯を食べながら訊いてきた

「……美味しい」

正直な感想だった。普通の豆腐の味噌汁だったけど、美味しかった。

「お前って、本当に料理上手だな」

「えへへ」

と麗奈は顔を赤らめていた

健斗はそんな様子を見ながら卵焼きを口に運ぶ

これもまた美味かった。ちなみに卵焼きは甘い味だった

健斗は塩味の卵焼きに慣れてたから、ちょっとびっくりしたけど…
…問題なく美味しかった

「美味いつ」

「そ、そんなに言わないでよ」

麗奈は恥ずかしそうに言うのを、健斗は可笑しそうに笑った

「でも美味いんだもん。お前スゲーな」

「卵焼きなんて誰でも作れるよー」

「俺……作れないんだけど」

健斗が言っていると麗奈は可笑しそうに笑った

「料理ダメなんだ」

「料理と言えないもんなら作れるよ」

「何それ。まあ確かに健斗くんそういうの苦手そうだよね」

「悪かったな」

健斗はむっとした感じで言うと、麗奈は笑いながら卵焼きを食べた。

「知ってる？料理出来る人ってモテるんだよ？」

「……だから？」

「だから健斗くん料理上手になったら、結衣ちゃん気が替わるかもよ？」

「余計なお世話」

健斗はふんつと不機嫌そうに言った

「もう諦めてんのー？」

健斗にそう訊いてきた麗奈は残念そうだった。健斗はそんな麗奈を見て、呟くように言った

「お前……俺の恋愛見て楽しんでんだろ？」

「え……まあ、それなりに……」

健斗はそれを聞いて力チンときた

不機嫌そうに味噌汁を飲みながら言った

「とにかく、もう俺はきっぱり諦めましたから。残念でした」

「えー？何で？」

「早川に好きな人いるからだよ。しかも相手はあのサッカー部の主将だぜ？学校イケメンって言われてんのに……勝てるわけねえだろ」

健斗は味噌汁を置いてご飯を口にした

「それに、そう思ってなきややってらんねえよ……」

そんな健斗を見て麗奈は呆れるようにため息をついた

「まったく……君ってやつは……」

「何だよ」

「何でもない。ごちそうさま」

麗奈は食器を片付けて、キッチンの方へと歩いていった

「何だよ。言いたいことがあんだったら言えよな」

健斗は不機嫌そうにそう言つと麗奈は健斗を見て言ってきた

「そんなことより、早く朝ごはん食べて、学校行く準備してよ。遅れたら健斗くんのせいだからね。ちゃんと歯も磨いて……早くしてね」

麗奈は急に大人びた口調になるとさっさと居間から出ていった

健斗はそれがたまらなくむかついた

苛々が込み上げきた

「あっ」

廊下から麗奈が顔を覗かせた

「ちゃんと食器洗ってよね」

それだけ言つと麗奈は階段を上つていった

「わーってるよっ!!ちくしょう……」

健斗は何だか急に悔しい気がして苛々していた

「ったく……誰の家だと思つてんだよあいつ……」

健斗はぶつくさ一人言を言いながら朝ごはんを着々と食べていった。

「……ちくしょう!!本当に美味しいなこれっ!!」

と、麗奈の卵焼きを悔し紛れに一気に口の中に入れた

第4話 過去 P・11

「鍵閉めたか？」

健斗は自転車を塀の外まで持っていきながら、麗奈に訪ねた

麗奈は鍵を持って健斗の元に走ってきた

「大丈夫」

と言っていつも通りに、自転車の後ろに座る。

「よしっ！！学校までしゅっぱあ〜っつ！！」

と元氣良くそう言ってきた。そんな麗奈を見て、健斗は可笑しそうに笑うとゆっくりと自転車を漕ぎ始めた

いつもの道をいつも通りに漕いでいく。けど何だか妙な感覚がした。昨日、一人で自転車を漕いだから……

寂しさを感じた

けど今は麗奈が後ろに乗っているということが、安心感をもたらせていたことに気づいてはいなかった

麗奈は後ろで鼻歌を歌いながら風を感じていた

「気持ちいい」

そう呟くように言った

気持ちいい……か……

確かに気持ちよかった。風を感じると、何だか心地よかった

「やっぱり楽しいなあ」

「今更何言ってんだよ」

「だって昨日ヒロくに送ってもらったんだもん」

健斗はそれを聞いて不思議そうに言った

「俺もヒロも変わんないだろ？」

「変わるよ」

と麗奈は即答してきた。健斗はまた不思議に思っ、後ろを振り返った

麗奈はとびっきりの笑顔を見せていた。それが何だか可愛くって健斗は笑った

「何が変わるんだよ」

「ん……なあんか、健斗くんじゃないと安心感がない」

「何だそれ……そんなに俺を信じきってんの？」

と冗談を加えて麗奈に聞いてみた。すると麗奈は当然というように、健斗に言った

「信じてるよ」

麗奈は微笑みながらそう言ってきた。健斗はそれを聞いて何だか気恥ずかしくなって、プイっと前を向いた

「……3割は」

「はあ？」

健斗はまた後ろを振り返った

「あと7割は何だよ」

「7割は……不安と心配」

「同じじゃねえかよ」

「同じじゃないよ。健斗くんが途中で転ばないかなっていう心配でしょ？あと健斗くんがゆっくりし過ぎて遅刻しないかなっていう不安」

「何だよそれ。わけ分かんねえ」

と言って健斗は可笑しそうに声を上げて笑った

麗奈も可笑しそうに笑っていた

「だったら不安と心配無くしてやるよ！！ほりゃ！！」

と言いながら健斗はグングンとスピードを上げていった。麗奈は焦りながら健斗にしがみつく

「ちよっ……早いっ！！早いっばあっ！！」

「遅れたくないんだろ！？」

「やだっ！！ちよっ……アハハ 危ないよっ！！」

「転ばないことを教えてやるよ。俺の高等テクを嘗めんなよ！！」

健斗と麗奈は笑い合いながら、スピードをつけていつもの道をこいでいった

麗奈は笑いながら悲鳴を上げて、そんな麗奈が可笑しくって大笑いする健斗……

何だかすごく楽しかった

前よりも何倍も、何百倍も仲がよくなっていた。この感じ……前もどこかで……

そう、翔もそうだったな。何回も何十回も喧嘩したけど、そのあとは必ずと言っていいほどスゲー仲良くなっていた

それを繰り返していったら、翔は俺の中でスゲー大切な存在になっていったんだ

麗奈も同じなんだと思う……というより、そうなってることに今更ながら気がついた

あんなに麗奈を気にしていたことも、自分の中で徐々に麗奈が好きになっていったからだ。

それは早川のように、恋愛として好きとは違った

ただ、麗奈という人間が好きになったんだと思う

だから今ならはっきりと言えた

「麗奈!!」

「ん〜!?!」

風に乗りながら、健斗は大きな声で言った

「俺さっ!!お前のこと好きかもっ!!」

「えっ!?!」

麗奈は驚いたような声をあげた

健斗は可笑しそうに笑った

「勘違いすんなよっ！？お前のバカで能天気で、おっちょこちょいで、マジで訳分かんねえところが好きだってことっ！！」

そうなんだ。

もう自分の中で麗奈は

一人の家族で

一人の親友で

スゲー大切な存在になっていたんだ

それに気がついたとき、俺はもつと麗奈のことが好きになっていた

麗奈という人間が、スゲー大切な人になった

「……健斗くん」

麗奈は嬉しそうに笑っていた。本当に嬉しそうだった

健斗は照れ臭かったからに何も言えなかった。すると麗奈は健斗の背中を叩いてきた

「もう、嬉しいこと言わないでよっ！！」

「……悪かったなっ！！」

「ありがとうっ！！」

「別にいゝ！？ほら、ちゃんと捕まってるよっ！！」

健斗はさらにスピードをあげて学校へと向かっていった

健斗は途中のコンビニで麗奈を下ろすことなんてわすれていた

忘れていたし、気にすることをやめた

だって麗奈は俺の家族なんだから。

誰かに誤解されたって気にすることはない

それが例え早川だとしても……麗奈は家族なんだから関係ねえよ

二人は笑いながら、学校へと続く坂を下り、さらにスピードをつけていった。すると、目の前自転車を押しながら歩いている早川と佐藤が見えた

麗奈もそれに気がついたらしくて大きな声で呼びかけた

「おゝい結衣ちゃん、マナゝ！！」

麗奈の呼びかけに二人は通り過ぎていく麗奈に気がついてしばらく口を開けて哑然としていた

「……二人が自転車に乗りながら登校してくるなんて……珍しいね」

と、佐藤が不思議そうにそう言ってきた

けど早川は嬉しそうに笑いながら頷いた

「二人とも付き合い始めたんじゃない？ ねえ結衣」

「さあ？」

早川はクスクスと笑っていた

「昨日はあんなに仲悪かったのに……分かんない人たちね」

佐藤が呆れながらそういうと、ふうつとため息をついた

けど早川はゆつくりと微笑みながら、走っていく健斗と麗奈を見ていた

「よかった……二人とも元通りになって」

「え？」

佐藤は早川の言ったことが聞こえなかったらしくって聞き返してきた

「何でもないよ」

と早川はご機嫌そうに歩いていった。そんな早川を見て、佐藤はまた不思議そうに首をかしげた

「結衣も変……」

いつもより早く学校に着いて、健斗たちは自転車を駐輪場へと置いていった

「ふあゝっ!!」

麗奈は爽快そうに自転車を降りた

「いつもより早く着いたな」

と健斗は笑いながら言った

「このペースで毎日来ればいいな」

「えゝ!?!やだよそんなのゝ」

「でも楽しかったろ?」

「そりやそうだけど、結構掴まってるのも大変なんだからね」

と麗奈はクスクスと笑っていた

健斗も笑って、麗奈と共に校舎の方へと歩いていった

麗奈と喧嘩して、健斗は麗奈に対する素直な気持ちを吐き出せた

それがすごく爽快で気持ちよかった

やっと素直になれたんだ

それが何だか色んな意味で嬉しかった

健斗はご機嫌そうに校舎の方に駆けていく麗奈を、笑いながら見ていた

ずっとこんな生活が続くと、本当に思っていた

そして願っていた

翔が死んでから、俺は毎日生きることが辛かった

本当のこと言うと、生きるのが嫌になってたときもあった

けど麗奈が来てくれてから、日々が変わり始めていた

最初は戸惑ってたけど、最初は嫌だったけど……麗奈が俺に必要な上に関わってきてくれたことに、本当に心が救われていたんだな

麗奈がいたから、翔との過去を思い出さずにすんだんだ

だから麗奈には感謝をしていた

健斗は思い出していた

麗奈がこの町に来た日のことを……

びつくりするくらいの美少女で、それに最初はめちゃくちや嫌いだった

こいつといると疲れるし、受け入れるのが嫌だった

けどこいつの寂しそうな表情は忘れられなかった

それから学校が始まり、毎朝こいつを後ろに乗せていくのがすごく嫌だった

邪魔だったし、スゲー嫌だった……

おまけに俺に野良猫だのと言ってきて、そんな俺が好きと言ってきた。訳が分からなかったけど、本当はすごく嬉しかった

それにこいつはこいつなりに色々考えてるんだなってことが分かつ

た。

能天気で迷惑なやつばかりだと思っていたけど、自分が迷惑にならないようにと考えてたり、すごく見直した

自転車の練習をしてる麗奈を見てすごく感動した。イメージと全然違うことに気が付いた。

いっしょに練習して、10秒くらいだけ自転車に乗れた麗奈を見て嬉しかったし、すごく楽しかった

買い物にも付き合わされたな……

そして……こいつの母さんのことも聞いた……

俺の過去を聞いて、いきなりキスしてきた麗奈には腹が立った

けど、麗奈の大切さに徐々に気がついて……仲直りしたいって思った

俺のために泣いてくれたのは、嬉しかった……

優しく抱き締めてくれて、今を生きて欲しいと言ってくれた麗奈が……本当に嬉しかった

あのとぎずつと持ち続けていた、心の傷が麗奈によって癒してもらってたんだな

麗奈は俺の中でかけがえのない大切な存在だ。

翔がそうだったように……麗奈も同じくらい大切なんだ

それが今ならはっきりと言えた

大切な家族なんだ……

だから今なら胸をはれる。

空を見上げながら……翔を見た

今更だけど……翔、俺は前を向いて生きようと思う

今度は誓うよ

お前にしたことは、一生償いきれないことだけど、けど俺はお前を
忘れないから……

忘れずに、前を向いて生きていくから

今度は揺るぎのない決意で……

だから翔、見てくれ

いつも青い空の中から、笑いながら……

それがお前に対する……せめてでの償い……

いや、そんなことは言わないよ

俺は俺のために生きる。

それで……いいんだよね……

健斗は立ち止まって、青い空に流れる白い雲をみた

翔の……俺の大好きな空は……今でも笑っているんだな

「健斗く〜ん」

ふと呼ばれ、健斗は前を向いた

麗奈が健斗に向かって言ってきた

「早くう〜っ!!」

「分かってるよ」

健斗は笑いながら、校舎の中へと向かっていった

色んな過去を背負って、色んな支えを受け、それでも強く生きようと決めながら……

光に向かうように、堂々と笑いながら歩いていった……

E n d

第4話 過去 P・11（後書き）

どうもここまで読んでくださってありがとうございました。

ここまでの物語……いかがだったでしょうか？できればこのグッラブ！自体に評価や感想を頂けると嬉しいです。

さて、続きはグッラブ！2にて掲載されています。そちらの方も読んでもらえると嬉しいです。

では次はグッラブ！2でまた会いましょう！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5728e/>

ゲッラブ！

2011年2月21日23時38分発行